
突然の彼女 3 ・ ファイナルエピソード

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突然の彼女3・ファイナルエピソード

【Nコード】

N1464D

【作者名】

ヒロヒト・JJ

【あらすじ】

ドジが絶えない森田卓^{もりたすぐる}が絶世の美女・ゆりかと結婚できた軌跡から、一転して破局を迎えたその後の続編をコメディタッチで描きます。森田とゆりかの今後はどうなるのか？陰謀を企てた者の行く末は？またその陰謀に気づくのはいつ？そしてそれを暴くのは誰か？この3作目の序盤は、主人公の知人の視点から描きます。

第1章 ほつとかけない二人 その1 ひろいもの

第1章

ほつとかけない二人

その1 ひろいもの

●美智代のブログより

タイトル：みっちちちの好き勝手ぶろぐ♪

みなさんこんにちはあ（´・・・）ノ”

あ、でもきつと夜読んでる人が多いかも？

じゃあこんばんはあ♪（´・・・）ノ

アタシがブログ書くななんて自分でもびっくりするくらいなんだあ。だつてさ、いつも更新のこと考えてなきゃなんないでしょ？そんなのめんどくさいし、だるいし、絶対3日坊主になると思うの。

だからあと2日で終わるかもねw（´・・・）ノミミ ぱんぱん

でもね、とりあえず書くきっかけはあつたんだ。

あ、アタシ丁寧語苦手だからタメ口で勘弁してね。その方が書きやすいのよ。

んで、そのきっかけだけど、実はアタシ、プチPTSD気味っぱいんだつて。

こんなに陽気なアタシなのになんで？つて感じてしょ？

それでカウンセラーの先生がね、“日記をなるべく正確&忠実に書いて下さい”

なんて言うもんだから、アタシ言っちゃったの。

「せんせ、ムリムリムリ。アタシ集中力ないから絶対無理！」ってね。

でもそのときフツと思いついたの。

「ねえせんせ、ブログでもいい？そっちの方が楽しくできそうだし」

「ああ、それはいい方法ですね。でもブログは人に読めますよ。いいんですか？」

「名前はニックネーム使えばいいし、コメント欄は非表示にすればいいでしょ！」

「なるほど。あなたがそれでいいなら別に構わないですよ」

ワオ！アタシったらなんて頭いいんだろw

そんなこんなでカウンセラーからもオッケーもらって決心したわけ。

でもいざとなると、なかなか書くことってないのよねえ。

アタシの最近のニュースだったって、ずっと同棲してた彼氏と別れたことくらい。

別れたから元彼って言うべきかな？ま、そんなこと言ってもしよ
うがないけどねw

この13人目の元彼は結構本気だったから、このアタシでもマジ
凹みしちゃったのは確かカモ。

そうなの。なんかぽっかり心に穴が開いちゃったんだよね。。

でもね、ボーッとしてたわけじゃなくて、壁中にキックしたりお
皿やお鍋投げたりして散らかしまくったのw

で、しばらく掃除も洗濯もする気がしなくて部屋が物置状態にな
っちゃったのね。

そこでちょうどその時、TVの再放送で『のため』やってんの観
てたら、

「あ、のだめの部屋ってアタシの部屋とおんなじだあ！ww」
思わず叫んで笑い転げちゃったわよアタシ（――）ミ　　バ
ンバン

あ！そっか！！なるほど！！

だからアタシ、プチPTSDなんだ！これ書いてて今気づいちゃ
ったわw

でもね、ごはんはしっかり食べれるから幽霊みたいにゲツソリは
してないの。

ここが困っちゃうのよねえ。ごはんがおいしくておいしくて。。

（^□^；A

あ、話がいっきりに脱線してるけど、このブログを書くきっかけ
はそれだけじゃないんだ。これだけだったらもう明日から書くネタ
ないもんねww

実はね、最近不思議な生き物を拾ったの。しかも見覚えがあるや
つ。

なんか哀れっぱいから連れて来ちゃったんだ。

って言ってもアタシの部屋にはもちろん入れてないよ。

うちのアパートのとなりの部屋がちょうど空いてたから『来れば
？』って誘っただけ。そしたらホントに来ちゃったのww

それはアタシの親友・ゆりかの元ダンナ。

んーと…名前なんたっけ？ あ、そうそう森田っていう動物w

一応プライベート的なこともあるから、苗字だけで下の名前の公
表はご勘弁をw

って訳で、森田がいたら退屈しそうにないブログが書ける予感が
しそうなのw

なんでゆりかと別れたのかはまだはつきり聞いてないんだよね。

じゃあ今日はこのへんで！（・D・）
（続く）

その2 妙なやつ発見

妙なやつ発見

●あかねざきりょう茜崎涼の私的記録より

探偵の仕事はそんなカッコいい仕事ではないと聞いていた。

と言っても別に人から聞いたわけではなくて、テレビの密着取材番組の中で実在の探偵がそう言っていただけの話。

でもこうして自分が探偵になってみると、実際その通りだった。

見習い探偵でまだ駆け出しのこの俺が、今回で4件目になる仕事の依頼も、またまたよくあるつまらない浮気調査。

特に嫌気が差しているわけではないが、人の裏切り行為を探るのは正直いい気持ちはしない。

まして依頼を受けた結果が潔白だったということはほとんどないから尚更だ。

妻が夫の浮気に疑念を抱いての依頼はほぼ100%の確率で黒。

女の直感というのは男よりも数段、研ぎ澄まされていることを痛感する。

この日はカップル喫茶前でターゲットが出てくるのを外で待機。

依頼主は、とある会社の部長の妻。亭主の行動の一部始終の報告と、浮気相手の女の素行調査。

この店の内容についてはすでに調べがついている。カップル喫茶というよりSMクラブに近いかもしれない。

お気楽な部長さんは昼休み時間を利用して、真昼間からここでプレイを楽しんでいるようだ。

ここで問題になるのは、部長と連れの水との間に愛情関係があるかどうか。

単なるプレイパートナーというだけの関係なら、それは浮気と言
えるのだろうか？

まあこの判断は依頼主に任せたほうがいだろう。俺は事実だけを
報告すればいい。

俺はカレーパンとコーヒー牛乳を飲みながら空いた小腹を補って
いた。

今日は女を尾行して行動パターンを探る予定。

だが最初に出て来たのは部長だけだった。女の姿はまだ見えない。
彼は足早にこの場から立ち去ろうとしていたが、遠くから大声で
叫ぶ声に立ち止まった。

「ぶちよおおおー！ぶちよおおおおー！！」

部長が慌てふためくのも無理はない。

「あ、も…森田っ！バ、バカ！でっかい声で呼ぶなこらっ！」

「す、すみませんっ！お得意様から部長に急用のお電話がありまし
てっ！」

「だからでっかい声で言うなって！！」

部長は辺りを気にしながら焦りまくっている。裏通りということ
もあって通行人がまばらなのが幸いしている。

それにしてもこの森田と呼ばれた部下らしき男もマヌケな男だ。
上司に恥をかかせることくらい計算できないのか？

「森田、な、ななんでここがわかったんだっ？」

走って来た森田という男は息をきらしながら答える。

「たぶんここじゃないかと思って…ハアハア。。カバンお持ちしま
しょう。」

「うむ。。だがそれじゃ答えになってないぞ（^―^；）」

「僕も前にここ来たことあるもんで…ハアハア。。」

「Σ（□、；なにつ？」

「それより部長。。。様にすぐ連絡して下さい！」

「あ、ああ、それはわかるが…だがそれくらいのことなら私のケータイに電話すれば済むことじゃないのか？」

「ええ、そうしたんですが出られなかったの。。」

「ん？…あ、しまった！ケータイはそのカバンにマナーで入れたままだったか」

「出しますか？」

「頼む」

森田という男は、部長のカバンを開けようとしたが、その動作が無造作だったため、中身を道端にバラまいてしまった。

「うわーっ！森田なんてことすんだっ！！（ 0 ）」

部長はさっきよりもまして慌てふためき、一目散に地面にしゃがんでプチまけられた所有物を拾い集めた。

そう、それもそのはず。部長のカバンから出てきたものはS Mグッズがズラリ。

「森田っ！絶対誰にも言うなよ！いいな？わかってるな？」

「は、はいっ（＾□＾；A すみませんぶちよお！」

「だからでっかい声で私を呼ぶなって！」

「あ…（ - ；- ）」

俺にこんな部下がいたらすぐにキレそうだ。

（続く）

その3 炊事当番

炊事当番

●美智代のブログより

タイトル：みっちちちの好き勝手ぶろぐ♪

みなさんこんにちはあ（´・・・`）ノ”

最近炊事が少し楽になったみっちちちですw

何でかって言うとな、アタシのとなりに越してきた例の森田がいるからなの。

つまり夕飯だけなんだけど、当番制にして炊事する決まりにしたからなのね。

もちろんアタシが一方的に決めたことだけどさ、部屋紹介してあげたんだからそれくらい当然よねw

ところでこのブログのタイトルなんだけど、単純に“みっち”の方が短くてスリムなのに、なんで”みっちちち”にしたのかって思った人いるでしょ？

思わなかった人は今思いなさい！理由言えないでしょ！（*^m^

*）ムフツ

それはね、みっちだと及川光博っぽいし、古い年代の人だと三橋美智也って思うみたいなの。アタシはそんな人知らないんだけど、子供の頃、近所のおばちゃんにそう言われたことあるのよ。

別に「ふうん」て感じなんだけど、ちよっぴりだけ気になったから“みっちちち”にしたの。このブログにいらした方、気軽にそう呼んでね！

で、炊事当番の話に戻るけど、ホントは1週間交代にしようと思
ったのね。

でもそれはアタシの作戦ミスだったの。森田のやつ、3日間とも
インスタントラーメンしか作らないのよ。特売で大量買いしたから
とか何とか言ってさ。

さすがにおとなしいこのアタシでも3日目には言っただよ。

「ねえ、アタシもラーメン好きだけどもさあ、毎晩同じだと飽きるわ
よ！あんた他に何か作れないのっ！？」

「え？でも3日間、みそ、しょうゆ、とんこつってバリエーション
変えましたか？」

「そういう問題じゃないのよ（＾―＾；）」

「じゃあその間に焼そばを挟めば良かったですかね？」

「どうせインスタントでしょ！フライパンに水入れて蒸発するまで
麺をほぐすやつ。」

「ウツ！！Σ（・・・）あたりです……」

「ウツ！！じゃないわよ。あんたね、これじゃ貧乏学生と一緒にじゃ
ない！いい大人なんだし、お金だって稼いでるでしょ！」

「すみません！元々独身時代こうだったものですからつい。」

「こんなこと言いたくないけど、あんたゆりかと別れてまだ立ち直
れてないの？」

「いえ…その。正直ダメージが大きかったのは確かですが……」

「別れてもうどれくらい経つの？」

「1年2ヶ月と6日…くらいかなあ。」

「そこまではつきり言えて“くらい”って何よ（＾―＾；）」

「アハハ（＾□＾；A」

「（；- -） 3 フウ…まだ思いつきり未練があるのね」

「でも…もうどうにもならないことだし……」

「ちよっと前にゆりかと会ったけど、すっごく元気そうだったよ」

「そうですか…それは良かった。美智代さんは僕のことは話してる
んですか？」

「言うわけないでしょ！恥ずかしい！」

「は、恥ずかしい？（ - ；）」

「あんたのどんな面をゆりかに報告することがあんのよっ！」

「確かに…（ - - ；）」

「とにかくあんたはもっとシャキツとすることから始めないとね」

「はい。。」

「それに夕飯はどうにもならないことじゃないわ。料理に目覚めたら昔のことなんて忘れるわよ。」

「そういうもんですかねえ。。」

「明日はアタシが夕飯作るわ。4日目もラーメンじゃかなわないもん。」

「すみません。。」

てなわけで、これからの炊事当番は一日ごとに交代することにしたの。

ちよっぴり森田に同情はするけど、こいつとは絶対の絶対に愛が芽生えることはあり得ないんで、アタシのブログご訪問された方は変な予想とか期待はしないでねw

じゃあ今日はこのへんで。 Bye - Bye ♪ — / / / —)
()

(続く)

その4　なんだ？この繋がり

なんだ？この繋がり

●茜崎涼の私的記録より

森田という冴えない男と部長を無視して、俺は5分後に店から出て来たターゲットの女を尾行した。

女の名は倉沢まりも。下調べはしてある。ブランド物を身にまとい、派手目な化粧で目鼻立ちがハッキリしている。

どう考えても、この都会派の女とくたびれかけた中年部長は釣り合わない。

つまり外見的には二人の不倫関係などあり得ないように思われる。やはり単なるSMクラブでのパートナーに過ぎないか、あるいは女にとって部長は絶好の金づるになっているかのどちらだろう。

倉沢まりもは午後6時半頃までに、数件のブティックをハシゴしたあとタクシーを拾った。俺もすかさず跡を追う。

そろそろ家路に向かうと思われたが、俺の調べた彼女の住まいとは明らかに違う方角へ向っている。

『どこへ行くこうとしている？もしかして本命の男のところなのか？』数分後、俺の読みが正しいことが証明された。

まりもは、とあるマンションの前に到着した。もちろん彼女の自宅ではない。

にも関わらず、まりもはすんなりマンションの一室に消えて行った。

『ほらなやつぱり…本命の男が他にいると思っただぜ。』

俺は外からマンション全体のベランダを眺めた。数分後、暗いベ

ランダに明るい照明が点灯した。

「5階か。。」

暗い部屋に入ったということは、まだ男は帰って来ていないということだ。そして彼女は合鍵を持っている。

俺はどんな男が見極めようと、男の帰りを待つことにした。

目立たぬようにマンションの5階に上がり、非常階段付近で待機し、エレベーターから降りてくる人物と故意にすれ違い、顔を見極めてから入って行く部屋をチラ見で確認する。

そういつた地道な行動をして4人目、なんとなく見覚えのある男とすれ違った。

そう、どこかで見た。でも最近ではない。いつだろう？結構前かもしれない。でも見たことがある。誰だったろう？

そんな思いで俺はその男の入る部屋をさりげなく見た。

すると、正にそれが倉沢まりもがいると思われる部屋だったのだ！つまりこの男の部屋ということになる。

俺はそつと扉の表札を見に行く。

こんなことは5階に来た時点で先にしなくてはならないことなのにと、駆け出し探偵の未熟さをこの時反省した。

“石丸慎也”

聞いたことがある。慎也…うん、確かに覚えがあるぞこの男。名前も顔も。。

(。○。;)ハッ!!

わかった！思い出したぞっ！そうだ間違いない！

こいつは・・・こいつはゆりかと付き合ってた男だ!!

それはもう5年以上経つだろうか？俺が全国を転々としながら食いつないでいた頃、不意にゆりかに会いたくなってこの街に帰って来たことがある。

子供まで産ませておきながら、結婚も認知もせずに逃げたこの俺がゆりかに会う資格なんてないのは当然だ。

だが、この時の俺は何をやってもうまく行かずに精神的にもナイーブになっていた。

自己中で都合のいい話ではあるが、かつて自分が愛した女と、自分と同じDNAを持つ我が子を一目見たいという強い気持ちを抑えることができなかったのだ。

（続く）

その5 なんもない部屋

なんもない部屋

●美智代のブログより

タイトル：みっちちちの好き勝手ぶろぐ♪

みなさんこんばんわぁ（´・・・`）ノ”

相変わらず、森田と夕飯でゴタゴタもめているみっちちちでえす

（m o）プ

あ、勘違いしないでね。アタシたち二人で一緒にごはん食べてるわけじゃないの。

森田が当番の日はアタシんちに届けに来るの。もちろん玄関までよ！中には絶対入れないわw

で、アタシが当番の時は、森田に取りに来させるの（―――）

ミ バンバン

なんかアタシのしもべみたいだけど、これも森田のためだと思うの。

あいつをほつといたら、ずうーっと部屋にこもりつきりになっちゃうって、いつ死んでもわからないでしょ？w

いわゆる人助けなのよ。わかる？あいつを活発に動かすことが大事なの。

森田が悲惨な生活をしてるのがゆりかにわかったら、彼女また自分を責めるかもしれないもの。

元々マイナス思考なゆりかだから、親友としてとっても心配なのよね。

だから森田が自立すれば、ゆりかにも迷惑はかからないってわけ。

アタシって影の立役者みたいでしょ？（*^・^*）エヘッ

でもね、前の記事にも書いたけど、アタシだって同棲してた彼と別れちゃったし、凹んだことは確かなの。

だから正直に言うとね、森田を少し構って気を紛らわそうとしているズルいアタシもいるの。それにこのブログもその一環なんだしね！

今日は森田の炊事当番日だったの。

いつもの夕飯の時間になると、森田は夕飯を持ってやって来るのに今夜は定時刻が1時間以上過ぎてもあいつは来なかったのね。

おかしいと思って、アタシ初めてとなりの森田の部屋に行ったらわよ。

ドアが開いてたからちよつとドキドキしながら中に入ったの。

男臭いってこんな匂いなんだあって思いながらね（*^m^*）

ムフッ

でね、誰もいないどころか、森田がお茶の間にふとん敷いて寝てたの。

「美智代さん、すみません。なんか僕、風邪ひいたみたいで熱っぽいんです」

森田がふとんの中から弱々しい声で言うの。

「なら連絡してくれたら良かったのに」

「美智代さんのケータイアドレス知らないものですから。。」

「そっいえば教えてなかったわねw」

「教えてもらっていいですか？」

「ダメw」

「（（ノーωー）ノバタ」

「まあいいわ。具合悪いんじゃないもんね。アタシが夕飯作るわ」

「すみません。」

「でも材料はあんたんちからもらってくわよ」

それからアタシは森田の部屋を物色し始めたの。

「思ったより清潔にしてるのね。それにこの部屋すごく広くない？
アタシの部屋と同じはずなのにさあ」

「ああ、僕にはほとんど家財道具がないからです」

「そういえばホント何もないわよね（＾―＾；）」

「ええ…それに今まで外食が多かったんで家ではそんなにゴミもないんです。清潔に見えるのはきつとそのせいかも」

「片付けるものさえないってことね（＾―＾；）」

それなのに、この何もない部屋の中で、ケースごと買ったと思えるラーメン軍団だけが際立つてるの。もう、どんだけえゝって感じ。

「ねえ、ラーメンばつかじゃん」

「焼そばもありますが。」

「同じよっ！前にも同じこと言っただでしょー！」

「じゃあ他には何もないです。」

その時アタシは唯一の発見をしたの。

「あ！パスタがあるうゝ」

「カップ麺のスパ王ですよ。他と同じです」

「いいえ、パスタは違うわっ！」

「…よくわかりませんけど。。（-_-）」

無類のパスタ好きのアタシには、もうスパ王の他は目に入らなかつたのね。

「これもちょうね。あんたにも作ってあげるから」

「麺類はちよつと。具合悪いんでおかゆの方が…」

「アタシにおかゆ作れって言うの？それにだいいちごはんは炊いてあるの？」

「いえ・・・（「」；ヒヤリ」

「米だつて見当たらないし、何血迷ってるのよ。あ、アタシの家でおかゆ作って持って来いってこと?」

「そんなめっそもない（^□^；A 冷蔵庫の中にレトルトのおかゆがあるんで」

「はあ?」

それ聞いてアタシびっくりしちゃったのね。で、冷蔵庫のドアを開けたらホントに入ってるのよ。おかゆが。

玉子がゆ、梅がゆ、白がゆ e t c・・・

「あんた、用意はいいけどこんなものまでインスタントなの?」（-

-.;）」

「はい...すみません。」

「それにこれ、常温でいいのよ。冷蔵庫に入れる必要ないわ」

「知りませんでした...」（-.;）」

「でもおいしそうだからあたしにも1個ちょーだい」

「あら（ノー）ノコケッ!」

「（*...*）ウフフフ、これなら楽だからあんたのも作ってあげるわ」

なんせ明日にはちゃんと体調治してもらって、夕飯当番してもらわなくっちゃ!

それじゃあ今日のブログはこのへんで。

（`・A・`）ノ“SAYOUNARA

（続く）

その6 過去進行形（前編）

過去進行形（前編）

●茜崎涼^{あかねざきりょう}の私的記録より

マンションの非常階段の片隅で、5年前の記憶がまざまざと蘇ってきた。

結局当時の俺は、ゆりかに会いに行ったものの、余計にショックを受けて再び姿を消すことになる。

ゆりかは絶世の美女だ。新しい男がいても然だとは思っていた。だが会いに行ったあの時、玄関先で慎也という男とキスを交わし、抱きしめ合っている光景を目の当たりにしてしまうとは全く予想外のこと。

なんとというタイミングの悪さか！俺がとっさにした行動は、二人に気づかれないように素早く近くの物陰に隠れることだった。

「慎也、今度いつ来る？」

ゆりかが甘えた声で尋ねている。恋人つてとこか。まだ結婚はしてないようだ。

その時の俺は物陰から息を潜め、男が立ち去るまで、その姿や顔を嫉妬の眼差しで凝視していた。嫉妬する資格もないのに。

みじめだった。こんなにコソコソとしてしまう自分が本当に情けなかった。

この二人の抱擁を見届け、ゆりかが家に引っ込んでから数分の間を置いて、俺は玄関先まで近づいた。そしてチャイムを押そうとした瞬間、ドアが開いてゆりかが出て来た。

「あつ！」

「あつ！」

お互いが驚いて同じセリフになった。

ゆりかは目がまん丸になるほど驚愕している。

「涼！……何しに来たの？」

「やっぱりそう言われると思ったよ」

「当然じゃない！」

「わかってるよ。全て俺が悪いんだし」

「ちよつと待って！反省の言葉なんか聞きたくない。私はもう涼とはやっていくつもりもないんだし」

「それもわかってるって。ちよつとだけ顔見たかっただけさ」

「やめてよ。私といずれみを見捨てたクセに！」

「ごめん。都合のいいことは充分わかってるんだ。でも今俺、何をやってもうまくいかなくて……成長したいはずみの顔を一目見たら頑張れるかなって。」

「勝手なご都合主義ね！それに知らないの？いずれみはあなたのご両親が預かったままよ！自分の実家に帰ってないの？」

「ああ、あれから一度も。そうか……いずれみはうちの親が育ててるのか。」

「あのときは私もまだ18だったし、私が育てるって説得しても誰にも聞いてもらえなかったんだから！」

「そうか。」

「遊びぐせの悪いあんたは消息不明になるし、今更こんなこと説明しなきゃわかんないかって、あんたって最低よ！」

「それは認めるさ。でもさ、ゆりかの親じゃダメだったのか？何でうちの親がしゃしゃり出て来たんだ？」

「そんなこと涼が言う権利ないわよ！ご両親だってバカ息子のしでかした責任をとるつもりで必死だったと思うわ」

「なるほど……（――）；ヒヤリ」

「それに私の母も入退院を繰り返してる時期だったし、孫の面倒を

見れる家庭環境じゃなかったのよ。」

「そっか…でもさ、そろそろお前の元に戻してもいい頃じゃないのか？」

「気軽に前って言わないで！」

「あ、わるかった。(^ | ^ ;)でもそうだろ？ゆりかも今は社会人だろ？」

「大学出てから就職して1年経つわ。その頃からずっと涼のご両親と話し合ってるの。でもまだ無理」

「いずみに会えないのか？」

「いいえ。会いたいときはいつでも会わせてくれるわ。それはなんとか大丈夫だけど。」

この当時の会話は俺の無知さを象徴している。

そう、俺は何も知らないでノコノコやって来ただけだった。

まわりに迷惑をかけまくっていながら、平気でこの街に戻って来たんだ。

俺はこの時、猛烈な自己嫌悪に陥った。

そして俺が再びこの街から出るきっかけとつか、とどめになったのが、ゆりかの新しい彼氏、慎也の存在ということになる。

(続く)

その7 過去進行形（後編）

過去進行形（後編）

●茜崎涼の私的記録より

ある会社の部長の妻から依頼された浮気調査。いつもの単純で退屈な仕事のように思えた。でもこの一件が、間接的にゆりかや俺に繋がるものだと夢にも思わなかった。

石丸慎也と倉沢まりもがいるこのマンション。

ごく自然な推測からしても、おそらく二人は恋人関係だろう。

だとしたら、慎也という男はゆりかとすでに終わっているのか？それとも二股か？

あれからもう5年は経つ。男女の仲なんてどうなっているかどう思議ではない。

俺はもう一度、ゆりかに会って確かめたい衝動に駆られた。

また怒られてもいい。なじられてもいい。

だがもし、ゆりかが慎也に裏切られているのに気づいてなかったとしたら、なんとか手立てを考えてやらなければならない。

俺は翌日、覚悟を決めて5年ぶりにゆりかの実家を訪ねた。

そう、玄関先で多少の会話はできたものの、結局は門前払いされてしまったあの時以来のこと。

もちろん、ゆりかが実家を離れてどこか新居で暮らしていれば、家を探す手間ができるが、依頼主の前金が結構弾んだ額を支払ってくれたから、多少の交通費や宿泊費はまかなえることができる。

俺の頭にふと娘の顔が浮かんだ。

『いずみはもう10歳くらいか。』

5年前、いずみに一度だけ会ったことがある。ゆりかと玄関で話したあと、すぐに自分の実家に行ったのだ。

俺は、いずみが産まれて間もない頃しか対面していない。だからいずみにとってはほぼ初対面。

それなのにいずみは、人見知りもせず、平気で俺になついてくれた。

自分で遊んでいたオモチャを俺のところに持って来て、さかんに一緒に遊ぼうと誘いに来る。もう可愛くてたまらなかった。

3年くらい前だったろうか…いずみはゆりかの元へ戻されたと親から聞いている。

俺はゆりかと会うことで緊張する反面、いずみの成長を見れる期待や喜びもひそかに持っていた。

(続く)

その8 ドジの功名（前編）

ドジの功名（前編）

●美智代のブログより

みっちっちの好き勝手ぶろぐ♪

いらした方こんばんはあ（´・・・`）／”

今日はとっても面白いことあったんだあ。

ここで言っているのかどうかかわかんないけど、この際だからアタシのブログに來た人限定で教えちゃうね♪

それはね、例の森田のことなの。やっぱあいつはネタになるわ（

！
m_l o_p

ブログ始めてホント良かったw

でね、今日は日曜だったから、食料の買い出しに行こうと思ってたのよ。

アタシ最近日曜にまとめ買いすること多いの。だってよく特売してるでしょ？

なんかオバサンくさいかもだけど、お金ないし今もアタシ、プーだしね。

でも結構楽しいの。先着10名様のタイムサービスを手GETできるときなんて最高！

だいたい前だけど、ゆりかにも超激安の豚ばら肉をあげたことあるの。

あ、ゆりかって、前の記事にも書いてるけど、アタシの親友のことなのね。

なんか笑えてきちゃう。ゆりかと離婚した男が今はアタシの隣に

いるなんてねw

それで、その隣の森田が午後になってアタシんちに來たのよ。

「ごめんください」

「（・・・）．．．ン？？あんだどしたの？」

「美智代さん、昨日は本当に助かりました。僕が夕飯当番だったのに代わっていただいて」

「ああ、だってそれはしょうがないじゃない。もう良くなったの？熱は？」

「微熱程度です。もう治りかけです。」

「治りかけが一番悪いのよ！人に遷すからマスクしなさい！アタシの持つてる予備のマスクあげるから」

「色々とすみません。美智代さんには感謝することばかりでお礼の言葉ありません」

「お礼の言葉もないのっ！？」

「いや、そういう意味じゃなくて。（・・・）」

「まあいいわ。じゃあ感謝の気持ちを行動で表してくれる？」

「はあ…でもどうやって？」

「これから一緒に付き合ってよ！」

「Σ（・・・）＊エエッ！？それはちょっと…僕はもう女性とお付き合ひする気なんて。」

「バカ！買い出しに付き合っってって言うてんのよっ！あんたは荷物運搬係っ！」

「あ、なるほど。（・・・）」

「あんたに特別な感情なんてあるわけないでしょー！」

「アハハ…（＾□＾）；A それもそうですね。僕もそうですし」

「なんですって！？」

「いえ、何でもありません…（D・・・）」

こんな会話のやりとりがあったのはどうでもいいことで、要はア

タシが森田を引き連れて買い物に行った帰りのことなのね。

森田の両手に持ちきれないほど荷物持たせて駐輪場まで歩いてたの。アタシは自転車で森田は歩き（*^m^*）ムフツ

買ったものの全部は自転車に乗らないから、残りの荷物を持って帰るのは森田の役目。

「ねえ森田、こっちの重い袋の持つてよ」

「えっ？自転車には重い荷物を載せた方がいいのでは…？」

「アタシがバランス崩して運転できなくなるでしょ！」

「ちゃんとカゴの真ん中に乗せれば大丈夫なのでは…？」

「このネギと大根が袋から飛び出てるのがカツコ悪いのよっ！」

「しかしそれは…（^ー^；）」

「アタシはまだ独身のレディなのっ！所帯じみたところ人に見られたくないのよっ！」

「そんなこと、ゆりかは気にしなかったけどなあ…」

「ゆりかゆりかかってうるさいっ！」

「そんなに何度も言ってますが…（^ー^；）」

「もうつべこべ言わずに帰るわよっ！さ、早くカゴに軽い方の荷物乗せてっ！」

「はい。。（ー；ヒヤリ）」

（続く）

その9 ドジの功名（後編）

ドジの功名（後編）

●美智代のブログより

みっちちちの好き勝手ぶろぐ♪

そこで森田がやらかしちゃったのよ。何も焦ることないのにさ。奴が自転車のカゴに荷物を載せようとしたときにね、前につんのめって本人&自転車モロとも倒れちゃったの。

全くもうドジの本領発揮ってとこね。

それだけならまだしも、アタシの自転車の横にはまだ20台近くの自転車がズラ〜と並んでたのよ。

ってことはあ。。ね、ここまで言えばもうわかるでしょ？w

そうなの。自転車がドミノみたいに次から次へ倒れていったのね。

森田はもう焦りまくり。

「しまったああ！僕としたことがああ……」

「何言ってるの。アンタらしいわよ」

とアタシははクールに返したのw

で、そこからがもつと大変だったの。

並んでる一番最後尾の自転車が倒れると、そこはもう歩道なのね。勢いよく倒れてるから、結局最後まで止まらなかったの。

しかも案の定、ちょうど歩道を走って来た30代くらいの男の人と見事にビンゴ！

倒れた自転車に蹴つまづいて大転倒しちゃったの。

森田の慌てようつたらなかったわ。

「うわーっ！ごめんなさあああい！ー！」

奴は倒れた男性のところにダッシュで駆け寄っていったわ。

でもそれより先に、歩道を全力で走って来た二人のおまわりさんが、なぜかその男の人に飛びかかって取り押さえたの。

「よしっ！捕まえたっ！無駄な抵抗はよせ！」

わけわからなくてアタシと森田は静観してただけ。

『なんなの一体。？』

っと思つてると、次におまわりさんが言った一言にもうびっくり！

「お前を強盗殺人未遂で逮捕するっ！」

Σ—111（「；」——1えええええ〜っ？！！

アタシも森田もあぜんとしたわ。そして歩道をよく見たら、男の手からこぼれ落ちた包丁が転がってたの。しかも血がベツトリ。

（。□。；三；。□。）ヒイイイイ！！

超ビックリしたアタシは、地面にしりもちついちゃったわけ。

森田は森田で、どう見ても立ったまま固まってたわ。

で、その後すぐにパトカーが来て、犯人とおまわりさん一人が乗ったの。

そのときゾツとしたのが、犯人がパトカーに乗る直前に、振り返って森田を睨んだのね。こわーっと思っちゃった。森田もかなりビビってたようだし。

そして現場に残ったもう一人のおまわりさんが森田の方に向き直って言ったの。

「助かりました。あなたのおかげです。あの容疑者は足が速くて取り逃がすところでした。あなたのとっさの機転に感謝します」

「え？…あ、ハ、ハイ。。（^| ^;）」

「あそこでわざと自転車を倒すなんて、普通考えもしないですよ」

「いやいやいや・ハハハ（^□^;）」

アタシ、それ聞いて噴出しそうになっちゃったw

「あちらの女性は奥様ですか？」

突然アタシを見るなり、とんでもないことを言うおまわりさん。
アタシ、すかさず速攻で返事したわ。

「全然違いますっ！ただの隣人ですっ！」

森田もそれに合わせて言ったの。

「とんでもない。絶対にあり得ません！」

なんか森田の口からこう言われるとカチンとくるのよね。

「では改めて署の方からお礼があると思いますので、お名前を聞かせて下さい」

「はあ。。それはまあ。。」

これから先は大した面白くない会話だから書かないけど、ホント今日はこんな刺激的な？一日だったわww、

帰り道の途中で森田が不思議そうに言ったの。

「僕のドジが良い結果に繋がるなんて、こんなの初めてです」

「あんたに最近運が向いてきたのかしらね？」

「いえ、それはないと思います。おとといは部長にこっぴどく怒られましたし、昨日は具合悪くて寝込んでたし」

「部長の前でなんかドジしたの？」

「いいえ、部長にどうしても急用があつて、探してたんです。見つけましたけど」

「それが何で怒られるのよ？」

「たぶん部長が通っているカップル喫茶まで僕が尋ねて行ったからかもしれません」

「たぶんじゃなくて、絶対そうよ（・_・）あんたもバカね。前からわかってたけど」

「だから僕は運がいいとは言えない人間なので、ホント今日は意外でした」

アタシこのときふと思ったの。一時的でもゆりかが森田に惹かれたわけ。

森田は純粹素朴でウラがない。ありのままの姿をそのまま信じればいい。

タカビーにもならないし、人にはちゃんとお礼や感謝の言葉を与える。

いい人なのは確かなのよね。でもいい人過ぎると人生損をすることを知らない。

だからアタシは、森田を絶対好きにはならないし、なれない。ここがゆりかとアタシの違うところね。

じゃあ今日はこのへんで。みな様おやすみなさい。

（――）（・・・）（○）（ふぁ・・・）（u――u）クウ
ウウ。○

（続く）

その10 5年ぶりの対面

5年ぶりの対面

●茜崎涼の私的記録より

俺は車の中からゆりかの帰りを待っていた。

ちょうど彼女の実家の門前から30メートルほど離れた場所に停車している。

それも今日で3日目。まだゆりかは現れないが、ある意味仕方がない。

俺自体、そう毎日長い時間も待機しているわけでもないからだ。

ここは閑静な住宅街。同じ場所にいつまでも停車していると不審に思われる。

せいぜい午後6時から7時までの1時間が関の山だ。

この時間なら、ゆりかの仕事帰りか、あるいは買い物帰りを捕まえられるかもしれないと思ったが、未だ読みが外れている。

俺は直接玄関のインターホンで話すのは差し控えた。

ゆりかの母親に悟られるとまさに修羅場。

なにせ、ゆりかを孕ませた上に、結婚もせずに行方をくらませたこの俺が、彼女の親に^{はい}対面できるはずもない。

そう思うと、俺が5年前、一度この街に戻って来たとき、よくこの玄関まで尋ねて来たものだと自分に感心してしまう。

これが若さゆえの“非常識がなせるワザ”だったのかもしれない。

しかしながら、こうして3日も経つのに会えないとなると、本当にゆりかといずれも実家に住んでいるのも疑わしく思えてくる。

俺は一旦、窮屈な車から降りて、空を見上げた大きな深呼吸で新鮮な空気を体内に取り入れた。

と、その時突然、俺の後ろの襟首を捕まえて引つ張る何者かがいた。

驚いて振り返ると、そこにはゆりかが呆れた顔で立っていた。

「うおっ！ゆりか！」

「うおっ！じゃないわよ。なに怪しいマネしてんのよ！近所迷惑だわ！」

「そんなこと言うなよ。5年ぶりに来たのにきつい一言だなあ。3日続けて待ってたんだぞ。家に帰って来てなかったのか？」

「失礼ね。毎日帰ってますっ！涼が車の中でうたた寝してたんじゃないのっ？」

「Σ(□・ギクツ！…そうだったかもしれない。」

「で、なんか用なの？私はないわよ」

「お前、慎也って男と今どうなってるんだ？」

「Σ(・・*エエツ！？なによ突然！こんな道端でそんなこと言わないでよ」

「じゃ俺の車に乗って話そう」

「それはイヤ！」

「バカだな。何も変なことしないって」

「そんなこと思ってませんっ！とにかく乗らないから小声で30秒以内で話して」

「しょうがねえな全く。だからさ、慎也って奴はお前の亭主じゃないのか？」

「よしてよ。あんな人とはちょっと付き合っただけで、とつくの昔に別れたわよ」

「そっか。なら良かった。それを確認したかったんだ」

「それと私のこと『お前』って呼ばないでって前にも言ったっですよ！」

「ああ、そうだったな。ごめんよゆりか様」

「様もいないから」

「はいはい」

「でもなぜ涼が慎也のこと知ってるの？面識ないでしょ？」

「直接会ったことはないけどな。間接的に見たことはあるんだ」

「慎也がどうかしたの？私、彼とはもう何年も会ってないわ」

「それならいいんだ。ちょっと別な場所ですの男を見かけたもんだから」

「へえ、彼女と一緒にだったとか？」

「おっ！ゆりかは相変わらず勘がいいな。まさにその通りなんだ」

「私には関係ないけど」

「でも、もしゆりかと慎也が夫婦になってたとしたらだ。今現在、奴は不倫してるってことになるだろ？」

「あーなるほどね。それを私に教えに来てくれたってわけね。ご苦労様」

「まあ、どうやら心配ないようだな。安心したわ」

「一応心配してくれてありがと。私は大丈夫だから。涼は自分のこと考えて・・・」

と、ゆりかがまだ話している最中、

「ママーッ！」

遠くから女の子の声がした。振り向くと一人の女の子が走ってこちらに向って来る。

「あれがはずみか？大きくなったな」

「涼、あなた5年前に、自分がパパだっけはずみに教えたでしょ？」

「あれ？バレてた？アハハ（^□^；A」

「父親らしいこともできない人が子供に名乗らないで欲しいんだけど」

「もう言っちゃったんだし、しょうがないじゃん。それにまだいずみが5歳の頃だぞ。もう忘れてるさ」

「もう・・・」

いずみが息を切らしながら俺たちの元へ辿り着いた。手にはなぜ

か子供らしからぬ新聞を持っている。

「ママ、大変！すごい写真見つけ・・・あっ！本当のパパだっ！」

俺はその一言に超感激した。

「すごいなずみ。パパを覚えてくれてたのか。5歳の時の記憶がしっかり残ってるなんて素晴らしい頭のいい子だ。こりゃ将来は東大だな！」

「涼、ほめすぎ（- - ;）」

「記憶がいいのは誰に似たんだろう。もしかして俺かな（- -）」

「私です」

「あっさり言うね（^ - ^ ;）」

ゆりかは俺の言葉には耳も貸さずに、いずみに問いかけた。

「いずみ、すごい写真って何なの？」

「これだよママ。この新聞見て！友達に借りて来たの」

新聞を観るゆりかに混じって、俺も背後からそっと覗き込んだ。

「あっ！」

「あっ！」

俺とゆりかが同時に叫んだ。

「何で涼が叫ぶの？」

「ゆりかだって何だよ？」

「それはちよつと...涼こそこの写真の人が誰か知ってるの？」

「いや...知り合いではないんだけど、最近見かけたことがあるんだ」

「最近？へえ。。」

「ママ、卓くん元気そうだね。写真写り悪いけどw」

「そ、そうね...頑張ってるみたいね（^ - ^ ;）」

俺はどうしても事情がつかめない。干渉する気は少ししかないが、ハッキリ聞いてみるのも肝要だ。

「この卓とか言う男とゆりかはどういう知り合いなんだい？」

「だからそれはちょっと…」

ゆりかがためらっている隙に、いずみがいとも簡単に俺の質問に
応えてしまった。

「ママと卓くんは夫婦だったんだよ。3人で2年間暮らしてたの」

「Σ―111」 「…」 ―11なんだってええええ??！」

(続く)

その11 夕飯論争

夕飯論争

●美智代のブログより

みつちつちの好き勝手ぶろぐ♪

最近思うの。アタシと森田ってこれからもクサレ縁が続きそうな予感しない？

アタシのおせっかいから始まったんだから、自業自得でもあるんだけどねw

でも困るわ。アタシ元タイケメン好きなのにまわりから変な誤解されたくないもん。

今日の夕方ちょっとコンビニ寄ってたらね、中に森田がいたのよ。カップめんのコーナーで1個1個食い入るように原材料の説明書きを読んでいるの。

なんかそれ見てたら気持ち悪かったから、知らないフリしておやつ選んでたのね。

そしたらやっぱり森田に見つかって私のテンションは下がる下がるw

「美智代さんじゃないですか、ちょうど良かった」

「あ、あんたいたの？ 気づかなかったわ（^ー^；）」

「アハ…僕は普段から目立ちませんからね」

「はいはい」

「あのー、今日は僕の夕飯当番ですよな？」

「そうよ。忘れたら針千本飲ますわよ」

「へ」ω「――」へぎくツ！忘れませんよ絶対（^□^；A」
「まさかカップめんて済まそうなんて思ってたないわよね？」
「ダメですか？」-；」

「ダメツ！やっぱりそうだろうと思った！ラーメンばっかし見てるんだもん」

「なんだ美智代さん、僕に気づいてたんじゃないですか」

” うっ！ヤバツ！アタシ墓穴掘っちゃった？”

「あんたね、そもそも何でコンビニにいるの？カップめんだってスーパーで買った方が安いでしょう？」

「まあそうなんですけど、コンビニにしかない限定品つてのがあるんですよ」

「へえ…どうでもいいけど、とにかくラーメンはイヤよ」

「じゃあ…おでんとかどうでしょう？」

「あら、いいじゃない。それでいいわ。みそ煮込みおでんにしてね！」

「Σ（「□」…えっ？！み、みそじゃないとダメですか？」

「あんたの思ってることなんてお見通しよ。レジ前のおでん買うつもりだったんでしょ？」

「わかりましたか（^□^；A」

「当然よ。ちゃんと材料買って作ってね」

「みそおでんなんて、名古屋の人しか食べないんじゃないですか？」

「バカね、偏見もいいとこだわ。じゃあ九州の人はとんこつラーメンしか食べないの？東京の人は醤油ラーメンしか食べないの？北海道の人はみそラーメンしか食べないのっ！？」

「ごめんなさい。僕が間違っていました（- -；）」

「じゃ頑張って！」

その後アタシは雑誌とおやつを少し買って店を出たの。

そしたらすぐに森田もあとから出て来たのね。

「ちよつと！アタシに尾いてこないでよ！野菜の買い出しくらい自分ですてね。当番なんだから」

「別にそういうわけじゃ…たまたまですよ（^ー^；）」

「そう。じゃアタシは家に帰るから、あんたはスーパーに寄ってくるのよ！」

「はい・・・」

こうしてやつとくされ縁の森田と別れることができたら、このあと意外なことが起こったの。

あんまし長く書いてもダレるから今日はここまでねw

この話の続きはまた次ということw

じゃあ訪問してくれた人ありがとうございます。

Bye - Bye ♪ — / / / — () (ノ↑うしろ向きw

(続く)

その12 ぶっ飛びの話

ぶっ飛びの話

●茜崎涼の私的記録より

コーヒーを一口飲んで、俺は気を落ち着かせた。

目の前にはゆりか。俺が半ば強引に連れてきたのだ。

あんな道端では到底できない話。ゆりかは最初、俺に話す気はなかったようだが、今後しつこく付きまとわれるのもイヤだと悟ったらしく、これまでのいきさつを話してくれることに同意した。

いずみも一緒に来たいとせがんだが、当然子供が聞く話ではない。お土産を必ず買って帰ると約束の上で、家に戻ってもらった。

「いずみの言ってたことは本当か？」

「・・・ええ、そうよ」

「なんであんな男と結婚なんかしたんだ？」

「涼はあの人のどこまで知ってるの？あんな男ってどういう意味？」

「どう見たってブサイクじゃないか！お前と釣り合わないじゃん」

「お前って呼ばないでって何度も言ってるでしょ！馴れ馴れしくないで！」

「わ、わりい…でも随分早まったことをしたな」

「早まったのはあなたと結婚しようと思った気で思ってた昔のことよ」

「（「ド」…いきなり手厳しいな」

「私は結婚も離婚もしたけど後悔はしてないもん」

「それはおかしい話だな。結婚を後悔したから離婚したんじゃないのか？」

「いいえ、そうは思っていない。言葉では…うん。表現しにくいわ」

「全然わかんねえよ。俺がこいつを見たときも外で上司に叱られてたときだったぞ。情けない謝り方だったし」

「心から謝ってるからよ。強気で謝る人なんていないでしょ」

「なんか怒られ慣れてるようだったけどな」

「彼はいつも真面目で素直過ぎるから怒られるのよ」

「ものは言いようだな。ダメ人間にしか見えなかったが」

これを聞いたゆりかは明らかにムツとした表情になった。

そしていずみから手渡された新聞記事を指差しながら言う。

「でもこうして新聞に載ってるじゃない。強盗殺人未遂犯人の逮捕に協力したなんて、ダメ人間には絶対できないわ」

「マスコミは人を持ち上げるのがうまいからな。どこまで本当のことやら」

「彼はきつと精神的にも強くなってるのよ。以前よりね。」

俺はどうも腑に落ちなかった。氣に入らないから別れたんじゃないのか？

それなのに。。。なぜだ？なぜなんだ？

「なあゆりか。離婚したのに何で奴をかばう言い方ばかりするんだ？」

「私たち、ケンカして別れたんじゃないもの。」

「氣の迷いから覚めたからだろ。いくら変わり者好きなゆりかでも、長く暮らせば嫌なところばかり目についてくるもんだ」

「わかったふうな口をきくのね。所帯を持ったこともないくせに」

「俺今、探偵やってんだ。男女間のトラブル調査の依頼が多くてさ。色々聞き込みしてるとみんな口を揃えて同じことを言うんだ」

「へえ、涼は探偵さんなんだ。似合わないわねw」

「で、どうなんだ？俺が言った通りなんじゃないのか？」

「いいえ全然。確かにまわりからはよくそう言われたわよ。でも実際は違うし。」

「なんだよ一体！ひょっとしてまさか…そいつとヨリを戻すつもり

じゃないだろうな？」

「さあどうかしらね」

なぜか余裕の落ち着きを見せるゆりかを見て、俺は新たな感情が沸き起こった。

“なんであんなブ男のことをまだかばうんだ？まだ気があるってことか？”

この俺から芽生えた初めての嫉妬心が、自分でも驚くほどに次のセリフを衝動的に言わせた。

「ウソだろ？ゆりか、もしそいつとヨリ戻すことを考えるくらいなら、俺とやり直すことも考えてろよ！」

この言葉にゆりかは目を丸くして驚いたようだ。

「Σ（・・） ＊エエッ！？急に何言い出すの？涼」

俺にもわからなかった。なぜこんなセリフが出たのか。なぜ言えたのか。

「まあ返事はすぐじゃなくてもいいさ。いずれまた。」

この後、俺たちはしばらく無言が続いた。お互いコーヒーを飲みながら、それぞれが頭の中で考え込んでいる。

やがてゆりかが口を開いた。

「私、元の夫とはヨリは戻さないわ。そして涼、あなたとも無理。これが私の答えよ」

「なにもそんなに早く結論を出さなくても…」

「いいえ、はつきりしてるの。前からね」

「???どういうことだ？」

ゆりかは一つ大きなため息をついてから、更に衝撃的なことを俺に言った。

「私、今付き合ってる人がいるの。近々再婚予定よ」

「ガ
ン!」

Σ
 Σ
。
D
;

ン!
ガ

Σ
 Σ
。
D
;

(
続
)

その13 ヒーロー

ヒーロー

●美智代のブログより

みっちっちの好き勝手ぶろぐ♪

アタシのブログに来てくれる少数のみなさん、こんにちはあw
今お風呂から上がって、一息入れたとこ。

トマトのカクテルっておいしいね！アタシこれ大好き♪今も飲んでいるの。

最近ハマっちゃってディスカウントショップでまとめ買いしちゃった。

今、ほろ酔い気分だから、途中で寝ちゃって更新できないかも？

ww

じゃあ早速だけど、前回の続き書かなきゃね！

アタシ、森田とコンビニで別れるつもりで、最初は別々な方向に歩きだしてたの。

でもね、後ろから誰かの大声がして振り向くと、知らないおばさんが森田に向って話してるの。

「あんた見たわよ新聞で！すごいわねえ。よくやったねえ」

「いえいえ、大したことじゃ…」

「あんな凶悪犯取り逃がしたらとんでもないことになったわよ」

「それはそうですね・・・ハハ」

「そんな謙遜することないじゃない！世の中に貢献したんだから。あら川井さんの奥さん！ちょっとこっち来て！」

見ててなんか面白そうな展開になりそうだったから、アタシもそつと近づいて行っただの。

そのおばさんは、まさに人集めの名人！

「このお兄ちゃんが凶悪犯を捕まえたのよ！新聞見なかった？見たでしょ？」

「ええ、知ってるわ。この人がご本人？まあすごい！サインもらおうかしら」

「いや僕はそんな人間じゃ……」

森田がたまにボソツと言う言葉なんか、おばさん達の耳にはもう入ってないのw

「もらつときなさいよ。持ってたらかの記念にはなるから」

一体何の記念になるのかわからないけど、とにかくおばさん達の会話が面白すぎて、アタシは傍で笑いをこらえてたのね。

こうして数人が騒ぎ出すと、何が起きたのかと更に人が集まりだしたの。

そしてその都度、ご丁寧にそのおばさんが説明するもんだから、急に森田の人気はウナギ上り。

集まった様々な人から賞賛の言葉の嵐。

「勇気あるわよねえ。偉いわぁ」

「この街にこういう人がいたら安心よねえ」

「記事読んだけど頭脳プレイよね。自転車をドミノ倒しにして犯人を捕まえたんでしょ？」

「見かけによらず頭いいのねえ」

「は？（＾―＾；）」

他にもいろいろ言われてたけど、キリがないからおしまいねw
ただ、森田が傍に集まった女子高生数人に、キモカッコいいって言われてたのが一番ウケたかもw

一体どつちなんだ？って感じ？ww

で、その後森田がアタシに気づいて、救いの目でずっとこっちを見てるわけ。

アタシもヤバくなりそうだからそろそろ行こうとしたら、

「美智代さん、待って下さい！」

って森田が呼びかけるのよ。何でこんなときになって思ったわ。

案の定、アタシもおばさん達の餌食になっちゃったの。

「あらまあ、彼女と一緒にだったの。ごめんなさいねえ。気がつかなくて」

アタシはすかさず否定したわ。

「違います。そんなんじゃ……」

「いいのいいの。こんなとこじゃ恥ずかしくて言えないものね。でもお似合いよ」

“ お似合いって……どーゆー意味よ？（――；） ”

「お幸せにね。お兄ちゃんなら彼女をしつかり守って行けるわ」

「この街のヒーローにみんなで拍手しましょうよ」

「そうね。そうしましょう」

なんかわけわかんないうちに、アタシと森田は恋人にされて、拍手に贈られながらこの場を退場したの。

「あんたもちゃんと否定すればいいでしょ！」

「すみません。パワーに押されて。」

「それにどうするつもり？あんた偶然転んで自転車倒しただけなのに、知らないうちにヒーローじゃない」

「困りますよホントに。ウソはついてないんですよ。ただ本当のことを言う前に記事になっちゃったんで」

「勇気ある行動が聞いて呆れるわ」

「僕も自分でそう思いますよ。犯人に睨まれたときはオシッコちびつちやいましたもん」

「別にそんなこと言わなくていいから――」
「あ、はい。」

2、3分ほど歩いたアタシと森田が、近所の小さな商店街に差し掛かると、今度はもつと年配のおばちゃんに近いようなおばちゃんに声をかけられたの。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、あんた新聞に載ってた人だねえ」
「は、はあ」

アタシは森田に小声で言ったの。

「人違いって言えばいいのにつ！」
「なるほど。その手がありましたか……」
「バカ！」

そのおばちゃんは手招きで呼ぶの。

「こっち来なさい。誰にも目につかんうちに早く早く」

「どうします？美智代さん」

「寄るしかないでしょ。アタシは先に行くからあとはヨロシク！」
と、アタシが歩き出そうとしたら、

「そっちの嫁さんも来なさい！ほら早く！二人分あげるから」って呼ぶの。

“今度は嫁さん扱いなのね……（――）”

結局アタシも“二人分”って言葉に釣られて店の中に入ったの。
そしたら、

「ほれ、これ持って行きなさい。これもこれも。お金はいらないから」

って気前よくくれるの。

「ええっ？いいんですか？本当に？」

それは大根やじゃがいも、みかんやトマトやいちごまでも、さすがにアタシも気が引けて言ったの。

「こんなにいただいたらおばちゃん全然儲からないじゃないですか。お金払いますよ」

「まあ！できた嫁だねえ」

“ だから嫁じゃないって（――；） ”

「いいんだって。お兄ちゃん英雄だからね。特別サービスだよ」

「でもおばちゃんには何もしてあげてないのに」

「いいや、それがしてるんだよあんたは。あの逮捕された男はね、実は子供の頃から知ってるんだけど、万引きばかりしててさ。うちの店もただけ被害にあつてたかわからないんだよ」

「へえ…そうだったんですか」

「そして札付きの悪^{ワル}になつてどうしようもなかったんだよ」

「それを僕が…」

「そう、だから遠慮なく持つて行きなさい。お金は次からでいいよ」

「そうですか。じゃあお言葉に甘えて」

「そうそう。遠慮なんかしちゃ、こっちの気が悪くなるだけだよ」

「ありがとうおばちゃん」

「はいはい」

でもそのあとに、森田がおばちゃんに言った言葉にアタシ驚いちやったの。

「あのー、遠慮なしついでにお願いがあるんですけどいいですか？」
「ん？何だい？」

「今夜、おでん作る予定なんですけど、このみかんやトマトとおでん材料を交換してもらえませんか？」

「は？」一瞬固まるおばちゃん。

「バカ！あんた何てこと言うのよっ！」

「やっぱりまずかったですかね？^| ^ ;」

結局、おばちゃんの暖かい計らいでガンモやはんぺんと交換してもらえたけど、後味が悪かった気がしたわ。

それで、さっきおでん食べ終わって、今はとっても満腹気分なわけw

森田がちゃんとアタシのリクエスト通りに、みそ煮込みおでんを作れたことにちよっぴり感激しちゃったw

じゃあ今日はこのへんで。なんとか寝ないで更新できたわw
今夜はもう1本、トマトカクテル飲んじゃおっと」

(続く)

その14 気になるそのお相手

気になるそのお相手

● 茜崎涼の私的記録より

自分でもわからない。なぜゆりかのことがこんなにも気になるのか？

一人マンションに帰宅してからもそのことばかり考えていた。

ゆりかがすでに結婚も離婚も経験していたのにも驚いたが、何よりもまして、近々再婚するという事実には更に度胆を抜かされた。

ゆりかは少し人生を歩むスピードが速すぎるのではないか？

それとも俺がのんびり過ぎるのだろうか？

まあ、俺のようなこんな薄情な人間がゆりかに対してこんなこと言える立場でもないのだが。

にも関わらず、ついあんな未練らしいことを口にしてしまうなんて、今更ながら恥ずかしさが込み上げてくる。

なぜ俺はあんなことを言ってしまったんだろう？

理由は自分が一番わかっていて。ただ、簡単にそれを認めたくないだけなのだ。

そう…それはまさに嫉妬に他ならない。

ゆりかほどの女が、森田とかいう冴えない男と夫婦生活をしていたことへのショックと腹立たしさ。

そして、実の子いずみに対する気持ち根深まるにつれ、ゆりかともやり直せるわずかな望みを心に秘めていたからだ。

だが、それも見事に打ち砕かれた。

ゆりかの再婚。。。。

こんなに展開が早いだなんて、連続ドラマでもないのに信じがたいものがある。

さっき晩飯用に買ってきたコンビニ弁当を食べていても箸が進まない。

テレビをつけてもわずらわしい雑音にしか聴こえない。気を紛らわそうと、無理に別なことを考えてみる。

「しまった！明日はゴミ出しの日だ。外食するんだった。」

そうなのだ。この弁当さえ買わなければ、明日の朝に出すゴミはなかったのだ。

(; - ;) " 3 フウ・・・

くだらない。こんなことしか思い浮かばないなんて。

無理に別なことを考えようとしても無駄だということがよくわかった。

自分の思考回路くらい、自然の成り行きに任せよう。

思う存分考えたら、明日にはすっきりするかもしれない。

そう自己中的に自分を納得させると、俺はゆりかと喫茶店で話した時の会話を復唱するように思い出していた。

「その再婚相手って誰だよ？またしょうもない顔してるんじゃないだろうな？」

「私は顔で人を選びません」

「じゃやっぱり変な顔してんだ？」

「そういう意味で言ったんじゃないの！なによ、顔・顔って！」

「ぶっちゃけ俺の顔と比べてどうだ？」

「あのね……じゃあハッキリ教えてあげる。彼はとてもハンサムよ。モテるタイプだと思うわ。でも私はそんなことで再婚を決めたんじ

やありませんからね！」

「そうか…付き合つてどのくらいなんだ？」

「いいじゃないどうだって！とにかく彼にはなんでも相談できたし、いつでも真摯^{しんじ}に受け止めてきちんと答えてくれる人なの」

「へえ…そんな素敵なお相手さんはどんな仕事してるんだ？収入は安定してるのか？」

「なによ涼ったら。あなた私の親でもないのに」

「一度失敗してるなら慎重にならなきゃいかんだろうが」

「お気づかい無用よ。安心して。彼はうちのパパの直属の部下なの」

「（□、；）えっ！」

「だからパパもすぐくお気に入りなの。今は本部長として、取締役員の一員でもあるわ。涼と全く立場が逆でしょ？あなたがパパの前に現れたら殺されるわよ」

「；、（、）た、たしかに。。」

俺は自分がつくづくバカだと思った。ゆりかを捨てて逃げた俺が、彼女の父親に受け入れられるはずもないのに、うまくいけばヨリを戻せるなんて甘く考えていたことを。

「わかつてると思うけど、結婚式には涼は呼ばないから」

「そんなの行きたくもないね」

「そう言つてもらえて良かったわ。この際ハッキリさせておかないとね。私が再婚してからもまた突然あなたが現れてたら困るし」

ゆりかの言葉が俺の心に重くのしかかった。

「でも…いずみに会うくらいダメなのか？」

と、精一杯の反論。

「父親らしいことなんて何もしてないのに、そんな資格ないでしょ！いずみが産まれたことも知らなかった上に暮らしたこともない。当然子育てもしてない。そんな人は父親じゃないわ！」

結局、俺はこの後、一言も返せなくなつてトボトボとこの部屋に歸つて来た。

まさにゆりかの言うとおり。俺はいずみに対して父親だと主張する権利などない。

自業自得だ。仕方ない。。たしかに仕方はないが。。

それにしても。。

俺はどうしても氣になつてしょうがなかった。

ゆりかの心を射止めたその張本人。森田なんかはどうでもいい。過去の人間だ。

一目だけでもどんな二枚目のエリートなのか確認できないものか？

そう、ネットだ！

一流企業ならたいいていホームページくらいはある。しかも本部長で取締役員なら顔写真くらい載つてもおかしくはない。

俺はすかさずパソコンを立ち上げる。もう食べかけのコンビニ弁当なんかに目もくれなかった。

そしてネットに繋いで検索でサイトを確認する。

「あつた！これだ！よし、役員の一覧もあるぞ」

俺はマウスでゆつくりと画面をスクロールさせていった。すると…

「いた！本部長つてことは、こいつに間違いない！」

俺はサイトの顔写真をマジマジと食い入るように見ていた。

「これえだひでゆき
是枝英之・・・か」

(続く)

その15 身震いした美智代

身震いした美智代

●美智代のブログより

みっちちちの好き勝手ぶろぐ♪

みなさんヾ(〃´・・´〃)こんにちはぁ♪

今日はなんかね、朝からもややな気分なの。

って言っても、別に具合が悪いとかじゃないのよ。

みなさんも思い出せそうで思い出せないことってあるでしょ？実はそれなの。

先週のことなのね。朝ゴミ出しに行ったら、回収小屋の前にワリとカッコいい男の人がいるわけ。

結局その人もゴミ出しに来てたわけなんだけど、どっかで見た顔だったのよねえ。

しかも最近じゃなくて、結構昔かも？

それがどうしても思い出せなくてね。胸につかえて気持ち悪いのよ。それにちょっとアタシのタイプだったしねw

とりあえずその彼には満面の笑みで会釈したの。

ゴミ出しに来るってことは近所だろうし、一応初対面は最初が肝心だしね。

それなのに、せつかくアタシのさわやかな印象を台無しにした奴がいたのよ。

、そう、ご存じ森田。奴がのこのご自分の部屋のゴミ袋を持ってや

つて来たの。

そしてアタシのそばに来るや否やいきなりこう言うの。

「美智代さん、今日の夕飯当番は勘弁して下さい。残業になりそうなんですよ」

「ちよつと！そんなこと今ここで言わないでよっ！」

アタシ、顔から火が出るくらいに恥ずかしかったわ。まるで森田を奴隷にしてるみたいに聞こえるじゃない？

案の定、タイプの彼はアタシと森田を交互に見ながら、不思議そうな顔してたわ。そしてやっぱり言われちゃったの。

「彼氏…ですか？」

「違いますっ！ただの隣人ですっ！（へへ）」

もう即効で答えたわよ。

「そうですか…失礼しました。では僕はこれで。」

その彼は首をかしげながら帰って行っちゃったの。

もうヤダ！森田のせいで、アタシの運命の出会いを不意にしたかもしれないわ。

…って、この時は思ったの。

しかもどつかで見たことある彼なのに、思い出せそうで出せないままね。

でもね、もっと大変な問題がさつき起こったの。

実はね、今日これからアタシの親友ゆりかの結婚式なの。

式は午後からだから、今はまだ家にいるの。でも朝早く美容院行つて来たから、髪もメイクもバッチリ決まってるんだけどね。」

それで問題のことだけど、さっきとなりの森田がいきなり尋ねてきたのね。

それまでゆりかの再婚については何も教えてなかったのに、アタシったらすっかり口すべらせちゃったんだ（へ□へ；A

「美智代さん、今日の夕飯は何にしましょう？」

「あー、アタシ今日はいらない。ゆりかの結婚式だから」

「Σ—11（　　）——1ええっ？」

「ハッ（。〇。；）」

「ゆりかって…須藤ゆりかさんのこと…ですか？」

もう隠してもしようがないからアタシも観念したわ。

「そうよ。あんたにはシヨックだと思って今まで言わなかったのよ」

「今わかった方がシヨックですけど…（　　）；」

「もうしょうがないじゃない！あんたはもう別れたんだし、ゆりかの幸せを願ってあげるのが利口よ」

「……そうですね。。。」

「ゆりかは常に前を向いて歩いてるわ。あんたにとってもこれがいきつかけだわ。もう過去のことなんてクヨクヨ考えないで、自分の将来をしっかりと考えてみたら？」

「……はい。」

なんか急にテンションが下がった森田を見てたら可哀そうになっちゃった。

「ねえ、あんたとゆりかに何があったか知らないけどさ、誰か相談相手はいなかったの？離婚しなくてもすむ方法は探せなかったの？まあ今更こんなこと言ってもしょうがないけど」

森田は大きなため息をついて言ったわ。

「いましたよ。。会社の同僚に相談してました。すごくいい人でいろいろと助けてもらいました」

「今もその人に相談してるの？あんたの親友？」

「親友でありたいと願ってるんですけど…今その人はもう退社してしまつて、同じ部署にはいないんです」

「そう…でも連絡先がわかるなら、たまに電話して話でもしなさいよ」

「それがその…わかんないんです（^—^；）」

「（ノ——）ノコケッ！」

「すっかり聞くの忘れちゃつて…そう言われればそうですね。是^{これ}枝君^{えだ}のケータイ番号だけでも聞いておけば…」

「ちよつちよつちよつと!？」

アタシその時、森田の言葉に過敏に反応しちゃったの。

「(・|・)…は？」

「今あんた、是枝って言った？」

「はい。是枝君ですけど？」

「まさか…是枝英之^{これえだひでゆき}じゃないわよね？」

「是枝英之ですけど？あれ？美智代さんお知り合いですか？」

「…(――)こ、これって。」

「美智代さん、どうかしましたか？」

「何でもないわ。とにかくあんたはこれから頑張りなさい。アタシもう出かける準備するから帰って！」

「はあ…じゃあこれで。」

アタシ、すっごく驚いて、しばらく開いた口がふさがらなかったわ。

ゆりかの結婚相手と森田の相談相手が同じ人だなんて。。。ってことは。。。

ってことは。。。

ゆりかと森田の破局はもしかしたら仕組まれたこと？そうさせられたこと？

そしてゆりかの再婚も全て是枝英之の計算だったとしたら。。。

そう考えるとアタシ、急に身震いしてきちゃった。

なんか怖い。すごく怖い。

でももう、どうにもできない。証拠もない。推理にすぎない。アタシの考えすぎかもしれない。とにかく式は迫ってる。

ゆりかは本当に幸せになれるのかな？

男と女。ある日どこかで必ず出会う。とても大切なこと。運命のターニングポイント。

ゴミ出しの時に会った彼とは赤い糸で結ばれているかはわからないけどねw

でもその時の第一印象だけで好感を持った軽い気持ちより、きちんとお付き合いして相手を見極めることの方がとっても大事なんだなって、森田の証言から今改めて思ったわ。

そろそろ行かなくちゃ！ゆりかの結婚式に。。なんかとっても不安で心配。。

じゃあ今日のブログはここまでね。アタシに何かできることがあるのかしら？

みんなのひらめいた方法や意見も聞けたら嬉しいな。

（続く）

その16 情報収集

情報収集

● 茜崎涼の私的記録より

余談になるが、この前ゴミ出しに行った朝、偶然にも森田卓と遭遇した。

もちろん、森田は俺のことは知らない。

しかしながら、こんなに近くに住んでいるとは知らなかった。それもゴミ出しの集荷場所まで同じとは。

あまり関わりたくもなかったが、森田と一緒にいた女性と親しく話していたので、少しだけ興味を持った。

不思議だ。こんなブサイクな男でも、ゆりかと結婚できた上、離婚してからもうこうして女に縁がある。

一体、こんな男のどこに魅力があるのだろうか？

俺はこの女性にちよつと質問を投げかけた。

「彼氏…ですか？」

「違いますっ！ただの隣人ですっ！」

と、必死に即答してきた。おそらく照れ隠しなのだろう。

森田と夕飯のメニューについてを話すくらいだ。全くもって信じがたい話だが、二人は同棲しているとも考えられる。

まあいいさ。俺には関係ない。勝手にしてくれ。ε・(・へ・)

その女性は俺にぎこちない会釈をした。妙な作り笑いでおかしく見えたが、そこは冷静に対処して、俺はこの場をあとにした。

家にいても気になるのは、どうしてもゆりかのことだった。

かつて、彼女がなぜ森田と結婚する気になったのかも気になるところだが、離婚した以上、追及してもしようがない。

問題は、是枝英之という男とはどんな男なのか？仕事の肩書きなんかじゃなく、一個人としての性格は？男気はあるのか？

森田に関してはだいたい想像がつくからどうでもいい。

是枝はルックスも地位も収入も申し分ない。その中身をどうしても知りたい。

こんなこと考える俺はきつと嫉妬しているのだろう。自分でもわかる。でも恨みなど毛頭ない。

ただ、俺自身で納得し、安心してから、ゆりかを祝福してやりたい。そう思っているだけなのだ。

俺はゆりかを不幸にした。その間、ゆりかは離婚を経験して更に不幸を味わった。

今度の再婚は間違えた選択をしてほしくないのだ。

翌日俺は行動に出た。是枝英之がゆりかにふさわしいかどうかの調査。もちろん自分勝手な捜査だから報酬などない。

余計なおせっかいにすぎないが、これをしなければ俺の気持ちがどうしても収まらなかった。

まず最初に訪ねたのが、是枝が卒業した大学の同期生たち。

今の会社の同僚を訪ねても、外面的な部分しかわからないと思っただけだ。

それが功を奏してか、俺は非常に興味ある証言を得ることができた。

○同期生・山野井さとの証言

「是枝は場の空気を読む賢い奴ですよ。人に合わせてしゃべれる

し、まあ世渡り上手なんでしょうね、たぶん。」

○同期生・上野浩輔の証言

「人に心のうちをあまり話したがない奴だったかな。いい奴なんだけどね」

○同期生・菅野久志の証言

「緻密で計算高い奴ですね。こうと決めたらじっくり時間をかけてやり遂げるタイプだったかも」

○同期生・田上リオナの証言

「昔の是枝君のことしかわからないので。今の彼を一番知ってるのはたぶん、綾乃^{あやの}じゃないかと思うけど。三木綾乃。同期で彼と同じところに入社したはずだから」

俺は最後の田上リオナの証言が特に気になり更に問いかけた。

「今も彼女はそこに？」

「いえ、なんか異動が2回くらいあって、綾乃は今、関連子会社にいると思います。本社からはちよつと遠く離れてますけど」

「なるほどね。ありがとう」

これはまさに好都合。その三木綾乃なる人物が本社にいるならアポはとりづらい。是枝のことを調べてる人間がいて社内で噂がたつのも困る。

だが離れた子会社ならそれほど影響はないだろう。

俺は早速、三木綾乃に会いに行くことにした。

そしてそのことが、俺がこれからこの私的記録に書く大きな発見と、まだ推理の段階ではあるが、驚愕の大問題に繋がることになる。

（続く）

その17 何もできないまま

何もできないまま

●美智代のブログより

みっちっちの好き勝手ぶろぐ♪

みなさんこんにちあ。。

なんかねえ・・・今日は顔文字とか出したくない気分なの。
前回のアタシのブログ読んでくれてる人にはわかると思うけど、
さつきちょうどゆりかの結婚式が終わって帰宅したところなのね。
いつものアタシなら2次会でも3次会でも参加して飲みまくるんだけど、なんか腑に落ちないまままで式に参加しちゃって全然そんな気分になれなかったの。

もちろん、ゆりかには幸せになってもらいたいからちゃんと祝福したけどね。

ゆりかの嬉しそうな顔見ると、これでいいんだって思えた部分もあったし。

第一、ダンナ様は高給取りで二枚目。ゆりかのエスコートも上手だし、おしゃべりも上手でほぼパーフェクト！

逆にアタシの方が、推測だけで是枝さんを疑いの目で見ているのが悪い気がしちゃったりしてね。

アタシのテーブルのとなりには親友の翔子がいたの。

翔子は1年前に結婚したの。ちょうどダンナの転勤が決まっていたから、それに合わせて結婚したって感じかな。

だってニューヨークだよニューヨーク！一緒に行くに決まってる

じゃない？

まるで連ドラの最終回にあるパターンが現実には起きちゃったって感じ？

とにかく翔子とは1年ぶりの再会だったの。

で、アタシの疑問を彼女に相談しようと思ったんだけど、なにせ翔子ったら友人代表のスピーチに決まってたわけよ。

だから頭の中はそれでいっぱい。特にあがり症の翔子には人の話なんか聞く余裕もなかったみたいなの。

しょうがないからスピーチが無事に終わってから話そうと思ってたのに、翔子ったら緊張の糸が解けたのか飲みまくっちゃってね、はしやぎまくりなの。

でもゆりかを心から祝福してるのがよくわかったし、是枝さんをカッコイイとか声がしびれるとか褒めまくるし、結局アタシ、翔子に何も言えないまま式が終わっちゃったの。

でも翔子とホテルのロビーで別れるとき、彼女の方からこんなことを言ってきたの。

「ゆりかも今度は森田とは比べ物にならないほどの人を見つけたよね」

「まあそうね」

「森田との時間がロスタイムだったのかもね？でもこれが必然的な運命かもしれないし」

「アタシにそんな難しいこと言ってもわかんないよ翔子」

「つまりね、ゆりかがパーフェクトな人に出会えるまでには、乗り越えなければならぬ修行をしなければならないってことよ」

「なんかそれって、スピリチュアル的じゃない？」

「アタシこういう話、結構好きなの（・・）うふふ」

「でもさあ、パーフェクト過ぎる人ほど、なんかウラがありそうって思わない？」

「そういう考えも好きよ（・ー・）むふふ」

「好き嫌いの話じゃなくてさ（^ー^；）」

「はいはい、美智代の言いたいことはわかってるわ。人間誰にでも外面と内面があるもの。でもそれはお互い様でしょ？」

「その内面が、外面とかけ離れてたらどうする？」

「え？どういこと？美智代、是枝さんのこと詳しいの？」

「いえ、今日まで会ったこともないよ」

「じゃあなんでそう思うの？あーわかった！ゆりかのこと心配してるのね？二度目だし。そんなの取り越し苦労よ」

「そうかなあ。。？」

「もし是枝さんに欠点があるとしたら・んーなんだろ。例えば変わった性癖があるとか？（――）ミバンバン」

ダメだこりゃ・・・；（――）翔子は完全に酔っぱらってる。。

こうしてアタシは2次会も行かずに帰って来たの。胸のもやもやが晴れないままね。

で、とりあえず着替えてこのブログでも更新しようと思ってたら、となりの森田がいきなり訪ねて来たの。

またこの続きはあとで更新するね♪

だって、森田見てるとなんかせつなくなっちゃったし、先にお風呂にも入りたいしねw

ではみなさん、おやすみなさい。（uーu）クウウウ。o

（続く）

その18 対面・三木綾乃（前編）

対面・三木綾乃（前編）

●茜崎涼の私的記録より

三木綾乃とは土曜に会う約束を取り付けた。

前日移動先の会社に電話を入れ、なんとか二つ返事で承諾を得てホッとした。

なにせ、いくら正直にこちらが名乗っても、見知らぬ探偵からの対面要求など警戒されるのが当然といえば当然。

予想のできない緻密な犯罪も増えている昨今、警察手帳でも見せない限り断られて当たり前なのだ。

だから俺は待ち合わせ場所を、大通りに面した人の出入りの多い喫茶店を選んで彼女に伝えた。これならたとえ何かを企てたとしても、必ず目撃者が存在するから、犯罪など割に合わないことになる
と丁寧に説明もした。

そして当日、指定場所に三木綾乃がやって来た。お互い顔は知らないが、俺が入口付近に立っていると云っておいたので、彼女の方から話しかけてきた。

やや緊張した面持ちだがそれは仕方のないこと。とりあえず、二人で中に入って席につき、話の本題に進むことにした。

「早速ですみませんが、先日お話ししましたように、是枝英之さんのことで少々うかがいたいと思いますのでよろしく願います」

「はい。。でも話すことがそんなにあるかどうか。。」

「大学で同期だったんですね？その後同じ会社にも入社されていますし」

「はい。」

三木綾乃はうつむき加減で俺と目線はあまり合せなかった。

「率直に言って、あなたから見た是枝英之という人物はどういう人ですか？」

「どうって…頭の回転のいい人じゃないかと思えますけど」

「なるほど。それはみんなそう言いますね。では社会人になってからの彼はどうでしょう？大学時代と比べて何か変化はなかったですか？」

「別にそれほど変化はないと思えますけど」

「それほどってことは、少しはあったと？」

「あ、すみません。そういう意味じゃ…。ただ彼は入社当時からスピード出世を目指してたので、仕事一筋に頑張っていたということが、学生時代とは違うということですよ」

「そうですね。そして彼はそれが実ったわけですね。今やこの若さで本社の本部長であり、取締役員ですもんね」

「すごい人だと思いますけど。」

俺は少しだけ腑に落ちなかった。三木綾乃は緊張してるとは言え、あまり余計な話をしたがないように思える。

「職場での彼は、上司との関係はうまくいっていましたか？」

「はい。だから出世したんじゃないかと思えますけど」

「では同僚はどうでしょう？出世を目指すなら同僚はみんなライバルです。ぎくしゃくした関係もあったのでは？」

「いえ、全くありませんでした。むしろ彼はリーダーシップ的な存在で、私たち女子社員も含めた同僚からも信頼されていましたので」

「そうですね。非の打ちどころがありませんね（ハ―ハ；）まさにパーフェクトだ」

三木綾乃が不思議そうに尋ねてきた。

「なぜ是枝さんを調べてるんですか？彼が何かしたんですか？」

「いえいえ、そんなんじゃないやありません。私は警察じゃありませんの

で。そうそう、彼が結婚することは当然あなたも知ってますよね？」

「え？あ…はい」

「いろいろ素行調査つてやつがありましてね。申し訳ありませんが、内密の調査なんですかこのことは内緒にして下さい」

「はあ…どうせ彼に会うこともないですし。。」

「え？」

俺はこの言葉にはつきりとした疑問を抱いた。

「是枝英之さんの結婚式には行かないんですか？もう今週ですよ？」

「招待されてないもので。」

「ええっ？同期生であり、同期入社のあなたが？なぜ？」

「わかりませんけど。。」

「失礼ですが彼とケンカされたとか？」

「いいえ全然」

「あなたも不思議だとは思いませんか？」

「たぶん私が異動したからでしょう。招待されたのは本社の人たちと、彼が1年間だけ出向していた関連会社の一部の人たちだけだと思います」

「は？ちよつと待って下さい。彼はずっと本社勤務じゃなかったんですか？」

「いいえ、彼は私と一緒に1年だけ。商事に異動しました。そのあと…」

「（□、；）ええっ？本当ですか？」俺はマジで仰天してしまっ

た。「…何か私、とんでもないこと言いました？」

「す、すいません。何でもありません。続けて下さい」

「はい。。そのあと彼は本社に戻り、私も今の会社に異動になりました。もう彼とは会わなくなつて1年以上になります」

「そつだったんですか。。異動つてそんな頻繁にするもんなんですか？」

「さあ、よくわかりませんが、一個人1年ごとに異動するのは珍しいとは聞きますけど、私は人事部ではありませんし理由はわかりません」

「そうですか。。」

このとき、なぜかはわからないが、俺の心の中で胸騒ぎが起きているのを感じた。

（続く）

その19 対面・三木綾乃（後編）

対面・三木綾乃（後編）

●茜崎涼の私的記録より

不思議なことが起きた。というか起こっていた。

俺は仕事とは関係ないプライベートなこととして、是枝英之という人物について探っていた。彼が裏表のない評判通りの男であるか確認するだけで良かった。

それなのに・・・それなのに事態は思わぬ方向へ行こうとしていた。

ポイントは。商事。。

そこはあの森田卓も勤務している会社なのだ。

しかも俺が浮気調査の依頼を受けたターゲットのいる会社、つまり部長もいるのだ。

俺は驚きと共に、別な関心が沸々と湧き上がってくるのを感じた。

「三木さん、関係ない話ですみませんが、森田卓という人はご存じですか？」

「え？あ、はい。森田さんのことも調べてるんですか？」

「いえいえ、たまたまその。商事に勤務しているのを知ってたもんですから」

「はあ・・・」

「じゃあわかったついでにちょっと聞きますが、是枝さんと森田さんとは面識があることになりますよね？」

「ええ、私も含めて同じ部署でしたので」

「失礼ですが、あなたの目から見て、森田さんと是枝さんは、プライベートで仲が非常に悪かったということはありませんでしたか？」
「いいえ、全然。むしろ仲が良かったと思いますけど」

「仲が良かった？本当ですか？」

「はい。森田さんが個人的によくお話する人は是枝さんしかいなかったと思いますけど」

「（「□」；）えっ？そ、そんな仲だったんですか？」

「それが何か？」

俺はこの三木綾乃のキョトンとした表情にも疑問を持った。鈍感なんだろうか？それとも普通のバカなのか？

「あのですね、是枝さんが今週結婚するお相手は、その森田卓の元奥さんだってことくらい、あなただって知ってるはずでしょう？」

一瞬、三木綾乃の口が真一文字にキュツとしまった気がした。

「ええ、知ってます。」

「気を悪くしたらすみません。僕が今ふと思ったことはですね……」

「はあ……」

「是枝さんと仲が良かった同僚、つまり森田卓が離婚した。そしてその別れた奥さんと是枝さんが今週結婚しますよね。何かドロドロしたものを感じるんですが。」

「私にはわかりません。それがわかった時には私、もうこっちに異動してましたから」

「なるほどね。」

「私も是枝さんがそんな方と結婚するとは思いませんでしたし」「では今はどう思いますか？率直な意見をどうぞ。誰にも口外はしません」

「：別にいいんじゃないですか？森田さんが離婚したあとなら、是枝さんだって、ゆりかさんだって自由じゃないですか？」

俺はちよつと驚いた。

「あなたは森田卓の奥さんの名前を知ってるんですね？面識がおあ

りだったんですか？」

「ハッ…（。〇。；）い、いえ、ありません。森田さんがよく奥様の自慢話をされてましたから。」

「（。・・）ほー」

ここで腑に落ちないことがいくつか出てきた。

一つ目は三木綾乃が、いとも簡単に“ゆりかさん”と言ったこと。面識のない相手に、しかも異動してから1年以上も経つのに、すぐにゆりかの名前が出てくるものだろうか？

二つ目は森田がよくゆりかの自慢話をしていたこと。それが本当なら、こんな仲のいい二人がなぜ別れることになったか？

三つ目、これも三木綾乃が言ったことの中にある。

“森田さんが個人的によくお話する人は是枝さんしかいなかったと思いますけど”

そう、ここだ。森田は是枝以外、プライベートな会話をする人間がいないはずなのに、三木綾乃が森田の自慢話を聞いたのはなぜか？森田卓と三木綾乃の関係も探る必要があるかもしれない。

四つ目、これもまた三木綾乃の言葉から引用してみる。

“森田さんが離婚したあとなら、是枝さんだって、ゆりかさんだって自由じゃないですか？”

離婚したあとなら。。。

これだけ矛盾が出てくると、この言葉でさえどうにも引っかかる。

これがもしそうでなかったとしたら？

つまり、離婚する前から是枝とゆりかの仲が良かったとしたら？
いや、ゆりかは決して不倫などする女ではない。

逆に独身の是枝の方が、絶世の美女・ゆりかに惚れこんでしまう
可能性が高い。

だとしたら…

だとしたら少しは納得できる部分もある。

是枝が緻密で計画的な性格であること。

目的のためなら長期的な努力もいとわないで一途に突き進むこと。
これらは学友たちの証言からもわかつている。

大飯説として、もしゆりかの再婚が、是枝の計画によるものだと
したら。。？

これは法で裁けない目に見えない犯罪だ。

罪には問われないかもしれないが、人間として卑怯きわまりない
手段であり、許すわけにはいかない。

そんな男と一緒になくてもゆりかが幸せになれるはずはない。

しかしこれを立証するにも証拠が何もない。ただの推測でしか
ない。

だがこの推測の方が正しく思えてくるのはなぜだろう？

俺がゆりかをエロひいきしてるからなのか？いや違う。

ひとつの線でこの3人が繋がった。是枝英之、森田卓、三木綾乃。
そのうち是枝と三木は同期生。彼女の証言もあいまいだ。
是枝をかばおうとしているのか、それとも。。

・・・共犯者？

「すみません。私もう帰ってもいいですか？」

「あ……！す、すみません。僕、考えこんじゃってました？」

「ええ、かなり」

「いや本当に申し訳ありませんでした。では最後にもうひとつだけ」
「わかりました」

「森田卓は、是枝さんが結婚することを知ってるんですか？」

「たぶん……知らないと思いますけど。招待も出してないと思いますよ。普通に考えてもそうでしょう？」

「まあそうでしょうね。友人同士なら修羅場になりかねないですもんね。でもあなたが招待されないのが不思議でなりません」

「……それは本人にでも聞いて下さい。私にはわかりません」

「是枝さんとあなたは入社も異動先も一緒にやって来た仲間だというのに、僕には本当に不思議でなりませんけどね」

「正直、私あまり記憶にないんです」

「は？記憶？何のですか？」

「前の会社では是枝さんと関わった仕事とか、あまり覚えてないんです」

「それはどうしてですか？」

「さあ……仕事が単調で樂すぎて、やりがいがなかったからかもしれない」

「ふむ。そうですね。。わかりました。もう結構です。今日はわざわざお時間をとっていただきありがとうございます」

俺は帰り道、またひとつの疑問にぶち当たっていた。

“記憶にない”

何なんだこの言い方？彼女が天然キャラのせいで、言葉の選び方を知らないだけなのか？

それとも俺が深く考え過ぎているだけなのか？
実際そうなのかもしれないが。。。

（続く）

その20 森田しつかりしなさいっ！

森田しつかりしなさいっ！

●美智代のブログより

みっちちちの好き勝手ぶろぐ♪

みなさんこんばんわぁ(´・・・´)ノ”

早速だけど、ゆうべ森田にハツパかけてやったの。

ホントは何も言わずにしばらくそっとしておこうと思ってたの。

アタシだって、それくらいの気遣いはできるつもり。

なのにアイツの方からのわざわざやって来たわけよ。

それもアタシがちょうど着替えてブログ更新しようとしてたときによ！

あ、先にお風呂は入ってたんだけどねw

だからアタシはもうパジャマ姿でリラックスしてたの。

大好きなトマトカクテルも冷蔵庫から出して飲もうとしてるときだったのよ。

もうサイアクーー！！(´へ´#)

よっぽどほつとこうかっと思ってたわ。

でもね、やっぱちょっとだけ気になっちゃって、玄関まで入れちゃったの。

「何の用？」

「あー、森田と言いますけど。」

「見りゃわかるわよ。もう玄関に入ってるでしょ」

「そ、そうでした(´へへ´;)」

「(´・・・´) = 3 フウ」

「あの…今日の結婚式のことなんですけど…ゆ、ゆりかさんの。」
あーやっぱり思ったアタシ。当然気になるはずよね。
気になるどころか、明らかに動揺を隠せないって感じ？

だって、右足にサンダル、左足にスニーカー履いてんだもの。それに
なぜか片手にティッシュの箱持つてるし。

アタシすぐにツツコミ入れたわ。

「あんたティッシュ持って部屋でひとり何してたのよっ！ヤらしい
っ！」

森田もさすがにハツとしたようだけど、動揺が大きすぎて弁解も
できなかったの。

「こ、これはちょっと…」

「もうジョークくらい軽く受け流してよ！」

「は、はあ。。」

最近では久しぶりに見た森田の情けない姿。

でもアタシにはティッシュを持つてる理由がわかった。

森田は昼間ずっと部屋で泣いてたってね。今でも目が赤いし鼻水
も出てる。

“マズイわ…森田にゆりかの結婚相手が是枝さんだって教えたら
…きつと泡吹いて倒れちゃうかも？”

だからアタシはこいつを元気づけようとしたの。

「あんた、いつまでゆりかのことを引きずってるの？立ち直る気な
いの？」

「はあ…そうは思ってるんですがなかなか。」

「だったらこれがいい機会じゃない。ゆりかはもう結婚しちゃった
の。ケンカして別れたんじゃないなら、あんたはゆりかの幸せを願
うべきでしょ？」

「はい。。理屈ではわかってるんですが。。」

「しょうがないわね。で、何が聞きたいの？」

「その…ゆりか…さんのお相手はどんな人かと。」

「知ってどうすんの？」

「いえ、どうもしません。殺しに行くとかそんなんじゃないです」

「当たり前よっ！（^□^；」

「だからその…僕が言うのも変ですけど、僕よりいい男なのかな？
つて。」

「安心して。あんたより数百倍いい男よ。ホント変な質問ね」

「それと、僕よりハキハキしてる人かなって。僕は決断力がなかったから、ゆりかを悩ませてしまったんです。だから。」

「あーなるほどね」

「ゆりかを大事してくれる人ならそれでいいんですけど。」

「それも多分大丈夫ね。お相手の人は重役よ。責任のある立場の人だし、人との会話も上手だわ。緊張しないタイプって聞いたけど」

「アワワ（；）僕と真逆な人ですね」

「あんたも早く新しい彼女見つけるつもりで、もっと積極的になりなさいよ」

「そうですね。」

「でもアタシはダメよ」

「は？」

「アタシのパジャマ姿見て萌えないでね。変な気起こしたらゆりかに言っわよ」

「それはないです。全然萌えません」

「なんですってー！！（、（、（ノ」

「え？なんで怒るんですか？」

「年ごろの独身女性が目の前でパジャマ姿なのに、少しは目をそらしなさいよ！」

「すみません。ゆりか…さんの姿を見慣れてたもんで。」

「いちいち腹が立つ言い方ね！もうっ！（、（、（ノムキィ」

「じ、じゃあ僕はこれで失礼します（^ー^；）ご迷惑おかけしました」

このあと森田はアタシの怒りに慌てたみたいで、振り向きざま玄関の閉まつてる扉に顔をぶつけたの。まるでシナリオの出来上がったコントみたいにw

「バカね。今どきそんなことしてもウケないわよ」

「はは…（-_-）」

「ところであんたも今の会社、随分長いみたいだけど、出世はしないの？」

「一応、今は課長です。部長補佐もやらせていただいています」

「へー（-。-）それは意外ね」

「僕、プライベートは最低ですけど、仕事はできるんです」

「自分で言わないの！（^ー^;）」

「はい…では失礼します。おやすみなさい」

アタシ、森田が帰ったあと考えちゃった。

これで良かったのかな？是枝さんのこと教えなくても良かったんだよね？

だってもうゆりかは結婚してしまったんだもの。

アタシの推測でどうのこうのできないもの。

それに…

それに、例えこの結婚が是枝さんの計算だったとしても、ゆりかを愛するゆえにしたことなら、ゆりかは彼にしっかり守られるわ。

幸せな家庭も築けるじゃない？

以上、アタシの今日の結論。みんなはどう思う？

じゃあ今日のブログはこれまでね！

トマトカクテルぬるくなっちゃったから、味が半減しちゃったわ；

（*、-、*）ノ”じゃあね”
♪

(続
く)

その21 悩める茜崎

悩める茜崎

● 茜崎涼の私的記録より

” 仕事でもないのにお前はなぜ人のことに首を突っ込むんだ？ ”

今、人にこう聞かれたら俺はすぐに返答できないだろう。

はつきり言って自分でもよくわからないのだ。

ゆりかとはもう無縁。向こうもそう思っている。

だからゆりかがどうなろうと本来なら知ったことではない。

でも一度は愛した女が、もしもともんでもない男と運命を共にするとしたら、それを素通りして見過ごせない自分がいる。

その一方、全く真逆な思考の自分もいる。

もし、陰謀か何か事実がわかったとしたら、俺は一体どうすればいい？

ゆりかに教えるのか？ 策略者に抗議に行けばいいのか？

だがそれが一体何になる？ いざこざになるのは間違いない。

その上、ゆりかにも精神的にダメージを与えてしまうだろう。

彼女は以前、カウンセリングを受け、長い間通院していたこともあるらしい。

もしかしたらそれは俺のせいかもしれない。

そしてまた、俺がゆりかの新たな結婚生活をぶち壊すことになったら・・・

“ そうだ。余計な詮索はもうよした方がいい。 ”

“ いや、違う。ゆりかがこのままずっと騙され続けてもいいのか？ ”

“このままほおっておけばすべてが丸く穩便に済むんだぞ”

“でも真実を知る権利は誰にでもあるはずだ”

“証拠はあるのか？お前の勝手な思い込みだったらどうする？”

“でも思い込みじゃなかったとしたら？”

“それでゆりかやいずみは幸せになるのか？真実が幸せとは限らないんだぞ！”

部屋にいても自問自答ばかりで数日間が無駄に過ぎて行くばかりだった。

そして何も進展のないまま、気づくとゆりかの結婚式当日。

俺は相変わらず部屋で悶々としながらくすぶっているばかりだった。

これが映画やドラマの世界なら、式場に飛び込んで花嫁を連れ出すおなじみのパターンも考えられる。

だが実際にそんなこととしてしまったら、俺はただの不届き者の誘拐犯。

だいいち、ゆりかが俺に愛想を尽かしているのにドラマのワンシーンにもならない。

“俺はゆりかに未練があるのか？”

正直“ない”と言ったらウソになる。

でも今の俺の心境としては、ゆりかとヨリを戻すことよりも、彼女が不幸せにならない方向に導いてやりたい気持ちの方が強い。

それは俺が純粋なゆりかに対する今までの懺悔さんげの意味も含まれている。

部屋の時計を見ると午後7時…

ゆりかとは枝英之の挙式も終わった頃だろう。

今日も自分の心と葛藤しているうちにこんな時間になってしまっ

た。

煮え切らない自分が齒がゆい。

調査しようと思えばできないことでもない。

だがどんな形であれ、ゆりかが幸せになることを大前提に考えると、俺の行動に移す意思がなえてしまうのだ。

“もう…諦めよう。ゆりかからきっぱり離れよう。そうすべきだ”

この日の最後には、こんな思いが俺の気持ちの大半を占めるようになっていた。

だが再び、そんな俺の決心も一気に急転したのが、翌朝の意外な人物からの1本の電話からだった。

そしてそれが、うやむやにはできない事実、探らなければいけない事実へと繋がっていくことになる。

（第1章・終わり） 第2章へと続く

第2章 それぞれの思い その1 小松房江

第2章

それぞれの思い

その1 小松房江こまつふさえ

私が依頼した探偵さんはすぐにやって参りましたの。

「急に電話でお呼びだてしてごめんなさいねえ。忙しかったんじゃない？」

「いえ、今日は暇でした。でも調査料なら振込みでも構いませんのに」

「私も最初はそう思いましたのよ。でもね、どうしてもあなたに名前何でしたっけ？」

あかねさき
「茜崎です」

「そうそう、茜さんだったわね。女の子の名前のような苗字だと記憶はしてありましたけど出てこなくてねえ。年取ると恐ろしいものですわ」

「あの…茜じゃなくて茜崎ですけど（^ー^；）」

「ごめんなさい。悪いけどその名前、言いづらいから略して言わせてもらえませんかしら？」

「は、はあ；ー」

「実は茜さんに直接お礼がしたくなったものですから」

「そんなお気づかいは別に…」

「いえいえ、あなたの調査報告は目を見張るものがありましたもの」「それは買いかぶりですよ」

「謙遜なさらなくて結構ですわ。全てあなたの調査通りでしたもの」「…は？あの…ご主人に確かめられたんですか？」

「まあ玄関で話すのもなんですから、中にお入りになって。さあ御

遠慮なさらずに」

「じゃ、じゃあ少しだけ」

こうして私の半ば強引な誘いで、茜さんを応接間までご案内しましたの。

「今、お茶入れますわね。それともお紅茶がよろしいかしら？」

「おかまいなく。どちらでも結構です」

「私のおすすめはブルーベリー紅茶なんですよ。これは厳選された実を丁寧に…」

「じゃそれでいいです（＾―＾；）」

「あらそう？まだ説明は終わってませんが、すぐにお持ちしますわね」

数分後、私は用意したお紅茶を探偵さんの座るテーブルの前にお出しましたの。

「お茶菓子はベルギー産のクッキーとフランス産のフィナンシェと、どちらが…」

「あの、何かお話があるのでは？（＾―＾；）」

「ありますわよ。茜さん、二枚目さんでいらっしゃるのに随分せっかちですね？」

「すみません（-；）」

「それにズボンもジャケットも黒づくめで、これから法事か何かですの？」

「いえ、これ普段着なんです；」（-；）」

「まあ、まだお若いんですから、もっと明るい色を着なければいけませんわ。それじゃあ古畑任三郎みたいですよ」

「あの人も探偵だったですかね？刑事だったですかね？」

「いいえ、あの方は俳優さんですわ」

「た、たしかに（＾□＾；A）」

茜さんたら、時折こんなすつとんきようなことを言うみたいだけれど、こういう人に限って頭脳は明晰なのですね。

「とりあえず、一口お飲みになつて。おいしいですよ。とっても」
「はい。いただきます。」

そして一息ついたところで、あらためて私は茜さんにお礼を申し上げましたの。

「主人のことでは安心しましたわ。茜さんのご報告通り、相手の女は主人に何の感情もないようですし、うちの主人もそれをわかってたようです」

「部長に……いや、ご主人に直接お尋ねになつたんですか？」

「ええ。それに私、相手の女とも2日ほど前に会つて来ましたの」
「Σ―11（　　；）――1ええっ？そんなことよくできましたね」

「これも茜さんの報告書のおかげですね。だから確信して行けましたもの」

「それにしても……（^―^；）」

「行つて正解だったですよ。あの女の名前、何とかまりもつて……」
「倉沢まりもです」

「そうそれ。名前は可愛いのに、いろんな男をたぶらかして金づるにするメギツネだつてすぐにわかりましたもの。ああいう顔の女つてみんな同じ目をしてますわ。眼尻が吊り上つて、男を力モにするような目。私がまだ若かりし女学生の頃にもそんな女がいましたもの。一度に5人の殿方を相手にしてましたのよ。殿方は殿方でそんなことも知らずにその女に宝石だの洋服だのつて買い与えて喜んでましたのよ。で、私どこまで話しましたっけ？」

「いえ、これから本題ですが……（^―^；）」

「あらそう、まだ何も話してなかったかしら？」

「あの……それで彼女は奥さんにどう言い訳したんです？」

「言い訳も何もありませんわ。開き直つてましたもの。うちの主人

のことをお客さんの一人にすぎないって言い切ったんですよ」

「それでハッキリしましたね。不倫関係ではないということが」

「そうですね、言い切れる証拠はあるの？って私、更に追及したものですから、あの女、証拠写真があるからって私に見せてくれたんです」

「は？部長と不倫はしてない証拠の写真？意味がよくわかりませんが。。」

「つまり、うちの主人以外の男との情事の写真ですの。私、目を覆いたくなるほどショッキングでしたわ。いかがしいビデオみたいなものばかりで」

「なるほど。倉沢まりもが複数の男を金づるにしてた証拠写真ってことですね。逆に言えば、部長一人が特別な恋人ではないという証拠にもなる」

「そういうことですわ。でも茜さんの調査がなければ私もここまで大胆にできなかったですもの。心から感謝します」

「そんなめっそうもない。で、その見せてもらった写真というのはどこに？」

「もらって来たから今ここにありますがよ。見たいんですの？」

「一応どんな証拠かと。。」

「茜さんもお好きね（*・・・*）ウフフ」

「いや、決してそのような意味じゃ…（^□^；A」

私は持っていた数枚の写真を探偵さんに手渡しましたの。

「悪いけど、その写真、茜さんが持って行ってくたさる？」

「え？いいんですか？」

「そんな汚らわしいもの、すぐにでも処分したいくらいですわ」

「そ、そうですね（^―^；）」

そして探偵さんは少し体裁悪そうに、写真を見始めましたの。すると・・・

「こ、これは。(; _ ;)」

「どうかなさいましたの？」

「も…森田だ。」

「え？森田ってどなた？」

「い、いえ…何でもありません。失礼しました。これは僕が責任を持って保管させていただきます」

「保管じゃなくて、もう処分してもいいですよ？」

「はあ、そうですけどちょっと…」

変な探偵さん。でも、独身のようだし、ある程度は仕方ありませんわね。

かなりストレスも溜まってるようにお見受けしましたもの。

(続く)

その2 園崎頼子

その2

そのさきより

園崎頼子

もう毎日が飲まずにはいられない。

今日も一人でムシヤクシヤしながら行きつけの店で飲んでいるアタシ。

「頼子ちゃん、今日の機嫌の悪さは何？（^|^-）」

通い続けて親しくなったマスターがアタシに問いかける。

「森田よ森田！あのドジ課長が何で私の上司なのよっ！」

「またそれですか。でもまあ、世の中つてのは理不尽にできてるもんですから。忍耐も大事じゃないですかね？」

「それはわかってるつもりなのよ。でもね、森田に注意されるのだけは屈辱なのよ」

「怒鳴られたんですか？」

「あいつにはそんな度胸はないの。ただ、冷静にボソッと『同じ間違いは繰り返さないで下さい』って言うのよ」

「お言葉ですが、ごく普通だと思いますけど？（^|^-）」

「でもなんかあいつに言われるとムカついちゃうのよ」

「それって、その課長さんに気がある証拠じゃないんですか？」

「ちよつとマスター、冗談はやメテッ！ドラマや小説の恋物語じゃないの！」

「すみません（^□^；A」

「あんな奴、鼻ヒゲ生やしたらホントにオトボケ課長そのものよ！」

「面白い顔してそうですねw」

「（；-_-） 3 フウ 森田と同じ部署にいて運が良かったのは最初のうちだけだったわ」

「ホホウ（。_*）最初は運が良かったって、どんなことですか

「？」

アタシはのときかなり酔っていた。

酔うと口が軽くなるアタシ。あのときの秘密をつい口走ってしまった。

「実はね、一年半くらい前かなあ、森田のおかげで儲けたことがあるのよ」

「は？意味がよくわかりませんが？なんか秘密めいたことのようにですネ？」

「（・・）むふふ、わかる？じゃあ教えてあげよつかない？」

「中途半端なまま話をやめると、頼子さんも気持ちが晴れませんよ」

「マスター誘導がお上手ね。どうしよつかない？」

「無理に言わなくてもいいですけどね」

「いいえ、もうずっと前のことだし、ここだけの話ってことで教えてあげる」

「お、嬉しいですね」

アタシは少しもったいぶりながらイタズラっこのような目つきでマスターに言った。

「あのね…実は森田を外に呼び出しただけで、50万円くれた女がいたの」

「（「□」；）えっ？何ですかそれ？ただ呼び出すだけで50万ですか？」

「そうなの。不思議でしょ？」

「でもそれ、なんかヤバそうですね。呼び出された課長はその後どうなったんでしょうね？」

「さあね。森田に興味ないから聞かなかったし、その後も普通に会社来てたし、何事もなかった感じだったけど」

そのとき、アタシの背後から突然話しかけて来る男性がいた。

「すみません。その話、もっと詳しく教えてくれませんか？」

振り向くと、ちよつとだけイケメンの感じ良さそうな男性が立っている。

「どなた？今私が話してたことはただのうちのわ話ですから、人に話すようなことじゃないですよ？」

「いや、実はですね、森田卓さんの身边について少し調べてるものですから」

アタシは一瞬、警察ではないかとドキツとした。

でも彼はそんなアタシの表情をすぐに読み取ったようで、

「安心して下さい。僕は警察ではありません。探偵なんです」

そしてアタシは彼が差し出す名刺を受取り名前を確認する。

“茜崎涼”（あかねざきりょう）

「もちろん今日ここで話されたことはいっさい口外しませんから。それに裁判ごとでもないですし、出廷していただくこともありません」

「そうは言われても…これ以上は何も言うことはないですよ？」

「そうですか？」

「ええ。聞かれていたと思いますけど、私の役目は森田課長を…ただ当時は課長ではなかったけど、ある女の指示で外に連れ出しただけなんです。そして後日、お金を振り込んでもらってそれでお願いします。」

「その『ある女』に会ったことは？」

「ありません。電話のみです」

「なるほど。。じゃあちよつとこれを見てもらえますか？」

その探偵はポケットから写真を取り出してアタシに見せてくれた。

「この女性に見覚えはありますか？」

すぐに思い当たったので即答したアタシ。

「あつ！ありますあります！この人ならたまに会社に来ますよ。いつも部長のところに…ハッ（。〇。；）アタシ、こんなことまで言っちゃっていいのかしら」

「無礼講です」

と、探偵さん。

「そういう意味では使わない言葉だと思いますけど（ハ―ハ；）」とマスター。

「さつきも言いましたけど、いつさい秘密ですし、あくまでここだけの話です。世間におおやけになることはありません」

「じゃあアタシに50万くれたのはこの女なんですか？」

「おそらくは。彼女は倉沢まりもといいます」

「でもこの人、部長の愛人かと思ってたけどなあ。なんで金持ちでもない森田に用があつたのかしらね？今更ながら不思議だわ」

「森田卓さんはこの時期、まだ結婚されてましたよね」

「ええ。でも森田のバカ、身の程をわきまえずに浮気なんかするから別れちゃったのよ」

「え？離婚の理由をご存じだったんですか？やっぱりこの写真の倉沢まりもと。」

「いいえ全然。同じ部署の子と慰安旅行でエッチしてるのが奥さんにバレちゃったの」

これを聞いてホントにびっくりしたような探偵さん。

「それは予想外だったなあ。差支えなければそのお相手の女性の名前を教えてくださいてもいいですか？」

「ええ。三木綾乃って子ですよ」

「Σ―11（；）――1ええっ！？三木綾乃はてつきり是枝英之さんとお付き合ひしていたのではと思いましたが…」

「それはないと思うけど。噂すら立たなかったし」

「そうですか。しかし驚いたなあ。。。」

「たしかに私も驚く組み合わせだったと思いましたよ」

「では三木さんと是枝さんが大学時代からの友人で、本社に同期入

社したことは知ってましたか？」

「いいえ。それは初耳。三木さんと是枝さんで、仕事以外で会話することなんてなかったんじゃないかな？」

「うーん。」

「三木さんは結局、森田との噂が広まって、少し経ってからだけど、他の関連会社に異動させられちゃったって形になったんだと思うけど」

「なるほどね。。でもそこでちょっと引つかかるんですが、森田課長はそのとき異動にはなかったんですね？」

「そうそう、それも不思議だったのよね。スキヤンダルは両成敗っていうんじゃないかって、異動したのは三木さんと是枝さんだったのよね」

「んんん。。これはちょっと・・・深いな。。」

その後、探偵さんはしばらく考え込んでしまつて全く口も利かなくなつた。

そしてなんだか手帳を取り出して色々と書き込んでた様子。

アタシがマスターに8杯目のカクテルを頼んだところで突然立ち上がって、

「どうもありがとうございます。非常に参考になりました」と言つて、彼はお店から足早に出て行つた。

社内で何かが過去に起きていたつてことはなんとなくわかるんだけど、お金にならないことなら首を突っ込んでもしようがないと思つたアタシ。

それに森田のことなんかどうでもいいし。

アタシは9杯目のカクテルを追加した。

(続く)

その3 茜崎涼

その3

あかねさきりょう
茜崎涼

「お客さん、ご注文の方はそろそろお決まりですか？」

「あ…すみません。もう少しだけ。」

「じゃあ決まりましたら呼んで下さいね」

「はい」

昼食時、俺は人気のこじやれたラーメン屋に来て、メニューを眺めていた。

にも関わらず、俺は昨日の園崎頼子の証言ばかりを思い返していて、目の前のメニューなど全く目に映っていなかったのである。

今のところ考えられること。

学友でもあった是枝英之と三木綾乃は、何らかの理由で仲が悪くなった。

そして、なぜか三木綾乃は森田卓と男女の関係になってしまう。ここが1番理解に苦しむところでもある。

ところがゆりかに浮気現場を察知されて森田は離婚。三木はおそらく左遷。

程なくして是枝は、独り身のゆりかに接近して付き合い始め、ついにゴールイン。

単純に考えればこれでいい。特に違和感も感じないし、十分あり得ることだ。

だが・・・

だがそうなる、解決できない矛盾もまたいくつも出てきてしま

う。

約一年半前の同時期に、森田卓の身边にいろいろなことが起き過ぎてはいないか？

そう思うのは俺だけかもしれないが。。

この商事会社の部署に是枝と三木が異動して来たことから始まる森田の悲劇。

この悲劇は自然の成り行きなのか、それとも故意的なものなのか。そして園崎頼子を介しての森田への誘惑。倉沢まりもは何をするつもりだったのか？

園崎に50万も支払うだけの理由は何か？

是枝と倉沢まりもに接点はあるのか？

この二人には接点もないし、直接的な関係は何もないだろうと俺は思う。

ただ・・間接的には・・ある。確かにある。

倉沢まりもの彼氏は石丸慎也だ。

つまりこの男は、ゆりかの元彼という事実がポイントになる。

ゆりかを軸にして是枝と石丸慎也、そして倉沢まりもは間接的に繋がる。

これは一体、何を意味するのか？

「お客さん、注文しないんなら次のお客さんが席の順番待ちしてますので。」

「ハッ(。○。;) すいません。えっと。。じゃあピリ辛味噌ラーメンで」

「他にはございませんか？チャーハンと餃子をセットで頼むとかなりお得ですが」

「ラーメンだけでいいです」

「トッピングはいかがでしょう？今日は29日・ニクの日で、チャーシュー1枚50円になってますよ？」

「あ、じゃあそれで」

「ちなみにお客様、マイ箸はご持参ですか？当店ではエコ運動に力を入れてまして、マイ箸をご持参の方には半熟味付たまごを1個サービスしておりますが」

「いえ、持ってないです」

「わかりました。ではピリ辛味噌には辛さが3段階ありますがどれに…」

「1番辛いのでもいいです」

「麺の太さはいかがでしょう？当店では細麺・中太麺が選べますが」「じゃあ中太麺で」

「麺のタイプはストレートとちぢれ麺がありますが…」

「ちぢれでお願いします（^ー^；）あの…まだ何かあるんですか？」

「いえ、以上です。かしこまりー！」

（；ー；）「3 フウ 待たせた俺も悪いが、こんな面倒なオーダーも初めてだ。もうここには来ないでおこう。」

おひやを飲んで少し頭を休めた。考えすぎもよくないことはわかっている。

自分のCPUも冷やさないとフル回転させる前にクラッシュしてしまう。

数分後、オーダーした俺のラーメンが運ばれる。

真っ赤なスープを一口すすった。熱々のピリ辛で体が温まる。が！あまりにも辛すぎた。

俺は汗だくになりながら、目の前のポットに入った水も飲み尽してしまった。

「店員さん、すごい辛いですけどこんなもんなんですか？」

「はい。お客様は3段階の最上級を選ばれましたので」

「味噌の味より唐辛子の方が。」（ - ；」
「当店の3段階は、5倍、10倍、50倍になってますから」
「なんで10倍の次が50倍なんですかつ？（^□^；A」
「さあ…私、パートですからわかりません」
「（ノ——）ノコケツ！」

会計が終わって、帰り際にポイントカードをもらった。

「いや、僕はいいです」

「お得ですよ？普通はラーメン1杯にスタンプ1個なんですが、お客様は辛さ50倍をオーダーされましたので、スタンプも10個つきます」

「ホホウ（。・。*）」

「30個になりますと、ラーメン1杯分サービスになるんですよ」

「じゃあ、あと激辛2杯か。サービスのラーメンは好きなもの選べるのかな？」

「いえ、50倍ラーメンのみです」

「やっぱりいらない（^ー^；）ごちそうさん」

こんなラーメン屋での荒行も終わり、俺は街を宛てもなく歩いていった。

冷たい風が気持ちいい。たくさん汗をかいたせいだろう。

だがこれで頭も冷えた。冷静に今までの事実を分析できそうな気がする。

なぜ俺はこんなことをしているのか？

ゆりかも再婚したことだし、これ以上調べても仕方ないと思っていた。

だが、この再婚劇の陰には何かがあると確信してしまった。

訪ねた人々の証言を聞くと、たびに新たな発見も出てくる。

複雑に絡み合っている人間関係。

森田卓、是枝英之、倉沢まりも、石丸慎也、三木綾乃、そしてゆりか。

部長夫人・小松房江からの電話をきっかけにわかった事実。森田が仕組まれた罠に見事にハマられたことは確かなのだ。これだけのことが同時期に偶然起きるはずはない。あとはそのからくりと、真の首謀者は誰なのか。。。

森田卓と三木綾乃の関係はそれとなくわかった。次は森田卓と倉沢まりもの関係だ。

小松房江からもらったあの森田のSMチックな写真は何を意味するんだろう？

俺は倉沢まりものマンションへ足を運んでいた。

（続く）

その4 倉沢まりも

その4

倉沢まりも

その探偵は誠実そうに見えた。

普通、こういう男がアタシの絶好の金づるになるんだけど、尋ねて来た内容が内容だけにそうもいかない。

それに今は慎也は留守。警戒しておかないと。

アタシは探偵を中に入れずに、玄関で立たせたままにした。

「もう2年近く前になるもの。そんなこといちいち覚えてないわ」とそつけなく言ったアタシ。

でも目の前の探偵はまともおおよけに信じていないようだった。

「あのですね、さっきも言いましたけど、決して公おおやけにすることはありませんし、警察沙汰にはならないことも全て保障します。それは約束しますから」

見かけによらず、かなり押しの強い探偵。

「そんな昔のこと調べてどうするの？誰があなたにそんな依頼してるの？」

「いえ、依頼主はいないんです。僕個人の調査なんです。当時あなたが森田卓を誘った理由を知るだけでいいんです」

「悪いけどアタシ、当時はデートする人多かったから、その中の一人にすぎなかったと思うけど？」

「園崎頼子に50万も支払ってですか？」

「Σ（□、；！！！！」

アタシの鼓動がドクンと鳴った。なんでそんなことを。あ、もしかして。。

「そ、その女がしゃべったのね？」

「はい。伺つて来ました。反論しますか？」

「そう思いたければご自由に。人にお金あげたら罪にでもなるの？」
「いいえ、とんでもない。どうやらあなたはあまり答えたくないようですね」

「そんな急に來て2年も前の話を細かく言えつたつて無理に決まつてるじゃない！」

と、アタシは強引に突っぱねる。

「そうですか。。それなら仕方ないですけど、このままだとあなたにとつても損だと思えますけどね」

「どうということよ？」

「僕は探偵です。ある程度は推理もできます。ですからあなたに思ひ出していただかないと、僕の勝手な推測であなたを判断してしまいますよ？」

「それはあまり良くない推測つてことなのね？」

「失礼を承知で言わせてもらいますが、あなたはあらかじめ、ターゲットにしていた男たちの何らかの弱みを握るために、多方面に金をばら撒いては情報入手し、その出資金の元を取るために時にはベッドを共にし、男たちをゆすり続けた。違いますか？」

あまりの唐突で無礼な言葉にアタシは怒り心頭してしまった。

「違うわっ！全然違う！」

なんなのこの探偵！？アタシが誰とでも寝るアバズレ女みたいに解釈してるわけ？冗談じゃないわ！

「探偵さん。見当違いも甚だしいわ！アタシをナメないで！」

そう言つて睨んでやったのに、至つて冷静に返答する探偵。

「お気に召さなかつたら本当に申し訳ありません。ですから、あなたが話してくれないと、僕はこう思つてしまふわけです」

「.....」

「小松部長もあなたの金づる。それと同じように森田も……」

「森田なんか、お金も持っていないのにアタシがそんなことするはずないでしょっ！」

アタシは自分のプライドが傷つけられたようで、とっさに探偵の言葉を打ち消してしまった。男は色々選ぶけど、森田みたいな年収の少ないブ男にまで手をつけるアタシじゃない。あれは頼まれただけのこと。

「なるほど。。どうやら思い出してくれたみたいですね？」

「探偵さん、あなたはどこまで知ってるんですか？」

「あなたが森田を誘ったのは確認済みです。ただ、その理由がわかりません。金づるじゃないとしたら、森田は何だったんです？」

アタシはこのとき、もう観念した方がいいと思った。

もう正直に話そう。理由はわからないけど、この探偵の個人的捜査にすぎないだし、罪になるわけでもないんだから。

それにアタシ一人が単独の極悪女のレッテルを貼られたら、いい迷惑なもの。

「言うわ。ずっと口止めされてただけ…もう時効よね」

「ありがとうございます。決してご迷惑はかけませんので」

「約束よ。実は、森田はアタシの彼氏の恋敵だったのよ」

「コイガタキ？」

「そう。慎也は…アタシの今の彼は、森田の奥さんの元彼だったの」

「ということは…あなたの彼氏は森田卓に恨みがあつたということですか？」

「恨みってほどじゃないけど、気に入らないっていつも言ってたわ」

「つまり、森田に自分の彼女を横取りされたと？」

「いいえ、フツたのは慎也の方。でもそのあとに彼女がブサイクな森田と付き合い始めたもんだから、慎也のプライドが許さなかったのね」

「プライドねえ…」

「そして結婚しちゃったわけだし、ショックも大きかったんじゃない

いかしら？」

「でもあなたという女性がいるにも関わらず、そんなことに腹を立てるのは未練がましい気もしますが…それにあなたにも失礼でしょうに」

「ううん。アタシは慎也の気持ちがわかるから。それに彼はゆりか…あ、ゆりかってその女の名前ね」

「ええ、わかります」

「で、慎也はそのゆりかって女には未練は全然ないの。とにかく森田だけに腹を立ててたわ。まあ男の嫉妬っていうのかもね」

「でもそれは未練からくるものじゃないんですかねえ？」

「かもしれないけど、慎也はずっとアタシを大事にしてくれてるから別に平気よ」

「そうですか。では話を戻しますが、つまり森田を誘ったのは、あなたが慎也さんから頼まれたということですか？」

「ええ、そうよ。でもボコボコにしたわけじゃないわ。これは絶対ウソじゃない。慎也もアタシも暴力は嫌いだもの」

「それはわかります。逆に誘惑したんでしょう？S Mバーみたいなところで」

「えっ・・・（。〇。；）」

アタシは思った。この探偵はもうかなり知っている。うちに来たのは事実確認か、情報のおさらいをするためかもしれない。

「驚かせてすみません。実は森田卓がS Mバー風な場所で縛られながら目隠しされている写真を入手してまして」

「そうだったの。なら話が早いわね。そういうことよ」

「つまり、森田を誘惑して密かに証拠写真を撮り、それをゆりかさんに送った」

「ええ」

「そして家庭崩壊と彼らの離婚を狙ったんですね」

「そうよ。その通りよ。でもね、その作戦は失敗したの」

「ホホウ（。・*）なぜ？」

「全然効果なかったもの。あの夫婦が離婚したのはかなりあとからだつたし、直接アタシたちが仕掛けたことが原因じゃないわ」

「お互い辛抱してたのかもしれないよ？」

「いいえ、森田の離婚の原因は、信じられないことだけど、社内での不倫が原因だつて聞いたもの」

「それは誰から？」

「アタシが言わなくても探偵さんはもう知ってるんでしょ？」

「小松部長…ですね？」

「人が悪いわね。アタシの口から言わそうとして」

「すみません。仕事柄こんなパターンになることが多くて（＾|＾；）」

「これでもういいかしら？さっきも言ったように、アタシたちの作戦は失敗したの。だから罪にはならないわ」

「ええ、それは大丈夫です。じゃあ最後にもうひとつだけ」

「なんなの？」

「園崎頼子に支払った50万のことで。随分太っ腹ですね？あなたのお金ですか？それとも慎也さんが出したんですか？」

「慎也よ」

「慎也さんはそんなにお金持ちなんですか？あるいはセレブなご実家とか？」

「いいえ。あのお金…確か人にもらったお金って言うてたような。」

「えっ？人につて…普通そんな大金をすんなりもらうってことがありますかね？」

「アタシもそう思ったけど…あ！そうそう、思い出した！必要なときには用立ててくれる強い味方がいるって確か言ってたわ」

「（。。。） ほー。それは今でも？」

「いえ全然。あのお金だけだったわ。今はそんなことアタシに言わないもの」

「ふうん。。。なるほどね。」

「なんだかアタシ、しゃべりすぎちゃったようね。もし慎也に会うことがあったら絶対内緒にしてね。アタシがおしゃべりだっと思って思われたくないの」

「わかってますよ。安心して下さい。ありがとうございました。もういいです。」

アタシは探偵が玄関から出ていくと、自然に深いため息が出てきた。

結構、勘の良い探偵さんだった。このアタシが随分焦らされた。

さすがのアタシもこんな男を誘惑して貢がせるなんてマネ、できっこないわねw

でもなぜ、そんな過去なんて調べる必要があるのかしら？

あの人の個人的な捜査なら、森田と関わりのある人なんだろうか？

でもそんなこと考えたってアタシには関係ないし、変なことに巻き込まれるのはたくさん。

今日のことは慎也には言わないでおこう。

（続く）

その5 美智代

その5

みちよ

美智代

“ どうしよお？（＾□＾；A いきなり尋ねて来るなんてえ！”

アタシ、もうパニックって大変！

だってだって、いつかゴミ捨て場で会ったアタシ好みの男の人が
今、目の前に立ってるんだもの。（*v・v）

渡された名刺を見たら探偵さんだなんて。素敵っ！なんて凜々
しい職業なのっ！

茜崎涼さんね！よしっ！絶対忘れないわっ！

できれば中に入れてお茶の1杯でもあげたいのに。本当はそう
したいのに。

でもそれは絶対にできない！間違ってもできない！

玄関にいる彼に軽く微笑みながら、チラッと戸の隙間から見える
茶の間の状態を再確認するアタシ。

き…汚い！あまりにも散らかりすぎ！

洗濯物はあちこちに散乱。いつ食べたかわからないお菓子の残骸
がテーブルに乗ったまま。燃えるゴミを袋に詰めたまではいいけど、
無造作に4つも放置している現状。

“ あゝ、やっぱり今日は片づけておくんだったあゝ”

と思うのも毎回のこと。これじゃホント“のだめ”と変わらない。

でものためはドラマの架空人物。アタシはリアルな人間。

となりには千秋先輩とは似ても似つかないブサイク男しかいない。

「すみません。ちょっと散らかってるもので、こんなところで本当にごめんなさい」

「いえいえ、僕は玄関でもどこでも全然平気ですよ。お構いなく」

「じゃあせめてお茶でも入れてここにお持ちしますね」

「はあ…」

そう言ったアタシだったけど、ふと想像するとそれが不自然なことがわかった。

だって、玄関にお客さんを立たせたままお茶を渡すつてもビミョーよね？

ならどうしよあ？玄関にだけ上がらせて、座ってもらおうかな？うん、とりあえずそうしてもらおうと。

「あのー、立つてるのもなんですから、上がって下さい。このラインまでならOKです」

「あ、はい。このラインまでね…（^ー^；）では遠慮なく…」

「アタシ、お茶入れてきますね！」

でも結局、お茶を切らしていて、冷蔵庫にあった缶コーヒーを出すしかなかったの。

あゝん、変な女だって思われちゃうー！！（TOT）

「いえ僕、ぶっちゃけお茶より缶コーヒーの方が好きですから」

（ノ。o。）ノオオオオオオオオオオオ

まさかまさかの缶コーヒー作戦大成功！？涙が出てきちゃう。

「あのー、僕そろそろお話していいですか？（^ー^；）」

「ご、ごめんなさい。そうよね・・・どうぞ足を崩して楽に話して下さい。正座なんてしないでいいですよ？」

「は。ではそのように…」

「韓国では正座する人って、罪人の座り方なんですって」

「（。。。）ほー。韓国人のお友達でもいるんですか？」

「いいえ。ネットの韓国語講座で読んだの。ちよっと豆知識？（＊

「ハハハ*）えへ」

「アハハ…（　　）じゃあそろそろ話していいですか？」

「ハッ（　　）。〇（　　）ごめんなさい。アタシったら…」

「いいんですよ。実はですね・・・」

「Σ（　　）□（　　）ええええええ！アタシのブログを？」

「ええ。ゆうべ色々悩んでて、考えもまとまらないんで、なにげにネットでキーワード検索したら偶然ヒットしたんですよ」

アタシホントに驚いちゃった。まさか茜崎さんがアタシのブログを読んでたなんて！

「でもどうしてそのブログがアタシってわかったんですか？」

「僕は森田卓を知っているからです。あなたのブログを読んできると、森田がお隣さんだってことがわかりました」

「そうだったんだあ」

「ひとつ忠告しますけど、ある意味とても危険ですよ。ブログに実名を書かれるとストーカーとか悪い連中に居場所を探られて利用されてしまいますよ？」

「ええ。アタシも最初はそう思ったんだけど、こんなブログなんて誰も読んでくれないと思ったし、自分の名前だけは苗字入れてないしと思って…でも甘かったようね（　　）」

「ネット犯罪も増えてますからね」

「アタシ、元々はリハビリのつもりで始めたんです。プチPTSDかもしれないって、行きつけのカウンセラーに言われて」

「なるほど。日記をつけるように言われたわけですね？」

「そうなの。日記なんてめんどくさいこと絶対できないから、ブログなら楽しんでできそうだと思ったの。あ、ごめんなさい。アタシだんだんタメ口みたいになってきちゃって…」

「構いませんよ。その方が僕も話しやすいです」

「ホントに？良かったあ！」

「で、早速本題ですけど、あなたのブログを読んで僕が一番驚いたことは…」

「美智代って呼んで下さい（*v・v）キャ」

「じゃ、じゃあ美智代さん（・・・）僕が驚いたのはですね、僕も今、あなたと同じ思いを持っているということです」

「えっ？ そうなの？ 実はアタシも以前、ゴミ出しの日に茜崎さんと挨拶を交わした日から淡い思いを…」

「は？ 何のことですか？ 森田卓と元奥さんの須藤ゆりか… さんのことですよ？」

「（……）やだアタシったら、とんだ勘違いを。」

「どうでしょう？ 真実を僕と一緒に探ってみませんか？ 解決まであと少しなんです」

「そんなにわかってるの？ さっすが探偵さんね！ 感心しちゃう」
もう完全にタメ口のアタシ。

「ええ（^| ^；）現状では70%くらいかな。あと疑問点がいくつかわかれば、証言の組み合わせで全てが繋がると思うんです」

「キャー！ カッコイイ！ 推理小説みたいっ！ 茜崎さんて、シャーロック・ホームズかエルキュール・ポアロの生まれ変わり？」

「その二人とも架空の人物ですよ（^| ^；）」

「それならアタシも是非、協力したいわ。ずっと心のもやもやが離れないの。ゆりかとも親友だし、とっても心配なの」

「ありがとうございます。では少し今までの事実関係を教えて下さい」

「森田は呼ばなくていい？ 今日休みだから隣にいますよ？ たぶん」

「いえ… まだいいです。それは最後のときにでも。」

なんか嬉しい！！ 茜崎さんと二人つきり（・・・）むふふ
でもまだ思い出せない。ゴミ出しよりずっと以前に見たことある人なんだけどなあ。

（続く）

その6 是枝ゆりか（前編）

その6

これえだ

是枝ゆりか・前編

（旧姓：須藤ゆりか）

「ごめんねパパ。忙しいのに来てもらって」

「構わんよ。出かけついでの通り道だから」

「私がパパのところに持って行ければ良かったんだけど、これから美智代が久しぶりに遊びに来ることになってるから留守にできなくて」

「別に気にすることはない。ところでパパ宛ての郵便物ってそんなに多いのか？」

「うん。こんだけw」

私はおよそ30通余りの郵便物をパパに見せた。

「それもこれも全部、須藤源一郎様宛なの。広告や請求書が多いけどねw」

「やれやれ…全く郵便局員にも困ったもんだ」

そもそもパパ宛ての郵便物がうちに届くのも無理はなかった。

元々ここは私の実家。私が英之さんと結婚するまで、うちの両親といずれみと4人で暮らしていた。

今回の結婚で、パパは私たちにこの家を譲り、少し離れた静かな場所にママと二人で暮らす家を建てて引っ越したのだった。

「私たちが新しい家に行った方が良かったんじゃないの？」

「それはダメだ。親にそこまで甘えると、ふぬけた人間になる」

「ならないわよ」

「是枝君は…いや、英之君ほどの仕事のできる男は、自分の力で勝手に家なんか建てれるようになるさ。心配はいらん」

「新築の家にパパが入りたかったんでしょ？」

「いいかい、ゆりか。これは以前から決めてたことなんだ。同居もするつもりはなかった。お互い気を遣うからね。かと言って俺とママ二人きりではこの家は大きすぎる。こじんまりした家を建てて余生を過ごすのが昔からの理想だったんだよ」

パパの言うことはよくわかるけど、ここで私にふと疑問が湧いた。「それならパパはなぜ前のときもそうしようとしてくれなかったの？」

「前のとき？何だ一体？」

「その…私と卓^{すくろ}さんが結婚していたとき…」

「そんな昔の話はやめなさい！お前はもう新しい人生に切り替わってるんだぞ！なんであんな男のことを口にするんだ！」

パパの顔色が変わった。余計なことを口走ってしまったバカな私。

「ごめんなさいパパ。」

「あいつは全然ダメだ！話にならん。お前を幸せにしてくれるのは英之君しかおらんよ。お前もそう思ったから決心したんだろう？」

「うん。本当にごめんなさい。心配なくていいよパパ。もう大丈夫だよ。私の中では過去のことはちゃんとケリもついてるし、全て終わってることだから」

「ならいいが…英之君の前では森田の話なんか絶対するんじゃないぞ！」

「当たり前じゃない。しないよ絶対」

「もし何かあったらすぐに来なさい。いいね？」

「うん。ありがとうパパ」

「英之君の出張はいつまでだったかな？」

「明日には帰って来るってメール来たよ」

「そうか。同じ会社でも部署が違うから詳しいことはよくわからないが、英之君が帰って来たらみんなと一緒に食事でもしよう」

「うん。言っとく」

「お前がオメデタのことも言ったのか？」

「すぐメールしたよ。悪いけどパパより先にねw」

「それはまあ…仕方のないことだ。もう行くよ。邪魔したな」

こうしてパパは足早に出て行った。たぶん今週もゴルフなのだろう。

そして30分後、美智代が時間どおりにやって来た。

心持ち何か落ち着かない様子に見えるのは私の気のせいなんだろうか？

とりあえず、リビングでくつろいでもらった。

「久しぶりね美智代。いつ以来だっけ？」

「ゆりかの結婚式から会ってないじゃんw」

「そうだよ。バカな質問してごめんねw」

「家の中が前とガラッと変わったみたいね」

「うん。ちょうどいい機会だったから家具も買い替えたし、ついでに少しリフォームもしたの」

「へえ、旦那がエリートだと違うもんね」

「それ誰と比べてるの？（＾―＾；）」

「（＾□＾；A 別に誰とも比べてないわよ。で、どうなの？新婚生活の方は？」

「うん、まあまあ順調よ」

「いずみちゃんは？」

「今日はピアノ教室行ってるの。そのあとお友達のお誕生会だって、そうじゃなくて、是枝さんとの仲は？」

「美智代、一応私も是枝だから（＾―＾；）」

「そ、そうだったわね。（；）（；）（；）どうもまだ慣れないわw」

「正直、いずみは少し戸惑ってるみたい。別に彼を嫌いって訳じゃ

ないみたいなんだけどね。まだよそよそしいの」

「そうなんだ。難しい年ごろになって来てるしね」

「うん。でも何とかやっていけると思うわ」

「ゆりかと旦那さんがいつも仲良くしていれば、家庭のムードももっと良くなるし、きつといずみちゃんも溶け込んでくれるわよ」

「そうだといんだけど…」

「ゆりか、新婚早々まさか夫婦ケンカなんてしてないわよね？」

「えっ？（ - ；ええと…それがその、1度だけ。」

「（。〇。；）ええっ？もうケンカしたの？何で何で？何が原因？どっちが悪いの？」

「どうしよう…もう仲直りしたことだし今更…」

「言っちゃいなよ。仲直りしたんなら平気でしょ？アタシも参考にするから」

「参考には絶対ならないよ？」

「いいからいいから」

「じゃあ…うん。。言っね」

なぜかこれをきっかけに、私は美智代から質問攻めにあうことになった。

（続く）

その7 是枝ゆりか（後編）

その7

是枝ゆりか（後編）

旧姓：須藤ゆりか

「実はね、うちの主人がいずみに…」

「キャー（ ）うちの主人だって！夫婦っぽくていいわぁ」

「夫婦だし…（- -;） 美智代、別に私、話さなくていいんだけど？（^ー^;）」

「あ、ごめんごめん。続けて続けて。ちゃんと聞くから」

「あまり言いたくないのが本音だけど、美智代にだから言うんだよ」
「わかってるわよ。アタシだって何でもゆりかに話してるでしょ」

なんだか美智代が好奇心丸出しで私を見ているようで、ちょっと不思議に思った。私が卓さんと結婚していたときは全く無関心だったのに。

「じゃあ誰にも絶対言わないでね。翔子にもね！」

「わかってるって」

「実はね、いずみが夜遅くまで起きてて寝なかったときのことなの」
「ゲームでしょ？」

「そうなの。モバゲーとかいろいろね」

「あれはやり始めたらハマっちゃうもんね。でもそれが旦那さんとケンカする原因？」

「それがそうなのよ。私驚いちゃったんだけど、英之さんがいずみに催眠術をかけて寝かせちゃったのよ」

「（□、;）ええっ？それマジで？」

「うん。本人は冗談半分にやってみただけなのに、かかったちゃったって」

「えー？それってホントに偶然なのかな？」

「わからないわ。彼はテレビの見よう見まねって言うってたけど、例えそうだとしてもいずみもパタツと寝ちゃったのは事実なの。私、すごく怖くなっちゃって。」

「うん。わかるわかる」

「もしいずみが目覚めなかったらと思うとぞつとするわ。目覚めたとしても、ちゃんと正気に戻ってるかわからないじゃない？」

「それで大ゲンカしたってわけね？」

「久しぶりにキレちゃったw 美智代だって知ってるでしょ？私が催眠や暗示には苦い経験してること」

「うん。ゆりかの運命が変わっちゃうくらい影響されたもんね」

「だから余計に腹が立ったの。でも今はちゃんと仲直りしたから。」

英之さんも冗談半分なことは二度としないうって約束してくれたしね」

「ふうーん。そんなことがあったんだあ。不思議なケンカの原因だったわね」

「まあね（^ー^；）…あ、そうだ！美智代の好きなトマトカクテルあるよ。飲む？」

「さすがにアタシも真昼間からは飲まないよwwお持ち帰りでもいい？」

「も、持ち帰りしたいの？（-；）」

「うんw」

「じゃあ帰るときに用意するね。ていうか、今日は何にもお茶菓子なくてごめんね」

「気にしないでいいよ。アタシが急に電話して押しかけたようなもんだから。でも本当に何にもつまむものないの？w」

「んーん・・・ちよつと待ってね」

私はキッチンへ行き、冷蔵庫の中身を確認した。お菓子のストックが全くないので、何か簡単なものでも作ろうと思ったからだ。

「ゆりかあ、そんなに気を使わなくていいよ」

と、リビングからおつまみを要求してきた張本人の声。

「ε - (「へ」) 美智代も昔から相変わらずだわ」

「へ(「へ」) / わ〜い♪ アタシの大好きなチーズ！すごいじゃない！」

「パパがお歳暮にもらったやつ。パパ宛てに郵便物がよく間違えて届くのよ。これもそうだったの。欧州チーズの詰合せギフト」

「勝手に食べていいの？」

「ちゃんと連絡したわよ。食べていいって許可ももらったもん」

「すっごあい♪ ゆりかカットの仕方上手ね。このお皿に何種類あるの？」

「5種類あるよ」

「これはズルいよゆりか」

「え？ズルい？何が？」

「だってえ… やっぱこれに合うのは… お酒じゃない？ (*^ ^ -
^*) ヽ」

「さっき飲まないって言ったんじゃない？」

「チーズとお茶なんて合わないじゃん」

「じゃ今持つてくる？ トマトカクテル」

「うん。。 (「へ」) ヽ」

そんなこんなで、久しぶりに美智代との和やかなおしゃべりが終わった。

美智代の質問攻めは英之さんのことばかり。優しさの都合だとか、計算高さとか、完全主義率とか、エッチの集中力まで。。 (「へ」)

まあ、美智代にとって英之さんは未知の存在だから気になるのかもしれない。

今まで私が付き合ってきた男性はみんな美智代に紹介して、一緒にダブルデートしたりして遊んで来たから。。

それにしても、美智代の最後の質問がビミョーに変で、私の心に引かなかった。

「ゆりかさあ、慎也さんと付き合ってた頃って、家族に紹介したりしてたの？」

予想もしない突然の問いに私はおど驚きを隠せなかった。

「また急どうしてそんな昔のこと聞くの？」

「べ、別に…（＾―＾；）ただ、ゆりかの性格からして、過去に付き合った男はみんな家族に会わせてるのかなあって思っただけよ」

「そう…確かにそうかも。私、隠し事嫌いだしね。親に黙ってコソコソ付き合うのも後ろめたい気がして嫌なの」

「やっぱりねw」

「だから慎也も家に来たことあるし、うちの両親とも何回か会ってるよ。パパと一緒に酒飲んでたりしてたかな」

「ふうん、そうなんだあ。」

「こんな話、パパに聞かれたらまた怒られちゃうわ。英之君という立派な亭主がいるのに、昔の男のことなんか口にするな！ってw」

「まあまあ、ここだけの話だからw」

美智代はなぜ慎也のことを名指しで聞いたんだろう？

思いつきで言う美智代のことだから、特に意味はないのかもしれないけど。。

そうよね。。また私の考えすぎなんだわ。。

こんな自分の損な性格は早く治さなくちゃ。。

（続く）

その8 茜崎涼と美智代

その8

茜崎涼と美智代

体中がけだるかった。別にスポーツや筋トレをしていたわけではない。

昨日はほぼ一睡もできずに夜を明かしたせいだ。かと言って、こんな明るい昼間から眠れるわけでもない。

そうだ！美智代にお礼の電話でもしよう。彼女からの報告は予想以上の収穫だった。

これがなければ俺は今でも夢遊病患者のようになっているだろう。

前もって交換しておいたケータイ番号。

美智代はワンコールも終わらないうちに電話に出た。

「美智代さん、昨日は本当にありがとうございました。僕の勝手な頼みごとを快く引き受けてくれるなんて正直全然思いませんでしたので、本当に感謝しています」

「そうなんですか？アタシ、こう見えて頼まれたら断れない体質なんですよ？」

「体質…ですか？性格じゃなくて？（^ー^;）」

「あ…ごめんなさい。それでした。アタシ、あまり細かい言葉遣いって苦手なもんで」

「ハハ…（^ー^;）」

これが細かい言葉遣いになるのか疑問なところだが、どうでもいいことなのでこの件は無視することにした。

「で、茜崎さんのお役に立てたようですか？アタシ」

「はい。十分以上です。ゆりか…さんから貴重なことを聞き出してくれてますし、とても参考になりました」

「実はアタシもゆりかの家に遊びに行こうって思ってたからちょうど良かったの」

「なら安心しました。不自然な訪問は相手を不安がらせてしまいますからね」

「アタシとゆりかは親友だもの。いつ行っても大歓迎されるわw」

今回、この美智代はお世辞抜きで大変役に立ってくれた。

あらかじめ、ゆりかに尋ねて欲しい事柄を伝えと、その通りに実行してくれたようだ。

「茜崎さん？あまり元気なさそうですね、大丈夫ですか？」

「え？電話なのにそんなのわかるんですか？」

「声に張りがないですもん。悪いけどアタシ、声フェチなの（*^

- ^*）ゞ」

「ああなるほど。」

美智代が声フェチであろうが何フェチであろうが俺には関係なかったが、協力者である彼女の機嫌を損ねてもいいことはない。

「あのー、聞いていいですか？」

「ええ」

「アタシがゆりかから貴重なことを聞き出してるってさっき言いましたよね？」

「ええ」

「でもどんなことが貴重なのかアタシには全然ピンと来ないんですけど？」

「それは次回お会いする時に、今回のお礼も兼ねて教えますよ」

「お礼だなんて…アタシ素人だから報酬なんてもらえませんか？」

「…申し訳ありませんが、お金でお礼をすることはできないんです（^ー^；）」

「あらヤダwアタシの先走り？（*v・v）」

「どうでしょう？僕が美智代さんにお食事をおごらせていただくと
いうことではダメでしょうか？」

「どんでもない！おごつて下さい！是非とも！」

面白い女性だ。是非ともだなんて、遠慮の言葉ひとつもない。

「美智代さんは何が食べたいですか？」

「お寿司いーっ」

こ…こどもかつ！（―――）

「高い店じゃなくていいの。廻るお寿司でグー」

なぜここで美智代が“エドはるみ”風に今のセリフを言わなければならなかったのか理解に苦しむところだが、ここも無視することしよう。

「じゃあ美智代さんの都合のいい日にでも…」

「今日アタシ空いてますっ」

「あ…そうですか。ハハ（^―^；）」

「茜崎さん、なんか本当に元気なさそうよ？」

「実は寝てないんです。一晩ずつとこの一件について考えてたら知らないうちに夜が明けていましてね。」

「（□；）ええっ？それはいけないわ！少し頭休めなきゃ！その方が冴えるよ？」

「ええ。わかってます。でも…そのおかげで実は解けちゃったんです」

「Σ―11（；）――1ええええええ？ホントにいい？」

「たぶん間違いないでしょう。でも証拠があるわけでもないし…ただの推論でしかありませんからね」

「じゃあ、どうするの？ゆりかに教えなくてもいいの？」

「うーん。。」

俺はそのことについても一晩中考えていた。

ゆりかに教えるべきかそうでないかを。結論はまだ出ていない。美智代に問いかけてみる。

「このまま僕の胸にしまっておくつてのは・・・いけないでしょうか？」

「ゞ（ ㇿ ）ダメええええゝ！アタシも知りたーい！お寿司なんていらないから絶対知りたーい！」

「いや寿司の問題じゃなくてさ・・・；、；、」

「森田にはどうするの？」

「森田卓には一応教えてもいいかなと思ってるんですけど。。ではこうしましょう。3人で寿司食べながらお話するっていうのは？」

「そんなのヤダあああ！お寿司は茜崎さんと二人だけで食べましょうよ！森田も交えて話すのはその後にしていいんじゃないかしら？それに茜崎さんのお金の負担も減るし」

「そ、そうですか・・・美智代さんがそう言うならそれで。。」

なぜか押しに弱い俺。というか、美智代には何かしら決断力の早さと、人を巧みにリードする才能があるのかもしれない。

「やったあ！じゃあそれで決まりね！」

「そういうことになりますね（＾―＾；）」

「図々しいことばかり言つてごめんなさいね茜崎さん。タメ口の癖も治らなくて・・・」

「それは全然気にしてませんから。では明日、美智代さんと食事をして、あさつて森田と3人で話しましょう」

「いいえ、だから今日はアタシ空いてるから、これから茜崎さんとお食事して、明日森田と話しましょうよ」

「は、はあ・・・ではそのように。。（ ；、；、」

（続く）

その9 森田卓（前編）

その9

もりたすぐる

森田卓・前編

今日はラーメンのまとめ買いをしに行く予定だった。

食品の相次ぐ値上げの多い中、僕が心から愛してやまないインスタントラーメンも例外ではなく、買えるタイミングといえれば特売日のみ。

それなのに、美智代さんからのメールで足止めをくらってしまった。

“一体、大事な話ってなんだろう？”

そして約束の時間通り、美智代さんがやって来た。

でも驚いたことに、やって来たのは美智代さんだけじゃなく、僕の知らない二枚目風な男も一緒についてきていた。

「悪いけどあがらせてもらっわね。あんたの部屋広いからゆったりできそうね」

「あのお、お言葉ですが部屋のつくりは美智代さんちと全く一緒ですが…」

「アタシんちは家具と衣類でぎっしりなのっ！あんたの部屋は何もないでしょ！」

「ご…ごもつともで（^ー^；）」

更に一緒にいる男が、僕の部屋を見回して一言。

「見事だ。人が住んでる部屋なのにこれだけ何もない部屋は初めて見た」

変な関心を持たれても困るんだけど。。？（ - ；

「ねえ森田、こちらの男性とアタシにお茶出して。それくらいあるでしょ？」

「それがちよつと……ラーメンスープの素ならあるんですけど。」

「そんなのいるはずないでしょっ、（、、）ノ」

「じゃあ水道水でいいですか？ちゃんと沸かしてから冷ましますから」

「もういいわよっ（、、へ、#）日が暮れちゃうでしょ！」

「すいません。」

「じゃあ早速話をするからみんな座りましょう。茜崎さんごめんなさいね。この家イスもないのよ」

「いえいえ、地べたで結構ですよ。ここに丸いテーブルもあることだし」

「そうなのよ。森田んちにあるものと言ったら、この古いちゃぶ台と大量のラーメンくらいなのよ」

「ホホウ（、。、*）でもこの事実今回の一件とは関連性がなさそうですけどね」

「（* m *）ププツ ヤダ茜崎さんたらっ！ジョークもうまいわ」

「あのー、お話って何でしょう？僕の方は何も話すことはないですけど？」

「あんたの話を聞くんじゃくて、あんたに話を聞いてもらうために来たのよ！」

「はい、それはわかりますけど……あ、もしかして？」

「何よ？まだ何も言っていないのにわかるの？」

「美智代さん、そっちらの男性と結婚するんですか？」

「キヤ（ノ・¥）あたしたちそんなにお似合いのカップルに見える？」

「見えないでもないですけど（ハ―ハ、）」

「何よそのあいまいな言い方、（、、）ノふんっ！」

美智代さんと話すといつもこんな会話のやり取りが日常茶飯事だ。それを見かねたのか、茜崎という男性が僕たちの会話に割って入ってきた。

「お話が盛り上がってるようですが、そろそろ本題に入ってもいいですかね？」

「あ、またまたごめんなさい。じゃあ森田、ちゃんと彼の言うこと聞くのよ！」

「は、はあ。。」

「申し遅れました。僕は茜崎涼と言います。探偵やってます」
想像もしなかった職業名に僕は驚いてしまった。

探偵なんて、小説かドラマにしか出てこないものだとばかり思っていたからだ。

「探偵さん…ですか。。僕、何か悪いことしましたっけ？」

「いえ、そうではなくて、むしろその逆なんですよ」

「は？といえますと…？」

「あなたが悪いことしたのではなくて、あなたに悪いことをした人間がいるんです」

「……すみません。まだよくわかりませんが。。」

「そうですね。これから順を追って説明します。さかのぼってね」

「？？僕、何も被害にあった記憶はないですよ？お金も盗られてないし…」

「森田は黙って茜崎さんの話が終わるまで聞いてればいいのっ！」

「はいっ（＾□＾；A」

そして一呼吸おいてから、茜崎涼という探偵がゆっくりとした口調話し始めた。

「森田さん…なんか…言いづらいなあ」

「茜崎さん、森田でいいですよ。森田に“さん”付は似合わないですもん」

「わかりました。じゃあ森田！」

なんで初対面の人に呼び捨てにされるのを、美智代さんが許可するのかわからないけど、思えば僕の人生、今までたいていの人に呼び捨てられるのが多かったように思う。そして僕もそれがニツケネームのような感覚で受け止めて来たのも事実だった。

「森田の被害は、ゆりかと離婚したことにあるんだ」

僕はまだわからなかった。そんなことが僕の被害といえるのか？「お言葉ですが、被害を受けたのは彼女の方だし、あの問題は全て僕の落ち度なんです。最近になってやっと吹っ切れようとしてたところだったのに。」

「気持ちわかる。お前の落ち度も全然なかったわけではない」

“もうお前呼ばわりになってしまった（　　）；なぜか口調も荒くなってるし”

「でもだな、もしお前とゆりかが離婚させられたとしたらどうだ？」

「離婚させられた…？」

「そう、僕にかかったんだよ。お前は」

「…んーと。全然心あたりがないですけど？（ハ―ハ；）」

「そこが巧妙なんだよ。これは用意周到に準備された計画に基づいてる」

「お恥ずかしい話、僕の離婚の原因は浮気です。同僚だったある女性に一方的に好きになられて。。それで。」

「それも全て計画のうちなんだ。単純に考えてみる。どう見たってお前が一方的にモテるはずがないだろ？」

「それはそうですね、初対面から人をそこまで言いますか？（ハ

―ハ；）」

「悪いがちょっと前から調べてたんで、お前のことはたまたま見てたんだよ」

「・・・でも不思議です。探偵さんなら誰かに依頼を受けて調べじゃないですか？僕が依頼するならともかく、一体誰がそんなことを？」

「誰からも依頼は受けてない。そのことはあとで説明するから先に進ませる」

「は、はい。^ | ^ ;」

もう茜崎涼という探偵はなぜか完全に“上から目線”になっていた。

それにしても、僕の知らないそんな恐ろしいことが過去に実行されていたなんて。

全くもって信じられない。計画だなんて…まるで夢物語のようだ。あの綾乃さんのしたことが…全てお芝居だったってことなのか？

（続く）

その10 森田卓（後編）

その10

もりた すぐる

森田卓・後編

考えもしなかったことを突然知らない探偵に言われても信じることはできなかった。

聞き返したいことは山ほどある。でも黙って聞けと怒られるから今のところは自重するしかない。

「森田、お前が今考えてることはわかる。三木綾乃のことだろ？」

「え？は、はい。」

「離婚の原因は彼女だ。当然まずは彼女を仕掛け人から除外することはできない」

「でも…三木さんはずっと僕に弁当を毎日作ってくれてたんですよ？あれが全部お芝居だなんて信じられません」

「バカね！メギツネならその程度の演技くらいにいるわよ！そんな弁当なんて投げ返してやれば良かったのよ！あんたにはゆりかがいたんじゃないのっ！」

と美智代さんが苦々しく言う。

「ごもつともで…あとから随分反省しました。」
と美智代さんに謝る僕。

「さつきも言ったが、これは実に巧妙な作戦だったんだよ。演技がどうのこうのっていうような話じゃないんだ」

と茜崎という探偵が余計理解に苦しむことを言う。

「さて何から説明しようか。森田は見た目どおり頭の回転も良くないようだから、この一件の綿密な作戦を練った張本人から先に教えとくか」

「え？三木さんが仕掛け人だって言ってたじゃないですか？信じら

れませんけど」

と率直に聞き返した僕。

「バカ。彼女が単独でやったわけじゃない。お前を離婚させたところで三木綾乃には何のメリットもない。その裏で糸を引いていた人間が別にいるのさ」

「茜崎さんいいの？普通推理小説では犯人の名前は一番最後に言うものよ？」

「美智代さん、これは小説と違うから（＾―＾；）森田にわかりやすく教えるためです」

「はあい。。でもなんかドキドキ感が減るような感じだわ」

「美智代さん、僕のプライベートなことでウキウキしないで下さい

（　・　；　）」

そして茜崎さんは僕にキリッとした視線を向けて言い放った。

「まずは…三木綾乃のことは置いて…そう、石丸慎也だ。知ってるだろ？」

「（「□」；）えっ??石丸・・・慎也・・・いえ、知りません」

「（ノ――）ノコケッ！ウソだろお前！」

「ほら、ゆりかの元彼よ。あんたとも一度面識があるはずよ。ゆりかから聞いたもん」

「あゝあ、あの人か。ならわかります。思い出しました」

「つつくもっ…」

「でもそれはおかしいですよ？慎也っていう人なんて、何年也会ったことも見かけたこともないですよ？それに三木さんどう関係あるんです？」

「いや、それは全然関係ないんだ」

「は??じゃあ三木さんは仕掛け人じゃないってことでは？」

「それも違う。三木綾乃も仕掛け人であり、ある意味被害者でもある」

「はあ・・・??」

やはり僕にはすぐに呑み込めなかった。黙って説明を最後まで聞くしかない。

「どうぞ、先に進めて下さい」

茜崎さんは腕組みをして軽いため息をついたあと、ややうつむき加減で話した。

きつと頭の中で整理しながら口に行っているのだろう。

僕にとってはこの方が良かった。威嚇するような鋭い視線で話されたところでまともに耳に入らないからだ。

「この一件の最大の特徴が今言った部分にあるのさ。つまり、森田を罠にハメた人間は別々に存在したってことだ」

僕は生唾を飲んだ。まさかそんな…この僕が気づきもせず複数人間に？

「その顔を見るとまだ信じられないようだから、そいつらの動機から教えよう。それなら納得できるだろう？」

僕は激しくうなづいた。そうだよ動機だよ動機！それを聞かなくちゃ！

「まずは石丸慎也。彼は森田をずっと恨んでいた。ゆりかと復縁しようと思って近づいたとき、すでにお前がゆりかと付き合っていた。そして更には予想外の結婚までしてしまったことだ」

「そこでは僕は悪くないと思いますが。。」

「慎也のプライドは大きく傷ついた。ゆりかとあろうものがこのイケメンな自分より、チンチクリンな森田を選ぶなんて狂気の沙汰だと」

「アタシなら違うけどw」

と美智代さんがボソツと言う。

「その中で特に慎也のダメージが大きかったのは、森田とゆりかを交えた3人で会った店で、慎也はゆりかにハッキリとフラれてしま

ったことだと思う。しかも森田の目の前でだ。こんな屈辱はないだろう。これはみんな美智代さんから聞いたことだ」

「そうよ。ゆりかから聞いてたし。森田も思い出したでしょ？」

「え、ええ…そうです。確かにその通りでした」

「とにかく、慎也の恨みは頂点に達し、ゆりかの選択が間違いだつたことを後悔させ、悟らせるために、離婚作戦に走ったわけだ」

「それにしても…方法が。一体どうやって？」

「倉沢まりもは知ってるだろ？」

「ハッ（。○。；）し、知ってます。あのとき写真を撮られて…」

「そう、それを仕組んだ倉沢まりもは慎也の彼女なんだ」

「Σ（「□」；ええっ?!」

「つまり裏で糸を引いてた張本人は石丸慎也つてことだ」

「……」

「まりもがお前に近づいたのも計画的。園崎頼子を金で釣ってお前を誘い出し、まりもと接触させた」

「あ…あのときか。まりもさんが道端で倒れていたとき…」

「詳しいことは知らんがそういうことだ」

「でも…でもその一件では僕たち離婚はしませんでしたよ？自宅に送られて来た写真を見て、ゆりかが…ゆりかさんがこれは罠だつて気付いたんです」

「なるほど。さすがゆりかだ。そこで離婚していたら三木綾乃と是枝英之の出番もなかったわけだ」

そのとき僕は、その意外な名前が出てきたことに仰天してしまつた。

「今、是枝つて言いました？」

「ああ」

「彼は…僕の親友ですけど？」

「ふんっ。その親友がお前の嫁さんをまんまと横取りしたわけだ」

ガ ΣΣ（。□。；）ン！！な、ななななな。

僕は言葉にならなかった。マジで？是枝君がゆりかさんと？

「あれ？もしかして知らなかったのか？（＾―＾；）美智代さん、森田に教えてなかったんですか？」

「（「」；）ごめんなさい。うっかり言いそびれてたわ」

「（（ノ―ω―）ノバタツ」

僕は自分でも顔が青ざめていくのがわかった。

「まさか…是枝君が。そういえばここ半年、彼から何の連絡もなかったけど。」

「それはそうだろうな」

「ああ…すごいショックだ。ゆりかさんの再婚相手が是枝君だったなんて。」

「これでわかったら。是枝も仕掛け人の一人だったんだよ」

「でも…でも是枝君はいつも僕を応援してくれてたんですよ。それこそ、写真騒動のときも離婚の危機にならないようにアドバイスもしてくれたんです」

「なるほど。森田の相談相手になることで、お前んちの家庭事情を把握してたわけだ」

「Σ―11（「」；）――1え？」

「まったくもうっ！ドジねあんたは！」

「これで是枝の動機はわかっただろうが？」

「っ…つまり。」

「目的はひとつ。ゆりかを自分のものにするためだ。そのために三木綾乃も利用した」

「・・・（「」；）――1え？」

僕の頭の中で鐘が鳴り響いていた。どうやって騙されたのかわからないのにショックだけは大きい。

茜崎さんは淡々と話していた。

「結局、石丸慎也と倉沢まりもの計画は失敗した。お前の言った通

りだとすると、ゆりかが見破ったからだろう。おそらくそれが慎也の仕業だとは気付かなかっただろうが、とりあえず第1の離婚の危機は回避された」

「すごい話ね。昼ドラみたいだわ」

「そして間もなく第2の危機が訪れる。たっぷり時間をかけた緻密な計画でね」

「それが是枝英之と三木綾乃ってことなのね？」

僕はここで質問をした。

「ちよつと待つて下さい。僕の頭の中がまとまりません。つまり、慎也さんたちと是枝君たちは別々な仕掛け人ということなんですか？」

「そつだ。さつきも言つたろ？」

「グルじゃないんですね？」

「そこは正直、俺も一番悩んだポイントでもあるんだ。慎也と是枝の関わりをね。でもはっきり言つてそれはない。その方が話の辻褄が全て合致するんだ」

「はあ……」

「だが、間接的な関わりはあるんだ。あ、またこんなこと言つたらお前の頭が混乱するからあとで話そう」

「そつですね…あとにして下さい（ - ；」

「よしっ！ではこれから“森田卓とゆりかの破局実行作戦”の裏側について、こまかい部分の本題に入る」

「そんな題目だったのも事実なんですか？」

「いや、これは俺が今勝手に言っただけだ」

「（ノ——）ノコケッ！」

（続く）

その11 からくりの全貌

その11

からくりの全貌

「でも僕、どうしても納得がいきません。是枝君と三木さんがグルだなんて」

「お前は何も知らないからさ。是枝英之と三木綾乃は元々大学時代からの同期生だ」

「Σ(「□」・えっ?)」

またまた驚きの事実の浮上に仰天する僕。

「そして会社にも同期入社してるんだ。おそらく二人は恋人だったとも予想される」

なんてショッキングなことばかり聞かされるんだろう。僕は思わず反論した。

「それは絶対にそう言い切れるんですか？」

「いや、実は言い切れない。あるいは三木綾乃が一方的に是枝に好意を寄せていただけとも考えられる。むしろそう考えた方が自然かもしれないな」

「と言うと？」

「是枝は三木綾乃の思いをわかってたからこそ利用できたんだからな。両思いなら好きな女にそんな役はさせないだろう」

僕の反論が正しい方向に推測されたものの、心境は複雑だ(^ | ^ ;)

「だったら是枝君はすごい悪い奴じゃないですか！自分のことが好きなら指示通りに動いってことなんですよ？」

「まあそんなところだ。でもそんな卑劣な言い方はしてないさ」

「そんなことまでどうしてわかるんですか？」

「考えてみるよ。いくらなんでも好きな男から『森田を落として抱かれてこい！』なんて命令されて『はい、わかりました』って従う女がどこにいる？」

「それもそうですね…ならどうやって？」

僕はその納得のいかない部分を、茜崎さんがどう解釈してどう説明するのか、聴き耳をたてながらかたずを呑んだ。

「森田がさっき言った言葉はある意味正しいんだ」

「はて？僕の言ったどんな言葉が正しいんですか？」

「お前が『三木さんはずっと僕に弁当を毎日作ってくれてたんですよ？あれが全部お芝居だなんて信じられませんが』ってとこさ」

「じゃあ…やっぱり本気で僕のことを…？」

「バカ！うぬぼれるな！ありえない」

「すみません…（＾□＾；A」

「長期に渡る演技や芝居なんて、よほど根気よくないとできるもんじゃない。神経もかなり使うだろう。女優だとしても無理だ」

「じゃあやっぱり僕のが好き…」

「だから茜崎さんが違うつて言ってるでしょ！ちゃんと最後まで聞きなさい！」

と美智代さんに警告を受ける僕。

「はい・・・＾―＾；」

「是枝は知っていたんだ。演技力を必要とせずに、三木綾乃が森田を好きになる方法がひとつだけあることをね。美智代さんはもうわかるね？」

僕は美智代さんに視線を向けた。彼女は何かに気づいたように驚いた顔をしていた。

「わかったわ！…つまり催眠術ね。是枝は綾乃を暗示にかけたんだわ」

「その通り！」

ガ　ΣΣ（。D ;）　ン！！

またまた強烈なショックが僕を襲った。

しかも今度のショックは事実を知ったショックじゃない。

かつてゆりかさんが僕に一目惚れして付き合い始めた本当の理由がそれ。

まさにそれと全く同じことが三木さんによって再び起こっていたこと。

そしてそれに疑いもせず、僕はまんまと罠にはハマったことになるんだ。

催眠術・・・暗示。。

つまり僕は、学習能力がまるでなかったということだ。

なんとというバカさ加減！ただただ自分のふがいなさを思い知るばかり。

茜崎さんは話を続けた。

「俺がこのことに気付いたのは、三木綾乃と対面したときなんだ。

彼女の証言に『記憶にない』という言葉聞いたとき、これはおかしいと思ったのさ」

「さすが探偵さんだわ」

「三木綾乃はゆりかという名前はちゃんと覚えていて俺に話した。

なのには枝と一緒に仕事をした記憶はないと言いきった。矛盾すぎるだろ？本社から異動先までずっと一緒だったにも関わらずね」

「な、なるほど。」

「これは催眠術の特徴とも言える要素だ。是枝は自分があとで綾乃に恨まれたりしないように、自分の都合が悪くなるようなことは全て彼女の記憶から消えるような暗示も掛けたと思われるんだ」

僕は大きく頷くばかりだった。

「それに綾乃の証言から、森田の個人的な相談相手になっている人物が是枝しかいないと聞いたとき、これはわざと近づいてるんだと察知したんだ」

「僕ってホントに鈍感なんだな。」

「その判断は正しい。まあそれはそれとして先に進めるが、俺が催眠術についての決定的な確信に繋がったのが、つい最近の美智代さんの証言なんだ」

「え？アタシの？…ああ、ゆりかんちに行ったときの報告ね？」

僕はまた美智代さんの方へ振り返る。

「森田、不思議そうな顔するなよ。実は美智代さんにはゆりかの家へ訪問してもらうように俺が頼んだんだ」

「なんで自分で行かないんです？」

「お前、変なところで突っ込むなよ（^| ^;）あとで説明するか」

「はあ。。」

「で、そこで美智代さんが聞き出してくれた重要ポイント。ゆりかの娘のいずみが寝付きが悪くて、是枝に暗示をかけられてしまったことなんだ」

「Σ（□；ええっ？子供になんていうことを・・・！」

「もちろん是枝本人は、冗談半分にやってみたら本当にかかってしまったとゆりかに謝っているが、ただのど素人が偶然に催眠術を人にかけるはずがないと思ったんだ。そうだろ？」

「ええ。僕もそう思います」

「つまり、是枝はどこかで催眠術を習っている。俺はすぐに調べて突き止めた」

「さすが仕事が早いですね」

「俺をほめてもお前はほめないぞ」

「いや、そんなつもりじゃ（^| ^;）」

「是枝は、かつて、とあるクリニクで催眠の勉強をしていたことがわかったんだ。つまりその先生の門下生ってことだ」

ここまで聞いて、僕はこの探偵に脱帽した。完全に観念した。
もう反論の余地も疑問の余地もないことを。。。

（続く）

その12 演出者たちの奥に潜むもの

その12

演出者たちの奥に潜むもの

「そつか。三木さんは暗示にかかっていたから別に演技じゃなくて、本気で僕が好きだったんだ。」

「勘違いするなよ。あくまで暗示だ。そして今はとくに解けている」

「そうよ！今あんたが彼女のところに行っても気味悪がられるだけよ」

「（＾□＾；A ひどい言われようですね。別に行きませんけど」

「おさらいするところだ。くしくも石丸慎也と倉沢まりものコンビと同時期に、是枝と三木綾乃のペアが、森田卓とゆりかの離婚劇をもくろんでいた。だが慎也組はあえなく失敗に終わる」

「はい。」

「一方、是枝は、自分に好意を持つ三木綾乃を利用して暗示をかけ、森田卓を積極的に好きになるように仕組んだ。弁当作戦も含めて、森田に色仕掛けするような行動は全て是枝が指示していた」

「恐ろしい話ね。」

「是枝本人の行動と言えば、森田の相談相手になるふりをして近づき、ゆりかのことや、家庭の状況を探る必要があった。それに応じて綾乃の暗示を大胆にするか、控え目にするか調整していたんだろう」

「それに全く気付かなかった僕はほんとにマヌケだったんだな。」

「そして最終的には、ゆりか本人に森田の浮気現場を目撃させるのが目的だったと思うが、どうだったんだ？」

いきなりふられて僕はギクツとした。

「す、すごいですね。。その通りです。あの時は会社の1泊慰安旅行で、その夜に三木さんが僕の部屋に来て…社員はみんな相部屋だからいつ同僚が来るかもしれないのに随分大胆な人だなあと。あつ…!」

と、僕はそこで気がついた。

「たぶんそのときの相部屋は是枝だったんだろう?」

「はい。。そうなんです」

「そして部屋割りを決めた担当も是枝だったんじゃないのか?」

「あ…確かに…確かにそうでした!」

「やっぱりちゃんとお膳立てが出来上がっていたわけだ。そしてそこには枝ゆりか…いや、当時は森田ゆりかだったな…とにかく彼女もそこに来るように仕向けたのも是枝なんだろう」

「それはどうでしょう?あのときはゆりか…さんの意思で決めたと思うけど。。」

「そういう気持ちにさせたのも是枝かもしれないぞ」

「えっ?だって是枝君とゆりかさんは面識なんてないはずだけど。。」

「

「絶対そう言えるか?」

「そんな…絶対とは。。」

「俺は面識があったと考える。まだそこまで詳しく調べてないが、お前に近づいたように何らかの方法でゆりかにも近づいていた可能性は高い」

僕は驚きと共に感心してしまった。これだけ勘の鋭い人だ。茜崎さんの言うことが全て本当のような気がしてくるのはなぜだろう?彼の説明が全て自然のように思える。

「で、結果的には俺の言った通りになったってことだな?」

「はい。。部屋でその…現場を見られました。。」

「どんな現場を?」

「言わせないで下さいよ。。そんな。。」

「なによ今さら！エッチしてたんでしょ！三木綾乃とっ！」

「・・・そうです。お酒のせいか、彼女がすごく強引で。」

「やらしいっ！ゆりかっていう最高に美人の奥さんがいながら何てことしてんのよっ！このドすけベオヤジっ！」

数年の時を経て、僕はまたまた後悔と反省の念で胸が張り裂けそうだった。

「もう…僕には何も言う資格はありません。僕とゆりかの結婚生活はこれが最大のきっかけで終わっただんです。」

茜崎さんは一呼吸して座りなおした。

「仕掛け人たちの演出はこれが全てだと思う。まずはここまでの一区切りになるかな」

僕はその言葉に反応した。

「あのお、まずはってどういうことですか？これで全てじゃないんですか？一区切りって…一体何ですか？」

「ん？気付かないか？確かにやつらの演出は全て終わった。だがまだ疑問はいくつも残っているだろうが？それがはつきりしないと、この一件の全貌が見えてこない」

「えと・・・僕にはさっぱり。これがまだ全貌ではないんですか？」

「何だよ。わかってないなあ。残る疑問はお前が最初に言ってたことだぞ？俺がこれからそれに答えようとしてるんだ」

「はて???すみません。思い出せません（^ー^;）」

「しょうがないな。じゃ言ってやろう。お前は最初、不思議に思っていただろ？石丸慎也と是枝英之の別々な人間から二重に仕掛けられていたことを」

「え、ええ。」

「俺もそこはよくよく考えたんだ。お前とゆりかが結婚して約1年半も過ぎた時に、なぜ仕掛け人たちが同じ時期に現れ、それぞれ別々な作戦をほぼ同時に実行するに至ったのかってことだ」

「それは単なる偶然ではないんですか？」

「偶然という言葉をそんなに簡単に使えば、世の中全てが偶然で済まされるぞ」

「はい、すみません。。（^ー^;）」

僕はまたまた謝ってしまった。もう何回謝ったかわからない。

「俺がちよつと前に言っただろう？是枝と石丸とは、直接の関連がなくとも間接的にはあると」

「はあ…確かに。。ところであの…美智代さん、随分おとなしいですな？」

「真実が知りたいから黙って聞いているのよっ！あんたみたいに茶々なんて入れないのっ！茜崎さん、早く続きを！」

美智代さんはなぜか興奮してるようだった。確かに謎解きはわかってくると面白いけど、僕にとっては自分の身に起こったことだし、愛読している推理小説のようにはいかない。

「じゃ続けるぞ。この二つの作戦は、本当に関連性がないのか俺はじっくり考えた。すると、今まで聞いた証言から細かい要素を取り上げると、その関連性が見えてきたんだよ」

「ゴクツ。。」

僕は生唾を飲んだ。これももう何回飲んだかわからない。

そしてこのあと僕は、卒倒するような驚愕する新事実を茜崎さんから聞くことになる。

（続く）

その13 真の黒幕

その13

真の黒幕

茜崎さんと美智代さんが帰ってから、僕の興奮は冷めやらず、結局ゆうべは一睡もできなかった。

せっかく夕食に用意していた期間限定ラーメンものを通らなかった。

あれだけのことを聞かされたんだから当然なんだろうけど。

昨日は精神的ショックが多すぎて、気がどうかなってしまいそうだった。

まるでギャグ漫画のように髪の毛全体が逆立った気がした。

いや、髪だけじゃない。猫が体全体の毛を逆立てるように、僕の体全身にゾクゾクッと悪寒が走る感じさえた。

これはひょっとして、僕は一気に白髪にでもなったのかと不安になって、鏡を見に行くと、別に何でもなかったので胸を撫で下ろしたところ。

でもリアルな話、昨日の夜シャンプーしたときは、排水口に僕の髪の毛が大量に抜け落ちていた。

今も昨日の精神的ダメージがかなり残っているのがわかる。今日は会社を休もう。

そしてゆっくり体を休めなければ。普段はドジでも、仕事にミスは許されない。

そう思って横になってみても、やはり寝つけるものではなかった。あの探偵・茜崎さんの昨日の言葉が繰り返し次から次へと頭の中

をよぎっていた。

「まずは園崎頼子の証言からの疑問。彼女は倉沢まりもから、森田をおびき出すだけで50万円もの大金を振り込まれたこと。まりもはその金を慎也から受け取っただけ。慎也は必要なときには用立ててくれる人がいると言っていた。これはすごく謎だろう?」

「ええ…確かに。」

「じゃ次の疑問。三木綾乃はお前との不倫発覚後、すぐに部署を異動させられた。でもお前は異動どころか今は課長に出世している」

「僕の出世は疑問ですか? (- ;)」

「能力的なことを言ってるんじゃない。普通、スキャンダルは両成敗だ。なのに、異動したのは三木綾乃と是枝英之だ。この二人は異動して来たのもほぼ一緒。そして異動して行ったのもほぼ一緒。これもおかしいだろ?」

「そう言われるとそうですが・・・」

「是枝にとって、こんなに都合の良い異動はない。目的を達成してすぐに異動が決まる。そして自分は本社へ。暗示にかけた三木綾乃は遠くの関連会社へと。まるで絵に描いたような完全犯罪的なストーリー。これを計略でなくてなんと呼ぶ? 偶然として片付けられるか?」

「そうね・・・とても偶然なんて言えないわ」

「是枝は当時、自ら異動を決める権限などなかった。もちろん三木綾乃もね。じゃあ一体誰がそれを決めたんだ?」

「それは…人事課の人間が決めることだと思いますが…」

「森田、お前に確認の質問をひとつする。大体はわかってるが、最後はお前の口から聞きたい」

「え? あ、はい…どうぞなんなりと。」

「お前は結婚していた当時、ゆりかのご両親とはうまくやっていたのか?」

「は？？…あ、あの…今そんな突拍子もない質問をして何か関係があるんですか？」

「最終確認だ」

「はあ…まあ母親とならなんとか普通に会話もできたんですけど、僕は父親の方にあまり気に入られてないようで。」

「つまり父親と折り合いが悪かったんだな」

「はい。お恥ずかしながら…」

「よしつ。なら決まりだ」

「えっ？」

「全てが裏付けされたよ。この二つの別々な仕掛けがひとつに繋がったんだ」

「…すみません。教えて下さい。僕にはさっぱり。」

茜崎さんは軽いため息をした。僕がまるでしょうもない奴だと言わんばかりだったけど、そこはなんとか抑えたようで、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「では説明をしよう」

僕も美智代さんも真剣な眼差しで茜崎さんを食い入るように見つめていた。

「この2組の仕掛け人たちを影で操っていた黒幕がいるってことさ」

「く…黒幕？」

「そう。その黒幕は用心深い人間で、念には念を入れるタイプなんだろう。だから石丸慎也を利用するだけでは心もとない。失敗するとも限らない。そこで是枝の登場だ。黒幕はその二人にそれぞれの罠を仕掛けさせた。そしてどっちか一方さえ成功すれば良いと思っていたんだ」

「す、すごい話だ。」

「そしてその通りになった。慎也の作戦が失敗したものの、二重に仕掛けたもうひとつの罠、是枝の作戦が見事に成功した」

「その人は大物ね。自分は動かないで人を動かせるなんて。」

「そうですね。美智代さんの意見は正しいです」

「（＊＾　　＾＊）ぐえへっ」

なぜか茜崎さんは美智代さんに話するときだけ丁寧語になる。

「結論から言おう。黒幕の正体：それは慎也に金を用立てた人間。

是枝と三木を森田卓の部署へ人事異動させ、事が済むと三木をその部署から離し、是枝を本社に戻して昇進させた。そしてなぜか森田卓には情けをかけて左遷せず現状維持にした。つまり黒幕は人事異動にも顔が利く役職だったことになる」

「ひよっとしてそれは…」

「更に言えば、そんな大物は森田卓が大嫌いで、一刻も早く離婚させたいと心から願っていた。…もうわかったかな？森田」

「そんなことって…あの人がそんな…どうしてそこまで僕を…」

「どうやらわかったようだな。美智代さんもわかったね？」

「え、ええ。なんか…とても悲しくなったわ。」

「真の黒幕は…須藤源一郎。俺も知ってるゆりかの父親。皮肉なものだ」

（続く）

その14 元カレと元亭主

その14

元カレと元亭主

体は横になっただけでも心のダメージは消えない。
僕はお義父さんにそこまで嫌われていたんだ。

確かに考えてみたらそうかもしれない。

うまく付き合おうと思えば思うほど、全て結果は裏目だった。

お義父さんの前では緊張のあまり必ずドジるし、まともに会話すらできなかった。

情けないと思われても当然な僕。

可愛い娘の亭主がこんなだから、社会的地位のあるお義父さんにしてみれば、世間体にも示しがつかないと思ったに違いない。

親が介入して無理やり夫婦仲を引き裂き、愛娘ゆりかの心を傷つけるよりは、僕の失態を誘い、ゆりかさんも納得した上で離婚させる方が最良の策だ。

だるい。体の疲れがピークになっているようだ。

ゆうべ一睡もしていないだけに、あれこれ考えていてもさすがに意識が朦朧となってきた、知らぬ間に僕は眠りに落ちていた。

それからどれくらい眠ったんだろうか。

僕は玄関のチャイムの音で目が覚めた。時計を見るともう夕方の方過ぎ。

しまった。こんなに寝てしまったらまた今夜眠れないや（
;

玄関を開けると美智代さんが鍋を持って立っていた。そしてその後ろには探偵の茜崎さんもいた。

「力ギくらいいつも開けておきなさいよ！この鍋重たいんだからねっ！」

「そんなムチャクチャな…（ - ； ）」

「とにかく上がらせてもらっわよ」

「じゃあ俺も上がらせてもらおう」

「はあ…」

美智代さんはうちで唯一の丸いテーブルに鍋を下ろした。

「あんたのためにシチュー作って来たの。どうせ何も食べてないだろうから」

「はい…よくわかりましたね。当たり前です」

「だってあんた、昨日は魂のぬけがら状態だったじゃない。それくらいわかるわよ」

「すいません。今日の炊事当番は僕だったのに。」

「いいのよ。アタシだって昨日は作らなかったし。あんな話のあとじゃね。」

「…」

「お腹すいたでしょ？今すぐ食べなさいよ」

「いくらなんでも僕ひとりでこの量はとても…」

「バカ！アタシも一緒に食べに来たのよっ（^―^；）」

「え…？こんなの初めてのパターンですね」

「余計なことは言わない！いっぱい作ったから茜崎さんもどうぞ」

「はい。遠慮なくいただきます」

「あのー、皿は僕の分しかないんですけど。（^―^；）」

「（ノ―）ノコケツ！そ、そうだったわね。あんたんちには来客用なんて存在しなかったわね（^―^；）じゃあアタシ取って来るから待ってて」

「はあ。。」

美智代さんは足早に玄関を出て行った。そして部屋には僕と茜崎さんの男二人きりになった。

「あのー、今日も二人一緒に僕に何か用でも？」

「いや、美智代さんとは偶然ここで会っただけなんだ」

「はあ？」

僕は不思議に思った。偶然なんて言葉を簡単に使ったら、世の中全部偶然で片付けられると昨日茜崎さんが言っただけなのに。

でもここはそれを言わずに抑えた。というか、そんな思ったことをすぐに口にできる僕でもなかったし。

「君の今思ってることはわかる。でもこれはホントに偶然なんだよ」昨日は僕のことを“森田”と呼び捨てにしたり”お前”呼ばわりだったのに、今日はなぜか“君”扱いになっていた。

「俺が今日来た理由は君に謝ろうと思って来たんだ。美智代さんは単に、君が気の毒になってシチューを届けに来たただだろう」

「そう言われればそうかもしれないが。で、僕に謝るって一体……？」

「うん。。さすがに昨日は俺も強く言い過ぎたよ。もっと君の気持ちを考えて言えば良かったよ」

「確かに心にズシンと響きましたけどね（　　）」

「ごめん。本当に悪かったよ」

「もういいですよ。茜崎さんは探偵でしょ？心のケアをするカウンセラーとは違うんですから仕方ありません」

「そう言ってもらえるとホッとしたよ」

ここまでの会話が成立すると、なんだか少しだけ心が和んだ気がした。

だから率直な僕の疑問も、今なら茜崎さんに聞くことができると思った。

「あのお…どうしてこの件をここまで詳しく調べようと思ったんですか？確か誰からも依頼されてはいないとおっしゃってた気もしましたけど？」

「そうだよ。俺ひとりの勝手な捜査なんだ。だから報酬も何もないんだ」

「その理由って教えてもらえないんですか？なぜ兄弟や親せきでもない僕のことを調べたんですか？しかも2年近くも前のことを。」

「うん。実はその理由も昨日言うつもりだったんだけど、君のシヨックが大きくてずっと放心状態だったろ？だから言えずにそのまま帰ったんだ」

「・・・そうだったんですか。」

「だから今日はそれを言うつもりで来たんだ」

今日の僕は落ち着いて聞くことができた。でもそれは決して冷静だからじゃなくて、完全に腑抜け状態になっていたからだ。

「君に…森田君になんとかゆりかと復縁できる手立てはないもんだろつか？」

「えっ？（。○。；）突然何を。。？」

「あんな是枝みたいな卑怯な奴が、まんまと作戦通りにゆりかと結婚したなんて許せないんだ。ゆりかも騙してることになるんだし」

「まあそうなんでしょうけど。」

「あんな奴にゆりかを奪われるくらいなら、純粋な君の方がきっとゆりかを一生幸せにできると思うな」

「ちょ…ちよつと待って下さい。なんで急にそんなことを？」

「今ふと思ったんだよ」

「それに茜崎さんはゆりかさんのことを知ってるんですか？親戚の方とか？」

「いいや…親戚じゃないが…」

茜崎さんは一呼吸おいてから話した。

「実は…俺はいずみの本当の父親なんだ。でもゆりかとは結婚しな

かったのさ。彼女が妊娠してるとも知らずトンスラしてしまった薄情な男だよ俺は」

二人ともうつむき加減で話していたため、美智代さんが皿を数枚持って立っているのに気付かなかった。

「そうだったの。いずみちゃんの。どつりで茜崎さんをどこかで見たような気がしてたと思っただら。」

「あ…美智代さん。そうでしたか。俺に見覚えが。」

「ええ、でも思い出せなかったの。今までずっと」

「俺がゆりかと付き合ってるときに一度か会いましたっけ？」

「いえ…たしか昔、ゆりかに写真を見せてもらったことがあったからだと思うわ」

「そんな昔の写真の記憶が残ってるなんてすごいですね」

「アタシ、いい男の顔は忘れないのよ>(; ^ _ ^)」

(続く)

その15 最後のみっちちぶろぐ・前編

その15

最後のみっちちぶろぐ・前編

アタシ…もうこれ以上ブログを更新する気にはなれなくなっちゃった。

なんだか書いてたら泣けてくるの。何度も書いては消しての繰り返しで。

だって…だってあんな森田でもあまりにも気の毒なんだもん。。

それにアタシがブログを始めた元々のきっかけは自分のPTSDを治すため。

アタシも昔は毎日不摂生な生活で、男に捨てられたり捨てたり…ケンカ別れもしたし、貢いだあげくに逃げられたりもした。

でも森田に比べれば、アタシの過去なんて大したことじゃないと思うの。

アタシの経験なんて、普通誰でも一度や二度はあるはず。単にアタシの精神が弱かっただけ。

それに比べて森田はハンパじゃない罠にかかったんだもの。アタシの方がまだマシ。

ゆりかパパが糸を引いた人間に、ことごとく騙された哀れな森田。

そして最終的にゆりかを失った。ドジな男だけど、人が良過ぎるくらい素直な奴。

そんな森田が受けたダメージは計り知れないと思う。
よりによって義理の父親に裏切られたんだもの。。

アタシはどうしたらいいのかな？森田に何もしてやれないし、ゆりかにも。。

昨日、茜崎さんが森田に、ゆりかとヨリを戻してほしいようなことを言ってたけど…できればそうしてあげたい。

ゆりかだって、森田が嫌いで別れた訳じゃないって言ってたもの。

アタシがあれこれ思い悩んでいると、意外にも森田の方から訪ねて来た。

「昨日はシチューごちそう様でした。鍋洗って来ましたのでお返しに来ました」

「ああ、鍋ね。。そんなのいつでもいいのに」

アタシが不思議に思っただのは、今日の森田はワリと表情が明るなこと。

「あんた、少し元気になったみたいね？」

「はい。今日、たまった仕事を忙しくこなしていたら元気が出てきました」

「それって、仕事で気を紛らわしたってことじゃない？」

「そうでもないんですよ。僕、あれからまた色々考えて、僕なりの決断をしたんです」

「決断？」

「はい。だからもう悩んでません。そう決めたから。今日はそれを美智代さんに聞いてもらおうと思って」

「…そう。。じゃあ上がって」

「えっ？（。○。；）中に入れてくれるんですか？いつも玄関だけなのに」

「あんたはアタシを襲わないでしょ」

「襲いませんが、部屋が散らかってるんじゃない？」

「大事な話なんですよ？一人分の足の踏み場くらいあるわよ」

「ひ…ひとり分。。（。；）」

部屋に上がった森田は、いきなり床に落ちていたビニール袋に足をとられて転倒したけど、いつもよくある笑えないドジだから軽く受け流すことにしたの。

「正座はしなくていいわ。韓国では罪人の座り方なのよ」

「え？美智代さんて韓国人なんですか？」

「豆知識よっ！もうっ！言わなきゃ良かった。」

「すいません。」

「じゃあ大事な話を聞かせてくれない？昨日のことなんでしょ？」

「はい。」

「どうすることにしたの？」

「どうもしないことに決めました」

「・・・そう。。そうよね。」

「茜崎さんは僕に、ゆりかさんとヨリを戻せないかと言ってくれましたけど、それはどう考えても無理な話です」

「・・・うん。。続けて」

「仮にこれを実現するとしても、ゆりかさんに全ての事情を打ち明けないければなりません。そんなことをしたら彼女はどうなってしまうと思いますか？一度はカウンセリングに通って苦しんでいたゆりかさんを、また同じ目に遭わせることになります。いや、それ以上のことになるでしょう。彼女の精神が異常をきたしてしまうかもしれません。」

「・・・そうね。あんたの言うとおりだと思うわ」

「アタシは残念でなかった。森田がここまでゆりかのことを考えてるのに。。」

「逆に僕が感じたのは、茜崎さんの方がゆりかさんに未練があるのではと思うんですよ。ヨリを戻したいのは茜崎さんの方じゃないかって。だったらなぜ自分でそうしないんでしょう？」

「それはわかるわ。ゆりかから聞いてたもの。それが茜崎さんのこ

とは知らずにね」

「ど、どんな？」

「いずみちゃんのお父さんになる人は遊び人で、常に1か所に落ち着かない人。それができない人。当時のゆりかは一途で、相手のこともよく知らずに盲目のように好きになっただけで、本性がわかって冷めてしまったらもうどうでも良くなっただけで言っただけ。むしろ置き去りにされたことを恨んでるし、会ったと嫌悪感さえ覚えるって」

「へえ…ゆりかさんがそんなことを。」

「だから茜崎さんもそのことは十分わかってるんだと思うわ。だからだと思っの。自分はゆりかに迷惑かけたし、やり直すのは無理だっ」

「だからって僕にあんなことを頼むものでしょうか？」

「それは是枝さんを許せないからでしょ？あんな手でゆりかを我がものにする人間は軽蔑に値するって、昨日の帰りに彼が言っただわ。それなら森田にゆりかをゆだねた方が彼女は幸せだっ」

「買いかぶりですよ。僕にはそんな器量はありません」

「でも正直アタシね、今だから言うけど、あんたとゆりかが別れちゃったとき本当に残念だと思っただの。もしあんたがゆりかパパに気に入られてたら絶対こんなことにはならなかったのに。」

「…それが僕の欠点なんです。仕方ありません。でもそのことで今更ながらですけど不思議に思っただことがあるんです」

「なにが？」

「僕がゆりかさんと結婚してから、お義父さんは僕を全然気に入っただけじゃなかったんです。それなのに今回の一件で、慎也さんには協力を求めたじゃないですか。そこがいまいちわからないんです」

「ああ、そのことなら簡単よ」

「簡単？」

「ええ。アタシが茜崎さんに頼まれてゆりかの家に行ったことは聞いたわよね？」

「ええ、覚えてます」

「あときは単に様子を見に行っただけじゃなくて、聞きだしてほしい指定の内容を頼まれてたのよ」

「指定の内容？」

「そう。つまり、ゆりかパパと石丸慎也は仲が良かったかってこと」
「はあ…それで？」

「ゆりかは慎也と付き合つてるときにパパに紹介してるし、一緒にお酒も飲んだりした親しい仲だったんだって」

「そうでしたか…慎也さんはお義父さんに気に入られてたんだ。だからか。」

「そう。それにあんたをどうにかしたいって気持ちは二人共通だったしね」

「確かにそうですね（＾―＾；）ハハ…」

「また凹んじやった？」

「いえいえ、それはもうないです。確認できて逆にすっきりしました」

1分ほど、無言の空間が漂った。さすがのアタシも次に言う言葉が見当たらない。

そんなアタシに元気を装った森田がびっくりするようなことを言ったの。

「美智代さん、短い間でしたけど、今まで大変お世話になりました。僕、ここを引越すことに決めました」

（続く）

その16 最後のみつちつちぶろぐ・後編

その16

最後のみつちつちぶろぐ・後編

「なによそれ？引っ越しすることに何か意味あるの？」

「その方がいいと思ひまして」

「アタシと交代の炊事当番がイヤなの？」

とアタシは心にもないことを言ってみた。

「いえいえいえ、全然そんなことはありません（ - ；」

「じゃ何？ゆりかんちだつてここから距離あるし、ここにいたってバツタリ会うこともないと思うけど？」

「いえ、そうじゃないんです。」

森田はそう言うつと、ややうつむき加減で話していた顔を、もっと下げたの。

「言いくいことなの？なら言わないで帰りなさいよ」

正直このときのアタシは、これから森田が話すシリアスな内容を聞きたくなかったの。だって森田が哀れに見えるだけだし、何も手を差し伸べてやれないアタシ自身も齒がゆいだけだから。

「いえいえ、言います。言わせて下さい。これは…僕のけじめなんです」

こう言われるとやつぱり聞くしかないわよね。仕方ないから突っ込みながら聞いてあげよう。

「引っ越したらけじめがつくの？」

「はい。どう考えても今のままではいけないと思うんです。というのは…」

「というのは??」

「毎日、美智代さんと顔を合わせてしまうからです」

「・・・え？どういうこと？」

「美智代さんはゆりかの親友だからです。僕はあなたを見るとゆりかさんを思い出してしまっんです」

「アタシを見ると？」

「はい。かつて僕とゆりかさんが結婚できたのも、美智代さんの機転がなかったらできませんでした」

そう言われてアタシは思い出した。

森田が合コンの2次会で、同僚や女の子たちから耐えられないほどの屈辱の言葉を浴びせられていて、まさに堪忍袋の緒がブチ切れる寸前だった。

「僕はあのとき、ゆりかさんに寸前で止められました。あれがなかったら僕は、あの場にあつたナイフとフォークで同僚を殺していたかもしれません」

「そうね・・・あのときはホントにそう見えたわ。早くゆりかが来ないかと冷や冷やで遠くから見てたもの」

「ゆりかさんをあの場に呼んでくれたのは美智代さんです。あなたは僕とゆりかさんの愛のキューピットだったんです」

「愛のキューピットだなんて...顔に似合わないこと言わないでよw」
「ほっといて下さい」 - ； -

「ごめん。少し口がすぎたわ」 - ； -

「とにかく、僕は美智代さんのおかげで救われました。今でも感謝しています」

「じゃあ、縁結びのアタシに申し訳ないから引越すってこと？」

「いえ、そうじゃないんです。さっきも言いましたが美智代さんを見てると、どうしてもゆりかさんのことも考えてしまっんです」

「アタシとゆりかつてそんなに似てる？チャーミングなことか？」

また少し話をはぐらかすアタシ。

「チャーミングとかキレイとかそんなんじゃないって...」

「なんですって!!、(、(、(ノ」

「（＾□＾；A いやいや、僕の言いたいのですね・・・美智代さんとゆりかさん…そして翔子さんは大親友で、いつも一緒に僕も交えて遊んでたじゃないですか」

「そうね。そんなときもあったわね」

「だからなんです。美智代さんと会って、いつもみんなで遊んだ楽しい場面ばかり浮かんで来るんです。そしてゆりかさんとの思い出も溢れるくらいに。」

「・・・ふうん。」

「僕にゆりかさんは高根の花のような存在です。でもそれがひとときの短い期間でも実現したことは僕にとって奇跡でした。だからこんな形になった今でも、幸せだった日々を思い出しては自分の心を癒していました」

「でもそれは大切な思い出なんだから、別に悪いことじゃないと思うけど？」

「でもそれじゃ僕はいつまでもダメなままなんです。現実を見つめない過去に生きる男でしかありません」

アタシはこんなことを言いのけた森田に驚いた。そして充分理解もした。

ゆりかと別れてから、やっと森田が前向きに進もうと歩み始めたということ。

「僕は最初、この一連の仕掛けを知らない方が良かったと思います。知ったところですでに再婚もしている幸せなゆりかさんにどうすることもできないからです」

「うん。それはわかるわ」

「でも今は違います。教えてもらったからこそ、気持ちを切り替えるきっかけができたんだと思います」

「・・・そうなの？」

「ええ。僕が離婚してからの数年は、ゆりかさんもまだ独身でいた

ようなので、僕の心の中にひよつとしたら元に戻るかもしれないという浅はかな思いがあったのは確かなんです」

「やっぱりそう思ってたんだ。」

「情けない話そうなんです。でも、今回のこの一件で目が覚めたような気がするんです。僕はゆりかさんを見守るんじゃなくて、彼女から離れて自分の将来を真剣に考えようって思えるようになったんです」

森田の言うことは確かに良いことで、ビックリするほど感心もするけど、アタシにはどうしても引つ掛かることがあったの。

「ひとつ聞いていい？」

「はい？」

「あんたはゆりかを奪われたのよ！是枝が憎くないの？憤也は？ゆりかのパパは？みんなあんたを騙した人たちよ？なのに何であんたはそんなに清々しい気持ちになれるの？アタシなら…アタシなら半狂乱になっちゃうわ！」

なんか恥ずかしい。。森田の前で急に熱くなっちゃった。

でも聞きたかったの。誰でも悟りを開いてる人間じゃないんだし、人を憎んだり恨んだりもするのは当然。ましてこんな僕にハメられた森田なら尚更のことでしょ？

それなのに森田の返答は、まさに汚れを知らない心の澄み切った人間が言うような言葉だったの。

でもまあ、これはちよつと褒めすぎかなww

悪く言えばお人よしっていうのかもしれないし。。

（続く）

その17 さよなら森田卓

その17

もりたすぐる

さよなら森田卓

「悪いのは僕なんですよ。お義父さんでも是枝君たちでもありません」

「は？あんた何言ってるの？悪いのはあの人たちでしょ？」

「いいえ、僕の心に隙があつたからこうなつたんです。これは全て僕の責任です」

こうキツパリ言つた森田だけど、顔はうつむいたままで話している。「誰の責任とかじゃなくて、あんたを騙した人たちが憎くないの？つて聞いているの！」

「あ……いいえ。ショックでしたけど、自分に腹が立つただけです」

「うーん。アタシには……理解できないわ。」

うつむき加減のままの森田が、微妙な間を開けて再び話し出したの。

「僕は……人に憎まれても人を憎みたくないんです。人に騙されても人を騙したくないんです。そんなヤラれたらやり返すような人間関係なんて醜いじゃないですか。そういう中で生きるのって僕イヤなんです」

「でもそれってあんたがバカみるだけなのよ？」

「わかつてます。でもそれでいいんです。僕が悪人に仕立てられても構いません。人の踏み台にされても平気です。それでみんな和やかで喜びあつて過ごして行ければ火種は消えるんです」

（・へ・）うーん。ちょっと違うような気がする。

人に憎まれても憎みたくないと言つた森田の心はとてもピュアで、

今までの印象からは到底想像できない発言だった。ある意味、森田を見直した。

でも…でもこれが逆に仇になるわ。単に偽善者だと言われてもおかしくないもの。

世の中にはそういう心ない人がたくさんいる。そんな人たちが大勢いる中で、森田はこれからちゃんと一人で生きて行けるのかと本気で心配したアタシ。

「でもやつぱり、あんたが犠牲になるだけじゃない。その献身的な心構えは素晴らしいと思うけど、悪人を正すことにはならないわ。野放しのままよ。またいつ騙されるかわからないのよ？」

「僕が悪人を正すなんて…そんな恐れ多いこと考えていません。それにまた騙されるかもしれません、そのときはそれでいいんです。それが僕の宿命なんですよきつと」

ダメだわこれじゃ。。森田はいい人過ぎる。

「美智代さん、心配してくれてありがとうございます。でも決して僕は開き直りで言ってるわけじゃないですし、ヤケにもなってませんから安心して下さい」

「（；ー；） 3 フウ」

アタシはため息しか出なかったわ。

「あのですね、プラス思考で考えると僕はとてもラッキーだと思うんですよ」

「え？なんで？」

「だって、僕は左遷や異動がありませんでした。あのときは同僚みんなが僕が左遷されると思っていたはずです。それなのに今は課長に昇進もしました。この意味ってわかりますか？」

「ああ…そのことは茜崎さんも少し触れてたわね。ゆりかパパね。」

「はい。これはお義父さんの恩情です。僕に対するせめてものお詫びの意味があると思うんです。だからお義父さんには感謝しなければならいかもしれません」

アタシはそれを聞いて苦笑いするしかなかった。黒幕に感謝するだなんて絶対アタシには無理！死んでも無理！アタシは森田に対する印象が一変した。

こんな風に思える森田って、単なるバカ正直じゃなくて、よほど寛大な心の持ち主ってことになるの？なんかまるでどこかの宗教の信者みたい。。

「あんだ…精神力が強くなったわね。すごいわ」
数秒の間があってから森田が話す。

「…そう見えますか？美智代さん。。」
森田の口調のわずかな震えにアタシはハツとした。

「僕は…全然強くなありません。」
なぜ森田が顔をずっとうつむいたままで話していたのか今わかった。

アタシを見るために少しだけ上げた顔…そこには森田の潤んでいる瞳があったの。

涙がいつこぼれ落ちてもいいくらいウルウルに。。

「すみません。。こんなつもりじゃなかったのに。。」
「森田…」

「僕ってホントにだらしないですよね。今まで色んなことでさんざん泣いて来て、やっと気持ちを切り替える決心をしたっていうのに。。」

森田は涙がこぼれるのを必至で耐えていた。目線を横にズラしたり、見上げたり。。けっして手で拭こうとはしなかったの。それが余計にアタシの心にせつなさを感じさせた。

森田は強いわけじゃない。。これが精一杯の強がりだったんだ。。それもこれもゆりかと完全に決別するために。。そして自分の決意を固めるために。。

アタシは衝動的に口走ってしまった。

「森田…思いつきり泣いていいよ。アタシに遠慮はいらないよ。声出して泣いたからってあんたを軽蔑したり情けないって思ったりしないわ」

「み…美智代さん。。（トートート）」

「その代り泣くのは今日が本当に最後よ。さあ、アタシの胸を貸すから遠慮しないで」

なぜこんなこと言っちゃったのか、アタシ自身もわからなかった。森田は感極まって、アタシの言葉をモロ素直に受け止めてくれたようで、いつもの躊躇も恥じらいもなくすごい勢いでアタシの胸に飛び込んで来た。

そして泣いた。。大きな声で泣いた。。

森田は気丈に振る舞いながらも、ここまでこらえにこらえていたんだ。

不覚にもアタシも泣いてしまった。。森田の頭を撫でながら泣いた。。

森田とゆりかに何もしない悔しさと同情の涙。。

かつて、ゆりかが森田を結婚相手に選んだ理由が、今になってようやくわかった気がする。

不意に、涙声の森田がアタシの胸の中でおかしなことを言った。

「僕、もうすぐ死ぬのかな…？」

「えっ？何言ってるの？」

「だって…だって今までの出来事が頭の中で走馬灯のように流れて行くんです。。」

「だから何だって言うのよ？」

「こういうときって映画やドラマでは死ぬ寸前じゃないですか。」
アタシは森田の頭を手のひらで軽く叩いた。

「バカね、違うわよ」

「…じゃなんで。」

次にアタシは叩いた箇所をそつと撫でてあげた。

「それはね・・・きつとあんたの心の奥底にも、ひとつのピリオドが打たれた証拠よ」

「・・・はい。。そう…思います。。」

“ ゆりか。。 あんたもバカよ。。 こんなに一途でピュアな森田と離婚するなんて。。 ”

こうして心ゆくまで泣いた森田は、アタシに別れを告げて自分の部屋に戻って行った。

アタシの服は森田の涙と鼻水でグチャグチャになったけど、それはさすがに許してあげたの。森田は洗濯して返すって言うてくれたけど、あいつの下着と一緒に洗われるのもどうかなー？って悪いけど一瞬だけ思っちゃったw

この夜はさすが寝付けなかったアタシ。

色々考えさせられた。森田のことばかりじゃなくて、アタシ自身のことも含めて。。

森田の素直さとこれからの決意はアタシも見習わなくちゃいけないと思った。

こんなダラダラした生活は良くない。楽しく遊べる男と浅く付き合っては別れる繰り返しも良くない。

そして、親の仕送りとフリーターでしのいでいる生活ともそろそ

るお別れしなくちゃ。。

考えてみたらアタシ自身も全然進歩がなかった。森田のことをどうのこうの言えない。

ベッドの中でじっくり考えた。なぜか逆に森田にパワーをもらったみたい。

絶望の中から生きるすべを見つけようと決意した森田を目の当たりにしたからかもしれない。

そしてアタシも決心したの。。

今日をもってアタシは変わる！そう、新しい自分になるわ絶対！！
このブログはこれで完全に終わり。
そして前を向いて堂々と進んで行こう。
アタシらしく。。

第2章終わり（第3章へ続く）

第3章 再会の余波 その1 それは突然

第3章 再会の余波

その1

それは突然

僕はそのとき公園にいて、ある作業をしていた。

しゃべることもなく、ただ黙々と進めてゆくだけの地味な作業。もちろん誰に注目されるわけでもない。

そんなとき、背後から呼びかけられる声がした。

振り返ると、そこには制服を着た女の子が立っている。

見かけで判断するとしたら、女子高生というよりも、まだ中学生かもしれない。

「おじさん、何してんの？」

人におじさんと呼ばれてもしょうがない。もう35歳も半ば過ぎ。

それに僕は昔から老け顔だし（ - ；

「空き缶を拾ってるんだよ。公園のあちこちに転がってるんだ」

僕はこのとき軍手を履いていて、片手には大きなビニール袋を持っていた。

「おじさん、ホームレスの人？」

そう思われても当然の話。作業している格好すら、みすばらしいのだから。

でもここはきちんと誤解のないように答えておこう。

「いや、違うんだ。お手伝いをしてるだけなんだよ」

「ふうん。誰の？」

「ほら、向こうにいる人を見てごらん。僕と同じことをしてる人がいるだろ？あの人がホームレスのトメさん」

「（＊ m ＊）ププツ トメさんて本名なの？」

「えっ？…そこまで考えたことないなあ。本人が言うからそう思ってたけど」

「へえ、でもトメさんとかゲンさんとか、よくあるニツクネームだよなw」

このタメ口で話しかけてくる女の子はなんなんだろう？

ホームレスをバカにしてる風でもないし。

「じゃあおじさんはホームレスじゃないってこと？」

「ああ、違うよ」

「じゃなんで手伝ってるの？」

と、この子はなぜかにこやかに尋ねてくる。

別にバカにした笑いでもないし、悪い子のようにも思えない。

「いや、色々あってね。これも一種の人助けだと思ってさ」

「ふうん。へんなの」

一瞬“へんなの”にカチンときたけど、あとは無視して作業を続ける僕。

「おじさん、そろそろやめた方がいいよ」

と意外な言葉に僕は作業の手を止め、またその女の子に振り返る。

「どうして？僕は悪いことなんかしてないよ！」

と少しきつめの口調で言ってみる。

でもその子にとってはまるでどこ吹く風。

「んとね、さっき近くのコンビニにあいつらがいたの。もうすぐここに来るよ」

「えっ？あいつらが！」

僕にはピンと来た。あいつらとは、この街で有名なタチの悪い不良少年グループ。

「おじさんもあいつらにオヤジ狩りされちゃうよ」

それを聞いた僕はさすがに焦った。

ここ1か月でもう10人以上のホームレスが乱暴されている。被害にあっても仕返しが怖くて誰も警察に訴えようとはしないのだ。

僕はすぐさまトメさんに声をかけ、数分のうちに公園から退却したのだった。

その後、トメさんは夕食の調達のために繁華街へと歩いて行った。僕はそのまま家路に戻ろうとすると、なぜか女の子も僕の後ろを一緒について来る。

「僕はもう家に帰るんだよ。さっきは教えてくれてありがとう。もう大丈夫だよ」

でもその子はまたまた意外な言葉を発した。

「おじさんとこ行ってもいい？」

「Σ―11（ ; ）――1ええっ!？」

「そんな驚かなくてもいいのに」

「ダメだよ！君いくつ？」

「15歳。でも大丈夫」

「んなわけないって！知らない人のところにホイホイ着いて行っちゃいけませんって、お母さんから教わらなかった？」

「ママはホイホイって言葉は使わなかったよ」

「あつそ…（^―^ ; ）でもちゃんと教わったんでしょ？」

「うん。教わったよ。でもおじさん知ってる人だもん」

「（・―・）…は？」

僕は立ち止ってその女の子の顔をよく見てみた。

「まだわかんないの？卓くん！」

「あ―!…（ ; ）」

「（＊ m ＊）ププッ、やっとわかったね。相変わらず鈍いよね。卓くんて」

僕は仰天した。確かによく見ると面影はある。

でもこの15歳になるまでの成長ぶりには目を見張るものがあった。

「もしかしていずみ??」

「もしかなくてもいずみだよ」

「な、なんでここへ…?」

「話は卓くんの家でしようよ、早く帰ろ。ねっ」

「・・・うん。じゃあちよつとだけだよ」

「そんな遠慮しない遠慮しない」

「それ、いずみの言うセリフじゃないから（^―^）（;）」

「エへ（＊ ^ - ^ ＊）ゞ」

（続く）

その2 こんなところで？

その2

こんなところで？

卓くんのアパートは公園から歩いて5分くらいだった。

階段を上ってちょうど2階の真ん中。

卓くんは玄関の前まで来ると、キョロキョロと辺りを見回した。

「何やってんの？」

「ん？だって人に見られたらヤバいだろ？」

「別に」

「僕がヤバいんだよ。近所の人に未成年の女の子を連れ込んでるって思われるんだよ」

「考えすぎじゃないの？」

「いいから早く入って！」

私はせかされながら玄関から部屋の中へ。

でも一歩入ると気分が悪くなった。

「うつー！！」

手で口をふさぐ私を見て慌てる卓くん。

「いずみどうしたっ！大丈夫っ！？」

「この部屋くさっ！！」

「Σ―111（；；）――1ゲ！しまった！気付かなかった！」

卓くんは急いで窓を開けたあと、消臭スプレーを部屋中にまいた。と勝手に思っていた私が間違っていた。

「卓くん、なんでキンチョールまくのっ！」

「ごめん。とりあえずこれしかなかったんだよ（＾―＾；）」

「（ノ――）ノコケッ！」

「ホントごめんな。自分の部屋の臭いってわからないんだよ」

「ファブリーズくらい買っておこうよお」

「誰もうちには来ないから必要なかったんだよ（＾＾）」

「ねえ、臭くない部屋もうないの？」

「僕の寝室はもつとすごいだろうし（；）、A」

「（ 3 ）ぶーっ！」

「あつ！そういえば…たしか風呂の窓は開けっ放しだったはず…」

「泥棒入るじゃない！」

「いいや、小さな窓なんだ。子供の体もやっと入るくらいの」

「・・・だからなんなの？（ ； ）」

「部屋の匂いが消えるまでの間、そっちの方で話そうよ」

「エー（ノ　ノ）ノ！！ヤダよ。そんなとこ絶対行かない！！」

「ここよりマシだよ。それともここで我慢する？」

「う…」

1分後、私は卓くんとお湯の入ってない乾いたバスタブの中に向き合って座っていた。

卓くんは体育座りで、私はミニスカートだから正座。

「卓くん、これどう見てもありえない画なんだけど（；——）」

「ごめんごめん。もうちょっとの辛抱だから。でもなんか恥ずかしいね」

「す、卓くん…（^ー^；）」

こんな卓くんだけど、なぜか不思議と安心できて楽しかった。

卓くんは私が小学3年生のときまで暮らしていたときと全然変わってない。

英之パパならこんなとぼけたことなんて絶対しないし、緊張して息が抜けない。

やっぱり話せるのは卓くんかな。。でもその前に。。

「ねえ卓くん」

「ん？なんだい？」

「ママのこと、今でも好き？」

「えっ？Σ(□)；な、ななんだよいきなり…」

「どうせこんな部屋だから彼女もいないんでしょ？」

「ズバリ正解(- ；)」

「じゃあママと再婚する可能性もあるよね？」

「な、ないよそんなの。だって是枝君…いずみの新しいパパがいるじゃないか」

「それはそうなんだけどさ…」

私は今の家の事情を言うのをためらった。

本当は卓くに聞いてもらいに来たのに…

そのためにわざわざ卓くんの会社から住所を調べて、バスで30分の道のりをやって来たのに、いざ言おうとしたら口がつぐんでしまう。

「いずみ、どうしたんだい？家で何かあったのかい？ママに怒られたとか？」

「そんなじゃないよ…」

「なら良いけど。」

卓くんはそれ以上、深くは聞いてこなかった。

ちよつとの間の沈黙のあと、私はとっさに思いついたことを口にしてしまった。

「ねえ、私が卓くんの彼女になってあげよっか？(*^ - ^*)」

「な・・・(- - - ；)」

このときの卓くんの驚いた顔はまさに傑作w コミックに出てくる変顔そのもの。

「冗談だよ冗談。安心して。私、彼氏は年の差5歳までって決めるからw」

そう言つと、固まっていた卓くんは本当に安心したようだ。

「あーびっくりした(^□^；A 突然いずみに彼女宣言されても

「さあ」

「元ムスメだしねw」

「あのさ、何か相談があるなら遠慮はいらないよ。わざわざ来てくれたからには何か話することがあるんだろ？」

ウツ！Σ（・”・）するどい！さすが大人。

でも私はもう少し別なことで話題をそらせた。

「私、今受験生なの。だからさ、卓くん私に勉強教えて」

「ええっ？（。〇。；）僕が？」

「うん」

「いずみは塾に行っていないのかい？」

「うん。ママには頭の良い友達と一緒に勉強するから、塾は行かなくてもいいって言ってるの」

「それホントの話？」

「ウソに決まってるじゃん」

「（（ノーωー）ノバタツ」

「ねえ、だからお願い。成績下がったらママにバレちゃうもん」

「だってここまで来るの遠いだろ？」

「バスで来るから平気だよ」

「（・へ・）うーん。。どうしたものか。。」

そのとき、お風呂の窓の外の前を人が通り過ぎる音がした。

「シッ！静かにっ！となりの人が玄関から出てきたんだ。小声で話そう……てゆうか、もう部屋の匂いも消えた頃だから戻ろうよ」

「うん。そうだね」

そう言っつて、卓くんはすぐに立ち上がったけど、正座していた私の足はしびれて動かなかった。でもそれに気づいた卓くんがそつとしゃがんで肩を貸してくれた。

「さあ、ゆっくり立ち上がるよ。無理だったら僕の背中にそのまま

おんぶして」

さすがにそれはちよつと恥ずかしいので、私は自力で立ち上がりかけた。

けど、卓くんの肩に手をかけたままバランスを崩してしまったため、卓くんまでよろめいて、私のしびれた足の上に卓くんの足が乗ってしまった。

「あああああああん！」

つい大声を張り上げた私（ - ；

「ご…ごめんごめん。大丈夫かい？」

「なんとか。。」

「ヤバいなあ…聞かれちゃったかなあ…勘違いされなきゃいいけど。
。 ^ | ^ ;」

（続く）

その3 マンツーマン

その3

マンツーマン

次の日もいずみはやって来た。本当に僕の家毎日通うつもりなんでしょうか？

昨日と今日は土日だから僕も時間があるけど、平日はどうするつもりなんだろう？

「卓くんすごい！」

「なにが？」

「だって、今日部屋臭くないもん」

「はは…（；） “ほのかに薫るファブリーズ” っていうのを買って来たんだ」

「ほのかにしては随分いい香りするよ？」

「なんか全部スプレーしちゃったみたいなんだ」

「（ノ——）ノコケツ！す…卓くんそれやりすぎ（^—^；）」

いずみはしっかりと教材を持って来ていた。

本当に目的は僕に勉強を教わるためだけなのかな？

いや、そうじゃない。何か別にある。きつとある。

昨日は僕から聞いてもうまくはぐらかされた。いずみの方から話してくれるまで待とう。うん、そうしよう。

「こんなに早く来るとは思わなかったよ。まだ10時だし」

「卓くんが空き缶拾いに行っちゃったら困るもん」

「あはは、そういうことか」

「わかんないんだけど、何であんなことしてるの？」

「ん？それは…何て言えばいいのかなあ。いずみに言うのもなあ。。」

「あのホームレスのゲンさんと友達なの？」

「トメさんだよ（＾―＾；）」

「（　　；）ゝあ、そうだった？私の中ではゲンさんもトメさんも同じだからw」

「アハハハ。なんとなくわかるよ」

「で、どうしてなの？」

「たいした理由じゃないんだ。人のために何かをしてたら、自分に運がついてくるんじゃないかと思ってね」

「ふうん。それって風水？何かの占いに書いてあったとか？」

「何かにテレビで観たんだ。独りよがりな人間より、世の中や人のために尽くす心のある人に健康運や金運もついてくるって」

「へえ…じゃあ私も卓くんが公園に行くとき手伝おっかな」

「それはいいよ。いずみは受験生だろ」

「そうれもそうだね。じゃヤメたw」

「はやっ（ノ――）ノコケッ！」

いずみは小学生の頃からハキハキしてるところは変わらない。

物おじしないところは、将来社会人になったら有望かもしれない。でも何より嬉しいことは、別々に暮らして何年も経つのに僕を頼って来てくれたこと。そして対等に話してくれること。

理由はどうであれ、そんないずみがとても可愛く思える。勉強くらしいいつでもわかる範囲で教えたくなる。

そんな思いから僕は、テキストを開いて準備をしているいずみの顔を見つめていた。

さすがゆりかの子だけに、輪郭の整った顔立ちで色も白い。

でも顔の部分的なパーツは、探偵の茜崎さんにどことなく似ているような気がする。

どうやらそんな僕の視線にいずみも気づいたようだ。

「ちょっと卓くん何見つめてるの？キモチワルイ！」

ぐはっ！言われてしまった（＾□＾；A

「いや、しばらく見ないうちにいずみも大きくなったなあと思ってさ」

「ああ、大人がよく言うセリフだね。私どうリアクションすればいいかわかんない」

「いや別にリアクションはいらないよ」

「卓くんは昔と全然変わらないよね。公園で見たときすぐわかったもん」

「そうかい？若さを保てて良かったよ」

「てか卓くん、最初から老け顔だし。今も一緒だよ」

「（ノ―ω―）ノバタツ：そういうことか。」

しばしの間、僕たち二人は勉強に勤しんだ。

人に勉強を教えるのはいずみが小学3年生以来だ。

少し心配だったけど、中学生の問題までなら、なんとか記憶を呼び覚ましながら教えることができた。

「あれ？知らないうちにもう昼になってたのか。いずみお腹空いたる？」

「うん」

と言ったものの、うちにはラーメンのストックしかない。いずみに評判を落とされないためにも、ここは喜ばれることをしなくては！

「ピザ食べる？」

「えっ？（。〇。；）そんなのあるの？」

「宅配ピザだよ。好きなもの頼んでいいよ」

「／＼、／＼、わい、やったああ」

（・・・）むふふ、たまないわ、いずみに喜ばれるこの優越感。

よしっ！いずみを目標の高校に絶対受からしてやるぞっ！

（続く）

その4 いずみのやるせなさ

いずみのやるせなさ

私が学校から帰ると今日もリビングが散らかっていた。もちろん妹の“ひなた”がしたことはわかっている。

最初のうちはママや私もすぐに片づけたけど、最近はそのまんま。あとでまとめて一気に掃除するって感じ。

テーブルにメモ書きがあった。

ママはひなたと一緒に夕飯の買い物に行ったらしい。

私は見慣れた汚いリビングを気にもとめず、ソファに横になった。

4歳のひなたはよくヒスを起こす。

お気に入りの玩具で遊んでいても、急に叩きつけて壊したり物を投げたりする。

幸い、お皿だとか食器のような割れ物は投げないから今のところ助かっている。

でもこんなことが毎日だと、片付けするにも気がめいる。

そんな時、私と5分違いほどで英之のお父さんが出張から帰宅した。私はすぐにソファから起き上がった。

そう、私はこの義理の父親を“英之のお父さん”と呼んでいる。

さすがに卓くんのように、英之くんとは呼べない雰囲気があった。といって、パパとも呼べず、単純にお父さんとも言えなかった。

私個人的には呼び捨てにしたいくらいなんだけど、一応養ってもらってる手前、顔をたてて名前のあとにお父さんを連結させて呼んでやってるのだ。

でも心の中ではいつも“英之”としか言わない。

「随分散らかつてるな。いずみ、片付けなさい」

いつもなら夜9時過ぎまで帰って来ない英之なのに、出張の帰りの汽車が早く着いたのかどうか知らないけど、こんな夕方にもならない時間に家に戻るのは予想外だ。

「あとでするから」

「あとにすると絶対しないからダメだ」

「いつもママと夜にやってるもん」

「ママに負担をかけないように、いずみがやればいいだろ！」

全くウザい義理のオヤジになった。たまたま早く帰って来たからって、ママと私のペースを乱さないでほしい！

ママと結婚したときは私にも優しくかったのに。今に思えばあのときがウソのよう。

「だって、これみんなひなたがやったんだよ」

英之はムツとした目で私を見た。

「いずみはひなたより何歳年上のお姉ちゃんなんだ？妹のしたことはいずみがフォローしなきゃダメだろ！」

こんな理不尽なと言われると普通誰でもこう反論したくなると思う。

“自分のしたことは自分でやらせるのがしついてもんでしょ！”と。

でも私はずっとその反論ができないでいた。それは英之が口癖のように言うセリフ。

「ひなたは耳が聞こえないんだから苛立つのは当たり前だ！まだ子供なのに大きなストレスをためてるんだ！ひなたの身になって考えてみる！」

これを言われたら一言も返せない。

それに私もひなたが可愛い。難聴の妹に厳しいしつけをするのにも抵抗がある。

ママもひなたのしつけには甘い。理由はわかってる。

ずっと前に、ママが泣きじゃくりながら英之と話してるのを聞いたことがる。

ママは、生れつき耳が聞こえないひなたを産んだことに、ショックと重大な責任を感じているのだ。

そのことで英之も私によく説明する。

「今のママは精神的に弱っているから、些細な注意でも神経にさわる。だからこそ、いずみがしっかりとひなたの面倒を見なきゃダメなんだぞ！」

そんなのわかってる。ホントにうつとうしい義理のオヤジ。

第一、自分はどうかなのさ？仕事はできるかもしれないけど、家事や育児は全くしない。

だけどひなたは英之が大好き。そして当然だけどあのオヤジはひなたを溺愛してる。

仕事から帰るとすぐにひなたに満面の笑みでだっこする。

他の大変なことは何もしないくせに・・・

それにひなただけを可愛がる。ひなただけにしか優しくない。そう・・・ひなたが産まれてからというものずっと。

私は無言で片付けをして出かける準備をした。

「どこへ行く？」

部屋着に着替えた英之が私に聞く。

「友達の家で受験勉強しに行くの」

「そんなの一人でするもんじゃないのか？」

「秀才の友達に教えてもらってるの」

「ふーん。」

もう、こんな空気の家やダ！早く卓くんのと一緒に行こう。」

（続く）

その5 恥ずかしいお話

恥ずかしいお話

夕方6時。僕はトイレにしゃがんでいた。お腹の具合がいまいち悪い。

最近は食べるものにも気を遣ってるつもりだ。

もう僕も年齢的には30半ばだし、体の健康のためにも最近食べるカップ麺は、こつてり系のとんこつラーメンから、さっぱり系の鶏がら醤油ラーメンに切り替えた。

それなのに一体どこがいけないんだろう？

それでもトイレの便座にじっと座っていると、徐々にお腹の痛みはうすらいだ。

『どうやらやっと落ち着いたようだし、そろそろトイレから出よう』

そう思ってペーパーを手で手繰り寄せようとするところ……

「Σ―11（；）――1しまった！ペーパーがないっ！！」

そう気づいたところで後の祭り。代用品なんて何もない。

ただし茶の間には、先週ドラッグの特売で買った12ロール入りで158円のトイレットペーパーがあるのはわかってる。

ということは、当然ながらこの状態のまま、僕はそこまで取りに行くさだめにある。

『ま、いいか。誰かに見られるわけじゃないんだし……』

僕は下着やズボンを下ろしたままトイレの外へ出た。それが大きな間違いのひとつ。

特に、目の前が玄関だったのが災いの元。

なんとそこに絶妙なタイミングでいずみが入って来たのだ。

「卓くん何のマネ？（……………）」

「わーっ！（ノ　　ノ）」

僕はすかさずUターン。でもズボンを下ろしたまま自由に歩行できるはずもなく、慌てるあまり前につんのめって転んでしまった。最悪だ・・・これでいずみは完全に僕を軽蔑する。。

と、一瞬思っただけど、ところがどっこい、それは僕の思い違いだった。

「アハハハハハ（――）ミ　　バンバン」

いずみが笑い転げている。これは軽蔑されるよりはよっぽどマシなこと。

ドン引きされたらもう会話すらできない。なんか少し救われたような気がする。

とりあえず僕は態勢を立て直し、再びトイレにこもった。

トイレの外からいずみの声。

「ああーおかしかったw卓くんのドジは今も変わってないんだね」

「ごめん。とんでもないとこ見せちゃって」

「いいよ。私しか見てないんだから」

「軽蔑した？」

「してないよ。卓くんは私の家庭教師じゃん。頼りにしてるんだよ」

『な…なんていい子なんだ。（。ー）ホロリ』

「私も15だからね。小3のあのときより少しは大人になったの」

「小3のときって？」

「あのととき、卓くん私の参観日に来てくれて、教室で思いっきりオナラしたでしょ。あのとときはマジでむかついたからね」

そうだ。思い出した。あれからしばらくいずみと口もきかなくなつた期間があつた。

「でも今は違うよ。それが卓くんだもん。ドジのひとつもしない完璧主義者って私、窮屈でいやなの」

「そ…そっか。なんか安心したよ。ありがとういずみ」

「何でお礼言うの？おかしな卓くんw」

「ハハ…^|^」

僕はいずみの言葉に引つ掛かりを覚えた。

“たしか是枝くんはミスのしたことのない完璧主義者だった。つてことは…”

「ねえ卓くん、なんであんな格好でトイレから出てきたの？」

いずみの声にハツと我に返る僕。

「あ、そうだった。いずみに頼みがある。茶の間にトイレトペーパーがあるから持って来て欲しいんだ」

「なんだ。そういうことだったんだ。じゃあすぐ持って来るね」

「ありがとう」

「卓くん、玄関の戸じまりはしっかりしてなきゃダメだよ！」

「はい…すいません。」

1分、2分、3分が過ぎても、いずみがペーパーを持ってやって来ない。見つからないのだろうか？僕は少し大きめの声で呼びかける。

「いずみーっ！どうしたーっ？」

するとすぐに反応があつた。

「卓くん、この電動マッサージチェアどうしたの？」

「ああ、それハガキの応募で当選したんだよ。届いて開けたばかりだったんだ」

「ちよつと…痛いよこれ…」

「あわわ（；）もう使ってんのかい？」

「うん」

「それ、いろいろ微調整できるから僕がやってあげるよ。だから早く紙持ってきて」

「あ、そうだったね（；）今行くよ」

いずみからペーパーを受け取って、なんとか事なきを得た。

僕は自分ひとりできるときより、人と接したときにドジが発生する。

まさにこれが典型的な例。マッサージチェアが当たった運の良さもあるのに、ドジ運も同時に存在しているこの不思議さ。

そしてこの日の些細なトラブルはこれだけでは終わらなかった。

（続く）

その6 噂の渦中

噂の渦中

ペーパー事件は一件落着いたものの、神様は僕にホツとする時間をくれなかった。

トイレから出るなり僕を待っていたのは、同じアパートに住んでいる“噂大好き人間”の梅田さん。

50代半ばのオバサンのように見えるけど、僕も老け顔だから決めつけはできない。でもたぶんそうだろう。

さすがに常識はあるらしく、玄関のドアのカギは開いていても勝手に扉を開けたりせずに、外から声で僕に呼びかけていた。

うちにチャイムがないのも問題だけど――

「森田さん、回覧板ですよー」

「はい、今すぐ」

僕が玄関の扉を半分だけ開くと、その隙間から体をコジ入れるように梅田さんが割りこんで入って来た。いかにもオバサンらしい。

「森田さん森田さん、ちょっとあなたの噂を耳にしたんだけど？」

「ええっ？僕のですか？」

「そうよ。てゆうか、あなた今トイレから出て手を洗ってないんじゃない？」

「あ、いけね……」

「ヤダわあなた！そのまま私に触らないでね。回覧板の端っただけ持ちなさい」

「はあ、すみません（ - ；」

僕はつまむように回覧板を受け取った。

「それであなたの噂のことだけ聞きたい？」

この梅田さんに聞きたくないと言っても無意味だ。なんせしゃべりたくてしょうがないわけだから、どう返事しようと結局は話してくれるのだ。

「あなたが未成年の女の子と付き合ってるって噂よ」

（へ　；　）うつむ…なるほどやっぱりそうきたか。なんとなく予感してたんだ。

僕はきっぱり否定する。

「それはないですよ。僕が若い子になんてモテるはずないです」「そうよね。誰が見てもそうよね。だから私も驚いちゃったのよ」「ちよつとム力ついたけどそれが事実だからしょうがない。

「でもね、向こう隣の奥さんがね、森田さんのお風呂の窓の前を通り過ぎたときに、女の子の声を聞いたって言うのよ」

Σ（「□」；！！）やっぱりあのとき聴かれてたのか！！

「絶対私が言つたつて言わないでね？いい？」

「も、もちろんです」

「私はあなたのために思って、教えてあげようと思って来たのよ」「そんなわけないだろうけど、一応お礼は丁重にしておいた。

「はい。わざわざありがとうございます」

「で、ホントのところはどうなの？お風呂場でしゃべってたのはあなたなの？」

「どうって…その…風呂場では僕も独り言しゃべってしまふときってありますから…」

「そ、そうよね。でも…でもよ。決して私はあなたを疑ってるわけじゃないけど、隣の奥さんが言うには、女の子のヨガリ声っていうのかしら？やだわ私ったら、こんなハシタナイ言葉使って。隣の奥

さんの言葉だと思って聞いてね」

「はい…わかりました（＾―＾；）」

「それでうめき声のようにも聞こえたって言うのよ」

「――」ヤバ…いずみのしびれた足を踏んだときだ。

「まさか森田さん、少女を買春なんてこと…？」

「と、ととんでもない！してませんよそんなこと絶対！」

「そうよねそうよね。わかるわ。うんわかる。当然よ。私は信じるわよ。私はね。向こう隣の奥さんがそう言ってたものだから、ただそれだけのよ」

とその時、奥の茶の間から僕が凍りつくような声が。　（　・　；

「卓くん、早くうゝ！もつと気持ちよくしてえゝ！」

・・・（―――）いずみ…

「森田さん何なの？今の」

「いや、知り合いの子が来てて…」

「卓くん、痛いよおゝ！」

Σ――（　・　）―――ゲツ！最悪だあゝ！

「森田さん、まさかあなた少女を監禁してるの？！」

「だから違いますって」

「違うも何も中に女の子がいるじゃないの？」

「じゃあ中にあがって確かめて下さいよ」

「いやよっ！怖いわ！私にも何かする気じゃないでしょうねっ！？」

「いえいえ、興味も何もないですよ」

「なんですって!!」

「いやその…なんてゆうか(^ □ ^ ; A」

(; - -) 〓 3 ハア…弱ったなあ全く。

『ねえオバサン、それって自意識過剰じゃないの?』って言いたいところだけど、もちろん言えるはずもない。しかしこのまま帰られても大変な噂になりそうだし、警察沙汰にもなりかねない。なんとか理解してもらわないと。

「卓くん、何してるの?あ、お客さん?」

「いずみがひよっこり玄関に出てきてくれた。」

「あらま、お譲ちゃん。あなた大丈夫?何ともないの?」

「え?...ちよつと調整が強すぎて痛かったですけど?」

「んまあ!やつぱり。」

「いずみ...(^ - ^ ;) そんな間接的なこと言っても理解してもらえないだろ?」

「は?」

いずみは僕と梅田さんの表情を交互に見て、どうやら事の事態を察知したようだ。

「ああ、わかった!そういうことね」

いずみは梅田さんの方を向いて笑顔で答えた。

「おばさん、心配ないですよ。卓くんは私の家庭教師なんです。私、受験生なので毎日勉強教えてもらってるんです」

「それ、言わされてるんじゃないでしょうね?」

「梅田さん頼みますよー(- - ; さつきは僕のこと信じてるって言ってくれたじゃないですかー」

「だって、家庭教師なら普通、親御さんのいるこの子の家に行くのが常識つてもんでしょ?何でこの子があなたの家に来るの?」

「それはその…」

すぐに答えられない自分が情けない。でもいずみがすぐにそれを力
バーしてくれた。

「親戚なんです。私が子供の頃からお世話になったおじさんなん
です。ずっと仲良くさせてもらってるので、卓くんと呼び捨てにし
てくれるんですよ」

い…いずみ。(。ー)ホロリ

僕はいずみの機転の良さに感激と感動を覚えた。ホントに頭の回
転のいい子だ。梅田さんもどうやら納得してくれたようだし。

「あらそうだったの。お譲ちゃんがそこまでニコニコ言うなら…お
芝居にも見えないしねえ。でもあなた、お風呂もここで入るの？」

(。。(。 ドキッ！ヤバい質問。

でもいずみは動じなかった。

「はい。部活で汗をかいてくるので、ここのお風呂を貸していただ
いてます」

「なるほどね…じゃあもうひとつ。さっき奥で気持ち良くして…と
か痛い…とか言ってたのは何？」

いずみは少し頬を赤らめた。

「聞かれてたんだ…(*^_^*)えと、あれは電動マッサ
ージチェアです」

「あらま。森田さん、そんな良いもの持ってるの？」

「はい。ハガキで応募して抽選で当選したんです」

「んまあ(。O;)ひょっとしてテレビでやってるあのクイズ番
組の？」

「そうです。それです」

「私も20通ハガキ出したのよ。それなのにカスリもしないわ！あ
なた何通出したの？」

「1通です」

「（ノ——）ノコケッ！」

「あの…梅田さん、たまに貸しますので、遠慮なく言ってください」
僕がそう言った瞬間、梅田さんの表情が一変した。

「えっ？いいの？嬉しいわぁ。じゃあ遠慮なくそうさせていただくわね。今夜から」

「はやっ！…い、いいですよ。どうぞお気軽に^|^」

「今夜が楽しみだわぁ」

「喜んでもらえてうれしいです（ - ；」

「そういうことならまあ…色々と事情を聞くと話のツジツマもちやんと合うし、何も問題はないようね」

「どうもご心配おかけして申し訳ありません」

「いずみは深々とおじぎをした。その態度に梅田さんも気をよくしたようだ。」

「しっかり勉強するのよ。隣の奥さんには私から事情を説明しておきます」

「は、はい。よろしく願います！」

僕も一礼して梅田さんの退出を見送った。

なんだか知らないけど、これから先もまだまだ波乱含みな展開になりそうだ。

（続く）

その7 雨の日の憂鬱

雨の日の憂鬱

卓くんのとこに通い初めてから1か月。毎日ここで過ごすのがとても楽しい♪

家にはママとひなたがいるけれど、英之がうつとうしいから気が滅入る。

昨日の夜に言われたセリフだって、いやみにしか聞こえなかった。「いずみは良い子だよな。塾に行かないからお金もかからないし助かるよ。ハハハ」

このハハハと言う笑いが私をいかにも小バカにしている。

「いいか、だから絶対に私立だけは行くなよ。高くつくからな。レベルの低い高校でも構わないから絶対公立だぞ！」

こんなことをいつもママがちよっと席をはずした隙に言う。

英之は会社では本部長。そして取締役役員でもあるから、それなりの高い給料はもらってるはずなのに、こんなお金にケチな話しかない。

つまり、私のために使うお金はもったいないと思ってるんだ。

私は英之にとってはどうでもいい存在。実の子のひなたと私を見る目が全然違う。

でもママには言えない。ママには心配かけたくない。言ってしまうえばママの精神状態を破壊してしまいそうで怖い。

英之も私がママにチクれないことを知ってる。それをいいことに徐々に私を邪魔者にしていく。

もうこんな奴、大嫌い！私は高校を卒業したら家から出て上京するんだ！

どうせ英之だって私がいなくなることがお望みなんだから。

「いずみ？どうした？何か考えてる？」

「φ（。○。；）ハッ」

卓くんの前でテキストを広げていながら、知らずのうちに回想していた。

「ごめん。何でもない」

「…今日のいずみは何だか元気ないね。どっか体の具合悪い？」

「うん。平気だよ。さっきバス停から走って来たから少し疲れちゃったかも」

「ああそっか。途中で雨が降って来たからだね」

「うん」

「濡れたから寒いんじゃないか？」

「少しだけね」

「じゃ今日の勉強はこれくらいにしよう」

「え？でも…」

「集中力のないときは何をやっても無理さ。あとはテレビでも観ながら少しゆっくりしていきなさい。帰りは車で送ってあげるから」

「（「」；）えっ？ウチに来るの？」

「家の近くまでだよ。いずみのママやパパにばれないように帰るから」

「うん。ありがと卓くん。じゃあその前にちよつとシャワー使わせてもらえる？」

「いいけど着替えとかあるの？」

「実は持って来てるんだ。今日は最初からシャワー借りるつもりだったの」

「（「へ」ん？またなんで？」

「家に帰るといつも英之が長風呂してるから入れないの」

「Σ（「□」；？いずみは是枝くん…お父さんのことを呼び捨てにしてるのかい？」

「そっだよ。でも本人の前では言わないよ。私そんなバカじゃないもんw」

「（＾|＾；）アハハ。。そっか。」

卓くんは何かを感じたかもしれないけど、何も聞いてはこなかった。

根掘り葉掘り聞かないのが卓くんの思いやりなのかもしれない。

雨の音が微妙に耳障り。

あゝあ、こんな日ってなんで憂鬱なんだろう…

（続く）

その8 らしくない家庭教師

らしくない家庭教師

家庭教師。聞こえはいいけど僕は人に教えるほど優秀でもない。そりゃ小3のときの勉強くらいは見てあげたけど、中3の受験勉強となるとそんなに甘くはない。

幸い、いずみは元々頭が悪いわけではないから、僕が何もかもある必要はなく、その点では助かっている。

それにしても先生でも何でもない僕に、いずみはよく毎日通って来てくれる。

本当に不思議でならない。是枝くんの稼ぎを考えると、塾へ行くお金には不自由するはずがないのに。

家庭に何か問題がでもあるのだろうか？僕がそう思ったところで余計なお節介だし、何かできるわけでもない。

今日もいずみは途中のコンビニでおにぎりと飲み物を買って来ていた。どうやら毎日弁当代はもらってるらしい。

いつも夕方4時頃から勉強を始めて、6時半になると食事タイムにしている。

本当はそこで終わりにしてもいいのだけど、いずみがその後もまだ勉強したいと言うので、8時過ぎまで延長する。

当然帰りは真っ暗で、そんな中を中学生の女の子ひとりを帰すわけにも行かず、僕が是枝家のすぐ近くまで車で送るのが日課になった。

いずみがおにぎりを食べている間、僕は洗濯機に洗い物をぶち込んで回している。

「卓くんも一緒に何か食べたらいいいのに」

「いいんだ。僕はやるべき作業を全て終えてからじゃないと、食べる気がしないんだ」

「夜遅く食べると太るよ。いつも何時に食べてるの？」

「んと、いずみを送って帰って来てからだから…9時半頃かな」

「・・・そうなんだ。ごめんね。」

「いやいやいや、そんなの気にしないでいいから。普段でもそのくらいだから」

「おにぎり半分あげよっか？」

「いいってば。いずみは食べざかりなんだから遠慮しないで食べなさい。受験生は体力だって必要なんだよ」

「…うん」

「でもどうしても僕にくれるって言うんなら、その焼きたらこをもらおっかな？」

「焼きたらこだけは絶対やんないよーだ（´・`・´）」

いずみが買ってくるおにぎりは毎日2個。そのうち1個は必ず焼きたらこ。もう1個の具は毎日バリエーションが違う。

「焼きたらこが大好きなのは小学生の頃から変わらないんだな（〃

・m・）ウププ」

「卓くんそんなこと覚えてたんだ？なんか恥ずかしいなあ（*^

・^*）ゞ」

軽い食事タイムと延長授業が終わり、次なる時間はこれも定例になったいずみのシャワータイム。着替えも毎日準備良く持って来るのが習慣になっていた。

僕はその間に、脱水が完了した洗濯物を干し、前日に干して乾いた衣類やタオルを取り込む。

そのとき、ふと気づいた。

「あれ？バスタオルがない。脱衣室に置いてきちゃったのかな？」

僕はいずみに気づかれないように、そっと風呂場のとなりにある

「卓くん、私のスカート見当たらないんだけどー？」

ガ ΣΣ(。D；) ン！！

これはごまかしきれない。話がこじれたら大変だ。正直に謝ろう。

「ごめんいずみ。んと…その…いずみのスカートでこぼれたお茶拭いちゃったんだ」

「ええっ？(。O。；)なんでぞうきんとかタオル使わないの？」

「うちのバスタオルといずみのスカートの柄が似てたんだよ」

；

「(ノ――)ノコケツ！何でそんな柄のタオルなんてあるのっ！？」

「去年のお歳暮のもらい物なんだ。チエック柄のタオルでさ」

「(・T―T)うう…私、下着の替えしか持って来てないよお」

「ごめーん。僕のジャージ貸してあげるから間に合わせに履いてくれる？」

「いいけど…臭くない？」

「洗濯してるから大丈夫だよ(^―^；)」

こうしてシャワーから上がったいずみのジャージ姿に驚いた。

「卓くん、ヤダこれ。ジャージの丈が短いよお(；へ；)」

「い…いずみの足が長すぎるんだよ」

さすがゆりかさんの血を引く娘。八頭身美人とはよく言ったもの。

「帰ったらママに何て言えばいい？」

「友達のジャージ借りたって言えば？」

「私の友達、こんなダサイジャージ持っていないもん」

「そりゃごめんよ(^―^；)」

「まあ、なんとかするよ。たいしたことじゃないから」

僕は内心ホッとした。最近、爽と鬱の日がはっきり分かれている
いずみ。

めちゃくちや怒られるかと思ったけど、案外ケロッとしてくれて
本当に助かった。

もうこんなドジは二度としたくないんだけど…

やっぱり無理かもなあ。。。 (^ □ ^ ;

(続く)

その9 卓くんのラーメン

卓くんのラーメン

英之にバレた。私が友達の家に行つて勉強してないことを。

友達とは口裏を合わせておいたのに、まだ私の考えが甘かった。

英之は、ママから聞いた私の友達の家に電話をして、あちらの両親にお礼を言つたそうだ。当然、私がそこにいるわけもなく、英之は事の次第を知り、卓くんの家から戻つた私を問い詰めた。

もちろん、ママには聞かれないうちに、そつと私の部屋にやつて来てのこと。

隠してもしょうがないから、英之にイヤミのつもりで正直に言つてやろうと一瞬思つた。でもそれはやっぱりまずい。

私はギリギリのところで踏みとどまつた。どうしてもママには知られたくない。

ママと英之は普通に仲がいい。ママは英之の冷酷さを知らないから。義理の子の私への仕打ちを知らないから。

今、精神的に弱っているママを悩ませることはできない。英之の仕打ちも、卓くんちで勉強してることも、絶対言つべきでないと私は心に誓つた。

「私、ママや英之のお父さんに迷惑をかけるようなことは絶対してませんから。高校も希望の学校に絶対うかりますから！」

この一言だけで、それ以降、私は貝のように口を閉ざした。

私が頑固なのは英之もよく知っている。これ以上聞いても無駄だと悟つた英之は、

「勝手にしなさい！希望の高校へ入れなかつたら学費は自分で稼いで行くことだ！」

と、捨て台詞を残して部屋を出て行った。

今日も卓くんの家に来て集中力がない。昨日のことが頭の片隅で引きずっている。

「どうしたいずみ？集中してないみたいだね？」

やっぱり卓くんにもバレた。

「ちょっと…色々あつて…」

「…じゃあ今日はこのくらいにしとこうか？」

私は自分に言い聞かせるつもりで首を横に振った。

「うつん。やるよ。こんなんでしょっちゅうやめてたら受験なんてできないもん」

「そっか…よし、じゃ頑張ろうな！」

「うん。卓くん、私にもつと気合入れてくれていいんだよ？」

「いや、そう言われてもねえ（^^ゞ僕はそんなタイプじゃないんだ」

「じゃどんなタイプ？」

「そんな自己診断なんてできないよ。でもね、僕は今まで人から気合を入れられると、余計に緊張して失敗しちゃうんだよ」

「あ、それなんかわかる」

「こう言っちゃご都合主義かもしれないけど、僕は誉められて伸びるタイプだって自分で思ってるんだw怒られると委縮するんだ。まあ腰抜けと言われたらそれまでだけどね」

「卓くんの腰抜け！」

「あら（ノ——）ノコケッ！」

「あは（*^ハ*）冗談だよw じゃあもうひと頑張りするね！」

やればなんとか知らないうちに集中していて、気づけばいつも定時の食事時間になっていた。

そこで私のうつかりミスが発覚。そう、それはコンビニに寄っていつものおにぎりを買って来るのを忘れてしまったこと。

昨日の英之とのことで頭がもやもやしたまま、ここに直行で来てしまったんだ。

どうやら卓くんもそれに気づいたようだ。

「いずみ、今日は食べるもの持って来なかったのかい？」

「え？…んとお…私、今日なんか食欲ないんだ。」

首をかしげる卓くん。

「ほんとに？」

「う、うん。だから先にシャワーして来るね」

私はぎこちなく立ち上がる。

シャワーしてる最中にお腹が鳴った。恥ずかしい…卓くんに聞かなくて良かった。

今日はこのあとすぐ帰って家でごはん食べようかな。

卓くんには体調が少し悪いって言えばいいよね。さっきも食欲ないって言ってるし。よし決めたっ！

脱衣室から出ると、とってもあったかそうな良い匂いが私の鼻をくすぐった。

見るとそこには、卓くんがちょうどラーメンをテーブルに運んでいるところだった。

「タイミングばっちりだね。いずみのシャワーの時間は規則的だから、ラーメンの出来上がる時間も計算しやすかったよ」

「卓くん。」

「あったかいうちに食べなさい」

「…でも私…食欲が。。」

「うん。わかっているわかってる。でもあっさり味の塩ラーメンだよ。ツルツルっと食べれるさ。僕も昔より進歩したんだ」

「進歩って？」

「ちゃんと野菜も…ほら、ほうれん草も入ってるし、メンマもナルトも海苔も入れたよ。しかもこれ見て！僕自慢の半熟味付けゆでたまごなんだ」

「うわ、すごい！卓くんの手作り？」

「そうだよ。昔みたいに素ラーメンはやめたんだ。体にやさしくて健康的だろ？」

「インスタントラーメンをやめた方がもっと健康的だと思うけど（
ー ^ ^ ; ）」

「あはは（ ^ ^ ）確かに。でも今日は勘弁して。さ、あつたかい
うちにどうぞ」

「・・・うん。。」

卓くんには見透かされていた。私が食欲ないなんて言っただウソを。私がつつと悩んでいたために、すっかりおにぎりを買って来るのを忘れたことを。

そしてこんな状態の私に、理由も何も聞かずにラーメンを作ってくれた。

私のために。。

ひとくちラーメンをすすった。

「おいしい。。」

たかがインスタントラーメンなのに、ものすごくおいしいと思った。本当に心の底からそう感じた。

「やっと少し微笑んでくれたね。いずみはやっぱり笑顔が似合うよ」

「やだあ…（ ^ ^ ）そんなこと言われたら恥ずかしいよ卓くん」

「ごめんごめん。食べづらいよな。じゃ僕は洗濯ものを片づけて来るから」

そう言っただ卓くんは隣の部屋に入って行った。

私はラーメンを食べながら思った。

そう言えば、しばらく家族みんなで一緒にごはんを食べていない。朝は食べないで学校へ行くし、昼はお弁当。夜は卓くんちでおいぎり。

私の家族って・・・なんかわからない。

卓くんも家族の一員に入れちゃいけないのかな。

卓くんは優しい。優しすぎるよ。

気づくと私は泣いていた。ラーメンをすすりながら泣けてくるのはなぜだろう？

卓くんのあつかたいラーメン。

おいしいのに。。こんなにおいしいのに泣くなんて。。

(続く)

その9 卓くんのラーメン（後書き）

評価ではなく、単にコメントや質問を頂ける場合はブログへお越し下さいませ♪ <http://blog.google.jp/millionhearts/>

その10 サ・ク・ラ・サ・ク

サクラサク

月日が流れて年も明け、いずみの受験も大詰めを迎えていた。いずみが僕のところへ来たのは夏休みが終わった9月頃から。本格的な受験勉強としては遅すぎるスタートだった。

これがもし春から始めていたなら、学習計画も立てやすかったのにと僕が勝手に思ってみても、いずみの事情だから仕方ない。

それにしてもつくづく思う。よくここまで家族にバレなかったものだ。

本当にバレてなかったんだろうか？ ゆりかさんが黙認してただけだとしたら？

いけね・・・また余計なことを妄想したところでどうなるわけでもない。

なんとか無事にこの時期まで来れたんだ。それだけでいいじゃないか。

そしていずみが高校に合格したら、もうここには来なくなるんだ。後ろめたい隠し事もなくなる。

勉強といってもこの半年、いずみはある程度、学習の基礎はできていたから教える苦労はさほどなかった。

そう思うと本当にいずみは僕を必要としてたんだろうか？

いずみなら、僕がいなくてもそれなりの成績はとれたはずだ。それなのにこんなド素人の僕なんかに…

そんな疑問をずっと抱いていた僕が、やっとのことでその答えを

いずみの口から導くことができたのが、つい最近のこの質問から。

「僕は今までいずみの役に立ってきたのかな？」

「え？卓くん何でそんなこと言うの？」

「だって、いずみは元々頭いいからさ。僕が教えなくっても別に良かったんじゃないかって」

「そんなことないよ。私、去年の期末で過去最高点取ったんだよ。卓くんとこに来なかったら無理だったよ」

「嬉しいこと言ってくれるね。でも僕にだってわからないところいっぱいあったのに」

「でも卓くんはそのままにはしておかなかったでしょ！」

「そうだけどさ…」

「卓くんはわからない問題でも次の日までには必ず調べて解決してたじゃない」

「そりゃ教える立場だつからそのくらいのことはしなくちゃ」

「そこそこ。そこなの。卓くんのいいところ。それに安心して勉強できたし」

「安心？自分の家の方がリラックスできるんじゃないの？」

「…うちは無理。自分の家では集中できないんだ」

「誰もいずみの勉強の邪魔なんてしないだろう？」

「それはないけど、勉強できる環境じゃないの」

「（・・）ン？わかんないなあ？家はデカいし、いずみの部屋だつて広いんだろ？」

「うん。10畳だったかな？たぶん」

「この茶の間より広いじゃん（・・）」

「そうだけど…部屋がどうのとかじゃなくて…」

「ん？なんだい？」

「私…私、英之が嫌いな。英之だって絶対に私を嫌いなはず」

「そんなことはないと思うけどなあ…」

僕はいずみが是枝君を呼び捨てにしているのに正直驚いた。

「そんなことあるの！私にはわかるんだ。だから家では息が詰まっ

て勉強できなかったんだもん」

「そんな…わが子が嫌いだなんて。。」

「私は英之の子じゃないもん。英之のわが子はひなた」

今まで家のことを何も言わなかったいずみ。

やはりこういう事情があったのか。。可哀そうに。。

そんな不安定な気持ちになる環境から逃れるためにいずみは僕の家を選んだってことなのか。

気づくのが遅すぎた。ほんと僕はトロクさい。こんな時期になるまで…

やっぱり僕がもっと早いうちに話を聞いてあげれば良かったんだ。プライベートな話をしていずみの気分を悪くさせてしまうことを警戒し過ぎた結果がこれだった。

3月中旬。公立高校の合格発表が一齐に行われた。

いずみは見事、希望通りの高校に合格。その一報は僕の携帯にメールで知らされた。

“やったよ！受かったよ！卓くんのおかげ。ありがとう♪”

僕は仕事の昼休みに返信メールをした。

“おめでとう。いずみが頑張ったからさ。いずみと一緒に勉強して過ごした時間はとても楽しかった。寂しくなるけど、高校生活頑張るんだよ”

僕は送信ボタンを押してケータイを閉じた。
終わった・・・これもひとつのピリオドだ。

。さて、明日は久しぶりに公園でトメさんの手伝いでしようかな。

そう思いを切り替えたところでメールの着信音が鳴った。

返信が来ることなんて期待もしてなかったのに、いずみは僕の予想をくつがえした。

“何言ってるのさ。また行くよ！今度は私一人じゃないかも？”
“……”

Σ（□）「な、なんて意味深なメールなんだろう。」

一人じゃないって、誰と来るつもりなんだ？まさか彼氏？
そんな子連れて来られても僕はどうしたらいいんだ？

おもてなしはラーメンしか出せないし。焦るー！（^□^）；A

こうして僕はまた、余計な先走り妄想に駆られるのだった。

（続く）

その10 サ・ク・ラ・サ・ク（後書き）

評価以外のコメントなどが頂けるのであれば、ブログの方へどうぞ
http://blog.google.ne.jp/million
hearts/

その11 新たな顔合わせ

新たな顔合わせ

英之の帰りが毎晩遅くなっていた。いつも帰りは酔って帰宅する。お酒飲まなきゃ仕事できないなんてバカみたい。

卓くんがラーメンを食べないと仕事ができないと言ってるのと同じだ。

でも私にとってみれば好都合。英之が1分でも家にいない方が気が休まる。

日曜も毎週接待ゴルフだの何だのって理由をつけて家にはいない。だから本来なら私は家でも外でも伸び伸びできるはずだった。

でも…その状況が少し変わってしまうことになった。

原因はおじいちゃんの入院。

ママの父親のおじいちゃんが入院したのは2月。

そのとき私はまだ受験生だったから、ひなたの面倒はママがみていた。

でもママの疲れもピーク。手のかかるひなたを連れて、ほぼ毎日おじいちゃんのところへお世話をしながらひなたの相手もするのは体力的にも無理。

だから受験も終わって落ち着いた頃、私自身からママに申し出た。「ママ、土日だけでもひなたの面倒は私がみるよ。ママはおじいちゃんに専念して」

「ありがたいね。そうしてもらえると助かるわ。じゃあひなたをお願いね」

か細い声のママ。相当疲れてるのがよくわかる。

それ以来、学校のない週末は毎週ひなたと家で二人。友達と遊び

にも行けない。

でもそれは私が言い出したことだから納得はしている。

そっだ！こういうときこそ卓くんとこに行こう！

本当はもつと早く行くつもりで、3月に送った卓くんへのメールにはそれとなく匂わせておいたのに、私自身が高校に慣れるまではと躊躇していた。

そっだよ。夕方までには帰って来ればいいんだもん。そうしよう！

私はひなたの手を引いて、ママと英之が外出した1時間後に家を出た。

ひなたは外が大好き。すぐくはしゃいで機嫌がいいから手をやかない。

ただ、ひなたはほとんど耳が聞こえないから、車にはもちろん、近づいて来る自転車やバイク、ジョギングしている人にも十分気をつけて私が守ってやらなければならない。

バスに30分の道のりを揺られながら無事に到着。

あとはすぐ前の公園を歩いて通過するとまもなく卓くんのいるアパート。

ふと公園の茂みにかがんでいたずんぐりむつくりのおっさんを発見。一目で誰かわかってしまうのがなぜか可笑しかった。

「卓くうくん」

私はまだ少し遠くにいる卓くんに手を振って叫んだ。

「ひなた、あのおじちゃんと一緒に遊ぼうね」

私が卓くんを指さすと、ひなたはポカンとした顔で卓くんを見つめていた。

「急に来るなんてびっくりしたよ。前もって言ってくれたら良かったのに」

「ごめんね。今日思いついたの。この子が妹のひなただよ」

「そうか、この子がゆりかさんと是枝くんの…」

「言っでなかったけど、ひなたに話すときは身振り手振りもつけてしゃべって。耳が聞こえないの」

「ええっ！（。〇。；）」

「だからそんなにびっくりしないで。ひなたが敏感に感じちゃうから」

「あ…ごめん。。」

「ほら、ひなただってびっくりした顔しちゃ…あれ？」

びっくりしたのは私だった。人見知りの激しいひなたが初対面の卓くんを見て笑っている。こんなの普通あり得ない」

「はじめまして。ひなたちゃん。おじちゃんと一緒にゴミ拾う？」

「卓くん、変なこと言わないで（^ー^；）でも今のジェスチャー良かったよ。そんな感じで話してあげて。勘のいい子だから4歳でもわかるの」

「うん、わかった」

「で、何でゴミ拾ってるの？前はペットボトルだったじゃない？」

「これはただのボランティアさ。ゴミの分別が厳しくなってから、みんなちゃんとペットボトルの回収容器の中に入れるようになったんだ。それは勝手に持って行けないからね」

「じゃあゲンさんの収入がなくなるじゃない？」

「トメさんだよ（^ー^；）」

「そうだったっけ？私にはどっちでもいいんだけど、その本人はどこにいるの？」

「今日はいないよ。駅の構内に行って、捨てられた雑誌とか集めるよっだよ」

「ふうん。いろいろやることあるんだね」

「ところで今日は何の用で来たの？ママに言っただけなの？」

「言うわけないでしょ」

「わけないでしょってことはないでしょ？」

「秘密だからしっかり守ってね！これから」

「これからって…まさか…」

「毎週来ることにしたの。ひなたと」

「ええええええ？（……）」

「いやなの？」

「そうじゃなくてさ、いずみが受験勉強しに来てたときもいつバレルかってヒヤヒヤだっただろ？」

「私は全然」

「僕はそうだったんだよ。やっといずみが合格してホッとしたところなのにさ。また秘密を作るのはちよつとねえ」

「だって、卓くんとか行って来るなんて言えるはずないじゃん。ママも英之もいよいよって言うと思う？」

「言わないだろうねえ——」

「でしょ？そういうことだからお願いね。そろそろ卓くんの家行くよ」

「う、うん…仕方ないしねえ。でもさ、何も御もてなしできないよ？」

「そんなの期待してないから安心して。ひなたのおやつも持って来てるし」

私は片手に持っていたおやつを軽く叩いた。

「ああ、それなら良かったよ。なんせ何もなかったからさああ」

「しみじみ言わないでよ」

「ハハ…じゃあとりあえず僕の家に行こうか。それにしてもひなたちゃんは人見知りしないんだね？」

「するよ。激しく。でも不思議なんだ。卓くん見て笑うなんて」

「純粋な子供は心の優しい大人がわかるのかもよ？w」

「自分で言わないのっ！きつと子供でもツボにハマるほど笑える顔

ってあるんだよ」

「僕はどんな顔に見えてるんだい？」 - ；」

「きつとアニメキャラだよw」

「まあ嫌われるよりいっか。ハハ。。さあひなたちゃん、おじちゃんちで遊ぼうね」

ひなたが卓くんを見てまた笑った。

ちよつと強引だったけど、卓くんならきつと大丈夫だと思っていた。

私の直感というほど大げさなものじゃないけれど、私やひなたを守ってくれるのは卓くんしかいないとこのとき思った。

根拠も何もないのに…

（続く）

その12 ターゲット発見

ターゲット発見

「兄貴、あそこでゴミ拾いしてるアホそうな男、やつちやいますか？」

公園近くの路上でたむろしていた少年グループ4人とそのリーダー格の男。

少年4人は、この町内と隣接する3つの町内も含めて、俗に“あいつら”と呼ばれて敬遠される不良グループ。

その中の一人が言い出した言葉に、兄貴分であり、リーダーの世^せ良^{らく}拓^{たく}真^まは苦笑した。

「おいおい、俺にまたすぐムシヨに戻れっていうのかよ」

「ハッ(。○;) すんませんっ！そんな意味じゃなかったっス」

「俺のせつかくの仮出所を台無しにすんなよ」

「申し訳ありませんっ！」

弟分は深々と頭を下げた。

「お前らまだホームレス狩りなんてやってんのか？ガキだなあ。たかが腹いせに金にもならねえオッサンをボコボコにしたところで何のメリットがある？」

「はいっ！その通りですっ」

弟分はリーダーの言葉に対して絶対に否定も言い訳もしない。

「わかったんならお前らもつと自分の目を養って頭を使え！」

「はいっ！」と一同。

「あいつを見てみる！ゴミ拾いはしてるが、服装はボロボロじゃない」

「さすが兄貴。やつはホームレスじゃないってことで？」

「サラリーマンだろう。毎日食うに困るホームレスがあんなに小太りなはずは……」

突然、世良拓真の目がその男一点に注がれた。

「兄貴、どうかしましたか？」

「あいつめ…こんなとこにいやがったのか」

弟分が不思議そうに尋ねる。

「もしかして兄貴の知り合いで？」

「…知り合い？…フフ、まあほんのちよつとな」

「はあ？」

「お前から先にゲーセンでもどこでも行ってる。俺は少し寄り道する」
「はいっ！ではお先ですっ！」

世良拓真は公園内に入ろうとゆっくり歩き始めた。

「あいつに間違いない！俺をコケにしてくれた野郎！逃げ切れたはずの俺を自転車を倒して邪魔した野郎！こんなところにいやがった

…」

拓真の形相が変わりつつあった。

ちょうどその時、路線バスが公園入り口前の停留所に停車して、中からいずみとひなたが降り立った。

彼女たちは、拓真の30メートルほど先を歩いて公園内に入って行く。

「卓くうくん」

不意に叫んだいずみに、少し遠くから見ていた拓真は驚いた。

「ん？顔見知り…か？」

拓真は立ち止まり、いずみとひなたが卓のそばまで行くのを木影から見届けた。

「親子？…じゃないよな？」

数分後、森田卓たちがこの公園から移動しようと歩き始めると、拓真も彼らのあとを気付かれないように尾行した。

そして卓のアパート前に来ると、3人が2階の真ん中の玄関に入るのを確認して、すかさずケータイを開く。

「おい、お前ら今どこにいる？ゲーセンに着いたとこだと？？そんなとこで遊んでんじゃねえ！一人だけすぐ俺んどこに來い！大至急だ！」

息を切らしながら弟分の“テツ”が息を切らしながら到着した。

「兄貴っ、どうしましたかつ？」

「おうテツか、お前さ、あのアパートの2階の真ん中見張っとけ」

「は、はいっ！」

「誰か出てきたらすぐに電話しろ。いいな」

「はいっ！兄貴は何か用事でも…？」

「俺？俺は近くのゲーセンにいる」

「（ノ——）ノコケッ！」

「じゃ頼むぞ」

こうして世良拓真は森田卓といずみ、ひなたをマークした。

「面白くなってきそうだといいいんだが。フッフ（ー）（ー）」

（続く）

その13 僕にできること

僕にできること

「ねえ、何で卓くんが“あやとり”なんてできたの？」

「なんでって聞かれてもねえ…でも結構覚えてるもんだなあ（^^
」

「子供の頃って女の子としか遊ばなかったとか？」

「まさか」

「だよな」

「納得するの早っ（^^―^^）」

「だって想像できないんだもん」

いずみとひなたちゃんを家まで送って行く車の中。

僕はいずみの疑問に答えた。

「それはね、僕が子供の頃にはあちゃんから教えてもらったんだよ」

「へえ、そうなんだ。卓くんのおばあちゃんはもう死んだの？」

「ちゃんと生きてるよ。田舎で畑仕事もまだしてるらしい」

「すごい元気なんだね。おじいちゃんは死んだの？」

「（-_-）あのねいずみ、その尋ね方が変だよ。死んだの？って聞くんじゃなくて、元気なの？とか長生きしてるの？とか言わないとね（^^―^^）」

「はい（-_-）」

さっきまでいた僕の家であやとりをしていたのは、ひなたちゃんに教えるため。

幸い、僕たちのやってる姿に興味を示したようで、じつとあやとりの行方を楽しそうに眺めていた。

「やってみる？」

と僕がジェスチャーで示すと喜んであやとりに手をかけた。

うまくいかなくてもかんしゃくも起こさないで何度もチャレンジするひなたちゃん。

すっかりあやとりに夢中になり、この帰り道の車の中でもひとりで自分の手に引つ掛けて遊んでいる。

「手のかからない子だね。ひなたちゃんは」

それに対していずみの意外な反応。

「それがびつくりなの。うちでは大声出すし、すぐキレるし、物は投げるし大変なんだよ」

「ええっ？（。○。；）そうなの？全然想像つかないなそんなの」

「私だってこんな楽しそうなひなた、想像できなかったよ」

なぜだろう？こんな無邪気な女の子が自分の家ではそんな状態だなんて・・・

むろん、耳が聞こえないハンデは大きい。ストレスも人の数倍かもしれない。

僕は思いついた率直な疑問をいずみに問いただしてみた。

「家ではひなたちゃんと遊んであげてないのかい？」

「いつもは無理だよ。私だって学校があるし、ひなたと遊んであげられるのは夜の1時間くらいかな」

「あやとりはしてた？」

「ううん全然。ひなたには今日が初めて」

「じゃ何してたの？」

「お絵かきとかぬりえをさせたり、たまにママごとしたり・・・」

「おとなしくできそうな遊びなのにね。ひなたちゃんの性格に合わないのかな？」

「そうかも。うまく絵が描けないとスケッチブックもぬりえもグチャグチャにするし、クレヨンも放り投げちゃうし」

「そっかぁ...でもゆりかママは遊んであげてるんだよね？」

この質問への答えはいずみの口が重かった。

「…うん、それがあんまり。ママ、ちょっと体調が悪くて…」
「え？まさか入院してるのか？」

「入院してるのはおじいちゃん。ママは毎日おじいちゃんの上に付き添ってるの」

「おじいちゃんが入院？それって源一郎おじいちゃんのこと？」

「うん。だからママ、疲れきっちゃって…」

「是枝くんはどうしてるの？」

「英之？あんなの全然ダメ。日曜でも接待とかでいつもいないし、ひなたと遊ぶのは5分か10分で、飽きたらおしまい。あと書斎にこもって出てこないんだ」

「そうだったんだ…それじゃひなたちゃんはストレス溜まるだろうなあ」

「やっぱり卓くんもそう思う？」

「うん。ろうあ学校みたいなどこには行っていないの？」

「そのつもりだったんだけど、ひなたがもう泣いて泣いて行かないの」

「うーん…人見知りが激しいのかな？」

「そうそう。それなのに卓くんには平気なんだから不思議でしょうがなかったよ。同類か同じレベルだと思ったのかもねw」

「さっきは僕の笑える顔がひなたにウケのかもって言ってたくせに

（ - - ）

「泣かれるよりはいいでしょ！」

「まあねw」

しかしながら、こんな事情を小刻みに聞かされると、いずみの家庭が決して円満ではないことがよくわかる。

僕にとって、元義父・須藤源一郎氏の入院。ひなたちゃんの聴覚障害。是枝くんの家庭放置。そしてゆりかさんの疲労と体調不良。でも僕がこの家庭に関わることはできない。ゆりかさんには何もしてやれない。

ただ、少しだけれど、間接的に何か手助けはできるかもしれない。幸い僕のところにいずみとひなたちゃんがこれから来てくれるようだし。

僕がこの子たちにしてあげられること…

特に障害を持つひなたちゃんをこのままにしてはいけない。

今の僕にできること。。。それは。。

いずみたちの家の近くに着いた。以前のように玄関の正面までは行かない。万が一、ゆりかさんは枝くんが帰宅していたら大変なことになるからだ。

「卓くん、ありがとう。はい、ひなたもお礼を言って」

ひなたちゃんはいずみに促されるようにわずかなおじぎをして、あやとりのひもが引つ掛かったままの両手でバイバイをしてくれた。

僕は二人を降ろしたあと、即効で本屋さんに向かい、お目当ての本を物色し、それに関するDVDも手に取った。

「よしっ！今夜から頑張らないと！」

そう、僕が手にしたのは手話の本。どこまでできるかわからないけど、僕はひなたちゃんのために頑張る！

人と対等に…人と意思の疎通ができるようにしてあげるんだ。。

(続く)

その13 僕にできること（後書き）

●現時点での今後の予定。

最終第3章は「その30」をメドにしております。

「その20」までのプロセスは決まっていますが、

その後は僕の心理的状況で、エピソードも変化する可能性あり（笑）
毎日更新できなくて申し訳ありませんが、どうか長い目で見てやって下さいませ。

その14 拓真の目的

拓真^{たくま}の目的

森田卓の車を追跡していたテツは、少し離れた路肩に自分の車を停車した。

「もしもし兄貴、例のアホづら男がガキらを車から降ろしました」

「そうか、家の前まで送り届けたんだな？」

「いえ、それが道端なんスよ」

「…ん？どういうことだ？」

「わかりません。でも家は近くに間違いないス！ここ結構すげえ家ばっかで…」

「すげえ家？」

「なんつかそのお…あちこちデカイ家ばっかで金持ちの溜まり場みたいなのこっスよ」

「つまり閑静な住宅街ってことか」

「そう、それっス！閑静閑静。それ言いたかったんスよ」

「ウソつけ」

「さすが兄貴。語学も達者で」

「それ語学って言わねえから」

「で、兄貴どうします？ガキらの家を確認めますか？」

「そうだな。どんな家が見ておけ」

「はいっ！男の方はどうします？」

「ほっとけ。奴の家はもうわかってるから意味がない」

「わかりました。またあとで連絡します」

仲間とゲームセンターからカラオケルームへと移動して指示を出す世良拓真。

歌うつもりなど毛頭なかった。ただ、第三者に会話を聞かれたく

ないことから個室のあるカラオケにしたのだ。

「兄貴、一曲どうです？」

「俺は飲んでるだけでいい。お前ら適当に歌っとけ」

「しかし、兄貴を差し置いて俺達が先に歌うってのはちょっと……」

拓真はグラスを置いてスゴみのきいた口調で言った。

「お前ら、俺がオンチなのを知っててバカにするつもりなのかっ！」
とたんにビビる弟分たち。

「すすす、すみませんっ。じゃ先に歌わせてもらいますっ！」

少年グループには絶対的な権力を誇る拓真だった。

10分後、拓真のケータイに再びテツから着信があった。

「もしもし兄貴、ガキらの家がわかりました。どうやら他の家族は

……」

「テツ、ちよつと待て」

拓真は持っていたグラスをテーブルに叩きつけて一喝した。

「マサ、静かにしねえかバカヤロー！いつまでも歌ってんじゃねえ
！」

「す、すみませんっ！」

歌うのをやめ、慌てて演奏を解除するマサ。

「よし、話していいぞテツ。どんな家だ？」

「思った通りデカイ家っす。金持ちには間違いないと思いますね」

「そうか。他の家族の姿は見たのか？」

「いえ、どうやらまだ帰って来てないようですね」

「どうしてわかる？」

「ガキ二人が家に入るまで、明かりがついてなかったんすよ」

「なるほど。さすがだなテツ。お前が一番観察力があるぜ」

「そりゃどうも（^^）じゃあ兄貴、俺そろそろここから離れて
いっすかね？」

「いや、親が帰って来るまで見張っとけ。その時間も忘れるな」

「（（；）ええ〜っ？」

「なんだイヤなのか？一生見張れって言ってんじゃねえんだぞっ！」
拓真の機嫌が明らかに悪いと悟ったテツもケータイの向こうで平謝り状態。

「申し訳ありません！全力でやりますっ！一晩くらい徹夜になろうと頑張りますっ！」

「1週間だ」

「……は？（……）」

「1週間、その家族の出入りする時間を全部調べろ」

「は、はあ……わかりました……」

弟分たちにはその理由さえも聞くことができなかった。

もちろん誰もが薄々は気づいているが、口に出す者はいなかった。

「面白くなって来そうだぜ。一石二鳥かもしれん」

拓真の機嫌が少し良くなったと判断したマサが、丁寧に話しかける。

「兄貴、もう1杯おかわり頼みましょうか？」

拓真は謎めいた笑みで答える。

「いや、歌おう」

「え？……ええっ？」

「なんだ？俺が歌ったらダメか？」

「いえいえいえいえ、どうぞお好きなのを。すぐに検索しますっ！」
「おーし！」

どう聴いても拓真のオンチはひどかった。

それでも少年たちはお世辞とヨイショのオンパレードだった。

「兄貴っ！サイコー！」

「しびれちゃいますっ！」

「満点満点！」

「アンコールっ！」etc…

歌い終えて、すっかりご機嫌の拓真。そしてホッとする弟分たちと、そこで大画面のモニターから採点評価の出る賑やかな音響が。。

「バカ！誰だ？採点設定したの」

そうマサが小声で言ってみても遅すぎた。

“ 只今の得点29点 ”

固まる一同。

10秒ほど静まり返った後、マサが重い口を開いた。

「兄貴、すごいですね！30点満点のうちの29点ですよ！」

もちろんそんな白々しいウソが通じるはずもない。

「ヤカマシッ！！」

拓真はイスを思いきり蹴とばして部屋を出て行った。

嵐の去ったカラオケ部屋に残された少年グループ。

「29点なんて、出せっても俺は出せないぜ」 - - 「」

「ある意味そうだなw」

「なあ、俺達兄貴をチャホヤしすぎじゃねえか？ナニサマのつもりなんだよありゃ」

その言葉を受けて、マサはゆっくりとうなづきながら同調した。

「だな…たしかに」

(続く)

その15 癒しと和みのひととき

癒しと和みのひととき

もうびつくりするしかない。

卓くんの手話の上達ぶりはハンパじゃなかった。

ひなたの聴覚障害を知ってすぐに始めたらしいけど、ここまでできるようになるなんて、すごい集中力だと思う。

この1週間、毎日夜中の3時頃まで勉強していたとのこと。

「卓くん、眠くならなかったの？」

「平気だよ。それにちゃんと寝てたよ」

「会社で？」

「違うよ（^ー^）僕はね、朝ごはん食べないから出勤時間ギリギリまで寝てるんだ。4時間半は寝てるから大丈夫」

「それにしてもすごいよ…」

ひなたと暮らしている私の方が恥ずかしくなった。手話なんてろくにやってない。

「早くマスターして、ひなたちゃんにも教えてあげないといけないだろ？ じゃないとひなたちゃんの意味を聞いてあげることができないし」

「うん… そうだね。」「ホントに私はダメな姉。」

私とひなたは最初、週末の土日だけ、卓くんの家に来るつもりでいた。

でも、ママの最近の疲労度を考えると、少しでも体の負担を軽くしてあげたい。

そう思って、私は学校帰りにおじいちゃんのいる病院へ行き、ママと一緒にくっついていっているひなたを連れてすぐに卓くんの家へ通うようになっていた。

そうすることに決めたのは、病院から家に戻るまでの途中に卓くんの家があったから。

卓くんがまだ会社から帰ってないときは、近くの公園でひなたと遊んでいる。

だから余計に卓くんは、毎日通って来るひなたのために、必死で一刻も早く手話をマスターしたいと思ったのかも。

だからある意味、私が卓くんをせかしちゃったようで、少し悪い気がした。

今日はひなたがお気に入りのままごと一式を持ってきた。

おもちゃの野菜や食品。そして調理道具。割れない皿や茶わん等々。

卓くんは手話のテキストを広げながら、身振り手振りひなたに話しかける。

幸い、ひなたは高度難聴だけれど、家で骨伝導補聴器こつでんどうきをつけているときは、わずかに聞こえている。

だからママや英之、私の話す言葉は、ある程度は理解できていると思う。

ただ、まだ小さい子供のせいか、補聴器のようなわずらわしいものを身につけるのは大嫌いなひなた。すぐに取り外してしまうようになり、強制すると、泣きじゃくって暴れまくる。

その繰り返しで、ここ数力月は補聴器なしの生活。ママも英之もひなたが嫌がることは無理強いしなくなっていた。

卓くんの手話にひなたはバカウケしている。

元々手話は、相手の顔をよく見て、身振り手振りをオーバーアクション的にしなければならぬから、卓くんのやっていることが可笑しくてしょうがないんだと思う。

失礼な話だけど、私も卓くんの身振り手振り、顔の表情、大きく口を開けて丁寧な話す口ぶりに吹き出しそうになる。

「ひなたちゃん、じゃあオジサンが野菜を切るよ」

そう言って、卓くんはおもちやのまな板の上で、おもちやの大根やきゅうりをおもちやの包丁で切るマネをした。

「さあ、次はひなたちゃんの番だよ」

卓くんが手振りでひなたに合図する。

ひなたはすぐに理解して、その野菜をおもちやのレンジに入れてスイッチのボタンを押した。

3秒足らずでレンジを開けて、皿に盛り付けるひなた。卓くんが
あぜんとしてその行動を見ている（＾―＾；）

うちの食生活が、いかに冷凍食品が多いかってことがバレたよう
で恥ずかしかった。

でもまあ…卓くんだって毎日ラーメンなんだから、そんなに恥ず
かしがることでもないかなと思いなおす私。

その後の2週間はあつという間だった。

ひなたと卓くんはすっかり仲良しになって、一緒にお風呂まで入
るようになっていた。

これは私が受験生のときから、ここでシャワーを浴びてから帰る
クセがついていたので、ひなたにもマネされた感じ？w

それに卓くんは、お風呂で遊ぶ子供のおもちやも買って来ていて、
ひなたもお風呂が大好きになっちゃったんだ。

それで困ったのは、今日のひなたは私の手を引っ張ってお風呂に
誘ってきたこと。三人で遊びたいという意思表示（- -；

「お姉ちゃんはダメだよ。ひなたはオジサンと遊んできなさい」

それでも半べそになりながら私の手を引っ張るひなた。

「僕は…かまわないんだけどね・・・ゞ（、；）ゝウヘヘ」

「卓くん、エロオヤジ丸出し」

「ごめん…（＾□＾；A やっぱ無理？」

「当たり前でしょ！そんなこと普通聞く？」

ちよつとエツちな卓くんを垣間見たけど、そんなの全然気にならない。

それよりも驚いたことは、今週になってひなたが自分から骨伝導補聴器をつけたいと意思表示をしたこと。

これは絶対に、卓くんの熱意がひなたに伝わったんだと思う。卓くんの声をじかに聴きたくなった現れに違いない。

本当にここは心が和んで癒される場所なんだってつくづく思う。ラーメン以外は何も無いこの家なのに、それが逆に笑いを誘う空間になっている。

こんな楽しい時間が今の我が家には全くないなんて……
ママは一体どこで歯車を連れちゃったのかな？

毎日、卓くんに送ってもらう車の中までもが、なぜかしら楽しい。カーエアコンを入れないで、車の窓を開けながら涼しい自然の風を浴びる。

とても気持ちのいい夜のドライブ。

「さあ、着いたよ。じゃあまた明日ね」

「うん。ありがとう卓くん。ひなたもお礼しなさい」

私がひなたにお辞儀する合図をすると、突然ひなたは両手の甲を90度に交差させたあと、右手の方を上にあげて微笑んだ。

「えっ……?」

卓くんも私もびっくりした。

「卓くん、ひなたのこれって……手話じゃない?」

卓くんが感動したように言う。

「……そうだよ。手話だよ。ひなたちゃんは今『ありがとう』って言うんだよ!」

すごい。練習や人マネでしかなかった手話を、初めてひなたは自らやったんだ。

卓くんはひなたの頭をなでて喜んでいる。

「なんかこれからが益々楽しみだよ。さ、ママたちが帰って来ないうちに早く帰りなさい」

「うんっ！」

こうして卓くんと別れた私たちは、すぐ目の前にある道角を曲がり、まだ明かりのない我が家の玄関に向かった。

いつものように玄関のカギを開けてひなたから中に入れる。

そして、そのあとに私が入り玄関の扉を閉めようとしたその瞬間
！！

・・・まるで悪夢のような出来事が私たちを襲った。

（続く）

その16 実行犯・世良拓真

実行犯・世良拓真^{せらたくま}

拓真の行動は素早かった。

いずみが玄関のドアを開けたと同時に走りこみ、閉まる寸前でドアノブに手をかけた。

拓真は覆面で顔を覆い、正体を隠している。

いきなり入って来た覆面の男に、大きく目を見開いて仰天するはずみ。

拓真は間髪入れず、いずみのみぞおちにパンチを1発。

「う……!!」

うずくまっていたいずみの両手をすぐにつかんで後ろ手で縛り、リビングまで引つ張りこんで床に倒し、とどめに再度、腹部に蹴りを入れた。

「うぐっ！ううう……」

呼吸困難で苦しむいずみ。

「よし！これでしばらく動けないだろ」

その間、ひなたは床にペタンとへたり込み、恐怖で泣きじゃくっているだけだった。

拓真もそれは予想済み。幼児なんて自力で逃げられるはずもないから、姉さえいち早く黙らせれば、そのあとはどうにでもなる。

あまりにガキがうるさければ、その場で始末してやろうとさえ思っていた。

だが、持って来ていた粘着テープでひなたの口を塞ぐと、それほど騒音にもならなかったので、始末する考えはこの時点では遠のいた。

リビングとキッチンの境目に、不釣り合いなヨーロッパ調デザイン

ンの太い柱が2本、吹き抜けの2階の天井まで伸びていて、いずみとひなたはそのうちの1本に体をくくりつけられた。

「おい、金はどこだ？知ってたら今のうちに言っという方が身のためだぞ」

拓真は持参して来た包丁の面の部分で、いずみの頬を2度3度と叩く。恐怖で唇が震えるいずみ。そしてそれは体全身への震えにも繋がった。

とその時、誰かのケータイの着信音が部屋に響いた。拓真が音源の元を目で追うと、リビングのテーブルの上に無造作に置かれている一つのケータイがあった。

「お前のかっ？」

即効で首を左右に振るいずみ。

「だよな。お前は俺が玄関からここまで引つ張って来たんだからケータイをテーブルに置く暇なんかない。とすると……」

拓真はそのケータイを手に取り、着信相手も見ずに電源を切った。「ちくしょうめ……誰か帰って来てやがるな……」

そう呟いて、このリビングの360度を見渡す。緊張と恐怖で静まり返った異様な空気の中、ある方向からのかすかな物音を拓真は聴き逃さなかった。

「あっちは……浴室か？」

包丁を持ちながらゆっくりと慎重に目的地まで歩いて行く拓真。

「……ぶっ殺してやる！」

脱衣室で身動きの取れなくなっていた是枝英之の恐怖はピークに達していた。

風呂上がりの体にはバスタオルを巻いたままの立ちんば状態。リビングで何か大変なことが起こっていることはすぐに察知できた。

せつかく今日はいつもより早く帰って来れたから、先に風呂でも済ませておこうと思ったのが今はこんなザマ。しかも足音は徐々にこっちの方へ近づいて来る。

『強盗なのか…それとも殺人犯なのか…』

実際は数秒のことなのに、気の遠くなるほど長く感じた時間。まさに生きた心地がしないとはこのこと。

ついに脱衣室の扉が勢いよく開かれた。目の前には包丁を持った覆面の男。

「こ…殺さないでっ！頼むっ！お願いだから殺さないでっ！」

覆面の拓真を見るや、とっさに口から連呼して出た是枝英之の命乞い。

「手を頭の後ろにまわせ！ちよつとでも手をずらしたら殺す！」

「は…はいっ！」

背中に包丁を突きつけられながらリビングへ連れて来られる是枝。そして柱に縛られているはずみとひなたを確認した。

いずみたちもまた、是枝の姿を見てあぜんとしていた。いつも帰りの遅い是枝が、まさか先に帰宅して風呂に入っていたとは思ってもみなかったのだ。

不意に是枝の体に巻いていたバスタオルがハラリと解けて床に落ちる。

すぐに目を背けるいずみ。それでも是枝はバスタオルを拾おうとしない。見かねた拓真が是枝にどなり散らす。

「バカヤロウ！さっさとタオル拾って隠せ！汚ねえもん見せんじゃねえ！」

「す、すいませんっ。ではこの組んだ手を外してもいいでしょうか？」

「俺に同じことを2度言わせるな！死にたいのか？」

「ひ、拾いますっ！拾いますから殺さないで下さいっ！！」

声もひっくり返るほど慌てふためく是枝。

威厳のある父親らしい姿など、かけらも見当たらなかった。

いずみはそんな是枝の姿を目の当たりにして絶望的になった。
頼りにならない義父。情けないほど哀れな声で命乞いする英之。
いずみが心の中で必死に叫んでいたのは別な人物の名前。

“ 卓くん…助けて。 卓くん…戻って来て。 卓くん…”

（続く）

その17 絶体絶命

その17

絶体絶命

いずみとひなたちゃんを降ろした後、僕は車で3分ほどのコンビニにいた。

目的は新作のカップ麺を買うため。

特に、朝のテレビ番組で紹介されていた今日発売の“ゆず塩煮卵ラーメン”は 是が非でも手に入れたいところ。

そう思いながらラーメンコーナーを眺めていると、なんとその注目の商品が1個だけ、ポツンと風前の灯ともしびのように陳列されていた。

「やった！まだ残ってた！ラッキー！」

僕はすかさずゆず塩煮卵ラーメンに手を伸ばす。

とその時、僕と同時にそのラーメンに手をかけた者がいた。

お互いが手を離さないまま、そつと顔を見合わせる。見ると制服

姿の男子中学生。

僕は思った。中学生の前で大人げない行動はできない。

「いいよ。これは君に譲るから買いなさい」

そつ僕が丁寧と言ったのにも関わらず、その中学生は、
「最初からオジサンのもんじゃないでしょ！」

と、僕から目をそらせてラーメンをつかんだままレジへ小走りに行ってしまった。

予想外の返答に、ポカンと口が開いたままの僕。

『なんだありや？人にお礼の一言も言えないのか？』

腹が立つのと同時に、どうしようもなく悔いが残るまま、トボトボと車に引き返す僕。

中学生にまで勝負に負けたようで情けなかった。

「あれ？」

その時だった。車に乗り込もうとしていた僕は、ふと目にした後部座席にひなたちゃんのオモチャを発見。

「あららら、電子レンジだ…置き忘れちゃったのかあ……さて、どうしたものか…」

僕は数秒思案する。

『あの二人は明日もウチに来るかもしれないけど、今なら3分で戻れるし……うん、そうだ！そうしよう！今のうち返した方が間違いないや！』

僕は車に乗り込むと、すぐに来た道をUターンした。

そのきっかり3分後、僕はいずみたちの家の前にいた。

万が一、是枝くんかゆりかさんが帰って来てたらヤバいので、裏口に回って扉のそばにそっと置いて帰ろうと思っていた。そしてあとからそのことをいずみにメールすればいいのだ。

裏庭には、ゴルフのパター練習用の人工芝が敷かれていた。

是枝くんが使った形跡がある。ゴルフボールがいくつも散乱している。そのうちのひとつが裏口の扉のすぐ真下まで転がっている。

『こりや危ない。外に出たときボールに足をとられるじゃないか』

僕はボールを拾って、オモチャのレンジと一緒に安全な場所に置き直そうとした。

『ん？までよ？明日の天気予報は確か雨だったような……』

僕の記憶が正しければ、明日は朝から90%の降水確率。こんなところにオモチャを置いては濡れてしまう。

『どうかこの裏口には誰もいませんように……』

僕は細心の注意を払って、ゆっくりと静かに扉を開けて、オモチャを中に置いた。

そしてまたゆっくりと音のしないように扉を閉めようとすると、リビングの方からビックリするような大声がした。

「バカヤロウ！さっさとタオル拾って隠せ！汚ねえもん見せんじゃねえ！」

『…えっ？誰？』

「す、すみませんっ。ではこの組んだ手を外してもいいでしょうか？」

『こっ…これは是枝くんの声だ…』

「俺に同じことを2度言わせるな！死にたいのか？」

「ひ、拾いますっ！拾いますから殺さないで下さいっ！！」

ただならぬ事が起きていることは鈍感な僕にでもすぐにわかった。『どうしよう。。きつと強盗か何かだ。しかも凶悪そうだ。いずれとひなたちゃんは今どんな状態なんだろう？無事なのかな？』

僕の胸の鼓動は一気に高鳴り始めた。

今警察に通報してこの家を取り囲まれたら、犯人は逆上してみんなを殺してしまうかもしれない。そう思うとウカツなことはできない。

『…どんな状況なのか様子は見れないものだろうか？』

僕は勇気を振り絞って家の中に入った。ここからリビングまでは約10メートルほど先。途中廊下を1か所曲がったところにある。まだ気付かれてはいない。

かつて僕がゆりかさんと結婚していた頃、この実家には何度も来ているから内部はよく知っている。勝手口を選ばなくて本当に良かった。あっちからだと出入りが丸見えで、すぐに捕まってしまった

ことだろう。

僕は廊下の曲がり角まで到達した。リビングまでは約5メートル。ここから覗けばリビングの様子が少しはわかる。

心臓が飛び出るくらいに緊張していた。この鼓動が犯人に聞こえたらどうしようと思うほど。そんなことなんてあり得ないのに。

床に腹ばいになった僕は、そつと顔の3分の1だけ出して様子を見うかがった。

——いた!!

いずみとひなたちゃんが同じ柱にくくり付けられている。そのとなりの柱には是枝くんが縛られている。

ここからはちょうどその側面が見える角度。犯人の姿は見えない。きつとここからは死角だからなのだろう。

Σ(□□;ハッ!!

ここで僕は気づいた。犯人はおそらく凶器を持っているのに、僕は何も持たずに入ってきてしまった。護身用すら持ち合わせていない。なんというおバカ!

このままじゃどうしようもない。何か武器になるもの……あつ! そうだ!

外には是枝くんのゴルフ用具があった。きつとパターもあるはずだ!

僕はゆっくり立ち上がって反転しようとしたところ、ここで最大のドジをやらかした。

廊下がスベって(ノ——)ノバタツ!とコケてしまったのだ。

「誰だっ！」

すかさず犯人らしき男の声。

僕は再び立ち上がろうと中腰になったところを制止された。

「動くなっ！それ以上動いたらこのガキを殺す」

ガ ΣΣ（。D；） ン！！

完全に気づかれた上に最悪のパターン。

「卓くん……」

「も……森田さん……」

いずみとひなた、そして是枝くんも僕の方を見ている。

そして姿を現した覆面の犯人も僕を凝視していた。

「なんだ、お前だったのか。丁度いい。一石二鳥だ」

「え??」

犯人の意外な言葉に驚いた。僕の顔を知ってるってこと??

「さあて、どう始末してやろうか……」

その時僕の口からとっさに出た言葉。

「待つて！目的はお金ですか？お金なら僕の貯金全部あげますから許して下さい！」

「ホホウ（「。」「*」）一体いくらあるんだ？」

「……30万ほどですが。」

「バカヤロー！！そんなハシタ金いるかつ!!」

「やっぱりね……（「。」「」）」

「俺をナメてるお前から片付けてやる！」

Σ——11（「。」「」）——1ええええええ???

犯人は包丁を右手に持ち代えて僕を睨んだ。

『ダメだ……このままじゃやられる。。』

とそのとき、僕のポケットにゴルフボールが入っているのに気づいた。

『しめたっ！これだっ！』

これが唯一のチャンス。でも1発で仕留めなければこっちがやられるのには間違いない。狙いは顔面。それしかない！

犯人が1歩、また1歩近づいて来た。

僕はポケットからボールを取り出しざま、渾身の力を込めて、犯人へ向けて投げつけた。

（続く）

その18 攻防戦の行方・前編

攻防戦の行方・前編

わずか5メートルの距離。外せば僕は絶体絶命。失敗は死を意味する。

——なのに僕は外した……

全力で投じたゴルフボールは覆面男の顔をかすめ、是枝くんが縛られている柱の上部に激しくぶつかって跳ね返り、ワンバウンドして僕の頭で弾かれた。

「アイタツ！」

こんな重大な局面でさえ、ドジをやらかすどうしようもない僕。それを見た覆面男は僕をせせら笑う。

「フハハハハ！ マヌケな奴め。それにしてもナメたマネしてくれるじゃねえか！」

「くっ……」

僕は痛みをこらえて背走するしかなかった。

「フフフ…もつと痛い思いさせてやるぜ」

僕のすぐ後ろを追いかけて来る凶悪犯。裏の出口までは来たけど、扉を開けてる間に間違いなく刺されてしまう。

とその時、目に入ったのが、さっき扉の隅に置いたオモチャの電子レンジ。

もう考える余裕もなく、僕は反射的にそれをつかむと、振り向きざまに投げつけた。

“ゴン！”と音がして男が片ひざを落とし、左手で顔を覆った。額

に当たったのには間違いない。

——— 今だ！今しかないっ！

僕は男に飛びかかり、馬乗りになるとすぐに、包丁を持った男の右手をがっちりと僕の両手で取り押さえる。

でも男の左手は自由。僕は右の頬を何度もグーで殴られた。

「くっそぉー！」

僕の中の怒りメーターが、恐怖メーターを上回った。

この両手は外せない。でもこのままじゃ殴られっぱなしだ。

「コノヤロー！」

破れかぶれで僕は覆面男の顔面に頭突きをした。何度も何度も繰り返した。

すると、包丁を持っている男の手がゆるくなり、ついにそれを手から落とした。

——— やった！！ついにやった！！

そう思ったのもつかの間、僕の一瞬の気の緩みが、男を押さえつける力を弱くした。

「うりゃあああ！」

覆面男の雄たけびと同時に、僕は体をつかまれ、力づくで投げ飛ばされた。

僕が再び起き上がって男に飛びかかるにはもう遅い。奴は包丁を拾って体制を整えようとしているところ。

僕はリビングに走った。柱に縛られているいずみやひなたちゃんの不安そうな視線を感じながら、素早く部屋を見渡す。

こっちは丸腰。包丁を持った相手と素手とでは勝負にもならない。
『武器武器…何でもいいから武器代わりになるもの…』

——あつた!!

リビングの隅にはゴルフバッグが立てかけており、クラブも数本見えている。

僕は急ぎ駆け寄り、一本のクラブを手に、向き直って反撃態勢に入ろうとすると…

「そこまでだっ!!」

覆面男…いや、覆面を外した男が鼻血まみれになりながら叫んだ。しかも包丁を振りかざしながら、いずみとひなたちゃんのすぐ前に立っている。

「そこから1歩でも動いてみる。この人質を殺す!」

当然ながら、言うとおりにするしかない。僕の頭突きのせいで、男を余計に逆上させてしまったのかもしれない。

「そのクラブを手から離せ。床に放るんだ。早く!」

緊張が走る。この状況からどうすれば助かるんだ?

僕はクラブを床に転がした。

「てめえ、よくもやってくれたな。お前には以前の仕返しも含めてたっぷり復讐させてもらうぜ!」

「えっ?」

僕は戸惑った。以前の仕返しって…何のことだ?

男はすごい形相で僕を睨みつけている。

——あの目…あの形相…たしかどこかで見たような——
あっ!!

思い出した! 5、6年前、僕が駐輪場の自転車をなぎ倒したときに、それに巻き添えをくらって逮捕されたあの時の強盗殺人未遂犯

だ！

僕のハッとした表情が男にもわかったらしい。

「思い出したようだな。俺はずっとお前に復讐しようと思ってたのさ」

「そんな言いがかり言われても…僕はあのと偶然に…」

「やかましいっ！俺に言い訳するな！」

「はい。。。」

「フフ…先にこの家の財産から頂戴しようと思ったんだが、お前の方からノコノコやって来たんなら一石二鳥だ」

『まずい…本当にまずいよ。僕はどうしたらいい？』

とっさに出た僕の行動。それは土下座することだった。

「すみませんっ！本当に申し訳ありませんっ！あなたをこのまま見逃しますから、どうか勘弁して下さい。お願いしますっ！」

床に頭をつけて謝る僕。が、予想通りそんなマネをしても通用するはずがなかった。

「ハハハハ！よく見てろ！お前の目の前で、このガキを殺してやる！」

男の視線がひなたちゃんに注がれた。

僕の心臓が飛び出るくらいに大きくドクンと鼓動する。

「待って！待って下さいっ！子供だけは勘弁して下さい。どうかお願いします。子供たちだけはどうかっ…！」

「は？随分おかしいこと言うじゃねえか？じゃあこのオヤジは始末してもいいのか？」

「そ、それは……子供たちのためなら仕方ありません」

「Σ―11（；）――1え~~~~~！？」

と叫んだのは是枝くん。粘着テープで口を塞がれても、その声は大きく響いた。

「うるさいっ！黙ってる！」

男は縛られている是枝くんの腹部に蹴りを入れた。

「うつ……！」

是枝くんがおとなしくなると、男は再び僕の方に向き直って不敵な笑みを浮かべる。

「よし、わかった。お前の望み通り、このオヤジから殺してやろう」「望んでなんかいませんが……」

「そして次にこの小さいガキを殺す。そのあとはこの高校生の……」血の気が引いた僕は、男の言葉を遮った。

「そんなの約束が違うじゃないですかっ！！」

「アホかっ！そんな約束いつしたんだよっ！！」

「今さっき土下座して頼んだじゃないですかっ！」

「ふざけんなっ！はいそうですかって俺が言うと思ってるのかっ！」

そんなこと全然思ってもいなかった。ただ、なんとか言葉のやりとりで少しでも時間を稼ぐことを考えているだけだった。

でも、もう限界かもしれない。。

しびれを切らした男がついに行動にうつす言葉を口にした。

「このガキから殺す。お譲ちゃん……悪いな、サヨナラ」

男は包丁を持った右手を引いて反動をつける。

「やめろおおおお！！」

間に合うか間に合わないかわからない。

僕は叫ぶと同時に最後の抵抗をした。

（続く）

その19 攻防戦の行方・後編

攻防戦の行方・後編

今、私の目の前にいる“鼻血ブー男”がひなたに包丁を向けた。

——もうダメだ——

そう思ったとき、突然“鼻血ブー男”の体のバランスが真横に崩れた。

その原因は卓くん。ちょうど卓くんのいる位置からここまで敷いてある電気カーペットをグイッと引つ張ったからだ。

すぐに態勢を立て直そうとする鼻血ブー男の顔面に、今度は飛んできたケータイが直撃。テーブルの上に置かれていた英之のケータイを、卓くんが投げつけたのだ。

真つ二つに折れた英之のケータイ。

「貴様あゝゝゝ!!」

私は怖くてたまらなかった。卓くんは相手にダメージを与えるところか、男の怒りを倍増させてしまったんだもの。

「こいつら皆殺しにしてやる!」

鼻血ブー男は逆上しながら私たちを睨んだ。

——次は本当にダメかもしれない——

私の頭に最悪のシナリオがよぎる。

その時だった。私が今まで聞いたこともない、卓くんの超ド迫力な怒声が部屋中に響き渡った。

「待てって言うてるだろがーっ!!このチンピラがーっ!!」

その声に鼻血ブー男でさえ驚きを隠せず、一瞬たじろいだ。

「…なにい？」

男がゆっくりと卓くんに視線を向けて口を開く。

「てめえ、こいつらがどうなってもいいってんだな？」

これに対して、卓くんが躊躇もなく大声で叫んだ言葉に私は度胆を抜かれた。

「いいとも！！やれるもんならやってみろっ！！」

「な、なんだと！？」

意表をつかれた返答…それに耳が痛くなるくらいの大声とその迫力に、鼻血ブー男も戸惑いを隠せなかった。

卓くんはかなり興奮状態。そんな中、卓くんは話し始めた。

「いいかよく聞け！その代り、お前がその子たちに指1本でも触ってみろ！その瞬間、僕はお前をブチ殺してスタスタにしてやるからなっ！そのクラブを拾って容赦なく、お前の頭をかち割って、顔がメチャクチャになるまで…いや、形がなくなるまで叩きのめしてやるっ！いいか覚悟しとけっ！」

一瞬静まり返る間があった。私も卓くんの声にあぜんとしたが、それは鼻血ブー男も同じだったようだ。

「バカめ。どうやらお前から死にたいようだな」

男は持っている包丁の先端をゆっくりと卓くんに向けた。どうやら最初のターゲットを卓くんに変更……あっ！

私は気づいた。そっか…そうだったんだ…卓くんは鼻血ブー男を挑発して、ターゲットを自分に向けようとしてるんだ。

それが功を奏したって言えるのかわからないけど、鼻血ブー男の関心は完全に卓くんに移ったようだ。

男が卓くんの方へ刃を向けながら歩き出した。

私は心で問いかける。

“卓くん、そんなことして勝ち目はあるの？先に死んじゃうなんてやだよ！”

今、私はリビングの端へ歩いてゆく鼻血ブー男の背中を見ている。そしてその先にいるのは卓くん。卓くんが床に放られたゴルフクラブを拾うには距離がありすぎる。包丁に対抗するものはもう何も無い。

「死ねーっ！」

小走りに突進した鼻血ブー男。卓くんは中腰で立っているだけ。手にはもちろん何も持っていない。

卓くんと鼻血ブー男の体が立ったままの状態で重なった……そしてまた……言い知れぬ静寂と共に、二人の動きも完全に止まった。

（続く）

その20 事件の終息

事件の終息

世良拓真が戻って来るのを車の中で待っていた少年グループ。その中の一人、マサがドライバーのテツに問いかける。

「兄貴を…裏切るんだな？」

テツの表情は険しかった。

「……ああ」

そう、テツは車を走らせ始めたのだ。待機しろと卓真に言われているにも関わらず。

「俺は…俺は兄貴を見限る！」

一同の反論は全くなかった。みんな気持ちは同じだったのだ。

「兄貴の傲慢ぶりにはもうウンザリだ。別に借りがあるわけでもねえし」

その言葉にも全員が賛同した。

「全くそうだぜ！いつまでも兄貴にヘコヘコする筋合いはねえ！」

「あんなテング野郎にもう用はねえ！」

1Kmほど走ると、公衆電話を発見し、車を停めて自ら降りるテツ。

「（ー）フフ…これからケーサツに電話してくる」

「マジでそこまでするのか？」

マサが驚いた顔で言う。

「バカだな。兄貴にうまく逃げられたらこっちが困るじゃねえか！」

「あ、ああ。それもそうだな」

「兄貴にはずっとブタ箱に入ってもらわにゃ」

テツは躊躇なく、拓真が押し入っている是枝宅の情報と場所を通報した。

そして公衆電話から出ると辺りを見回しながらすぐに車に駆け込んだ。

「さ、早いところズラかるぞ」

——是枝宅——

「ぐ…ぐあっ…ぐぐ…このお…うぐ…ぬおっ…うりゃあああああ
~~~~~!!」

卓の声にならない雄たけびがリビングに響いた。

卓は両手で拓真の包丁の刃を握りしめ、更には力づくでモギ取っていたのだ。

目を見開いて驚く拓真。充血した目でにらみ返す森田卓。気合と興奮で息が荒い。

これにはさすがの拓真もひるんだ。

“ヤバい。こいつ逆上してやがる。マジでメッタ刺しされそうだ”

瞬時にそう悟った拓真は、それまでの凶暴な態度を一変。卓から離れると、一目散に玄関から出て行ってしまった。

一気に気が抜けて床にペタンと座り込む森田卓。

柱に縛られている是枝が足をバタバタさせて、テープで塞がれた口とロープをほどけと催促する。それに卓はハッと気づいて解放しようとするが、包丁が手に食い込んで離れない。

痛みをこらえてなんとか片手だけは外れた。そして血だらけの手で全員の粘着テープを剥がす。

ひなたが放心状態なのが気になる。

「卓くん、ありがとう!」

いずみが半泣きで言う。

続いて是枝もすぐに口を開く。

「いやー、森田さんの火事場の馬鹿力ってすごいですね」

「え？火事にはなっていないと思うんだけど…（＾―＾；）」

このとき、いずみは心底、是枝英之に幻滅した。

”こんなとき、この人はなぜお礼の一言も言えないんだろう？”

そんな中、卓が困ったように言う。

「あのー、申し訳ないんだけど、このロープは切れそうにないんだ…」

無理もない。持っている包丁でロープを切ろうとすると、刃を握っている卓にも激痛と更なる出血が襲うのだ。

「今から僕は警察に連絡しますから、この家の電話貸して…」

とそのとき、リビングに警官隊が5、6人ほど一気に押し寄せて来た。

そして包丁を持っている卓が真っ先に取り押さえられ、はがいじめにされた。

「おとなしくしろっ！抵抗しても無駄だぞっ！」

「別に抵抗なんて全く…」

「話は署で聞く。おとなしくしろっ！」

「おとなしいつもりなんだけどなあ…（＾―＾；）」

卓が何を言おうとしても途中で遮られ、事情さえろくに説明できない。

「説明させてくれませ…」

「お前は黙ってろ！」

ロープもほどかれて解放されたいずみ。

こんな調子を見ていたいずみの怒りが頂点に達した。

「ちょっとあんたらっ！！もういい加減にして下さいっ！！」

一同の視線が一斉にいずみに集中する。

「その人は…卓くんは、命の恩人なのっ！！犯人はとっくに逃げましたっ！！さっさと追いかけてよっ！！このウスノ口警察っ！！」

キョトンしてる警官隊の中を割って、ひとりの女性が入って来た。  
「いずみ……これは。」

その女性はいずみから少し視線をずらし、取り押さえられている男を見た。

「卓さん…？」

森田卓も当然それに気づいた。

もう何年ぶりの再会なんだろうか？まさかこんな形で会うなんて…

「ゆりか…さん。。」

（続く）

## その21 かつての同僚・かつての妻

かつての同僚・かつての妻

ケガをしたのは僕だけだったけど、一応全員がバタバタと病院に搬送された。

だからゆりかさんとの再会も、お互いを確認しただけで、会話を  
するどころではなかった。

僕は、両手の手当をし、一通りの事情聴取を終えたあと、速やかに帰宅した。日を改めて現場検証をするらしい。

翌日の午後、例の逃走犯がスピード逮捕されたとテレビで報道された。

どうやら事件当日、警察に通報したのは仲間の少年グループらしい。つまり裏切り。

どうりでおかしいと思った。あの時、僕が連絡する前に突然警官隊が家に入ってきたのが不思議でなかった。

なにはともあれ、これで再び狙われることもなくなった。逆恨みされたままビクビク過ごすのはたかさんだ。僕は胸をなで下ろした。それよりも気になるのはひなたちゃん。

この一件がトラウマにならないだろうか？悪夢ばかり見ないだろうか？ふとした瞬間に思い出して、恐怖に駆られないだろうか？精神障害になったらどうしよう？

心配は尽きない。でも、もう会うこともないだろう。

いや、僕の方から改めて謝りに行くべきかもしれない。ゆりかさんとは枝くんに迷惑をかけたんだ。かもしれないじゃなくて行かないや…

——6日後（日曜日）

事件以来、僕は有給を使って会社を休んでいる。

なんせ両手が包帯でグルグル巻きだし、デスクワークすらできないからだ。

でもそれは家にいても同じこと。このまま何もせずには体がなまっ  
ていくと、更におデブになるのは必然だと思われる（ - ；

そんな日曜の午後、予想もしない突然の訪問客に動揺する僕。

「ゆりか…さん」

「ど、どうも…」

ゆりかさんは伏せ目がちで、チラツと隣を気にしながら僕を見る。  
そう、隣には是枝くんも一緒なのだ。

「森田さん、少しお話があつて来ました。お時間いいですか？」

是枝くんは本社の本部長で、僕は関連会社の課長。当然彼の方が  
上司なんだけど、かつて僕と同じ部署にいたときのように丁寧な  
言葉遣いをした。

こんな頭の低い人が、茜崎さんの推理した恐ろしい計画を本当に  
実行した人なのかと疑問さえ覚える。

是枝くんは知らない。僕が6年前の真実を全て知っていることを。  
そして僕もそんな過去をほじくり返す気もない。ゆりかさんが傷  
つくだけだ。

二人を茶の間に通すとすぐに是枝くんが話し始めた。

「いずみから聞きました。ずっとここにお邪魔していたんですね」

「……うん。隠すつもりはなかったんだけど…言ってもマズイかな  
って」

「それが隠すって言うんですよ（^ー^；）」

「うん。申し訳ないですホントに。近々僕の方から挨拶に行こうと  
思ってたんだ」

「来てくれない方がいいので、こうして今日伺ったわけですよ」

「は…はあ。。やっぱりそうですよね・・・」

是枝くんの言葉遣いは丁寧だけど、内心怒りが込み上げているのがよくわかった。

「森田さん、失礼ですけど僕とゆりかへの復讐ですか？」

僕はその言葉に仰天した。

ゆりかさんは顔をややうつむけ気味に黙って聞いている。

「まさか！何で僕が？」

「僕がゆりかと結婚したから、いずみを手なずけて自分の味方になろうと思ったんじゃないですか？」

「ととととととんでもないっ！」

「まあいいです。何にしてみいずみが目標の高校へ合格できたのは森田さんのおかげでしょうから、そういう点では感謝します」

「・・・」

「問題はですね、今回の事件です。わかりますよね？」

「……はい」

「少しきつい言い方かもしれませんが、はっきり言わせてもらいますよ」

「そりゃもちろん……」

「いずみとひなたと僕は、森田さんの巻き添えをくったようなもんです」

「……うん。。返す言葉もないよ」

「あの男は森田さんに恨みを持ってた。だからあなたの行動をずっと追ってたんだ」

「・・・うん。そうらしいね」

「だから、あなたがいずみと接触してなかったら、うちの家族はこんな風にはならなかったんですよ。それなのに、ひなたとまで遊んでたなんて」

「・・・」

「今のひなたは夜になると怖がって寝ません。とがったものを見る

だけで恐怖を感じてしまいます。果物ナイフやカッターすら見れません。誰のせいだと思いますか？」

「……僕のせいです。間違いなく」

「でしよう？それなのに森田さんは僕たちを助けてやったとお思いですか？」

「いえいえ、そんなこと思ってませんよ」

「なら良かった。第一あのとき、森田さんの一言で、僕たちは犯人に殺されるところだったんですからね」

「……すみません。正直あんまり僕、あの時の記憶がないんです。興奮しすぎて……」

「じゃあ僕が言いましょう。犯人は僕たちを人質に『こいつらが殺されてもいいのか？』と言ったのに対して森田さんは『やれるもんならやってみろ！』と言ったんですよ」

「……ああ、それは一か八かで。( ^ | ^ ; )」

「冗談はやめて下さい。一か八かで子供の命を賭けるなんて無謀もいいところです！人の子だからそういうことが言えるんです！」

「そんなことは……」

「じゃああの時、ひなたが犯人の手にかかったらあなたはどう責任をとるつもりですか！あなたも人殺しと同じじゃないですか！」

「それは……」

その時、是枝くんのケータイに着信があった。どうやらメールらしい。

「すみません。話の途中ですが、仕事の急用が入りました」

「日曜に？」

「役員になるといろいろあるんですよ。なんか話が腰砕けになっちゃったな……で、まあ、僕だって森田さんを恨んだりしたくない訳ですよ」

「はあ……」

「ちゃんと反省はしてるんですね？」

「それはもちろん。ずっとひなたちゃんのが気になって…」  
「ひなたのことを思うなら、今後は二度と会わないことです。いずみも同じです。また変な連中に狙われたら大変ですからね」

「わかりました。僕もそう思ってたんで、これ以上は…」

「それを聞いて安心しました。ではこれで帰ります。ゆりか、行くぞ」

是枝くんが立ち上がって足早に玄関に向かう。でもなぜかゆりかさんは後をついて行こうとはしなかった。それに気づく是枝くん。

「ん？ゆりかどうした？」

「あの、私ちよっと…もう少しだけ卓さんと話をしたいの。ダメ？」

「……………わかった。少しだけならな。家にはいずみとひなたがいるんだ。早く帰って夕飯作ってあげなさい」

「はい。」

こうして是枝くんは先に去って行き、部屋には僕とゆりかさんだけが残った。

不謹慎きわまりないかもしれないけど、正直僕はドキドキした。

こんな綺麗な人が僕のお嫁さんだったんだ。

しみじみ思ったところでどうにもならない。我に返った僕は、ゆりかさんにあらためて事件のお詫びをした。

「是枝くんの言った通りなんだ。ごめんね。僕のせいでいずみとひなたちゃんまで巻き込んでしまっ…本当に悪いと思ってる。ホントだよ」

ゆりかさんはさつきより顔を上げて僕を見ているような気がした。  
「わかっています。卓さんは正直な人だもの。でもひとつ確かめたいんだけど…」

「いいよ。何でも聞いて」

「さつき英之さんの言ったことは本当なの？犯人に『やれるもんならやってみろ』って言ったこと…」

「…うん。本当だよ…」

「そう…」

ゆりかさんは軽いため息をついた。僕に幻滅したのかもしれない。  
「卓さんには感謝してるわ。子供たちは無事だったんだもの。でも  
一歩間違えたらって思うと…ね。」

「うん…そうだよ。ごめん。」

「私は卓さんに何の恨みも持ってないわ。ただ、子供たちを危険な  
目に遭わせた点ではショックだったけど…」

僕は何も言えなかった。言い訳する気なんて毛頭ない。ただゆり  
かさんの話す言葉を深く噛みしめようと思っただけだ。

と、そこへなんと、次なる訪問客が現れた。

（続く）

## その22 いずみの主張

いずみの主張

「えへ…来ちゃった」

「いずみ!!」

ママが驚くのも仕方ない。英之に家で留守番してると言われたのに、無視してひなたを連れて来ちゃったから。

「ごめんねママ。どうしても我慢できなかったの」

「…しょうがないわね。たまたまパパがさつき急用で出て行ったからいいけれど…いたら怒鳴られるわよ」

「平気だよ。たぶん英之は人前では怒鳴らないよ。自分のイメージが第一の人だから」

「そんなこと言わないの!」

「ママもわかってるくせに…それよりも卓くんのケガも気になってたんだ」

卓くんの両手が痛々しかった。でもブサイクな顔からのぞかせる笑顔は自然だった。

ひなたが私と繋いでる手を放し、小走りで卓くんのとなりまで行き、チヨコンと座った。それを見て目を見張るほど驚くママ。

「ええっ?どうして?どうしてひなたがここまで…」

「ゆりかさん、すみません。気を悪くしないで下さい。僕は別に何も仕込んだわけじゃないですから。本当です。信じて下さい」

私は不思議だった。卓くんが謝る理由なんてどこにもないのに。

「どうやらいずみもひなたも、ママが思ってた以上に卓さんにお世話になったようね」

「それに命の恩人だよ」

卓くんが照れくさそうに否定する。

「そんな大げさな…(A)(ッデヘヘ」

ママの口元が少し引き締まった。

「そのことなんだけど…さっきパパが卓さんに言っただけなの。もう二度とあなたたちと会わないようにって」

私は驚かなかった。英之の言うことなんか予想できたもの。

「どうせそんなことだろうと思った」

「でもねいずみ、よく聞いて。ママも…パパの意見には賛成なの」

「（「」）ええっ?!何で?」

意外な言葉だった。ママと卓くんが会うのは不倫かもしれないけど、私たちは平気のはず。

第一ひなたが喜んでるし、あの家に戻ったらひなたはいつも不安定。あの場所で起きたことがリピートされて夜泣きもする…

「いずみの気持ちはよくわかるわ。でもね、卓さんがあなたたちの命を危険にさらしたのは事実なの。これからまた同じようなことが起こる可能性がないとは言えないでしょ?」

「大丈夫だよ。もう逮捕されたんだし。それに死刑じゃなくても、あいつが刑務所から出て来る頃には私も結婚してどっか別なところに住んでるよ」

卓くんが遠慮がちに話に入ってきた。

「いずみ…んとね、犯人がどうこうってことじゃないんだよ。ママはね、親の責任として、最善で安全な道を選んでるだけなんだよ」

「でも…」

「あの犯人は僕をずっと恨んで来たようだしね。僕がいずみたちと関わってなかったらこんな事件も起きなかった。君たちを巻き添えにすることはなかったんだよ」

「それは…結果論じゃ…」

「さっき是枝くんから聞いたけど、何よりもひなたちゃんの後遺症の全責任は僕にあると思うんだ。そんな僕が大きな顔をしてこれか

「らもひなたちゃんと遊ぶなんておこがましい限りさ」

「でも卓くんの大きな顔は治らないでしょ？」

「あの…見た目の話じゃなくてねえ。。（^ー^;）」

「ごめん。ちよつとふざけちゃったw」

ママの目が少し潤んでいた。一体どんな思いなんだろう？

今のママは卓くんをどう思っているんだろう？

英之との仲はもう冷めかけている。そんなの毎日見てるだけだから。

家庭を顧みない英之。いつもママを放置の英之。人質になったときも、命を賭けて助けてくれたのは卓くん。

それに対して、お礼も言わずに家では卓くんの批難ばかり。あのとき一步間違えたらって…ママにそればかり。

このままじゃ卓くんはただの悪者。私は英之の前では反抗できない。ママにも心配かけるし、家庭崩壊が目に見えてわかるから。

でも今なら言える！私の思ったこと。卓くんの正義を！

「ママ、訂正したいことがあるの」

「訂正？」

「うん。英之の言ったことを全部鵜呑みにしないで。あの人は私の意見なんか聞いてくれたこともないんだから」

「いずみ…」

「私たちが卓くんの巻き添えになったっていうのは事実じゃない。

その前に、卓くんに会いに行ったのは私の方からなの。結果論でものを言うなら悪いのは私。私がゴミ拾いしている卓くんに近づかなければこんな事件も起きなかったよ」

「ゴミ拾い…？」

「ママ、そこはどうでもいいから。重要なのは事件そのもの。卓くんがいなかったら、私たち人質3人は全員殺されていたってことよ」  
「それはわかるけど…」

「うつん、ママは現場にいないから全部わかってない。英之の個人的感情をそのまま聞いてるだけ」

「…どういうこと？」

「英之は、卓くんがーか八かの賭けをしたことや、ケータイを壊されたことばかり批難してるけど、あの時はああするしか方法がなかったと思うの」

卓くんが口をはさむ。

「いずみ、いいんだよもうそんなの…」

「しゃべってる途中なの！卓くんは黙ってて！！」

「はい…（　・　・　・　）」

私は熱くなった。これまでの悶々とした心のわだかまりを一気に出すように。

「犯人は私たちを刺す寸前だった。でもその都度、何度も制止してくれたのは卓くんなんだよ！会話を少しでも引き伸ばして時間を稼いだりしてたの」

「何度も…」

「そうよ。それでも限界つてあるでしょ。そのとき卓くんが言った言葉がママが英之から聞いたアレなの。『やれるもんならやってみる』ってね」

「…」

「そりゃーか八かかもしれないけど、あのときは犯人が力チンとくる言葉でも言わなかったら、あの包丁の動きは止まらなかった。私たちは順番に殺されてた。間違いなく！」

「…」

ママは言葉も出せずに黙って聞いていた。私のしゃべる勢いも止まらない。

「私、そのときわかったの。卓くんは、自分をターゲットにしているってね。犯人の気持ちを自分に向けさせようとしてるって。卓くんは武器になるようなものなんて何も持っていないのに…勝ち目なん

てあるわけないのに…それなのに今まで聞いたこともない大声で犯人をビビらせる言葉を浴びせたの！」

なぜか私は泣きながら話していた。思い出すのも怖すぎて嫌な場面だけど、卓くんのあのときの勇敢な姿は脳裏に妬きついて離れない。

「そのあと犯人が卓くんを刺しに行つて…私、正直卓くんが先に死んじゃうのかと思った。そのあと私たちはどうしたらいいのかつても卓くんは負けなかった。包丁を素手で掴んで、血まみれになった手で犯人から奪い取ったんだよ！」

私の涙にママももらい泣きしていた。

「そう…そうだったの。ママは細かい事情は何も知らなくて…全然知らなかった…」

私はふとひなたを見た。卓くんのひざの上でスヤスヤ寝ている。卓くんがグルグル巻きの包帯した手で、やさしくひなたの頭を撫でている。

「ママ、ひなたは卓くんが大好きなの。こんなになついでるんだよ。卓くんから離れるとひなたはトラウマから抜け出せないよ。暗い子のままになっちゃうよ！」

卓くんがまた口をはさむ。

「そんなことは…買いかぶりだよ。時間が解決するんじゃない…」

「卓くんは黙ってて!!」

「はい。。（ - ; :こわっ」

私はママに懇願した。

「お願いママ、卓くんのところに通わせて！そして英之には内緒にして！お願い！」

「一体ママ、どうしたら。。」

言うだけのことは言った。もうちょっとと言いたかったけど、しつ

こいのも良くない。

あとはママの判断。

ママ…心配ばかりかけてごめんね。

（続く）

## その23 元家族スリーショット

### 元家族スリーショット

ゆりかさんは思い悩んでいるようだっただ。

「困ったわね… パパに知れたら大変なのはわかってるわよね？」

「売られたケンカなら私買うよ」

「バカね、いずみがケンカ売ってることになるのよ。パパの言いつけ守らないんだから」

「そついうことになるならそれでいいもん」

僕は不思議だった。いずみが必死になってまでここに通うと言っている意味が。

ひなたちゃんが僕によくなくなっていく理由も一理ある。でもいずみの主張は何かそれ以上のものが感じられる。

推測できるのは、きっと我が家での居心地が悪いのだろうということ。いずみと是枝くんのぎくしゃくした関係がよくわかる。

と考えれば、僕の家が特別良いわけじゃないってことだ。

そんなことより、問題はこれを良しと考えるかどうか…

もし、これからも二人が来るとしたら僕はどうすればいいんだろう？

ひなたちゃんとは遊んだり、手話を教えたりできるけど、いずみは何が面白い？お受験も終わって勉強なんて教える必要もないし、だいいち進学校の学習内容なんて、僕はもうついていけない。

ゆりかさんがふと、包帯でグルグル巻きの僕の両手を見た。

「卓さん、その手じゃ随分不便でしょうね？」

いずみもそれには同調する。

「そうそう、私もさつきからそう思ってたんだ。そんな手じゃごはん作れないでしょ？どうしてるの？」

二人とも心配した顔で僕をみている。なんとなく嬉しいけどなんか照れくさい。

「ああ…それはね、実家のおふくろが来て食事は作ってくれるんだ」「お母様が…」

「私の元おばあちゃんが来てるんだ。でも今いないのは何で？」

「実家には82歳のばあちゃんがいるから、おふくろはそっちの面倒もみてるんだ。泊まり込みってわけにはいかないんだよ」

「ふうん…」

いずみがちよつと考えてから再び僕に質問する。

「でもさ、ごはん作ってくれたってその手じゃ箸もスプーンも持てないじゃん？」

なんだかこの二人には、核心を突かれているようで焦ってしまう。  
「だからその……食べさせてもらってるんだ（´・`・;）」  
「えっ？マジで？卓くんが私の元おばあちゃんにアーンってしてもらってるの？」

「あのね…そんなアーンとは言わないよ（^ー^;）」

「（\* m \*）ププツ でもなんか想像できない」

「想像したから笑ったんだろ（-・-）」

「いずみ、笑っちゃダメよ。卓さんは不自由してるのよ」

と言いながらゆりかさんも半笑いしている。

そんなゆりかさんの笑顔を見れたことに、嬉しさを覚える僕っておかしいのかな？

「卓さん、今日の夕飯はどうするの？お母様、また来られるの？」

半笑いがおさまったゆりかさんが僕に尋ねる。

「今日はもう来ないよ。夕飯は食べないことにしてるんだ」

「ええっ？お腹空くじゃない」

「いいんだ。夕飯抜くのがダイエットに良いって聞いたからさ。こんなことでもなけりや実行できないから、いい機会だと思ってやってるよ」

「じゃあお母様は朝早く来られてごはん作りされるのね？」

「ていうか、実家で作って持って来るって感じかな。昼ごはんはここで作ってくれたりするけど」

それを聞きたいずみの反応の早いこと。

「朝も昼も家にいるの？卓くん、会社クビになったの？」

「いやいや、クビじゃないよ。有給休暇ってのを使って休んでるんだよ」

「うわー、もつたいない使い方。普通、旅行したりしてリフレッシュしたりするんじゃないの？」

「中にはそういう人もいるけどね。ケガしちゃったから仕方ないよ。でもね、これでもリフレッシュしてる気がするんだ。仕事から離れてゆつくりできるのは久しぶりだからね」

「そついうもんかなあ…？」

今までうつむき加減だったゆりかさんが、だいぶりラックスしてきたようで、正座していた足をさりげなく横に崩すと、ゆつくり首を持ち上げて部屋をグルリと見渡した。

「卓さんの独身時代を思い出すわ。あの時も棚にラーメンばかり

( \* ^ m ^ \* ) 「

「全くもってお恥ずかしい… ( ; ; ) ヽ」

「でも今はお母様が食生活の管理をして下さるから、すごく健康的な毎日でしょ？」

こう聞かれると僕はちよつと答えづらい。

「いやそれなだけだね…どうもお腹の調子が悪いんだ」

「 ( ; ; ) えっ？何で？」

この反応は、ゆりかさんといずみが同時だった。

「やっぱし普段食べつけないものを食べると、僕の体が敏感に反応

するみたいで…」

「食べつけないものって…（＾―＾；）お母様がそんな変なもの作るかしら？」

「いや違うんだ。朝も昼もごく普通の純和食だよ。ごはんともみそ汁とおかずが数品」

「それなのにどうしてお腹が？」

「もう何年も定食みたいなごはん食べてなかったからねえ。たぶんラーメンの方が体になじんでるんじゃないかって…」

「卓くん…それってあり得ないから；」「」

いずみが不可解な顔で僕を見つめていた。

「ママ、私思った。やっぱり卓くんのお手伝いしたい。昼過ぎにはおばあちゃん帰っちゃうんだし、そのあと私が来て洗濯したりしてあげる」

「いずみ…」

「なんなら私が夕飯用意して、卓くんにアーンしてあげるよ」

それを聞いた僕はドキッとして、内心嬉しいのに軽く否定する。

「いや、それはちょっと恥ずかしいから…（Ａ　　）ゞデヘヘ」

「遠慮しないの。別に私、卓くんの彼女じゃないし。簡単に言えば介護だよ介護」

「まあそうなんだろうけど…（＾＾ゞ」

ゆりかさんがいずみを頼もしそうな目で見ている気がした。

それでも小さなため息をひとつ漏らして言う。

「いずみ、介護ってね、口では簡単に言えるけど楽なもんじゃないのよ」

「わかってるよ。でも卓くんは寝たきりのお年寄りじゃないんだから大丈夫だよ」

「だといいんだけど。でもね、甘く見ると大変な目にわよ」

「平気平気っ」

いずみは余裕さえ感じる口ぶりで返事をした。

だがこの後、そのいずみの余裕が一気に豹変することになるとは…

(続く)

## その24 オーマイガー!!

その24

オーマイガー!!

「うー!き、きたあつ…!」

何が来たかと思ったら、別に何も来たわけではなく、卓くんが急に前かがみになって自分のお腹を抑えつけた。

「ウソ!マジで?」

私は表情のゆがんだ卓くんを見て、気遣いもせずにそう叫んでいた。

「ちよつとごめん。トイレ…」

ひさまくらで寝ているひなたをそつと床に寝かせ直すと、一目散にトイレに駆け込む卓くん。

その慌てように、申し訳ないけどつついっ笑ってしまう私。

それとは対象的に、不思議そうな顔をしているママ。

「消化不良かしら…ヘンよね。せつかくラーメン生活から解放されたっていうのに」

「ママ、それが卓くんなんだよ。きっとラーメン食べたら体調良くなるよw」

「そんなわけないでしょ!」

「(\*^\_^\*) ズエへ」

ママが小さなため息について棚のラーメンコレクションを再び眺めながら言った。

「ホント卓さんは大変だね。箸も持てないならこんな時だって…」

ハッ(。○。;)」

突然ママがした驚きの表情。でもそれは私にも一瞬でわかった。

「ママ…これってマジヤバくない?」

「そ、そうね・・・^|^;」

私はママと目を合わせ、無言のまま二人同時にそつと目をやる先はトイレ。

案の定、トイレの中から卓くんの呼ぶ声が…（ - ;

「すいませーん…ゆりかさん…ちょ、ちよつといいですか…？^|^;」

「

一瞬固まるママと私。でもここから口火を切ったのはママの方。

「ほら、いずみが行ってあげなさい」

「Σ（・・\*エエツ！？何で？ママが呼ばれたんじゃない！？」

「卓さんを介護するって言ったのはいずみでしょ！」

「ヤダよあゝゝ！それだけは絶対にイヤ！人のおしりなんか拭いたことないもん！」

「ひなたのトイレの面倒は見えてあげてたじゃないの！」

「それとこれとは別モノだよ。15の乙女がすることじゃないもん」

「介護を甘く見ている証拠ね」

「ママの方が慣れてるでしょ！」

「何でママが慣れてるのよ？」

「だって昔、卓くんのハダ力とか見てたじゃない！キャ、私なんでもこんなこと言ってたろ（ノ・¥）」

「とにかく卓さんのところに行つて、用件を聞いて来なさい」

「聞いてくるだけだからねっ！そのあとのことはママがしてねっ！」

私は緊張しながらトイレのドア越しに立って卓くんに用件を尋ねた。

「卓くん、どうかした？」

答えがわかっていても白々しく聞いてみる私。

かすかな望みは予想通りの答えではないこと。でもその思いは儚く消えた。

「ごめん…ウカツだったよ。僕…自分のおしり拭けないんだ（  
□ ^ ; A  
」

ガ ΣΣ（。D ;） ン！！

予想通りとは言え、リアルタイムで直に聞くと更にショックが大きくなる。

「卓くん、ウォシュレットの水圧もつと上げたら？」

「そんなのこんなアパートにないよ」

わかっていた。わかっていながら一応言うだけ言ってみただけ。

・・・もう最悪。。

「何でいずみが？僕はゆりかさんと…」

「ママが介護の練習しろって。でも私には無理。ごめんね卓くん」

「…いや、いいんだ。僕だっていずみにそんなことしてもらうわけには…もう恥ずかしくて一生いずみに合わせる顔がないよ（ - ;  
」

なるほど。恥ずかしいのは私だけじゃなくて卓くんも同じなんだ。

「ねえ、いつもは実家のおばあちゃんにしてもらってたの？」

「うん…」

「でも今みたいに、おばあちゃんが帰っちゃった後に“大”がしたくなつた時はどうしてたの？」

「しないよ」

「えっ？」

「夜食べないから、今までこんなことはなかったんだ。それにいつもならこの時間はおふくろがいるし」

「ああ、そっかあ」

茶の間からママが話しかけてきた。

「いずみ、それができたら卓さんのところへ通うのを考えてもいいわよ」

「エー（ノ　　）ノママずるーい！」

トイレの中から卓くんが言う。

「僕がバカだったんだよ。いずみにしろ、ゆりかさんにしろ、人にこんなことお願いするなんて常識知らずもいいとこさ」

「卓くん…」

「ごめんね。僕はおふくろが来るまでここににいるから、君たちはもう帰っていいよ」

「でも…おばあちゃん今日はもう来ないんでしょう？」

「明日の朝には来てくれるし、大丈夫だよ」

「そんな…」

私は何か後ろめたい気持ちになった。このまま卓くんを放置して帰るなんて…

私は数分考えた。そうだ、たかが人のおしりを拭くだけのことだ。知らない人じゃない。命の恩人の卓くんなんだ！

「卓くん、炊事手袋みたいなのある？」

「んと…薄手のは…ないなあ」

「薄手のはいらないよ（＾―＾；）触った感触がわからない方がいいし」

「いずみ、無理しなくていいよ。でも台所に厚手のゴム手袋があると思うけど…」

無理しなくてもいいと言いながら、手袋のありかを教えてくれるヘンな卓くん。

Ｌサイズの厚手の手袋は、私の手にハメるとブカブカで、自分で見てもおかしくなりに妙な姿だった。

そしていよいよ私はトイレのドアを開ける覚悟を決める。

「卓くん、いい？開けるよ」

「ちよつとなんか恥ずかしくてたままないよお…」

「私もそうなんだからねっ！お互い我慢しようよ！」

「う、うん。そうだね・・・（＾―＾；）」

こうして私がドアノブに手をかけたその時、ママが後ろから私の肩を叩いた。

「いずみ、そこまでよ。もういいわ。あとは私がするから」

とニツコリほほ笑んだママ。

「…え？」

「いいから早くどいて」

私はキョトンとしながらも、そそくさとその場をママに譲った。

「ママ、手袋あげよっか？」

「いらないわ。そんなブカブカのなんて邪魔になるだけよ。卓さん入るわね」

「は、はい…」

私はその間、茶の間に移動してトイレの方角から目をそらせていた。

ちょっとだけチラ見すると、ドアが開いたままで、ママの背中が見える。

それもそのはず。なんせ小さな和式のトイレだもの。

それに卓くんのおしりはドア側にむき出しになっているはずだから、ドアを閉めるとママは作業どころか卓くんのおしりにぶつかってしまう。

数秒か数分か…無言のままに時が過ぎた。

私はテーブルのそばに座り、ママの行動を少し考えてからハッと気づいた。

———そっか、ママは私の“覚悟”を試してたんだ。。

と、改めて悟った私。今頃気づくなんてちょっと鈍感かも？

いとも簡単に作業を終えたママと、バツの悪そうな卓くんが手を洗って戻ってきた。

「ゆりかさん、本当に申し訳ありません。いずみにも迷惑かけて本当にごめんね」

「気にしないで卓さん。どう？いずみ、わかったでしょ？人の身の回りのお世話っていうのは、きれいごとじゃできないのよ」

「うん…」

私は深く反省した。ママの言う通り。ママはいつも入院している須藤のおじいちゃんのお世話をしてるから、その大変さを身を持って体験している。

私は本当に甘かった…ただそれだけ。

「いずみ、気持ちはわかるけど、やっぱりここに通うのは遠慮した方がいいと思うの」

「………」

「ここには卓さんのお母様がいらっしゃるから、緊急なことでもない限り大丈夫」

「でも…」

「もちろん、卓さんには感謝してる。あなたたちを救ってくれた恩人。危険な目に遭わせたっていうパパの意見もあるけれど、それは仕方のないことだったとママは判断したわ」

「だったらどうしてダメなの？」

ママが私に向き直って言う。

「今の家庭が益々バラバラになるからよ。このままだといずみとパパの関係はどうなるの？それを毎日見ているママはどうすればいいの？」

「英之なんか…どうせ私はあの人の本当の子じゃないんだし…」

「でも私たちは一緒に暮らしてるの。家族なのよ。卓さんと仲良くお付き合いしながらうちの家庭も円満になれると思う？」

それは確かにそう。私とひなたが卓くんのところに通い詰めて、英之が面白いわけがない。それはわかる。わかるけど…

そんな中、卓くんが会話に入ってきた。

「あの…僕のことはもういいからさ、平気だからホントに」

「卓くん…」

「いずみはママの言ってることが正しいことくらいわかってるはずだろ？僕だってママの言うとおりでと思う。何よりも家庭のことを優先しなくちゃ！そして、ゆりかさんもいずみもひなたちゃんも、家族みんな元気で仲良く暮していくことが一番。それが僕の望みでもあるしね」

「卓さん、ありがとう…」

なんか卓くんの言葉が全ての×をしているようだった。

でも、“元気で暮らしていくことが一番”と言った卓くんの言葉の中に、英之の名前が入ってなかったのは、単に省略しただけだったのかどうなのか、余計な詮索をしてしまう私ww

事実上、これで卓くんとは完全に決別することになる。

でも私はそうは思っていない。ひなたのためにも卓くんは必要。

帰り道、ひなたはママの背中であまり良さそうに寝ている。

今日は本当によく寝る子wあの事件以来、暗い夜は怖がつて寝なくなつたひなた。どれほど今日は安心して眠っているかがよくわかる。

私はママに唐突な質問してみる。

「ねえママ、卓くんのこと、まだ好き？」

「Σ(・・・\*エエッ！？何よいきなり」

「ねえ、好きか嫌いか言つて」

「…そんなの答えられないわ」

「でも卓くんって、すごく優しいよね」

「そうね・・・卓さんはとても優しい人。第一印象や見た目以上に素敵な人よ。尊敬すべき点もたくさんあるわ」

「じゃあ好きってことだね？」

ママが立ち止まって私にキッパリ言った。

「いずみ…感謝と愛情は違うのよ。尊敬と愛情も全然違うの」

「でも感謝から愛情が芽生えることもあるんじゃない？連ドラでよく観るよ」

「そりゃきつかけとしてはね。でもママと卓さんの場合はもう…」

ママはそれきり口を閉ざしてしまった。

私だって余計な大人の事情に口を突っ込みたくない。ママが英之と誰かがうらやむ夫婦ならそれでいい。

でも実際は違うんだもん…二人は冷めてるんだもん……だったら。  
。

そんな心境までは口にも出せず、家路に向かう路線バスに揺られながらボーッと窓の外を眺めている私だった。

（続く）

## その25 気にしない気にしない

「お邪魔しまーす」

今週末もいずみはひなたちゃんを連れてやって来た。

これで3週連続。土日は続けて来るから回数で言えば6回目。

僕の手はかなり回復して、人におしりを拭いてもらわなくてもよくなったので、おふくろはもうここには来なくなっていた。

とは言え、僕の心配事は次から次へと尽きない。

「なあいずみ、ヤバイよ絶対。ママにきっぱり言われたのにさ」

こんな僕の心配もいずみには何のその。

「気にしないでいいよ。ママも英之も家にいないときに来てるんだから」

いずみって子は肝が据わっている。バレたらバレたで仕方ないと平気で言う。

「でもねいずみ、もしこのことが知られたら、僕はゆりかさんにどんな顔して言い訳すればいいか、わからないよ」

「卓くんの顔はこれ以上変わらないでしょー\*、m、p」

「そついう意味じゃなくてさ……」

「わかってるよ。でもそんな必要ないって。私の独断なんだもん」

「そつは言っても僕としては……あ、ひなたちゃんちょ……ちよつと……」

まだ話してる途中で、ひなたちゃんが僕の腕を掴んで遊んでくれるとせがむ。

「ほら、ひなたが退屈してるじゃない。卓くんの手もだいぶ良くなつたんだし、これからもつというんなこと教えてあげて」

「そりゃ僕だつてそうできれば嬉しいけど……」

いまいち煮え切らない態度の僕に、いずみは小さなため息をつく。

「あのね卓くん、ママはたぶんわかってると思うよ」

「！？エエエエ（。〇。；）エエエエ！？」

「薄々だと思うけど。でも安心して。英之は知らないから」

「…じゃあゆりかさんは黙認してるってことなのかい？」

「たぶん」

「なぜだろう？」

「内心はママ自身も助かると思ってるからでしょ。でも英之もいる手前、公認するわけにはいかないんじゃないかな？」

「な、なるほどね・・・」

こんなこともあって、僕はいささかの後ろめたさはあるものの、更に1か月2か月と、週末にやって来るいずみとひなたちゃんを受け入れ続けていた。

そんなある日のこと…

「私、やっぱり卓くんの彼女になってあげよっかな」

冗談半分に言ったことだとわかっていても動揺してしまう僕に、いたずらっ子そうな目で様子を伺ういずみ。

「（\*・・・\*）ウフフフ♪週末だけ会っなんて、カップルみたいだね」

「僕はそう思わないけどなあ（　・　；」

「え？じゃあ私が援交してるように見える？」

「いやいやいや、そうじゃないよ（^□^；A」

援交…こんな言葉がいずみの口からごく自然に出るのに軽いショックを受ける僕。

「だいいち、ひなたちゃんも一緒にいるんだからカップルとは言わないだろ」

「アハ（\*ハハ\*）♪そうだね。どう見ても親子連れだねw」

「僕がそう言うのもおこがましいけどね（^ー^；）」

「気にしないでね。飯の彼氏でも作っておこっかなかって思っただ

けだから」

「か、仮？（ - ；）」

僕はひなたちゃんとあやとりをしながらいずみと話していた。

いずみは冷蔵庫から自分で買って冷やしておいたミネラルウォーターと、ひなたちゃん用のヤクルトサイズのりんごジュースを出して来てテーブルに置く。

「私ね、今ちよつと反省しちゃった」

「どういうこと？」

「まわりの友達ってほとんど彼氏いるんだよね。だから私も焦っちゃって…」

「なるほど。そうだったんだ。いずみには本命がないのかい？」

この質問には即答で帰ってくる。

「いるわけではないでしょ！男子なんてみんなガキなんだもん。もつと大人がいいの！」

「でも僕じゃ大人過ぎるだろ」

「だから仮だつて言っただでしょ！」

「ごもつともで…（ - ；）」

いずみはりんごジュースのフタをはがしてひなたちゃんに手渡す。あやとりをやめてジュースを選んだひなたちゃん。勢いよくおいしそうに飲んでいる。

「じゃあいずみの好きなタイプってさ、もうちよつと具体的に言うかどうか？やっぱジャニーズ系とか？」

「それ大人じゃないじゃん」

「スマップとか大人だろ。その上には少年隊もいるしw」

「ああ、ダメダメ。基本的に顔のいい人は無理」

「へ？（へへ）女子高生とは思えないこと言うね。なんで？」

「なんかやなの。カッコいい人っていかにも自分はモテるって感じでしょ？」

「僕にはわからないけどね（へへ；）」

「勘違いしないでね。別にジャニーズの人がそうだって言ってるわけじゃないから」

「わかってるよ。別に僕はジャニーズのマネージャーでも何でもないから^^;」

「で、そういう人ってさ、大した面白くないこと言っても女子にキヤーキヤー言われてモテるのね。そんなの見てるとバカらしくてね」

「ああ、それわかる。僕はそれを遠くから静観してた側の人間だけど^^;」

「それに比べてブサイクにはそんな余裕がないから、思いが一途でウソがないことがわかるんだ」

まだ高1なのに、いずみはよくここまで自分なりに分析しているものだと感じてしまう僕。

「だから今は本命はいらないの。男を見極める修行中ってとこかな。ひなたの面倒を見てたらそんな余裕もないしね」

それを聞いた僕は、いずみが言った前半の言葉を受けて、図々しい発言をしてしまった。

「いずみのその条件でさ、なんか僕に当てはまってない？なんなら飯の彼氏に…あ、もちろん飯のままだよ。なつてあげよう…か？（

ん　　）　　ッデヘヘ」

いずみはキョトンとした顔で僕を見つめていたが、そのうち噴き出した。

「（＊　m　＊）ププッ。ごめん、やっぱ無理。私、顔は面食いじゃないけど、体型はスリムな方がいいの。悪いけど卓くん、軽いメタボ入ってるじゃん」

「Σ（　□　　）　　）　　ガビン…そっかあ、ここ10年で10kgは太ったからなあ…」

「え？元々そんなじゃなかったの？」

「全然違うよ。中学時代は野球部でバリバリだったんだから」

「卓くん、もしかしてキャッチャー？」

「あのね、人の体型だけでポジションを勝手に決めつけないように！」

「じゃあどこ？」

「・・・・キャッチャー」

「きゃははは（Ｔ　Ｔ）ノ　　シ　　ばんばん！やっぱリー！」

僕は苦笑いするしかなかったが、こんな会話でさえ、すごく楽しいひとときに思える。

本当はこんなところに通わせてはいけないことだとわかっていても、いずみたちを拒むことができないでいる。

特に、最近のひなたちゃんは、教えた手話も上達し、すすんで骨伝導補聴器をつけるようになったから、大きな声で絵本を読み聞かせることを始めた。

その間、いずみは自分の愛読している本を読んでいる。表紙を見るといつも決まってアガサ・クリステイのミステリー小説。

特にお気に入りを見てみると、主人公以外の登場人物が、全員犯人だった作品が感動したそうだ（　　；

そんなこんなで、先の見えないこれからの僕たち。でもいつかは離れるときがやって来るのだろう。

いつかは。。。

（続く）

#### 第4章　＼落ち着く場所＼その1　突然の悲報

私は父のいる病室から窓の外を眺めていた。

と言っても、景色が目に入ってるわけじゃない。

中途半端な高さのビル群の中に紛れて建っている病院からの眺めなんて、風光明媚でも何でもない。

今の私はただ、風情を感じる環境にも見放され、心も癒されないまま現実と向き合わされている。

英之さんのキャバクラ通いが後を絶たない。

取締役だから、接待だの付き合いだの色々あるのはわかる。

だからって、お気に入りキャバ嬢と毎日のようにメールを交わさないと仕事ができないことはないはず。

男ってみんなそうなの？

英之さんには何でも相談してきた。また相談にもよくのってくれた。

それが結婚してからというもの、別人のように変わってしまった。怒りっぽくなったとか、そういうんじゃないけど、ただ優しさや思いやり、いたわりが消えてしまったように思える。

確かに私は、ひなたをあんな障害のある子に産んでしまい、自分を責め続ける毎日。

そんな私を見ているのがイヤになっても仕方ないと思う。

だからって、そんな遊びに興じる理由にはならないと思うのは私の勝手なわがまま？

英之さんはひなたには好かれている。私がひなたを叱ったあとで、必ずひなたを特別な優しさで溺愛し、猫なで声でなぐさめる。

まるで私が悪者。でも彼がするのはそれだけ。まさにイイとこ取

り。

もう昔のように何でも話し合えた頃のようにには戻れない。

私は…是枝英之という自分の亭主に対しての愛情なんて、とつくに冷めてしまったような気がする。というか、結婚生活自体に幻滅してしまっただのかもしれない。

この時ふと、卓さんのことが頭に浮かんだ。

本当は比べてはいけないのだけれど、つい卓さんと英之さんを比較してしまう。

あの頃は楽しかったな…

彼との初デートから、あんなに笑えたことは一度もなかった。

ファミレスで初めて一緒にごはんを食べたときや、砂浜でのデート。

美智代と翔子も交えて一緒に遊んだテニス。

卓さんの部屋で生まれて初めて食べたインスタント焼きそば。

卓さんは、私と結婚してからも変わることはなく、いずみにも優しく接してくれた。

あの頃は最高に幸せだった…

でも…でもやっぱり卓さんも男。。

あんな真面目な人でも甘い誘惑には勝てなかった。

隠さず、一言でもあの時言ってくれたら今頃はまだ。。

「ゆりか…何考えてる？」

ハッと我に返る私。

ベッドから父が心配そうに私を見ていた。

『いけない…現実逃避してるばかりじゃ先に進めないわ』

今思えば、とても懐かしい日々。

そうよ…そうなのよね…あの頃のこととはとうに過去の話。  
それは遠い遠い思い出の話にすぎない。。

「ん…何も考えてないよ。パパ。少し疲れてるだけ」

「…そうか」

父が何か言いたげに、私の方へ顔を向けている。

「パパどうしたの？トイレ？連れて行くよ」

「いや…何でもない」

父が口を真一文字に結んで天井に視線をそらせた。

「ママ、ひなたを迎えに来たよ。おじいちゃん今日も元気？」

「ああ、なんとか生きてるよ」

学校帰りのいずみがやって来た。おそらく今日もこれからひなたを連れて、卓さんの所へ行くのだろう。私がそのことを薄々気づいてることくらい、いずみだってわかってるはず。この子は勘がいいもの。

ここ1、2か月は週末の土日しか行かなかったのに、最近では今日のような金曜日から週3回も行くようになってる。

そんなに卓さんのところがいっぱいだろうか…？

なぜだろう？しかもひなたまで。。

「ママ、今聞いちゃったよ。ママは今もおじいちゃんのこと、パパって言うんだねw」

「（「」；）えっ？だって…ママのパパだもの。おかしい？」

「（\* m \*）ププツ まあいいよ。慣れってなんか怖いねw」

いずみはひなたが寝ているのを確認して困った顔をする。

「これじゃ起こすのもかわいそうだよね…」

「夜寝てくれたらいいんだけど…あの事件以来、なかなかね…」

困り果てたいずみが腕を組んで考えていたそのとき、私の携帯に着信があった。

「ママ、メールだよ」

「違うわ。電話よ。知らない番号だわ。どうしたらいいかしら？」

「非通知じゃないなら出てみたら？」

私は一抹の不安を抱き、通話に応じた。

「もしもし。失礼ですが、是枝英之さんの奥様でしょうか？」

事務的な声が私に確認を促す。

「はい…そうですか」

「こちらは 病院です。誠に残念ですが、たった今ご主人がお亡くなりになりました」

「！……！」

（続く）

## その2 そのとき僕は

最近の僕は、少しずつラーメン生活から脱却している。もちろん健康のためだ。

今日は帰宅早々、実家のおふくろが置いて行った切干大根で味噌汁を作ってみた。

何分煮ればいいのかわからないから、鍋の中を確かめながら作業をしていたのに、見た目では頃合いがわからない。

味噌汁はグツグツ沸いているのに、大根が思うようにならない。火を止めて、ハシでそれをつまんでみる。

縄を短く切ったみたいだ…それにまだ堅そうだ（ー）；

さてどうしたものか？大根とはこんなに煮えないものなのか？僕は何気に切干大根の入っていた袋に目を見ると、何やら説明書きの表示がしてあるのに気付いて愕然とした。

“はじめに、本品を水でもどし…”

ガ ΣΣ（。D ;）ン！！

しょっぱなの、たったこれだけの説明書きで、自分の愚かな間違いが露呈した。

水にもどすなんて作業、そんなの生まれてこのかた経験がない。

「あゝあ、失敗だ…仕方ないや。ラーメン食べるしかないな」

僕は味噌汁の入った鍋は放置して、自慢のラーメン棚から今日の一品をチョイスする。

そしてお湯を沸かそうとしていたその時、僕のケータイにいずれみからの電話が。。

「もしもし。いずみどうしたの？今日はうちに来る日じゃなかったっけ？」

「うん…そのことで電話したの。行けない理由ができちゃって…」  
明らかにいつものいずみではないことが、ケータイ越しからでもすぐわかる。

「卓くん…落ち着いて聞いてね。あのね、あの英之がね…」

「是枝くんがどうかしたのかい？」

「うん…死んじゃったの」

「（・・）…は？」

「だから英之が死んじゃったの」

Σ（□）；えええっ？！

「どういうこと？別に病気じゃなかったよね？もしかして事故？」

数秒のためらいの後、いずみはその原因をハッキリと口にした。

「英之は…会社で人に刺されちゃったの。なんか女の人にらしい」

「なんだって！？刺されたって…誰に？」

「だから女の人」

「じゃなくて、その女の名前とかわかるの？」

「まだ詳しいことはちよつとわからない…ひよつとしたら英之の浮気相手だったかも」

「そんなまさか…」

「でも人殺しはいけないよね」

意外にも、いずみが淡々としゃべっているのに驚いた僕。

「どんな理由があっても殺人は許されない。で、その犯人は逃げるの？」

「ううん。すぐに捕まったみたいだよ」

「捕まった？逃げなかったんだ？」

「だから詳しいことは私もよく知らないの」

「あ、ごめん。ゆりかさんは…ママはどう？取り乱してない？大丈夫かな？」

「そんなんじゃないよ。その逆」

「逆？」

「怖いくらいに落ち着いてるの。でも何を話しかけても上の空で…」

「いずみ、それは落ち着いてるんじゃないくて、ママはショックを通り越してしまっただんじゃないかな？」

「…私にはなんとも言えないけど」

行きたい！今すぐゆりかさんのそばに行つて、何かしてあげたい！でも今の僕はそんな立場にないんだ。

「是枝くんのご遺体は…今そこに？」

「ないよ。英之は今、しゅ…手動解剖？とか言ってたっけ？」

「手法解剖だろ」

「うん、それぞれ。今はまだそっちの方に行つてるから」

「そうなんだ。向こうの身内の人にはもう連絡したの？」

「うん。これからみんな来るみたい」

「そっか…なら僕が今そっちに行くのはやっぱりマズイね。元亭主が元妻のそばに行くなんて、変に誤解されるだけだし」

電話の向こうで少しの間を置いて、いずみが返事をした。

「うん。そうだね…そうだよね」

「ごめん、いずみ。正式な葬儀の参列には必ず行くから」

「うん。じゃあその時待つて。必ず来てね」

いずみと通話の後、ものの1分経つか経たないうちに再び着信があった。

「森田、驚かないで聞けよ。本社で大変なことが起きた！」

小松部長からだ。

「本社の是枝本部長が刺されて亡くなれたんだ」

「は、はあ……」

部長は僕のリアクションに不満だったようだ。

「何で驚かない？これは殺人事件なんだぞ！」

「部長が驚くなって……」

「そんなことに素直にならなくていい！とにかく是枝本部長は、以前俺の部下だったし、お前とも同僚だったから縁が深い」

「そうですね……」

「たぶん葬儀は社葬になるだろう。そのつもりで支度をしておけ」

「は、はい」

「森田、お前ひよつとして知ってたな？」

「え？…あ、はい。実は今ちよつと前に知り合いから。」

「何だ、そうだったのか？じゃあ是枝本部長を刺した女も誰か聞いたんだな」

「えっ？」

「なら良かった。さすがの俺もお前には言いにくかったんだ。数年前の一件のこともあるしな」

「えっ？一体何のことです？」

「あのときの慰安旅行でのスキャンダルのことだ。お前が思い出したくない気持ちもわかるから、言いたくなかったんだ」

僕は不思議でたまらなかった。何で今、小松部長がそんな過去の話を持ち出すのか。

「すみません。僕あの…意味がわかりませんが…（^ー^；）」  
小松部長は明らかに機嫌が悪くなった。

「何だよ！お前、知り合いとやらの聞いたんじゃないのか？」

「聞きましたけど……」

「なら意味がわかるじゃないか！わざとらしいボケをするな！」

「はあ……」

「しかし理由が全くわからん。なぜ三木綾乃は是枝本部長を刺す必要があったのか…」

「エエエエΣ(´□´)・エエエエ!？」

(続く)

### その3 わからない。

滞りなく葬儀は終わった。

葬祭場の出口で、参列者の人の群れに深々とおじぎをし終わると、次に私は何をしたら良いのかわからなくなった。

頭の中は空虚そのもの。何も考えられないから、ただ突っ立っているだけの私。

今の私はたぶん、人の目から見れば夢遊病患者のように映っているだろう。

目に力も入らないから、うつろになっているのが自分でもわかるし、姿勢も猫背になっている。

不意に、横から私に声をかける女性がいた。

「ゆりか、すっかりしてね。あんたにはいずみちゃんとひなたちゃんがいるんだよ！」

美智代が知らないうちに私の肩を支えてくれていた。

「そうよゆりか。今は辛いけど、あなたたち家族にはまだまだ未来があるんだから！」

翔子も知らないうちにやって来て、私の手を握っている。

「あ…ごめんね。美智代も翔子も。私、大丈夫だから」

「無理しないの！アタシ、この後も時間空いてるから、ゆりかと一緒にいるよ。今夜家に泊めてもらってもいい？」

美智代はいつも優しく気遣ってくれる。親友ってホントありがたいと思う。でもそれって逆に気の毒…

「美智代の方こそ無理しないで。不幸のあった家にわざわざ泊まるなんて、気持ち悪いでしょ」

「そんなこと言わないの！アタシがゆりかと一緒にいたいのに！今夜は思いつき話そ。思いきり泣いてもいいんだよ」

「良かったら私も泊めさせて。しばらくいずみちゃんともお話して

ないし」

「翔子……」

「じゃあ決まりね！私、家に電話してくるから、またあとで来るね」

みんな私を心配してくれている。

みんな私が夫の死のショックと悲しみでウツになってると思ってる。

それはそうかもしれない。今の私がこんな状態なら……

でも正直な話、それは間違っている。

確かに人の死はショックなことだけど……悲しみはそれほど感じない。

彼との関係……英之さんと私の仲はすでに完全に冷え切っていた。会話のない夫婦。家庭を顧みない夫。異常なほど多い接待。そして度重なる女遊び。

日に日にエスカレートしてゆくさ中、彼に降りかかった天罰。死に値するほどの罪があるかというところ、決してそうではないかもしれない。

けど、こんな状況で悲しむことなんて、今の私には正直不可能。もし、私がここで大泣きしたとしたら、それこそ名女優。結局、葬儀中にも告別式にも、1滴の涙も出なかった私。

こんな私って、よっぽど薄情な女なのかな……？

さっきまで何も考えられなかった自分が、知らずのうちに自己分析しているなんて、妙に可笑しくてたまらない。

こんな私の今の表情を見ている人たちは、きっと頭がいかれてると思ってるに違いない。

ふと、英之さんの遺影を見た。

予期せぬ事態に帰らぬ人になってしまった夫。

でも私は彼の死よりも、加害者の犯した行動の謎ばかり考え始めていた。

三木綾乃……かつて卓さんと問題を起こした女。  
彼女がなぜ英之さんを殺すことになったのか？

お通夜から告別式の間、誰もその理由を教えてはくれなかった。  
もちろん私が聞きもしなかったせいもある。

でもきつとまわりはみんな知っているはず。殺人事件だもの。テレビをつければきつと、各局のワイドショーが報道していることだろう。

外にはマスコミ関係のリポーターの姿がチラホラ見え、カメラマンに向かってマイク片手にしゃべりまくっている。

私にインタビューもしてないクセに、たぶん勝手な憶測でものを言ってるのだろう。

きつと親戚の人たちが、私に配慮して会見は断ったのかもしれない。

身内はみんないい人ばかりだった。

控え室でテレビをつけないのも、私に事件の背景や内容を伝えたくないためだろう。

——でも私は知ってしまった。

テレビなんか見なくても、自分のケータイのワンセグや、その日のトピックニュースなどがすぐに閲覧できる。

最新記事の閲覧でわかったこと。三木綾乃の自供によるものだ。

彼女と英之さんは学生時代からの顔見知り。

この記事によると、長年恋人同士だったらしい。

ただ、彼女にとってはその関係が終わっておらず、現在進行形が続いていた。

そこへ私と英之さんの結婚が内定し、彼女は関連子会社に飛ばされた。

つまり、恨み辛みが凝縮し、限界点を超えた上での犯行ということになる。

彼女にとっては、英之さんはまさに裏切り者だったのだ。

今わかつてるのはここまで。これだけではまだまだ疑問が残る。

なぜ、何年もこんなに月日が流れてからの犯行なのか？

当時なぜ、英之さんに一途だった彼女が、突然卓さんを誘惑する行動に出たのか？

この誘惑に関してはまだ、マスコミ報道はされていない。

私の推測にすぎないけど、ひょっとしてあれは、英之さんへのあてつけ？

彼に振り向いて欲しくて、害のない卓さんを利用しただけだったら？

うん…それなら辻褄は合う。充分あり得ること。

でも…でも、もしあの当時、私がここまでわかっていたら…

私と卓さんは離婚する必要がなかったかもしれない。

「ゆりか！ねえゆりかっ！」

美智代の呼びかけに、推理の世界から我に返る私。

「ハッ（。〇。）」

「ボーッとして何考えてたの？気持ちわかるけど、ゆりかがそんなんじゃ子供たちが可哀そうよ。あんたは母親なんだからね！」

確かにそう…美智代の言うとおり。

でも気持ちはわかると言った美智代だけど、私の本当の気持ちはたぶんわかってはいない。

「・・・ごめんなさい。自分ではしっかりしなきゃって思ってるんだけど…」

「幸い、向こうで森田がひなたちゃんの面倒見てるからいいけどさ」  
美智代に言われて、少し離れたところにいる卓さんとひなたに目

をやった。そのとなりにはいずみもいる。

「そうだったわ…卓さんにはずっとお世話になりっぱなしで…」

美智代があきれ顔になるのもよくわかる。私自身、ろくに母親らしいことをしていないもの。情けない自分。

そんな恥じるような、そして申し訳ないような気持ちで再び卓さんとひなたたちを見やると、私にとって衝撃的な光景が目映った。

——手話だ。。

さっきまでアヤトリをしていたはずなのに、卓さんは手話でひなたと会話している。

いつの間に手話を…

しかも、ひなたに向かって優しい笑顔で。

手話特有の不自然なほどの大きな口パクと表情で。

…いや、口パクじゃない。ちゃんと声も出している。補聴器をしているひなたに、声でも聴こえるようにちきんと話している。

私は衝撃と共に、感動を覚えた。

「ねえ、ゆりか」

となりにいる美智代が穏やかな口調で言う。

「え？」

「今こんなときにここで言うのも、不謹慎なんだけどさ…」

「いいわよ。美智代だもの」

「どういう意味？^ー^； まあいいけど」

こんなときに、こんなジョークが言えてしまう私って、ホント馬鹿みたい。精神が狂ってる。

「ごめん。つい…」

「いいのよ。全然気にしてないから」

「なら良かった。で、さっき美智代が言いかけた続きって何？」

「えっとね…」

美智代は更にそばに寄って来て、片手で口を半分覆いながら小声で私に耳打ちした。

「アタシ、思うんだけど、あんたが頼れる人は森田しかないんじゃないかな？」

私はその意見に言葉が返せなかった。

無言のまま、ただ卓さんを言葉にならない複雑な気持ちで眺めているしかなかった。

ふと、何気に視線を５メートル程横にずらすと、車イスの父が卓さんたち３人の光景を、私同様じつと眺めている姿が見えた。

昔から“卓さんギライ”の父。一瞬ヒヤツとしたけれど、父の表情は意外にも穏やかで、むしろかすかに微笑んでいるように見えるのは、私の錯覚なんだろうか？

（続く）

#### その4 対面・須藤源一郎

ひなたちゃんは、父親である是枝くんの死の意味を深くは理解していないようだ。

年齢からしてもまだ幼いのだから仕方ない。ただ、彼がいなくなり、しばらくは戻って来ないという認識はあるようで、時折とても悲しい顔をする。

僕もひなたちゃんには、いまだ慣れない手話と口頭で、いささか曖昧な説明しかできなかった。自分でも苦笑するほどに。

その内容は、名作ドラマや子供向け番組でもよく使われるベタな話。

「パパはね、お空の星になったんだよ。そしてね、天の方からひなたちゃんをずっと見守ってるんだよ」

現代の小学生でもドン引きしてしまいそんな説明しか浮かばなかった僕。

手話だから、身振り手振りや表情もオーバーアクション。

こんな自分が妙に恥ずかしくてたまらなかった。

でもひなたちゃん自身は、ポカンと口を半開きにしたまま聞き入ってくれた。

そばにいるいずみもそれはわかっていているようで、

「卓くん、そんな『失敗した』って顔しなくていいよ。ひなたは純粹な子だよ。冷めた子供とは違うから」

とフォローしてくれる。

「そ、そうか…なら良かったけど（^ー^;）」

「ひなたは卓くんの話なら何でも聞くんだから安心して」

「そうなのかな？ だったらすごく嬉しいんだけど」

「見りゃわかるでしょ。じゃないと、自分から面倒な補聴器なんて

つけないもの」

「う、うん。そうかもしれないね・・・不思議だけど」

「ホント不思議だねw」

いずみも優しい姉の目で、可愛い妹・ひなたを微笑ましく見つめていた。

不意に、背後から気配がした。振り向くと、電動車イスに乗った人物が目の前まで近づいて来る。それはまさにドキッとする瞬間。今日、この場所で車イスに乗っている人物はただひとり。

“須藤源一郎” 通称ゆりかパパ。

僕は緊張の極地に直面した。葬儀中は、遠くから間接的に姿は見ていたが、直接会話することも近寄ることもなかった。できれば僕もその方が良かったし、ゆりかパパだってきっとそのはずだと思ってたのに…

それなのになぜ…？

「卓くん、久しぶりだね」

ゆりかパパは笑顔ではなかったものの、機嫌が悪いようでもなかった。

「ごぶさたしてます。お父さ…じゃなくてその…あ、専務さんへ」

「そのどちらも違うな。私はもう本社を定年退職している」

そうだった。そう言われれば知っていた。僕は緊張状態に陥ると、ろくに言葉も出ないし、しゃべれたとしてもろくな言葉ばかり出る。「失礼しました。お、お元気そうで…」

「元気でもないさ。今もずっと入院してるんだ。私もそう長くはない」

「そうですか…」

この僕の一言にいずみがコケた。

「卓くん、“そうですか”じゃないでしょ？否定しなきゃ（＾―＾；

）」

「Σ（「□」；ハッ！しまった…」

苦笑するゆりかパパ。

その時、ひなたちゃんがゆりかパパの元へ寄って行き、

「ジジ…ジジ」と甘えた声を発する。

このときの緊張した僕は、再び愚かな聞き違いをしてしまう。

「ひなたちゃん、じじいじゃなくて、おじいちゃんって言うてごらん」

いずみもゆりかパパも目が点になり、一瞬、時間が止まったように感じられた。

その静寂な空気を破ったのがいずみ。

「卓くん…（＾―＾；）ひなたはジジって言ったの。ジジいじゃないから」

Σ―11（「」；）――1ええっ！！？

「君も相変わらずだな」

ゆりかパパが少し呆れ顔になった。無理もない。

「これはとんだ失礼を…（；）、Aアセアセ」

「そんな緊張するんじゃない。何も気にしとらんよ」

「はあ…」

もつと不機嫌になると思ったゆりかパパが、意外にも普通だった。年のせいである程度温厚になったせいだろうか？

「卓くん、君はいずみやひなたと随分仲がいいようだね」

突然の質問に戸惑う僕。でもゆりかパパの疑問は当然のこと。

いずみとならともかく、是枝くとゆりかさんの間に産まれたひ

なたちゃんが、なぜ僕と仲が良いのかなんて、誰でも不思議に思うだろう。

「あの…話せば結構長くなるんですが…話します？」  
「いや、知ってるからいい」

「（・・）・・・は？」

その言葉の意味の理解に苦しんでいる僕に、追い打ちをかけるようなゆりかパパの次なる言葉が。

「君にはすまないことをした…よろしく頼む…」

そう言っただけでゆりかパパは車イスを反転させて去って行った。まるで狐につままれたような話。

「卓くん、どういうこと？何でおじいちゃんが卓くんに謝ったの？」

「いや、それはちょっと僕にも…」

いずみには到底言えない理由。ゆりかパパこと須藤源一郎が、僕とゆりかさんの離婚劇を仕組んだ黒幕だったことなんて。

でもこれはあくまでも、茜崎さんの推理にすぎなかった。だから僕も心の底では信じたくない気持ちでいたし、そうであって欲しくなかった。

しかしながら、ゆりかパパのこの一言で、茜崎さんの推理が証明されたことになる。

あの一件のことで僕に謝ったとしか考えられない。それなら全ての説明がつく。

「森田ちよつと！」

美智代さんが僕を呼んでいる。

僕はいずみたちから離れて足早に彼女の元へ行く。

「あんたよく、我慢できたわね」

「え？我慢？」

「だって、ゆりかには言えないけど、黒幕のジジイじゃない。私だつたらハラワタ煮えくり返って何するかわからなくなるわ」

「そんな物騒な（　　）」

「あんたはよつぽどのお人よし、人格者かのどつちかね」

「僕は前者の方だと思えますけど。人を恨むと疲れますから」

「（　　）」 3 フウ… あんたらしいと言えばあんたらしいけどね」

そこへちようど、ゆりかさんもやって来た。口をつぐむ美智代さん。

「卓さん、パパと何話してたの？気まずかったでしょ？大丈夫？」

「ええ、僕は平気ですよ。案外、普通でした。ただちよつと…」

「ちよつと？」

「ええ、僕がいずみとひなたちゃんと仲がいいことを、前から知ってたように…ゆりかさん、言いました？」

ゆりかさんは目を丸くして仰天する。

「まさか！英之さんと生活している私にそんなこと言えるわけないじゃない。だいいちパパは“卓くん嫌い”だったし」

「そうですよね…（　　）」

うーん…何かまた謎めいてきたぞ？

だとしたら、一体誰がゆりかパパに事情を話したんだろう？

そしてもうひとつ気になること。。

ゆりかパパが僕に『よろしく頼む』と言った意味をどう受け取ったらいんだろう？

（続く）

## その5 手巻きパーティ

ウソのように平常通りの生活に戻った。

と言っても、気力が出てきたとか、生活にリズムが出て来たとか、そんなんじゃない。

私はただ、淡々と生きていた。そう、まさにそんな感じ。

何の喜怒哀楽もなしに、ただ淡々と…

朝はいずみのお弁当作りから始まり、炊事洗濯を終えるといつものようにひなたを連れて父のいる病院へ。

午後になると、学校が終わったはずみがひなたを連れに来る。

ほとんど今までとは変わらない。英之さんがいなくなってるのに、いつもの生活リズムと同じ。

家に閉じこもっている時間はないから、私にとってはこの方が精神的にも良いのかもしれない。

ただひとつ違うのは、週末の土日になってもいずみたちは、卓さんの家へ行かなくなったこと。その必要もなくなったというのが正解かもしれない。

それは卓さん自身が、週末の2日間だけ我が家に来るようになってから。

早いもので、英之さんの四十九日法要も過ぎ、季節も移り変わろうとしていた。

「ただいま…」

いつものように私は疲れきって病院から帰宅する。

「おかえりママ。今日は手巻きパーティだよ。もう食べてるけどw」  
いずみがにつこり微笑んでいる。見るとテーブルには、セルフで作る寿司ネタの材料がズラリ並べてある。

「すごいわね。みんないずみが準備したの？」

「うん。スーパ―で手巻きセットが売ってたもん。それにちよこつと付け加えただけ」

「そう…でも普段手巻きなんてしないのに珍しいわね。何かの記念日？」

すでに口のまわりにごはん粒のついたひなたが、一言で私に教えてくれた。

「タンジョービ」

「ええっ？誕生日って誰の？ママでもないし、あなたたちでもないでしょ」

いずみが次に食べる手巻きのネタを物色しながら私に即答する。

「卓くんだよ」

「あ…」

そう言われればそうだった。

しかもまだ夫婦のときにはたしか手巻きパーティーをしたはず。いずみはそれを覚えてたんだ。

「でも卓さんの姿が見えないけど？」

「さっきまでいたんだけど帰ったよ。5分前くらい前かな」

いつもの卓さんなら、私が帰宅するのを確認してから、入れ替わりのように去って行く。

きつと子供たち二人だけを家に残さないようにするための彼の心配りだと思う。例の事件のこともあるし…

それなのに今日は先に帰るなんて珍しいこと。

「用事でもあったのかしら？」

いずみが自分でチョイスした具材を、海苔の上に敷いた寿司メシと巻きながらそっけなく言う。

「違うよ。卓くんにお祝いしてあげたら照れちゃってさ。ママに顔合わせの恥ずかしいからって帰っちゃったの」

「そんな……まあ卓さんらしいと言えばそうだけど」

「でもね、手巻きはちゃんと5本食べて行ったから大丈夫。照れる

神経と食べる神経は別みたいw」

「いずみ、失礼なこと言わないの^|^」

「>( ; ^ \_ ^ ) エヘ」

「おいしそうね。ママも早く食べたいわ。着替えて来るわね」

「食べて食べて。カリフォルニア巻も作れるんだよ」

テーブルにはアボカドやサーモン、かにスティック、クリームチーズまである。

「卓くんは一通り全部食べちゃったんだよ」

「そう。相変わらずね。あの人は食いしん坊だから、目に入ったものは食べておかないと後悔するタイプなのよ」

「へー、さすが元夫婦！」

「コラ！からかわないの！」

やはり“卓さん効果”なんだろうか？彼が来るようになってから、ひなたの表情が明らかに変わったように思う。

あの事件以来のトラウマ。夜になると、まるで人格が変わったかのようにおびえてしまうひなたが、今では笑顔でごはんを食べるまでにまで回復している。

卓さん、ありがとう。

私は彼に、言い表せれないくらいの感謝の気持ちでいっぱいだった。

翌日、父のいる病院に、警察の人がひとりやって来た。おそらく私服の刑事って、こういう人のことを言うのだろう。テレビに出てくる若手のカッコイイ男性とは程遠い。どうやら私を尋ねて来たらしい。

「是枝ゆりかさんですね」

「はい。そうですが…どうかしましたか？」

その刑事さんは、ベッドに父がいるのもお構いなしに用件を話しました。

「実はですね。やっと三木綾乃が口を割りましてね。一応報告に参りました」

「そうですか…御苦労様です」

そう…三木綾乃は、犯行は認めているものの、動機が曖昧だった。メディアでは、単に片思いからくる逆恨みだと報道されただけで事件は終結している。

——だが、違っていた。そんな単純なことではなかった。

この後、刑事さんの口から聞いた三木綾乃の自供とその真実に、私が受けた精神的ダメージは大きすぎた。

（続く）

## その6 トークランチ

「卓くんすごい！ちゃんとできてるー！」

しきりに感心するいずみ。

「だろ。結構これ得意なんだ」

「へーえ」

ちよっとだけ鼻高々な僕。

ゆで卵の殻を剥いて、先っちょを一口かじったいずみが、中からトロ〜っと出てくる黄身を口で嚼むように二口目を頬張る。

「よくこんな上手に半熟が作れるね」卓くんが得意なのはラーメンだけかと思った」

「そんなことはないよ。ラーメンの具になるものなら、たいてい勉強したんだ」

「でもやつぱりラーメンからは離れられないんだね（^―^;）」

「僕の作り方は他の人と違うんだ。卵を水から入れないで、沸騰させてから6分きっかり茹でるんだ。そして火を止めて1分放置したあと、冷水に3分…」

「説明は別にいいよ（^―^;）」

「お湯に酢を入れておいたら殻が剥きやすく…」

「だからもういいって（^―^;）卓くん、熱入りすぎw」

「（ ; ; ）ゞエヘヘ…ごめん」

「じゃあさ、味付メンマも手作りするの？」

「あのね・・・それは買うよ（ ; ; ）」

「（ノ――）ノコケッ！」

この日、僕のアパートに来ていたのはいずみ一人だけ。

話に聞くと、ひなたちゃんとゆりかさんは、是枝くんの実家、つまり義理の親御さんのところに顔を出しに行ったとのこと。

いずみの父親は茜崎さんだから、自分は関係ないと言って一緒に

行かなかったそうさだ。

「さて、こっちの茹で上がりはこんなもんかな」

そう。僕は同時に鍋でラーメンも作っていた。

「ほら、今日は“コク旨とんこつ醤油”だよ。半熟卵もトッピングするからね」

「私、2個もらっていい？」

「今1個食べたのに？」

「だってまだ5個あるじゃん」

「ハハハ、そうだね。いいよ。遠慮しないで食べなさい」

「、（、、）／わ〜い」

無邪気に喜んでくれるいずみはホントの娘みたいで可愛い。グレもしないで明るくここまで育ってる。女子高生にもなったら友達と遊んでる方がずっと楽しいはずなのに…

今の自分はつくづく幸せもんだと思う瞬間でもあった。

できれば…許されるなら…こんな日がずっと続くといいのにな。

「卓くん、私何すればいい？」

いずみの言葉に幸せの余韻から我に返った僕。

「じゃ、じゃあいずみはごはんついでくれる？」

僕は出来上がったラーメンをどんぶりに移しながら言う。

「私はラーメンだけでいいよ。どっちも炭水化物だから太っちゃうもん」

「そっかあ。でも僕にとってはラーメンライスが定番だからなあ…」

いずみの言葉にちよつとだけしよげた僕。それを見たいいずみが

「卓くんは食べていいんだよ。私が卓くんの分だけ茶碗によそってあげるよ」

と、いきなりごはんを山のように盛るいずみ。

「はい、どうぞ」

「ちょ、ちょっと…いずみ、それはいくらなんでも…」

僕はいずみの行動に面を食らった。

「ん？多すぎた？」

「そうじゃなくてさ…あのねえ、ごはんの真ん中にハシを突き刺さないで欲しいんだけど…」

キョトンと僕を見つめるいずみ。

「あ、やっぱ気になる？」

「一応…」

「だってハシ置きないでしょ。一瞬迷ったんだよね（\*^\_^\*）」

「そうは見えなかったけど…ま、いつかあw」

「そうそう。細かいこと言ってたらラーメンのびちゃうよ！」

時々いずみには、意表をつかれる行動と言葉遣いをされるけど、これはこれで変わった刺激があつて、楽しいものなのだ。

テレビを観ながら二人で食事していると、おもむろにいずみが話しかけてきた。

「そう言えば、マッサージチェアが見当たらないけど、片付けちゃったの？」

「あー、あれはまだ梅田さんどこにあるかな」

「！？エエエエ（。〇。；）エエエエ！？まさかずっと前に貸したつきり？」

「そうかも。そう言えば全然気にならなかった^\_^」

「ダメじゃん…」

「（A）（ゞデヘヘ」

「あれ、気持ち良くて好きだったのになあ」

「いずみが前にそんなこと言うから、梅田さんに勘違いされそうになっただぞ」

「（・―・）ン？勘違い？…ああ、卓くんが私を買春してるって思われたこと？」

「だからそんな言葉すぐ言うなって！買春だの売春だのって（＾  
＾；；A」

「売春とは言ってますん！」

「だつたつけ？＞（；＾―＾）やば…」

会話が一旦途切れ、ラーメンもほとんど食べ終わっていたはずみが、再び僕に話しかけて来る。

「ねえ、卓くんはこのまま一生独身でいるの？」

「これまた意表をつかれた質問に浮足立つ僕。」

「そうかもしれないね（―；僕のとこになんて、もう来てくれる人なんかいないよ」

「そんなのわかってるからハッキリ言わなくてもいいのに」

「（（ノ―ω―）ノバタツ」

「でもさあ、これが小説だったらさあ、最後はどんでん返してあるじゃない？」

「最近、小説はほとんど読まないんだ＾―＾；」

「でも普通はあるの！じゃないとつまないでしょ？」

「まあね＾＾；」

「もし、卓くんと私がカップルになったら、大どんでん返しだよね？w」

「あり得ないよ（―；」

「あり得ないから小説なんだよ」

「読者から苦情が来ると思うよ。話がブツ飛び過ぎ！って」

「そうだよねwo（＾＾）oキヤハ」

こんな和やかなムードが一変したのが、この5分後に来るゆりかさんからの電話だった。

（続く）

## その7 ゆりかの知った事実

英之さんの実家には、午前中のうちにお暇いそまつした。

お義母様とお義父様は私には優しかった。

哀れな未亡人になってしまった私を気遣ってくれたせいもある。でも本当の理由はそれじゃない。

お義母様たちは知っていた。三木綾乃の自供内容を。

私同様、警察から教えてもらったそう。

ご両親とも、まだショックのあとが消えない表情をされていた。

親御さんにしてみれば、自分たちの大事な息子が、人を罾にかけ  
る計画を実行していたなんて、信じるに値しないのが当然の話。

私だってそうだった。警察からこの話を聞いたときは、頭を殴ら  
れたような感覚に陥った。

英之さんが三木綾乃を影で操っていたなんて…

私と卓さんの仲を引き裂くための計画だなんて…

だとしたら、私は英之さんの手の上で踊らされていただけ…

まんまと彼のシナリオ通りに動いて来ただけの話。

なぜそんなことをしたんだろう？

私と卓さんを離婚させてまで、私と一緒にいたかった理由は何？  
本当に私を愛してくれていたから？

もう誰も信じられなくなる。信じられる人の基準は何？

信じてても騙される。そしていつも傷つくのは私。

誰も信じずに生きた方が楽ならそうしたい。

人を騙すのは良くない。人の心を踏み躪ってまで騙すのは絶対良  
くない。

その結果……彼は罰を受けた。

三木綾乃も加害者であり、被害者でもある。

英之さんのご両親の心中も複雑だったと思う。

不思議なことに、自分の実の息子を信じるより先に、三木綾乃の自白をそのまま信用していたのには正直驚いた。

でもその理由は、お義母様の話を聞くとすぐにわかった。

お義母様は、私に申し訳ないと言いながらも、事の次第を丁寧に説明してくれた。

そう、英之さんは三木綾乃を以前から両親に紹介していたそうだし、そして決定的な事実。三木綾乃は、私と卓さんが離婚する直前まで、ご両親と会食をしていたそうだし。

つまり、お義母様とお義父様に見れば、当然息子のところへ来る嫁は、三木綾乃だと思っていたらしい。

それだけご両親は、彼女の人柄もかっていたし、信頼できる女性と判断したそうだし。

それにもうひとつ。

私も警察から聞いてはいたが、彼女は自白の内容の中で、英之さんに暗示をかけられたと話している。全てが催眠術で指示され、暗示でマインドコントロールされる。

ご両親は、英之さんが催眠術の技術を持っていることを知っていたらしい。

私にとっても催眠術は苦い経験がある。思い出したくもないから、過去に記した日記も封印しているほど。

だから、以前英之さんが、寝付きの悪かったいずみに催眠術モドキのことをしたときは激怒したことがある。

そして三木綾乃の自白の最後をめる言葉。

彼女はそれを、英之さんのご両親宛てにと、手紙にしたためていた。

“ご両親、ご家族の方々や友人、知人の方々にはお詫びのしようもありません。

ただ私は…ずっと英之さんが好きでした。英之さんだけを見て来ました。

彼のためなら何でもできたのに…

私は長年、解けない催眠術の後遺症で、頭が常に朦朧もろうとしていました。

そして少し自分が正気になったと感じたとき、

彼はすでに別な女性と結婚することになっていました。

それが森田卓さんの奥さんです。

私は森田さんを誘惑して、離婚に導くのに成功しました。

当時の私は、猛烈に森田さんを本気で好きになっていました。

そのとき英之さんにかけられた暗示は強固なもので、それは何か月も持続しました。

自分でも矛盾に思えるのですが、これだけ森田さんを好きになっ  
ているのに、

この使命が終わったら、きっと英之さんと結婚できるという希望も同時に存在していたのです。

だから、その希望が完全に打ち消されたとき、私は長い長い暗示の世界から

やっと解き放たれることができたのです。

正気に戻ってから、暗示の後遺症は何年も残りました。

なにせ、英之さん本人が私にかけた催眠を解いていないのですから。

長い時間をかけて、やっと解き放たれた私の心には、  
もう彼に対する復讐の2文字しかありませんでした。

これ以上書くと、殺伐としてしまいますので、この後は省略させていただきます。

彼の四十九日も過ぎたので、このようなお話する決心を致しました。

私がすぐに何もかもお話してしまったら、英之さんは死後までもマスコミや社会から痛烈に批難され、葬儀も困難になるのは必至。ご遺族も肩身の狭い思いをされると思いましたので、ここまで沈黙を守っていました。

どんな理由であれ、人を殺める行為は許されるものではありません。

本当に…本当に申し訳ありません。

お詫びして許されるとは思っていませんが、下された判決には従順に対応し、

反省の日々を過ごして参りたいと思っています。

三木綾乃”

これだけ詳細な信用性のある手紙があったからこそ、ご両親は三木綾乃にたいして思い悩んでいる。

息子を殺された恨みは当然あると思う。かと言って、その恨みを100%三木綾乃にぶつけることもできない歯痒さもある。

そして、私への配慮。

「ゆりかさん、あんたもまだ若い。いい人ができたら私たちに遠慮しないで再婚していいんだよ」

私はご両親に深く同情した。

息子が殺されたというのに、怒りのぶつける場所もない現実。被害者でありながら、加害者でもあった息子のために苦しんでい

る。

“英之さん、あなた本当にとんでもないバカ息子だわ！”

結局、今になってわかってみても、何の意味も持たない。

みんなが不幸になった。被害者も加害者も、その家族も全て…

ただ、私が自分自身のこととひとっだけわかったこと。

私も相当愚かでバカな女だということ。

男を見る目が全くないから、不幸な目にしか遭わないんだ。  
いつも私は信頼できる人を見誤っている。

じゃあ卓さんは…？

彼はいい人。とってもいい人。

私は彼のせいで不幸になったわけではない。

だとしたら…だとしたら…

卓さんを不幸にしたのは私だ。信用すべき人を排除した私の責任だ。

そう、私はいつも自ら不幸の道を選んで来たんだ。

5分後、私は、自宅から卓さんのケータイに電話していた。

（続く）

## その8 マイナス思考（前編）

「もしもし卓さん？ゆりかですけど…」

その声と口調からは、まだ用件も言わないうちから何か切実なものが感じられた。

「どうかしましたか？体調でもどこか…」

「いいえ、体は大丈夫です。それよりも私、卓さんにお話ししなければならぬことがあって…」

「はあ…何でしょう？遠慮なくどうぞ」

僕はそう言いながら、そばにいるいずみをチラッと見た。

いずみはテレビを観ていてこちらは見ていない。

電話の向こうでゆりかさんが話し始める。

「私、卓さんに今までのお礼とお詫びを全くしてなかったの…」

「ちょ…ちょっと待って下さい。お礼って何ですか？そんなの必要ないですよ。それにお詫びだなんて、意味がわかりません」

いずみがひよいとコチラを見た。

「卓さんには長い間、どれほど子供たちがお世話になってきたことか…本当に申し訳なく思っています」

「いや、それはですね。僕が勝手にやって来たことなんで…」

「今まで子供たちを本当にありがとうございました」

「（・・・）…え？」

その過去形で終わった語尾からは、明らかに決別宣言とも言わばきニユアンスが隠されていた。

「卓さん、あなたへの感謝の気持ちは一生忘れることはありませんから」

「い、いえ…そんな感謝だなんて…」

「これからは人に頼らないで、私がもつと頑張って進んで行きます」

「そ、そうですね…」

やはりそうだった。いきなりだったので、少し動揺はしたけど、僕に大きなシヨックは特にない。

元々、僕がしゃしゃり出て行くことは失礼なことだとわかっていたからだ。

是枝くんの忌明けもしないうちに、元夫が家に上がりこむ常識の無さ。

これが世間に知られたら、ゆりかさんがどんな目で見られることか…

自分に甘い僕は、それをわかっていながら通い続けて来た。僕に弁解の余地はない。

いずみは勘がいい。電話の相手が自分の母親であることにすぐに気付いたようだ。

またその逆に、電話の向こうのゆりかさんも同様、こちらの状況を察知していた。

「いずみもそこにいると思うけど、今日が最後ということで納得してもらいます…」

「…はい。わかりました」

僕があまりに素直に返答するせいか、逆にゆりかさんを心配させてしまったようだ。

「卓さん、怒ってる？突然でごめんなさい。私が自分勝手なことばかり言つて…」

僕はすぐにそれを否定した。

「いえいえ、怒ってなんかいませんよ。実は…僕もわかってましたから」

「え？わかってた？」

「ええ。今冷静に考えれば、人の家族の中に土足で入り込んで引つ掻き回していた僕がバカだったんです」

「私はそうは思っていないわ。そんな言い方しないで」

「いいえ。謝るのは僕の方かもしれませんが。僕はゆりかさんの家庭がいつまでも円満でいることを願っているだけで良かった。それなのに僕は、いずみが受験生のときからつい関わり始めてしまったんです。世間体で言えば、こういうのはトラブルの元です」

「そうかもしれないけど、私はそんなことは全然…」

僕はゆりかさんの言葉を遮ってしゃべり続けた。

「是枝くんが亡くなってからも僕は図々しく何度もご自宅にお邪魔していました。悪いと薄々感じていながら続けてしまっていました。今日がいい機会です。ゆりかさんたちの新たな出発のためにも、僕のような邪魔者は断ち切って下さい」

ついに言ってしまった。僕の今までの心の奥につつかえていたものを。

普段、口ベタな僕がここまで一気に言えるなんて珍しい。

でも自分では何となくその理由がわかる。

僕は臆病者だ。だからこの時の僕は、単なる強がりでしかなかった。心とウラハラなことだけが口から先に出てくる。小心者で臆病な人間の特徴だ。

——これでいいんだ。これで…

そう言っ て自分に納得させた僕だった。

けれど、それに対するゆりかさんの返答は、僕の思いとは全く違う観点からだった。

「違う！違うの。そういう理由じゃないの。勘違いしないで。卓さん」

「…は？」

その意外なゆりかさんの言葉に僕はいささか驚きを隠せなかった。いずみがそばで頼杖をついたマジ顔でこちらを見ている。

「卓さん、私は自分にダメ出ししたの。自分自身を許せないのよ」  
僕はこんなことを口にするゆりかさんが不思議でならなかった。

「どうしてですか？ゆりかさんのどこに非があるんです？」

「あります。いっぱい」

「ゆりかさんは今まで、被害者の立場ばかり経験して来たじゃないですか。あなたのどこにダメだしする要素があるんです？」

一呼吸おいたゆりかさんが、少し声のトーンを落とした口調で話し出した。

「私が、大変な目に遭ってばかりいる事に原因があるんです」

「え？？…すみませんが、僕にはその意味がわかりません。どういうことですか？」

（続く）

## その9 マイナス思考（後編）

ひなたがお昼寝している間に、私は自宅の電話から卓さんと話をしていた。

今の私に揺るぎない覚悟なんて全然ないけれど、改めて自分自身を見つめ直すためには、卓さんに子供たちのお世話を押しつけるわけにはいかない。

「私ね、つい先日、警察の人から三木綾乃の自供内容を聞いたの」

「えっ？…あの人が何かしゃべったんですか？」

「ええ。彼女がなぜ、英之さんに手をかけたのか…その動機も全てわかったわ」

「全て・・・ですか？」

そう呟いたきり、黙り込んでしまった卓さん。でも私はお構いなしに話し続けた。

「英之さんには申し訳ないけれど、私は三木綾乃を憎めなかった。

その動機に至るまでの事実を知らされたとき、私は驚いたのと同時に、自分の不甲斐なさも痛烈に感じたの」

「…不甲斐なさ？」

「ええ。なぜ私は途中で気付かなかったんだろうって。なぜ私はすぐ人を信用してしまうのかって」

「…でもそれはそれで…自然なんじゃないでしょうか？」

「そうかもしれないけど、私、そんな自分が嫌なんです。誰もみな、好きこのんで傷つきたくなんかないでしょう？」

「…そうですね。」

「私は人が好きだから、人間不信にはなりたくない。でもこのままじゃなりそうなの」

「…僕もそのきっかけを作った人間のひとりですから何にも言えません。」

私は卓さんの言葉にハツとした。

「ごめんなさい。違うの。卓さんを信用できないと言ってるわけじゃないの。ただ、今の私には、人を信じる基準がわからないの」

「そんなの…誰にもわからないですよ」

「いいえ、私は人より鈍感。今もそのことで混乱してる。だから…だから私、これからは人と関わらなければ自分は傷つかないと思ったの」

「それはちよつと…」

「無理かもしれないけど、自分の力だけで生きて行かないとって」「気持ちわかりますが…」

「私はいいように利用されただけ。ごめんなさいね。卓さんにはさっぱりわからないでしょうけど、説明しない方があなたのためだと思うから」

「………」

「私思つたの。私の結婚生活って何だっただんらうって。こんな事実を知つたら尚更、毎日が茶番なお芝居だったような気がして…」

「そんなことは決してないですよ。それにゆりかさんには、しつかりしたいずみやひなたちゃんがいるじゃないですか。今までの嫌な過去は封印して、これからのことを考えましょうよ」

こうした卓さんの言葉は嬉しいけど、彼に心配をかけてしまうことが逆にまた辛い。

「だから私も少しだけ考え直したの。ここ数日、冷静になつて考えたら、ちよつとだけ変わった見方ができるようになつて来たの」

「…それを教えてもらつてもいいですか？」

「ええ。つまり私は心が弱すぎるから、いつも被害者気どりでいたんじゃないかって」

「被害者気どり？どういうことですか？」

「私は辛い経験をするたびに、いつも運のせいにしていたの。自分では何も努力もせずね。そして悲劇のヒロインになつたつもりで、

ただ嘆いてただけ」

「でも、予測できないことが起きればみんなそうなります。自分の運命を呪ったりすることだって、誰にでも少なからずはあると思いますよ」

卓さんが私をフォローしてくれている。傷つけまいと…これ以上落ち込まないようにと…でも私は彼に甘えてはいけない。

「さつき私は人を信じる基準がわからないと言いました。でもあとでハッキリわかったの。人を信じる基準は自分でしっかり決めて判断しなきゃって」

「ええ、わかります」

「今までの私は、全てが曖昧なうちに判断していました。いえ、判断と言えるものじゃありません。私には人を疑うという行為は失礼だという固定観念があって、関わった全ての人を信賴していたと言えるかもしれません」

「それは決して悪いことじゃないと思いますけど…」

「でもそれはとても愚かなこと。ただのおバカなの。今の私は全然ダメ。だから被害者気どりの。騙された私にも責任がある。付け入るスキを与えた私の責任は思いわ」

「そこまで考えなくても…」

「いいえ、私がつとしっかりしていれば、こんなことは起きなかったんだもの」

「……」

「卓さん、わかってくれた？決してあなたが邪魔だとか、世間体はどうだとか、そんな理由で離れましようって言ったんじゃないの」

「はい。。」

「卓さんは今の私といるとダメになる。私の方こそ、卓さんに迷惑ばかりかけてしまう。卓さんの自由さえ奪ってしまう。そんな権利は私にはないわ。卓さんには卓さんの人生がある。私のためにあな

たの将来を犠牲にしないで」

「・・・ゆりかさん。」

「これがあなたと離れようと思った理由です…今まで本当にありがとうございました。」

私は一方的に電話を切った。もう話せない。話すことができない。卓さんに涙をすする音を聞かれてしまうから…

卓さんに私の涙声をこれ以上聞かせるわけにはいかないうから…

（続く）

## その10 サヨナラ、一応

電話を終えた僕に、すぐさま問いかけて来たいずみ。

でも僕の方は見ていない。さつきまでは確かに電話中の僕を見ていたが、今はテレビを観ながら僕に話している。

「ママからでしょ」

「うん…そうだよ。よくわかったね」

「何回もゆりかさんて言ってたじゃん」

「そうだったけ？　^^」

僕はいずみにどう話したらいいのかわからなかった。うまく言える気も全然しない。

数秒の沈黙の後、口を開いたのはいずみだった。

「もう私、ここに来れなくなるんでしょう？」

「えっ…？」

この時のいずみはもうわかっていた。

いちいち僕がへたな事情なんか説明しなくても…

「聞こえた？」

「聞こえないけどそれくらいわかるよ」

「そっか…」

僕はこれ以上言葉が出なかった。ただ、事情を察知したいずみがこのことをどう感じているのかが気になっていた。

「( ; \_ ; ) 3 フウ」

いずみが大きなため息をつく。

「どうしてなのかなあ…卓くんもママも」

依然、いずみはテレビ画面を観たまましゃべっている。

「いずみのママはね、もっとじっくり考えたいらしいんだ。僕はそれを尊重するよ」

「ふうん…」

「ママにとってはいずみが頼りなんだから、しっかり守ってあげるんだよ」

「……………」

無言のままのいずみ。ふと、おもむろにリモコンでテレビの電源を切ると、サツと僕の方に振り返り、突き刺さるような視線を僕に浴びせた。

「ハッキリ言うけど、ママは卓くんが好きだよ絶対！私、わかるもん！」

僕は少したじろいだ。これはいずみの怒りなのか、悲しみなのか…  
「仮にそうだとしてもね、ママの決めたことだし、僕には口を出す資格なんてないよ」

いずみの語気は更に強くなっていく。

「ホントにそう？卓くんだってママが好きなんですよ！」

「いやその…この場合は好き嫌いの問題じゃなくてね…」

「ママが好きな？嫌いな？どっち？（へ、へ、＃）」

いずみの勢いに押され、つい答えてしまった僕。

「す、好きです。はい…（＾□＾；A）」

僕からこの言葉を引き出したいずみの表情が少しだけ柔らかくなったように感じた。

「卓くん、私ね、ママの意見を尊重することだけが正しい事だとは思えないの」

「どうしてそう思うの？」

「ママはいつもマイナス思考。自分のことより他人のことを気遣ってしまう人。そして後になってから自分自身の行動を後悔してるの。いつもその繰り返し」

「うん…確かにそんなところもありそうな気もするけど…」

「だからね、卓くんにさっき電話で言ったことだって、きつとあとで後悔するかもしれないと思うの」

「それはわからないけど…じゃあ僕はどうしたら…？」

少しの間を置いていずみが言う。

「私、これ以上あまり言いたくないの。子供が出しゃばるのって、ム力つくでしょ？」

「いや別に僕はなんとも…」

「私自身がイヤなの。ドラマでもよくあるじゃない。子役の子が大人顔負けに生意気なセリフをづけけ言うの。あんなの観てたら私もム力つくもの。貼り倒したくならない？」

「いや、ならないけど…」

「（ノ——）ノコケッ！」

「だから僕には遠慮なく言ってくれないかな。いずみの優しさはよく知ってるから、生意気な子だなんて思わないよ」

「…そんな照れること言わないでよ（\*^ - ^\*）ゞ…じゃあちよつとだけ言わせてもらっね」

「うん。頼むよ」

このあと、いずみが持ち出した話は意外にも、僕とゆりかさんの過去をさかのぼって思い出させる部分からだった。

「卓くとママが結婚したときはどっちからプロポーズしたの？」

「えっ？そんなこと…答えなきゃマズい？」

「別にいいよ。ママの方からでしょ。聞いたもん」

「あら知ってたの^ー^；」

「出会って誘ったのもママからだってね。初めて聞いたときはママが大ウソつきかと思っちゃったけどw」

「ゞ（´、；）ゝ アハハ…」

苦笑いするしかない僕。

「確かにママは積極性のある人で、正義の名の元にはとても強い人で、行動力もズバ抜けてあると思うの」

いずみの言う通りだった。高校生にしては鋭い分析力がある。

ゆりかさんにはこれまで、独身時代から数限りなく救われて来た。僕が何度となく不審者に間違われたときも、テキパキした対応で証明してくれた。

下着泥棒の濡れ衣を着せられたときは、まさに圧巻。

彼女は毅然とした態度で相手と渡り合い、正しいと思える論理の説明と推理を元に、被害者側の訴えを退けさせた。

ゆりかさんは正義の名の下には、絶対勝つまで譲らない気丈さがある。

「でもね…そんなママでもメンタル面ではすごくナイーブ過ぎるほどナイーブなの」

「うん…」

「ひなたを難聴に産んだことにも責任を感じ過ぎて、半ノイローゼになってた。でもね、卓くんが身近になってからママは少しずつ変わって来たんだよ」

「まさかそんな…」

「私は毎日ママを見てるもん。絶対そう！」

「そう言われても僕には…」

「神経質なママはひとりでは無理。ママを守ってあげる人、ママが頼れる人がいて初めて、ママの強さも能力も発揮できるの。ママはそんな人なの」

さすがいずみだ。まだ15歳にして、親のことをここまで理解しているとは。。

「だから、私が言いたいのはね、卓くんはただママの言うことを聞いているんじゃないくて、ママを説得するのも大事なんじゃないかって思っの」

「説得って…そのつまり…僕も一緒にいさせて下さいとか言っの？」

「そんなの自分で考えて。恥ずかしいの？」

「なんというかその…ちょっとね（＾―＾；）」  
「全くもお…」

いずみが立ち上がった。

「今のママは言ってる事と心はウラハラ。ママにはパートナーが絶対必要。わかる？」

「まあなんとなくは…（＾―＾；）」

「今まではママからデートに誘って、ママからプロポーズしたんだし」

「何度も言われると、ダメ出しされてるみたいだね（　・　；）」  
「いずみが軽く微笑んだ。」

「頑張つてよね！次は卓くん次第なんだよ！卓くん次第なんだよ！」

僕はすぐには返事ができなかった。

何も言えないまま、立ち去ろうとするいずみを玄関先まで見送る。ドアに手をかける寸前で、こちらに振り返るいずみ。

その顔は、さっきまでとは全く違うシリアスさがあった。

「私からは…もう来ないからね」

「うん…」

「それと、さっき気づいたんだけど、お茶の間に置いてあるお部屋の匂い消し、あれトイレ用だよ」

「（　・　；）えっ？」

「うちのトイレの芳香剤と同じ匂いだから気をつけて」

「わかった…（＾―＾；）」

「それからみそラーメンのチゲ風味がもう賞味期限切れてたよ。よく見てね」

「そ、そうだったのか。全然気付かなかった（　・　；）」

「それと、燃えるゴミの中にペットボトルが1本入ってたよ。ゴミの分別には注意してね。目をつけられたらやっかいでしょ」

「ごもつともで…（　・　；）」

「それから…」  
「まだあるのかい？」「――」  
「最後にもうひとつ。例の電動マッサージチェアのこと」  
「ああ、あれね・・・」  
「早く梅田さんから取り戻した方がいいよ」  
「う、うん。わかった（＾＾）」  
「じゃあこれで…」

いずみが玄関のドアを開けて外に出ようとする。

僕も外まで送ろうとサンダルを履いて1、2歩進むと、再び振り返ったいずみと鉢合わせのようにつづかった。

「アタツ…！」

「イタツ…！」

「あ、ご、ごめん。いずみ大丈夫かい？」

「平気だけど今のちよつとヤバかったよね」

「（・A・）ん？何が？」

「卓くとチュウしちゃうとこだったじゃん。私の方が身長低かったら助かったけど」

「（＾＾□＾＾；Aハハ…そうだね」

一体僕はどうリアクションしたらいいんだ？

「ごめんね。卓くん。やっぱりまだ言わなきゃならないことがあった」

なぜかドキツとする僕。

「え？なんだい？なるべくラーメンばかり食べないように気をつけるよ」

「違うよお。えつとね・・・とりあえず一応、言っとく」

「どうぞ何でも遠慮なく。ドキドキ（\*・――・\*）ドキ」

次の瞬間、突然いずみが深々と僕におじぎをした。

「卓くん、今までありがとう」

「ええっ？Σ（□）；なにもそんな…いいよ別に」

「黙って聞いてっ！」

「はい…^\_^」

「卓くん、私の受験に協力してくれてありがとう。そしてひなたに手話を教えてくれてありがとう。私とひなたをいつも楽しませてくれてありがとう。強盗から私たちを守ってくれて、本当にありがとうね」

「いずみ…（。ー）ホロリ」

照れ隠しにハニかんでいるいずみの目には、ほんの少しだけ涙が光ってるように見えた。

「じゃあこれでホントに行くね」

「うん。。」

外に出たいいずみが玄関のドアを後ろ手に閉める。

僕はその閉じられたドアを数分間、ただ見つめていた。

僕の思いすごしかもしれない。

外からいずみのかすかなつぶやきが聞こえたような気がした。

“諦めないもん…私”

（続く）

## その11 父の告白

私はいつものように、午後から父の入院している病院に来ていた。でも今日は私ひとり。当然、父もそれが気になったようだ。

「ひなたは一緒に来なかったのか？」

「うん。いずみが家で面倒みてるの」

「ん？今日は平日じゃなかったか？いずみは学校だろ？」

「中間テストだから午前中で帰って来たの。今日で終わりだったし、そうか…」

私はいつも、院内のコインランドリーで父の着替えた衣類を洗濯している。今日も早速その作業から。

「ゆりか、ちよつと待て」

洗濯物を抱えて部屋を出ようとする私を、不意に父が呼び止める。

「え？何？パパ」

「お前にちよつと話があるんだ…私の横に来なさい」

「……はい」

父の体は確実に弱っていた。昔のような迫力のある声力もなくなつた。

そんな父が見せる久々の真剣な顔に私は内心驚いた。

「パパどうかしたの？体の具合が悪い？」

「そんなことじゃない。私が生きているうちに、ゆりかに言っておきたいことがあるんだよ」

「そんな縁起でもないこと言わないでよ。だったら聞かなくていい」

「ゆりか…私だって好きで死にたいわけじゃないんだ。それに言いたくて言っわけじゃないんだよ」

「????どういうこと？全然わからないけど？」

父は一呼吸して、ベッドでの姿勢を今より少しだけ起こし、ゆっ

くりと話し始めた。

「私はね…これから話すことで、ゆりかに恨まれても軽蔑されても仕方がないと思ってるんだ。それでもやはり…話すべきだと思ってるね」

一抹の不安が頭をよぎる。父がなぜこんな突拍子もないことを言うんだろう？私が父を軽蔑するなんてあり得ないのに。

「ゆりか…私はお前に本当に申し訳ないことをした」と急に詫げる父。

「だからわからないわよ。急にそんなこと言われても…」  
父は咳払いをひとつして、更に続ける。

「ゆりかは英之くんのことをどう思ってる？」

「どう思ってるって…もうこの世にはいない人だから…」

「この世にいるとかいないとかは別問題として、この前、ここで警察から事情を聞いた上でのお前の気持ちだよ」

「ああ…あのこと。」

三木綾乃の自供話は、父もこの場にいたわけだから当然知っている。

「思い出したくないことかもしれんが…」

「あの時は悪夢を見ているようだった。今はそれが現実なんだってことはわかるけど…もう人を信じられないかもしれない。信じるのが怖いもん」

「そうか…そうだろうな。本当にゆりかにはすまないことをした

…」

「???」

まただ。なぜここでまた父が今詫げるのか、私には理由がさっぱりわからない。

「どうしてパパが私に謝る必要があるの？関係ないでしょう？」

「いや…違うんだ。私の責任は重いんだよ」

「だから何があったの？教えて！」

「…今のお前を更に傷つけてしまいかもしれないが聞いてほしい。

このことを話すのは、お前の心の迷いを早く解いて、新たな幸せをつかんでもらいたい私の願いでもあるからだ」

「…うん。わかった」

ベッドの上の父が、更に神妙な顔つきになっていた。

「実はね…実は…英之くんに指図してたのは私なんだよ」

「えっ？…指図って…？どういうこと？」

「…私は森田が大嫌いだった。私が昔からお前の婿に有望視していたのは是枝英之くんだったんだ」

「…だから…何なの？」

「つまり…私の思惑に反して、お前と森田卓が結婚してしまった。

私はそれがどうしても我慢がならなかったんだ。月日がいくら過ぎても私は森田を氣にすることができなかった。そしてついに私は、悪魔の決断を下してしまったんだよ。お前を傷つけてまでね…」

「…」

「お前と森田卓が別れるように仕組んでくれと指図したのは、この私なんだよ」

「……！」

「英之くんは私の直属の有能な部下だ。彼は快く引き受けてくれた。私は早速彼を森田のいる部署へ異動させたんだ」

「…」

「すまんゆりか…今更どう謝っても許してもらえとは思ってないが。」

「そんな…そんなことって。パパがそんな…」

私は言い知れないショックに打ちひしがれていた。

もう他の言葉は耳に入らなかった。父は話をまだ続けているようだけど、今の私はもう上の空でしかなかった。

（続く）

## その12 僕に必要なもの(前編)

会社帰りの横断歩道。

信号待ちしている僕のとなりにやって来て、

「森田くん、久しぶり」

と声をかける男性がいた。

「あ！もしかして茜崎さん？」

「もしかしくても茜崎だよ(^^;)そんなに俺、風貌変わったように見える？」

「いえ…やつば変わってないですね(^^ゞ」

「(ノωノ)ノバタツ」

「茜崎さんとは何年ぶりでしょう？それにしても偶然ですねえ」

茜崎さんが苦笑いをしている。なんか僕、マズイことでも言ったかな？^^;

「いや、偶然じゃないんだ。君の勤務が終わって出てくるのを待ってたんだ」

「なんだ。そうだったのか。偶然じゃないんだ。アハハハハ」

「ノミ」

「そんなに笑えることかい？(^^;)」

「すみません。どうも僕最近、色々考えると感情がチグハグになっていました」

「感情がチグハグねえ…君らしい表現だね」

「言いません？チグハグって」

「言わないね」

「標準語じゃないのかなあ…？」

「そんなことより、君に話があつて来たんだけどね」

「あー、すみません。僕としたことが…」

「いや、君だからだと思うが^^;」

なかなか話が噛み合わなかった。まあ僕のせいなんだけれど。

信号が青になり、僕たち二人は並びながら歩き出した。茜崎さんが話しかけてくる。

「森田くん、これからヒマ？」

「ええ。特に予定はないですけど」

「じゃあちよつと付き合ってくれる？晩メシおごるから」

「（□、；）ええっ！…それってどういう意味の“付き合い”ですか？」

「あのね、無理な方向に持って行かないようにしてくれる？そんなんじゃないから」

「すみません。そうですね（・、；）やっぱ僕変なんですよ」

「色々考えるから？」

「はい、そうです。すごい！よくわかりましたね？」

「さつき君が言っただるε・（ーAー）」

「そうでした（、；）ゞ」

「・・・」

僕は明らかに浮足立っていた。その理由は自分でわかっているのに。。

茜崎さんの夕食は、自然食バイキングの店だった。

「森田くん、ひと通り食事を運んで来たらゆっくり話そう」

「そうですね。そうしましょう」

僕たちは一旦席に着いたテーブルを離れ、各種料理の調達に向かう。

食いしん坊の僕。見るものが食べなくなり、テーブルを何往復もしていると、

「森田くん、そろそろ食べない？食べたりなかったらまた取ってくればいいんだよ」

と茜崎さんが教えてくれた。

「Σ―11（、；）――1ええっ？そんなことできるんですか

「？」

「できるよ。まさかバイキング初めて？」

僕はコックリうなづく。

「僕はてつきり、一度席に着いたらもう取りに行つてはダメかと（  
ハハッ）」

「こりや驚いたなハハ； まあ、そういうことだから、とにかく座つて」

「すみません。でもあと一つだけ」

「ん？なんかウマそうなのあつた？」

「えとですね、向こうにある有精卵で作ったオムレツつてのを持つて来たいんですよ」

「じゃあさつさで行つて来て」

「すいません。ダッシュで行きますんで」

「こぼすからゆっくりでいいよ（「」；「」）」

茜崎さんが僕を呆れ顔で見ているのも仕方ない。それは充分承知している。

僕はあえて今の自分の精神状態隠すつもりはなかった。

明らかに今の僕は過食症に陥っている。心に持っている不安や迷いを、食欲を満たすことで気を紛らわそうとしている。

やっと席に落ち着いて食べ始めたとき、茜崎さんが待っていたかのようにしゃべり出す。

「ゆりかのことだけど…事情は色々聞いて知ってる。で、君はどう思ってるんだ？」

いきなり核心をついてきた茜崎さん。

「誰から聞いたんですか？」

僕は炊き立ての五穀米を口いっぱいにかき込みながら返答する。

「質問の答えになってない。俺は探偵だよ。情報網はいくつもある。君はゆりかをどう思ってる？」

僕は無添加みそで作った出来たての味噌汁を啜り、口の中の食物を胃に流し込んだ。

「ゆりかさんは…大事な人だとは思いますが」

「だったら決まりじゃないのか？」

「何がです？」

「だから、再婚すればいいんじゃないのか？」

「…そんな口で言うほど簡単には。」

僕がオムレツに手を伸ばそうとする所を茜崎さんが制止した。

「森田くん、逃げるな。食べることで大切なことから気をそらそうとするな。楽になろうとするな！」

『……。(……………;)』

凶星を指摘されて声が出なかった。

茜崎さんとは数年ぶりに会ったというのに、僕の内面を見抜いている。

それほど僕が単純だとも言えるけど。(……………;)

「森田くん、タイミングを誤るな。俺は思っんだ。今は君に風がなびいていると」

「はたしてそうでしょうか？」

「それを君自身が打ち消そうとしてるのがわからないのか？」

「はあ…なんとなくわかります。」

「それがわかってるんなら、俺はもうクドクド言わない」

「言うてもいいですよ？(……………いえ…もう少し僕に…何か説教して下さい)」

「は？(……………)」

自分でも不自然なことを言ってるのはわかっていた。でも、今の僕にはそれが必要だった。絶対に必要だった。

( 続  
く )

### その13 僕に必要なもの（後編）

「こんなダメダメ人間をもっと叱って下さい！」

「ちよつと待てよ森田くん」

「どうかお願いします。なじってなくても構いません」

茜崎さんなら、僕の今の気持ちがきつとわかるはず。

箸を持ったまま、僕をじつと見据えている茜崎さん。

「なるほど。そういうことか…」

さすがは勘の鋭い茜崎さん。僕の思いを理解してくれたようだ。

「森田くん、君はひよつとして…」

「そ、そうなんです。きつと茜崎さんの思っている通りです」

「じゃあ…君はひよつとして…どMか？」

「（（ノ―ω―）ノバタツ」

「（・A・）ん？？違った？」

「あの…違いますよ。僕はどMじゃありません！多分…」

僕の“どM”と発した声がちよつと大きかったようで、まわりの

テーブルのお客さんたちがこちらを見ながらクスクス笑っていた。

「森田くん…たとえ君がMであってもなくてもだ。今このシチュエ

ーションで叱つたりなじつたりは無理だろう？」

「はあ…確かに（^□^；A」

茜崎さんは少し顔を赤らめながら、周囲に視線をチラチラ走らせていた。

「やつぱり話すより先に食べてしまおうや」

「え、ええ。^―^；」

数分間、黙々と食べ続けていた。

会話が全くと、間が持たなくて余計早食いになってしまう僕。

茜崎さんはまだ半分も皿に食べ物が残っているというのに、僕はすでに完食していた。

「あの…もう1回取って来ていいんですよね？」

「1回でも2回でもどうぞ」

茜崎さんが有機野菜で作ったサラダを食べながら言う。

再び席に戻った僕は、言い訳がましいことしか言えなかった。

「僕、悩んだり迷ったりすると、もっと余計に食べちゃうんですよ・  
・・（^^）」

「そのようだな。でもさっきも言ったが、それは自己逃避だ。やめた方がいい」

「はあ…しかし。」

「君はもつと自信を持っていのに、なぜできない？」

「自信を持てる要素なんてないからです」

「あるじゃないか！君が今までゆりかやいずみ、そしてひなたにどれほど貢献して来たことが」

「ただのおせっかいですよ」

「だから、そのマイナス思考はやめろって。全くそういうところは二人揃って似てるんだもんな」

「え？誰と誰のことです？」

「君とゆりかさ」

不思議な言われ方だった。僕とゆりかさんが似てる？

「どちらも踏み込めない同士ってこと」

「ああ、なるほど。じゃあですよ？同じ性格の人間同士では、やはりうまくいかないんじゃないでしょうか？」

「（；-\_-） 3 フウ」

茜崎さんがため息ひとつ。

「あのな。誰も性格が同じだなんて言っていないぞ。君は度胸がなく、決断力に欠けてるが、ゆりかは神経が繊細なだけで、度胸も積極性もある」

「すみません…（^ー^；）」

「ゆりかが踏み込めないのは、その繊細な部分の方が上回っている

からさ」

「返す返すすみません…（――；）」

「まあいい。別に俺は君を凹ましに来たわけじゃないんだ。もっと頑張ってもらいたいんだよ」

これまた不思議だった。なぜ茜崎さんが僕を応援してくれるんだろ？

「あのー、理由がわからないんですけど…なぜ僕にそんな…？」

「理不尽なことに屈してしまうのが、俺には納得できないだけさ」

「でもそれは僕の問題で、茜崎さんのことじゃないのに（――；）」

このとき僕は、ふと瞬間的に頭によぎったことがあった。もしかしたら…

「失礼ですけど、茜崎さん自身はゆりかさんとやり直したいとは思わないんですか？」

「えっ？…俺？俺がゆりかとか？それは…正直もうないな」

「ということは、以前はあったんですか？」

「（――；）おいおい、俺のことを深く掘り下げるな！君のことなんだぞ」

「まあそうですねー（――；）」

茜崎さんは、明太子パスタを一口食べてからこう言った。

「俺は昔、ゆりかを放って逃げた男だ。しかも自分の意思で」

「ホントにそうなんですか？」

「ああ、結婚する気も全くなかった。ゆりかの腹にいずみがいるのを知ったのは、俺が消えてしばらく経ってからなんだ」

「ゆりかさんのご両親には会ったことはあるんですか？」

「何度かある。ついこないだも何年ぶりかで…」

「（――；）え？」

「そんなことはどうでもいい。俺は逃げた男だ。けど君は違う。単に勇気も度胸も自信もないだけだ」

「そこが1番問題なんですけどね（――；）」

「だが君の1番の強みは、とても献身的なことだ。ゆりかの支えになれる人物は君しかない。君ならなる。いや、なって欲しい！ならなきゃいけない！」

「なんだか学校で習った3段活用みたいですね・・・（；、A」

「ほらまた話をそらす」

「あ・・・すみません（^^ゞ」

「ったく・・・」

僕のハシは完全に止まっていた。でもそれは、食欲がなくなったわけではなく、何か沸々と体の中から熱いものが湧きあがってくるのを感じたからだ。

照れくさくて話をはぐらかそうとしちゃったけど、励まされると何となく自信が出てきたような気がする。

でもまだ気合が足りない。もっと自分に気合を入れないといけない。

僕は茜崎さんに弱弱しく問いかける。

「この僕に・・・本当にそれができるでしょうか？」

茜崎さんはハシを置き、まっすぐな鋭い視線を僕に投げかけた。

めぢから  
目力がすごい。まるで目から光線が出てるよう。でもそんなわけはない。それができるのはウルトラマンくらいだ。

「いいかい森田くん。君の信念でゆりかを取り戻してみろ！絶対にきるはずだ！そしてゆりかの不安を取り除いてやれよ！君が自身満々でゆりかを安心させてやれば、必ず彼女は頼ってくれる。君の気持ちもわかってくれる。ゆりかにはもう君しかないんだぞっ！」

さすがにこの声はデカかった。他の客の視線がまたこのテーブルに注がれた。

「茜崎さん・・・ちょっと恥ずかしいです（――；）」

熱のこもったトークの茜崎さんもその視線に気づいたようだ。

「あ…すまんすまん（＾＾）」

僕は嬉しかった。ここまで言ってくれる人が同姓でいるなんて。  
「茜崎さん、今日はありがとうございます！おかげでさっきよりずっと気合が入りました」

座りながらも深々とお辞儀をする僕。それを見た茜崎さんがピンときたようにニヤツ笑う。

「ははあ…森田くん。ひょっとして君は、俺にわざと気合を入れさせるように仕組んだな？」

「（；；）えっ？そ、そんな仕組んだなんてめっもっもない」

「ウソだ。俺を誘導するような言い方したたる？」

茜崎さんにはかなわない。やっぱし探偵だけのことはある。

「すみません。^^；別に悪気はなかったんです」

「それはわかってる」

「だって僕には…今の僕にはもっともっと気合と自信が必要だったんです。ハツパをかけて欲しかったんです」

「ふうん。で、どうなんだ？本当に気合が入ったのか？」

「はい！明日はわかりませんが、今は大丈夫です」

「それじゃダメじゃなかよ；；（；；）」

「努力します。なんとか」

「よし。その意気その意気。絶対持続しろよ！」

なんだか飛び跳ねたい気分。軽やかなステップでも踏もうか。でも僕はスキップすらできないし、レストランでそんなことできるはずもない。

僕って単細胞なんだとつくづく思う。

「あの…僕、五穀米おかわりしてきます」

「まだ食うのかよ？いいけど、今日で過食症とはもうオサラバしろよ」

「あ、そうでした（；、A 自信がついても食べなくなるもの  
なんです」

「君はどんな精神状態でも食べたくなるのは変わらないだろうな  
（；、」

（続く）

## その14 母と私（前編）

私と母は今、意識のない父をベッドのわきから見つめている。いずみとひなたも連れて来たけど、とりあえず今の父は小康状態。ひなたのおやつを買わせるために、二人共コンビニへ行かせた。

もう半年以上も前から父の寿命の宣告は受けているので、覚悟はできている。

それは昏睡状態に陥った父自身も承知の上。

ただ、この1年以内に英之さんの急死があり、そして次は父の可能性も高い。

この時ふと思った。私はとても冷酷な女なのだろうか。と。度重なる身内の不幸はショックだけれど、これは本人たちが犯した見えない罪に対する罰なのでないかと考えてしまうこと。

父の衝撃的な告白以来、毎日のようにここへ通っていた私が、病弱な母と交代した。

それまで8：2の割合で、私が父の面倒を。そして母は通院しながら自宅で療養していた。

元来、完全看護の病院なのだから、毎日来る必要はないとは言われていたけど、体力が急激に衰えてゆく寂しがり屋の父を見ると、放ってはおけなかった。

それに父は母がいると怒鳴り散らす。それが夫婦関係のお決まりなのかわからないけれど、亭主関白ぶりをいかんに発揮してしまう。これでは母も倒れるのは時間の問題。父は病弱な母に遠慮がなさすぎる。甘えすぎるとでもいうのか…

そんな理由もあるのに、今は再び母に同じ負担をかけることにな

り、申し訳ない気持ちでいっぱいだっただけ、父と顔を合わせるのにどうしても抵抗を覚えていた私。

母から父の昏睡状態の知らせを受けた時、約1か月ぶりにこの病院を訪れた。

「ママ、ごめんね。私…どうしても来れなくて…」

疲れているはずの母は私に軽く微笑みながら言う。

「何があつたのか知らないけど、パパはね、寝言でもゆりかに謝ってたわよ」

「えっ…？」

「すまないすまないって…パパはゆりかに対してそんなに悪いことでもしたの？」

母はたぶん全く知らない。父が私の最初の結婚生活を壊した張本人であることを。

でも今更そんなことを体の弱い母に教えるつもりもない。母まで失いたくないもの。

「ママは何も心配しないで。私は大丈夫だから」

そうは言っても不安な表情をぬぐい切れない母。

そんな母が私に向かって語りかけて来た。

「実はね…<sup>こつて</sup>パパから言伝を頼まれてたの。ゆりかについて…そう」

さほど驚きもしなかった私。

ベッドのわきに椅子を持ち込んで、二人並んで腰かけている私と母。

お互い目を合わさずに、意識のない父をただ見つめながらの会話が始まった。

(続く)

## その15 母と私（後編）

「パパはね、ゆりかともう一度でいいから話をしたがつてたの。こ  
うなる前にね」

私も罪な人間なんだろうか？父の願いも無視したまま時が過ぎ、  
今や言葉を交わすこともできなくなっている。

「謝るだけならもういいのに……」

小声でボソツと言う私に、母はやりわりとそれを否定した。

「いいえ。ゆりか、パパはあなたにもっと別なことを伝えたかった  
の」

「別なこと？」

ベッドの父を見つめていた私は、このとき不意に母の方へ首を傾  
げた。

一体なんだろう？過去の忌まわしい出来事のことならもうすでに  
聞いている。

「本当ならパパ自身の口から話したがってたの。というか、少し話  
したらしいんだけど、ゆりかは聞く耳を持たなくなってしまったと  
……」

母の言葉を聞いて私はハツとした。——あのとときだ。。

1か月前、私はこの病室で父から聞かされた衝撃の事実のあまり、  
父が語ったその後の言葉が耳に全く入っていなかった。

「どうやら思い出したようね。そしてあなたはそのまま帰ってしま  
い、それ以来、今日までパパと遭えずじまいだった」

「……うん。。」

言いようもない後ろめたさを感じた私。

それほどまでに伝えたいことがあるなら…それがわかっていたら、父の話を最後まで聞いてあげたのに。

「ねえゆりか。これだけはわかってあげて。パパはあなたのことばかり思っていたの。あなたの先行きの心配ばかりね。ママ以上に神経が過敏になってたわ」

「それは…わかるけど」

「わかったならそれでいいの。じゃあパパの言伝ことづてを言うわね」  
「うん。」

母は一度も父から目をそらさずにいた。

「パパが望んでいたのはね…ゆりかと森田卓さんが復縁することだったの」

「！！！！？」

一瞬、耳を疑った。「え？何で？」と。

あれだけ卓さんを毛嫌いしていたパパが…そしてあれほどのことをしたパパが、なぜそんなことを思っていたのか？

「ママ、それ本当の話？私、正直信じられないんだけど」

「本当よ。あなたが疑問に思うのはママもよくわかるけど、本当のことなの」

「理由がわからないわ。ママは卓さんには優しくかったけど、パパは真逆だったもの」

「確かにそうね…でもね、もちろんそれにはちゃんとした理由があるの」

私は母の顔を見つめたまま、催促の言葉を出さずに母の説明を待った。

「あれはまだ…英之さんが事件に遭う少し前だったかしら…あの茜崎が訪ねて来たの」

「（□、；）ええっ！？涼が？」

予想だにしなかった母の話の始まりに、驚きを隠せない私。

あの涼が、目の敵にされている母の前に現れるなんて、どんな意図があつてのことなんだろう？こんな優しいママでさえ、涼のこととは呼び捨てにしている。無理もない。私を妊娠させて、責任も取らずに蒸発してしまった男だもの。

「そうなの。あの男がこの病室に訪ねて来たの。たまたまゆりかがないくて、ママがここにいたときにね」

「えっ？じゃあパパも涼に会つたってこと？」

「そうよ。茜崎もそのつもりで来たって言つてたわ」

「全然わからない。なぜ涼がここに……？涼にとつてもママとパパには一番会いたくないはずなのに」

「ええ。ママもパパもあの顔を見た瞬間、引つ叩いて追い返してやりたかつたわ」

「でも……そうはしなかつたんでしょ？」

「ええ。そうしようと思つた寸前にね、あの男が言つたの。『どうか先に僕の話聞いて下さい。その後だったら僕に対するお恨みの言葉でも何でも甘んじて受けますから』って」

「……涼がそんなことを。で、涼は何て言つたの？」

「それがママもパパも驚いちゃつたの。あの茜崎が、森田卓さんの現在の暮らしぶりを色々と教えてくれるんだもの」

「……？？？なんでまたそんな……涼と卓さんは何の関係もないはずなのに」

「その説明は聞かなかつたからわからなかつたけれどね、とにかく卓さんが、いずみやひなたの面倒をよく見てくれることまで詳しく説明してくれて……特にひなたはすっかり卓さんになつているとか」

私は戸惑つた。涼はしばらく私の前には姿を見せないけれど、影でコソコソとまわりを調べていたんだ。理由はわからないけれど。

「パパの反応はどうだったの？そんな話、黙つて聞いていられなか

「たんじやない？」

この質問に対する母の答えは、これもまた予想外なものだった。  
「それが違うの。ママもそうだったんだけど、卓さんの人の良さに感じ入ってしまったてね。強盗事件のときも彼に子供たちを助けてもらったでしょ。だからパパは余計に卓さんに対して申し訳なく思ってたんだと思うわ」

それでも私には疑問がぬぐえなかった。

「でも、パパの“卓さん嫌い”は異常だったはずよ。それに私には英之さんがいた。普通、父親ならもう二度と近寄るな！とか言わないかしら？まして信用できない涼の言葉で聞かされたのなら。」  
「ええ。そうね…確かに茜崎の言葉だけだったら、そうだったかもしれないわね」

と、ママがまた意味深なことを言う。

「どういうこと？」

私の納得いかない顔も見ずに、いまだ父だけを一点に見つめて返答する母。

「茜崎の言うことは、いずみが私たちに教えてくれたことと同じだったからよ」

「！！——いずみが…？」

「そう。いずみは卓さんに受験勉強を教えてもらったことや、独学で手話をマスターしてひなたに教えてくれたりと、いろいろ報告してくれてたの」

「知らなかったわ…でも、パパはそれを聞いて怒らなかったの？」

「孫の嬉しそうに話す顔を見て、怒るおじいちゃんはいないわ。それにね、あなたと英之さんの関係もいずみから聞いてたから余計なのよ」

「いずみが私と英之さんのどんなことを？」

「もうすっかり仮面夫婦だって。英之さんは家庭のことはほったらかし。ひなたは可愛がるけど、面倒はみない。いずみにはいつでも

出て行っていていいとか平気で言ってたそうなの」

「いずみにそんなことを…」

「ゆりかも知らなかったなんてね。いずみはいい子だわ。きつとあなたに心配かけたくないからずっと黙ってたのよ」

「いずみ……」

母の声が少し震えていた。

「パパはね、そこで初めて反省したの。猛烈にね。ゆりかを一番大事にしてくれる人のことを考えずに、地位と出世に貪欲で、将来安定した生活を約束できるキレモノの人間を、娘婿に迎えて大喜びしていたことをね」

「……」

「そして英之さんが信じられない最期になった。亡くなった人を悪くは言いたくないけど、あなたもテレビで観たでしょ？英之さんを殺した女は、逆に彼に利用されていて、その恨みが爆発したものだって」

「ええ。。まあ」

「パパはとても悔やんでいたの。こんなことになるならって」

「こんなことになるなら？」

「ええ。パパはそのあと何も言わなかったけど、ママはそのときこう思ったの。こんなことになるなら、森田卓に冷たくするんじゃないかったって」

ママはやはり知らない。私ならパパの言葉の続きを正しく言える。  
“こんなことになるなら、森田卓を騙すんじゃないかった。是枝英之とゆりかを結びつけるんじゃないかった”と。

ママは更に話を続けた。

「…パパが森田卓さんとゆりかの復縁を望んでいたのは、そういう理由がまずひとつだったと思うの」

私は母の最後の言葉が引つ掛かった。

「まずひとつ？まだ他にも理由があるの？」

「ええ。あと理由が……二つほどね。」

「……？——あと二つも？」

（続く）

## その16 ふたつの理由

パパの昏睡状態は依然続いている。

母はかなり疲労がたまっているようなので、付き添い控え室で仮眠を取らせた。

今部屋にいるのは、父の他に私とコンビニから戻りたいずみとひなた。

いずみはひなたに絵本を見せてくれている。本当にいい子。

子供の頃から複雑な家庭環境で育っていたいずみ。

小学校に上がるまでは涼のご両親の元で。

そして私の元へ戻って来たあとは、卓さんと3人で一緒に暮らし、その後私が英之さんと再婚したために、いずみの生活環境が幾度も変わって来た。

大人の都合で振り回されて来たいずみ。それなのにこの子はめげないし、たくましい。だからこそ、もういずみにこれ以上の迷惑はかけれない。

こんな何もできない母親の私にほとんど文句も言わない。

もっと私がしっかりしなきゃいけないのに、いつまでも堂々めぐりの私。

理屈ではわかっているのだけれど…

私は父を見つめながら、さっきまで母と会話していた内容を振り返る。

「ママ、他の理由って一体何なの？」

「私の問いかけに、母は自分のセカンドバッグから“あるもの”を取り出した。

——通帳？

「これよ」

母は私にそれを手渡した。紛れもなくこれは通帳。しかもいずみ名義。

「ママ、これって…？」

「この通帳はパパがひそかに作って管理していたものの。卓さんがいずみの養育費をここに毎月振り込むために」

「！！！」

それを聞いて啞然とする私。そんな取り決めなんてしていない。

「なぜ？どういうこと？もしかしてパパが無理やり卓さんから…」

「いいえ。それは違う」

母はすぐに否定した。

「卓さんはね、あなたと離婚してから間もなく、パパの所に来て、いずみが成人になるまで養育費を払わせて下さいってお願いに来たらしいの」

「そんなこと…私、卓さんからもパパからも何も聞いてないわ」

「卓さんは言ったそうよ。このことがわかったら、ゆりかさんはきつと受け取らないだろうって。だから黙ってたのよ。パパもね」

「だからってそんな…」

「開けて見てごらん」

母に言われてそつと通帳を開く私。そしてその積立総額を確認して言葉を失った。

—— 11,250,000（一千百二十五万）！！！！

「驚いたでしょ。ママもビックリしたわ。卓さんが毎月かかさず振り込んでいたのよ」

「…信じられない。。まさかこんな…」

「自分のお給料から毎月15万円も…」

通帳の明細にはきちんと毎月決まった期日に入金されていた。

「それが積み積もってこんな大金に…」

「ええ。そしてそれは今も続いているの。自分の義務だから支払いますって、その一点張りだったそうよ。一体自分自身の生活費はどうしてたのかしらね…」

私は目が潤んで通帳が見えなくなった。私の胸に熱いものが込み上げてくる。決してお金に感動したわけじゃない。自分の生活を切る詰めるほどのこんな大金を、毎月いずみのために工面していた卓さん。

私に一言も言わずに6年間もただ黙々と……

「もう…バカよ卓さんは…バカ正直すぎるわよ。自分が犠牲になってどうするのよ」

かすんだ目から涙が溢れ出た。そんなことも知らずに卓さんと接していた自分が情けなくて仕方がなかった。

母がせつなそうに言う。

「パパはその通帳を長い間、気にもとめなかった。どうせ続かないだろうと思ってたから。でも今になってやっと、卓さんが実直で筋を通す人だってことに気づいたの。それまではママが何を言ってもダメだったわ」

「…パパが私と卓さんの復縁を望む理由のひとつがそれだったのね。」

「ええ…」

でも私はわからなかった。パパは本当に卓さんの人間性を見直したのか、それともいずみのお金を積み立てただけを評価したのか。

私はハンカチで涙を拭いながら、母に問いかけた。

「あとひとつの理由って？」

母がそれを口にするまでは、少し時間がかかった。言葉を選ぼうとしているのか、言うべきではないのか迷っているように思えたけど、やがて決心したようだ。

「あとひとつはね…これはママの推測なの」

「…推測？」

「長年パパと一緒にいるとね、多分そうじゃないかって思える節がたくさん見えてくるものなの」

何やら意味深は母の言葉に 私はただ黙って聞いていた。

「もしかするとパパは…英之さんとグルだったんじゃないかって」

「……」

ズバリな母の勘に、私は肯定も否定もできないでいた。

「どうして…そう思うの？」

「こう聞くのがやつとだ。」

「パパはね、英之さんが亡くなってから、寝言でうなされながら謝ってばかりいるの」

「それは私に詫びてるってさっきママが言ったんじゃない？」

「そうれもそう。でもね、あなただけにじゃないの。卓さんにも、英之さんにも謝ってた。でもそれだけならまだそうは思わなかった」

「どういうこと？パパが寝言で何て言ったの？」

母は目を閉じながら、思い返すような小さな声で表現した。

「パパはこう言ったの。『すまない三木くん。許してくれ。本当に申し訳ない』って」

「……」

「わかる？英之さんがやっていたことは、パパが裏で指示していたかもしれないのよ。パパならそれくらいのこと、やりかねない人だもの」

すごい。母の推理力には脱帽する。誰にも教えてもらわずに、ここまで核心に迫れるのだ。

「でも…例えそうだとしても、それがなぜ私と卓さんの復縁に繋がるの？」

と聞いた私。

「それはね…それだけのことをしたパパの猛烈な反省なんだと思う。ゆりかにまでダメージを与えた自分の責任の重さ。それに少しでも報いるためには、ゆりかが気を許せて頼れる人…つまり卓さんと復縁してくれることが一番だと判断したからだと思うの」

（続く）

## その17 間の悪い出張

1泊素泊まり3150円のビジネスホテル。

ここは僕の出張先の寝どこ。館内にはレストランもなく、夜の食事はぶらっと周辺を探索しての外食。

色々廻ったところでやはり落ち着くのはラーメン屋さん。

途中、うなぎ屋さんもあったけど、僕のポケットマネーでは到底無理。

表の看板メニューの“ひつまぶし”にもそそられたけど、食べ方知らないし店員に聞くのも恥ずかしい。

もう食事を領収書で落とす時代じゃないから、安く済ませるのは必定なのだ。

僕の入った小さなラーメン屋の店主は、まるごと典型的な頑固オヤジ風だった。

スキンヘッドにねじりハチマキ。ツヤのいいハゲ頭によくハチマキがすべって抜けないもんだと感心してしまうほど。

「兄ちゃん、ここに座んな。すぐできるから」

「は？はあ……」

僕はいきなり座席を指定された。カウンター席が5つしかない店だけど、そのド真ん中で、店主と刺し迎えて座る形。他に客はいない。

「あのー僕、端っこの席の方が好きなんですけどダメですか？」と、恐縮しながら聞いてみる。

「ダメだ！ここでいいだろう！ラーメン出来たら俺がすぐ目の前に出せるじゃねえか！」

「あ、はい……すみませんー！ハ；じゃ、えっと……何ラーメンにしようかな……」

「もうできるぞ。麺が茹で上がったらすぐだ」

「（□、；）えっ？僕まだ何も注文してないですけど…」

「ここはラーメン屋だ！餃子屋じゃねえ！頼むのはラーメンしかねえだろが！」

威勢のいいハゲオヤジの声が店内に響く。

「そ、そうですけどあの…味噌とか、とんこつとか…」

「ラーメンと言えば醤油に決まっている！ふざけたことを言っな！」

「…はい（—、—）」

どうやら僕はどんな店に入ってしまったようだ。想像以上の頑固オヤジに、会話などできるはずがない。

「へいお待ちっ！熱いうちにどうぞ！」

見た目は澄み切ったきれいなスープ。麺はちぢれの中太麺。

こういったオヤジのいる店は、□は悪くても、ラーメンの味には特別な定評があるものだ。そう願って一口スープを啜ってみる。

・・・んと…普通だ。。（—、；

次は麺だ。麺はきつとツルツルシコシコに違いない。

・・・あれ？…ちと伸び気味？（—、；

僕がひそかに楽しみにしていた出張先での外食は、見事期待外れに終わった。

「兄ちゃんどうだい？味は？」

「お、おおおいしいです（^□^；A」

普通そう言うしかないでしょう？

ちょうどその時、僕のケータイが鳴った。着信表示を見ると…え

？いずみから？

僕はすぐに電話に出る。

「もしもいずみ？どうかした…」

オヤジが僕の声を遮った。

「兄ちゃん！うちの店内ではケータイ禁止だ！外に出て話せ。他の客に迷惑する」

「は？他に客なんて…」

「□ごたえするな！そういう決まりなんだ！終わったら戻って来い！」

「すみません（…）」

渋谷外に出て、いずみの用件を聞くことにした。

「卓くん、あのね。おじいちゃん…ダメだった」

「（□、；）ええっ？それって…亡くなったってこと？」

「うん……一応教えておこうと思って。ママから聞いてないでしょ？」

「全然」

「やっぱしね。で、卓くん来れる？」

「ええっと…困ったな。今ね、出張先なんだ。3日間はこの町から出れないんだ」

「遠いの？」

「飛行機で来たからね^|^」

「そっか…」

「ごめんいずみ。戻ったら必ずお墓参りに行かせてもらっから」

「わかった。期待してないけど」

「行くよ必ず」

「もうどっちでもいいよ」

「え？」

いずみの言い方がぶっきらぼうになった。

「卓くん、おじいちゃんがこうなる前に、何でもっと早くママにプ



意外なオヤジの言葉に少しは気が晴れた気がしたが、それも一時の喜び。

結局新しいラーメンを食べ直して清算するときには、しっかりと2杯分の代金が請求されていた。

僕はホテルのベッドに寝転がりながら考えた。

いずみも茜崎さんも、応援してくれているのに、なかなか先に進まない。

僕がトロいせいもあるけれど、时期的なタイミングも悪いような気がする。

こんなことが続けば、天は僕に味方してくれないんじゃないかって思う。

僕自身に気づかない罪でもあるんだろうか？ 幸せになれない何かの罪が。

ふと三木綾乃さんのことが浮かんた。

彼女は是枝くんを愛していた。愛していたから彼に協力したんだ。そしてその結果があんな悲惨な事件を招いた。

確かに殺人は問答無用でいけないことだ。けど三木さんばかり責めるわけにはいかない。言わば、彼女も被害者。

そうだ！！

僕は気がついた。と言ってもひらめきというものじゃない。僕がゆりかさんにプロポーズできるかどうかはわからない。でもその前に、しておかなければならないことがあった。

出張が終わったら、三木綾乃さんに会いに行こう。

( 続  
く )

## その18 どうするつもり？

「良かった。ゆりかが比較的元気そうで」

父の葬儀も一通り終えた数日後、美智代が私のことを気にかけて来てくれた。

本当に有難い親友。会ったびいつも元気をくれる。

「パパのことは、ある程度覚悟はしてたから…それに正直、あまり泣けなかったし…」

「どうして？ ケンカでもしてたの？」

私は迷った。こんなこと…美智代に話すべきことじゃないけれど…

「美智代あのね…前の事件のことなんだけど、パパが…」

と、その時、部屋で遊んでいたはずみとひなたが現れた。すぐに話題をそらした私。

「私より母の方が心配。今も一人ぼっちで家にいるから」

「…そうね。そうよね」

と美智代も相槌。

「近いうち、母をここに呼んで一緒に暮らそうかと思ってるの」

「………」

いずみが美智代に挨拶すると、それに習ってひなたもお辞儀をした。

「あらー、ひなたちゃんこんにちは」

「…こんにちはあー」

「（\*…\*）ウフ、可愛いわね。ちゃんと補聴器してるから聴こえたのね」

「ええ。自分からするようになったから助かってるの。以前は嫌がつてすぐ外したり、投げて壊したりしてたから」

不意にいずみが会話に加わる。

「ひなたがこうなったのは、卓くんのおかげだよ  
それを聞いた美智代がニヤニヤ笑っている。」

「何？美智代。その意味深な笑い？」

「え？だってさ、気になるもん。ゆりかと森田が今どうなってるか  
って」

「そんなこと…別にどうもなっていないわよ」

「フウ…（；-|-）」 3 タイミングが少しズレちゃったかも  
ねえ…」

「何の話？タイミングって何よ？」

「ここでいずみがズバツとストレートな物言い。」

「ママの再婚のことに決まってるでしょ！」

「……！」

いずみは冷蔵庫からパピコを取り出すと、ひなたに与え、私に向  
かって更に言う。

「ママは卓くんが好きなんでしょ？卓くんだって、ママのことが大  
好きなんだよ！」

「いずみちゃん、よく言ってたわw」

美智代がいずみを絶賛するような目で見ている。

私は自信のない物言いしかできない。

「卓さんは…昔の責任を重く感じてるだけよ。私のことなんか別に  
…」

「違うよママ。私、卓くんを見ててわかるもん」

「……」

「英之がこの家からいなくなったときから、卓くんはずっとママが  
病院から帰って来るまで、ここで待ってたじゃない」

「あれは…あなたたちを守ってくれてたんじゃないの」

「それもあるけど、1番の理由はね、ママの顔を見たかったからな  
の。ママの顔を見てから帰ってたのよ！」

「そんなことは…」

「そうなんだってば！卓くんは単純だから表情見ればすぐにわかる

もん。ママが帰宅するとすごく嬉しそうにしてた。でもそれを悟られたくないから、入れ替わりのようにすぐ帰ったのよ」

私は返す言葉もなかった。いずみの説明にただ、困惑していた。

「そしてママもだよ。ママが1番幸せそうな顔をしてたのは、やっぱり卓くんと一緒に暮らしてたときかなあって、最近思うの」

「…いずみったら。」

「ママ。私が言いたかったのはここまで。あとはヨロシク」

「え？ちよつとヨロシクって一体…」

「これからひなたと一緒におばあちゃんの家に行くね。夕方には帰るから」

「え、ええ…わかったわ。気をつけてね」

私がいずみに対してまともな言葉で返せたのは、こんなことだけだった。

リビングに残った私と美智代。少しの沈黙の後、美智代が切り出した。

「ゆりか、どうするつもり？」

「どうするって、今はまだそんな。。パパも亡くなつたばかりだし」

「それはわかるわよ。行動としては今は自重の時期かもしれない。

でもね、ゆりかの決意は今のうちハッキリさせておいた方がいいと思うの」

「私の決意…」

「そう、むやみにダラダラした時を過ごしてはダメ！ アタシね、さつきゆりかが言いかけた言葉の続きがわかるの」

「…え？」

「ゆりかが言いづらそうにしてたから、アタシが言ってあげる」

「ちよ、ちよつと待って！本当にわかるの？それに何で美智代がわかるの？」

「事件とゆりかのパパの関係を言おうとしてたんでしょ？」

「Σ（□；；！！」

「是枝さんや三木綾乃を裏で操っていたのは、ゆりかのパパ」

今日の私は驚きの連続。開いた口がふさがらない。

「だからゆりかは余計に苦しんでる。でもね、あなたが苦しんだところで、もう結果論でしかないのよ。それにゆりか自身に罪は全くないんだからね！あなたの悪いクセで、深く考え込むのはもうやめて！やめるべきよ」

凶星を言われて私はまた言葉を失った。それと同時に美智代に対する新たな信頼感も生まれつつあった。

「ゆりか。あなたは素直な気持ちの自分をさらけ出すべきよ。もうそういう時期に来ているとアタシは思うわ」

美智代の言葉にはいつも勇気づけられる。でも。。

「私、卓さんに申し訳なくて…うちのパパが卓さんにした仕打ちを考えると…また再婚を願う私って、ただ都合がいいだけのようないがして…それにこのことを知ったら卓さんだってきつと…」

美智代が私の言葉を途中で遮る。

「それは違う！違うわゆりか。いい？よく聞いて。森田はね、全て知ってるの」

「えっ？（。○。；）す…全て？」

「ええ。昔の仕組まれた離婚劇の演出も。そしてその裏にはパパがいたこともね。森田は全てのからくりを知っているの。その上で森田は、あなたやいずみちゃん、そしてひなたちゃんと接して来たの」

「そ…そんなこと。全然知らなかった。」

「それなのに、なぜ森田がここまでしてきたのか意味がわかる？」

「それは…」

「さつきいずみちゃんも言ったじゃない。ゆりかが好きだからよ！森田は心底あなたが大好きなの！もうその一点しかないのよ！」

じんわりと涙が込み上げて来た。恥ずかしい…私、最近泣いてばかり。

私はそんなにも彼に好かれていたんだ。

私って、いつからこんな鈍感になったんだろう？人に言われて気づくなんて…

美智代がなぜここまで知っているのか不思議だった疑問は、このあと聞かされた。

あの茜崎涼が全て調べ上げたなんて、これも驚き。

彼は私のパパの病室にも足を運んで、卓さんの事情をあれこれ話している。

それはなぜなんだろう？愛のキューピット役でもしたいわけ？それとも私への償いのつもりなんだろうか？

そして、涼と美智代がなぜ知り合いなのかも尋ねると、それは軽く流された。

まあ、いいわ。今の私は自分のことで精いっぱいだもの。

美智代が帰った後、私は決意を新たにした。

これからは自分の人生に前向きに生きよう。今までは維持するのに必死だった。壊れかけの家庭をこれ以上被害が広がらないように食い止めていただけ。

でもこれからは違う。壊れた個所はちゃんと修復していこうと思う。新しいものを取り入れて、新しい感覚をつかみ、未来を考えていこう。

その前に…

私にはあとひとつだけ、確認したいことがあった。それは以前から気がかりだったこと。

早速明日、それを実行することにしよう。

く

（続

## その19 幸せは呼び寄せるもの

僕が拘置所に来たのはもちろん生まれて初めてのことに。

やや緊張しながら三木綾乃さんと対面するのを待っている。

そばには係員がひとり。おそらく僕と三木さんの会話が始まって  
もずっと無言で聞いているんだろう。テレビドラマでもそうだな。  
な。

——あ、何か差し入れた方が良かったのかなあ…？

慣れない場所に、ちよつとの待ち時間の間にもあれこれ考えてしま  
う。

思い立ったら吉日とはよく言うけど、僕は思い立つのがいつも手  
おくれだからどうしようもない。

でも、程なく三木さんが現れたので、差し入れのことなど頭から  
吹っ飛んでしまった。

「…森田さん…！」

三木さんはかなり驚いた様子で目を丸くしていた。

「どうも、お久しぶりです」

僕が軽く会釈をすると、彼女は僕より深いお辞儀をした。

「すみません…本来なら私の方からお詫びに行かなければならない  
立場なのに…」

どうやら三木さんは、僕がここに謝罪を求めに来たものと勘違い  
をしてるようだ。

「いえいえ、そんなことはどうでもいんです」

「…え？」

ふと横を見やると、係員の人はやはり退席せずにそばにいた。し

かも蠟人形のように無表情で動かない。

まあいいや。聞かれてマズイことなんて何もないんだから。

僕は口ベタなので、話し始めるきっかけにいつも苦勞する。

言葉に詰まってシドロモドロしていると、三木さんの方から口を開いた。

「森田さん、あなたがここに来られた理由はわかりませんが、私はあなたに対して謝ることしかできません。許してもらえとは思っていませんが、今の私にはこれしか…」

僕は慌ててそれを否定する。

「とんでもない。僕は三木さんに謝って欲しくて来たんじゃないません」

「でも…卑劣なことをしたのは間違いありませんから」

「そうですね…じゃあこれで充分、三木さんの謝罪の言葉は受け止めましたから、今日でもうそのことはキレイさっぱり忘れて下さい」「なぜですか？なぜそんなに簡単に許していただけるんですか？」

三木さんは真剣な顔で僕に問いかける。

「僕のことに関しては、三木さんに責任はないからです」

「——えっ？？なぜですか？私は森田さんを陥れた女なんですよ？」

三木さんは最初からまっすぐに僕を見ている。

こういったケースは、視線を落として目を合わさないものかと思つてたけど、逆に彼女の心にウラがないことがわかる気がする。

彼女の気持ちそのものが、アリアリとその表情に現れているのだ。

「三木さん。それはあなたの意思でやったことじゃない訳ですから、僕を陥れたことにはなりません」

「でも…森田さんがゆりかさんと離婚する原因を作ったのは私なんですよ」

やっぱり三木さんは責任を重く感じてるようだ。

「あの…言葉が悪いかもですけど、三木さんは利用されただけです。

暗示をかけられてしてしまったことは、あなたの意思ではありませんせんよ」

僕の言葉に三木さんの表情が少しだけゆるんだように見えた。

「森田さんにそう言ってもらえるなんて、私、少し救われた気がします」

「僕は本当のことを言っただけですよ」

「私……いろんな人から自分をこれ以上責めるなとか言われるんですけど、ご迷惑をかけたご本人様が許してくれない限り、私は自分を責め続けるべきものだと考えていました。またそうしなければ反省したことになりますもん」

やはり彼女の本心はそうだったんだ。

来て良かった。彼女の重荷を少しでも軽くしてあげないと。

「三木さん、僕がココに来たのはですね、失礼な言い方ですけど、あなたが絶望的になって精神的にも参ってないかがかりだったからなんです」

少し首をかしげる三木さん。

「……なぜ私のことなんか気にかけてくれるんですか？」

「だって、三木さんも僕同様、巻き込まれただけじゃないですか。でなければ、あなたは絶対こんな場所にいる人じゃありません」

「でも、結果は結果ですから……それに私は人を殺めました。どんな理由があっても許されることはありません」

「それはわかります。わかりますけど、僕が言いたいのはですね。

三木さん自身が、自分の人生を反省だけで一生終わらせて欲しくないんです。ここで自分の未来を諦めて欲しくないってことです」

「……」

「あなたはここで十分に罪を償うんですから、刑期を終えたら胸を張って社会復帰してもらいたいんです」

「森田さん。……どうしてそこまで？」

「昔、三木さんに作ってもらった手作り弁当、本当においしかった

ですよ。催眠術にかかったとは言え、心がこもっていたに違いありません」

「……」

「あなたは人を好きになったら、とことん尽くす人だと思いました。本来ならあなたは家庭的な人だと思います。だからきつと良い奥さんになれます。絶対幸せになって下さい。いや、なるべきです。幸せを呼びよせましょう！」

「森田さん。ありがとう……とても嬉しい言葉です。でもまだわかりません。なぜそこまで私のことを……？」

僕はまたチラッと係員を見た。こんな動かない人でも、僕が余計なことを口にしたら止めにかかるのだろうか？ まあいいや。気にしない気にしない。

「僕だつて1歩間違えれば、本気で人を殺していたかもしれない場面が過去に何度かあったからです」

ここで横から大きな咳払い。見ると、無言で突っ立っている係員が僕に目で警告していた。やっぱり聞いてるんだ。

「森田さんがそんなことを？ 信じられない」

僕は係員を横目でチラ見しながら答える。

「一度は僕の別れた妻に救ってもらいました。まだ結婚する前でしたが……」

「ゆりか……さん？」

「ええ。それに今回の是枝くんのことについても、僕はこれを天罰だと心の奥で思っていました。今まで誰にも言えませんでした、僕は是枝くんを恨んでいました」

「……」

「だから気持ちは三木さんとさほど変わりません。それなのに僕は今、再び幸せをつかみたいと思います。それまでは、もう一生独身でいようと自分に誓っていたのに。」

「それも……ゆりかさんなんですね？」

「はい。でもこんなの不公平じゃないですか。三木さんは服役しているのに、心の卑しい僕だけ幸せになるのは理不尽です」

「そんなことはないと思いますけど……」

「いいえ。僕の中ではそうなんです。僕も三木さんも被害者です。だからあなたにも幸せになってもらいたいです。今は無理でも、社会復帰に、未来に希望を見出して欲しいんです。そうじゃないと、僕だけ幸せになる資格なんてありません」

そんなにしゃべったつもりはないのに、のどが渴いている。面会時間もそう長くはとれない。

三木さんが優しく僕に微笑みかけた。

「森田さんは本当にいい人。そんな人を罫にかけた自分が恥ずかしいと思います。」

「もうそれは言わなくていいですから」

三木さんはややうつむき、一呼吸おいてから再び僕に顔をむけた。その表情は、確かにさっきよりも明るくなっていた。

「森田さん。正直私、昨日まで自分の将来なんて、もうどうでもいいって思っていました」

「やっぱり？」

「でも……今日こうして森田さんとゆりかさんが突然いらして、そして勇気づけられ……今はつきりと決意することができました。私、前向きに先を考えて生きて行きます」

僕は今の三木さんの言葉に仰天した。彼女の素晴らしい決意のあらわれのことではなく、言葉の最初に言ったこと。

「ちよつ、ちよつと……あのお、今ゆりかさんて言いました？」

「ええ。森田さんが来るほんの30分前くらいに、ゆりかさんもここにいらしたんです」

「Σ―11( ; )――1ええええ？」

「だから最初に私、驚いてしまつて……二人ともここに来る約束でも

して来たのかと思いました」

「いえいえいえ、全然そんな約束なんてしてませんよ」

「不思議ですね。偶然同じ日に来た二人が、私に恨みことも言わずに救ってくれようとしているなんて」

「ゆ、ゆりかさんも僕と同じようなことを？」

「はい。ゆりかさんにも感謝しきれないほど有難い言葉をいただいたんですけど、それがあまりにも意外だったので、私は戸惑ってばかりいてお礼も充分に言えませんでした」

「…そうでしたか」

「だからお願いです。ゆりかさんに私の感謝の気持ちを伝えてくれませんか？前向きに考えるようになったと」

「僕が…ですか？」

「ゆりかさんとやり直すつもりなら、会いに行くんでしょ？」

「そうは思ってるんですけど…」

「森田さん。彼女と絶対一緒になって下さいね」

「えっ？」

「森田さんとゆりかさんは似た者同士だと思います。感じる部分も通じ合うところも一緒。だから今日のような偶然も生まれるんじゃないかと思いました」

「そうでしょうか？」

「私からのお願いです。ゆりかさんと再婚して下さい。私が森田さんたちを引き離しました。だから元に戻してもらうことで、私も救われるんです」

三木さんの言葉がとても嬉しかった。

「は、はい。頑張ります！o(・n・)9」

勇気づけに来たつもりが、最後は三木さんに勇気づけられてしまった僕。

そうか…もう30分早くここに来ていれば、ゆりかさんに会えたのか。。

( 続  
く )

## その20 バス停にて（前編）

私は帰りのバスを待っていた。

真昼の暑い陽ざしに、立っただけで汗ばんでくる。

私はハンカチで顔や額を軽く叩くように拭きとった。

とそのとき、突然のいたずらな風。

バッグにしまおうとしていたハンカチが、私の手から道の向こう側の歩道まで飛ばされた。

「もう……」

横断歩道は目の前にはないけれど、町から離れた田舎道。交通量はほとんどない。

早足に道を横切りハンカチを拾いに行く私。

難なくそれを拾い上げ、バッグに片付けると、バスがやって来るのが見えた。

「あ……急いで戻らないと」

そう思っただけで来た道を再び横切ろうとすると、逆方向からバイクのツーリング集団が。

後ずさりして歩道に戻り、ただ黙って通り過ぎるのを待つ私。

「バスが行っちゃっ……」

そう呟いてもバイク軍団が止まってくれるはずもなく、長い行列を作った約30台ほどのバイクが、私の目の前を全て通過したところには、バスはすでに停留所を通り過ぎていた。

「ついてないわ……」

停留所に戻った私は時刻表を見て、次のバスの時間を確認する。

「ええっ？（。○。　；）次は1時間後！？」

町まで歩いて行くにもかなり遠い。それに今日はヒールだから長

距離は歩けない。

私はチラッと停留所の後ろにある屋根付きベンチを見た。

今日はこれ以上、急ぐ用事も特にない。

私は迷うことなく、ここで1時間ゆっくりバスを待つことにした。

ベンチに腰を落ち着けた私。今日は彼女に会いに来て本当に良かったと思う。

気になっていたこともよくわかったし、彼女の気持ちも理解できた。

最初、面会を申し出たとき、係官の人にあまりいい顔はされなかった。

加害者を被害者の身内が訪れるなんて、普通なら修羅場になってしまうのが必定。

だから私も例外なく、そうなってしまふものと思われていたようだ。

こうして私はベンチでひとりバスを待ちながら、徐々に三木綾乃との会話を思い返していく。

「いいですか。加害者を罵ったり、感情的になるようなことがあったら、すぐに面会は中止しますからね」

こう念を押されながら部屋に入った私。やがて彼女はやって来た。「申し訳ありませんでした。本当に申し訳ありませんでした」

彼女は私を見るなり、深々と頭を下げた。

でも私の目的は彼女に謝罪してもらうことじゃない。

「三木さん。私はあなたに教えてもらいたいことがあって来たの」  
彼女はうつむき加減で、やや首をかしげた。

「私が何を言っても言い訳にしかありませんから……」

彼女は無表情のまま。

「そんなことはないわ。例えば三木さんが言い訳だと思っても、

私はそれを聞きたいの」

この言葉にはすぐに反応した三木さん。

「どうしてですか？そんなことを聞いても、あなたの感情を逆なでするだけですよ？」

「いいえ。それは違う。この事件は三木さんひとりが悪いんじゃない。あなただつて、よほど精神的に追い込まれない限り、人を手にかけることなんてしないでしょう？」

「理由はどうであれ、私は英之さん…いえ、あなたのご主人を殺しました。そして前のご主人とあなたの家庭も壊しました。私は…あなたをどれほど苦しめたかわかりません。許されなくて当然の罪…」  
私は三木綾乃が哀れに思えた。思惑通りに利用されたがために犯してしまった罪。

それなのに今、生きて償っているのは彼女だけ。

「三木さん…確かに私も苦しんだ。でもそれは、死んだ是枝があなたにした仕打ちを思うと、恨むことなんてできないの」

三木綾乃は不思議そうに私を見る。

「例えそうでも、ご主人を失ったのに、そう冷静に思えるのはなぜですか？」

一瞬ためらった私。でも言おう。自分に正直じゃないと、相手だつて素直に語ってくれないもの。

「私と是枝の夫婦生活はすでに冷めきつてたの。もうお互い愛情のある関係ではなくなっていたし…」

「だからって…」

「ええ。確かに彼の死はショックだったし、悲しかった。けど正直、悲しみより不安が大きかった。残された子供たちのことを思うとね…」

「私って薄情な女かもしれないけど、是枝の死にはあまり泣けなかった。結婚したとたん、豹変するように変わってしまった彼。出張

だと言つては家に戻らない日も多くなつた」

「…そうだつたんですか」

「そんな中、彼は殺された。でも事件の背景にあつた事実を聞かされたとき――是枝が人を陥れたために恨みを買つたと知つたとき、私は彼への同情が消えうせたの。そして新たに思つたのがあなたのこと」

「なぜ私のことなんか…」

三木さんは、いまだ不思議そうな表情を変えずに私を見つめていた。

「聞いてくれる？実は私もね、過去に暗示にかけられたことがあるの。それで、ある人を深く傷つけてしまったわ」

「えっ!？」

「もし私がその暗示を別な目的のために悪用されたら…って思うと、三木さんを責めることなんて到底できないの。どうしようもないのよ。暗示にかかりやすい人は、言われるがままになつてしまうもの」

「あなたは…とても寛大な人ですね。」

「寛大だなんて全然。ただ暗示に関しては理解できるだけ。だからあなたの本当の気持ちを充分に理解して納得したいの。暗示にかかつていないあなたをね。この事件は起きるべくして起きたことだと」

「起きるべくして…起きた？」

「そう。愛してたんでしょう？是枝を。私と彼が知り合う前からずっと…」

「う…」

「だから許せなかった。利用するだけ利用して、暗示が解けた頃には彼は私と結婚していた」

「…そこまでわかつてるのなら…」

「いいえ。これはあくまで、報道の情報と警察の人に伝え聞いたことのみです。私は、あなたの口から事実を知りたいの」

(続く)

## その21 バス停にて（後編）

ひとりベンチに座りながら、私の頭の中では過去進行形が順序よくリピートされていた。

「聞いて…どうするんですか？」

「聞いて全てを納得したら、きっと私は1歩前に踏み出して行けると思うの。」

「…そうですね。私にはよくわかりませんが、あなたに少しでも償えるのなら。。。」

「ありがとう。でもね、前に踏み出すのは私だけじゃない。あなたも一緒よ。」

「私も？——なぜ私もなんですか？」

「あなたも私も被害者だからよ。今日がそのきっかけになればと思う。これは私自身に言い聞かせてることでもあるんだけどね。」

「……。」

「じゃあ話してくれてもいい？」

「…はい。わかりました。でも何から話せば…？」

「最初からよ。事件のことからじゃなくて、三木さんと是枝の最初の出会いから。」

「最初の出会い…。」

「そう。思い出すと辛いかもしれないけれど、お願い。」

三木さんは、私から視線を更に落とし、遠い昔を回想するかのように、穏やかな口調で説明が始まった。

「私と是枝が初めて出会ったのは高2のとき。クラス編成で同じ組になったときからです。」

「そんなに前から…。」

「でもすぐに付き合ったわけじゃないんです。彼には高1のときか

ら彼女がいたので、私にとって彼は憧れの存在でした」

「同級生なのに“憧れ”なの？」

「私のような地味で目立たないタイプは、誰からも注目を浴びることなんてありません。それに比べて彼は、文武両道と言いますか、何をやっても万能で、人から一目置かれるタイプ。わかるでしょう？ 私と何一つ共通点なんかないんです。単なる憧れでしかなかったんです」

「…それなのに彼と付き合い始めたきっかけって何なの？」

「是枝はその彼女に大失恋したんです。私にしてみれば、彼に彼女は合わないとは思ってましたけど」

「それはどういうこと？」

「彼女の方は帰国子女で、家柄も財閥の娘。国内外にいくつも別荘があるセレブな子。物の考え方や生活感覚も違うし、彼女は完全にアメリカナイズされて、彼はついて行けなかったと後で聞きました」

「そう…私はそんな話、彼から一度も聞いたことがなかった——  
あ、ごめんなさい。先を続けて」

「はい…その後間もなくして、突然彼の方から私に告白して来たんです。付き合ってくれないかと」

「ええっ？（。○。；）なぜ？それまで彼と親しくしてたわけじゃないんでしょう？」

「全然です。実はそれには理由があつて、クラスメイトの友人が、私の気持ちを勝手に彼に打ち明けていたんです」

「それはとてもいいお友達ね」

「いいえ。完全な悪友でした。いつも人には親しみやすい態度をしていながら、私のことは上から目線でした。きっと私がフラれると思つて、からかい半分でやったことだと思います」

「でもそれが逆に功を奏した…」

「ええ…そうなんです。最初は不思議でなりませんでした。でもすぐにわかったんです。彼が失恋のショックから妬けになって、どう

でもいい私を自分の慰み者に行っていることを」

「えっ？」

「別れた彼女はかなり高慢ちきでした。彼はさんざんわがままな彼女に振り回されたあげくにフラれた。もうこりごりだったと思います。そこに私の悪友が仲介に入る。きっと彼には、私が目立たなくてわがままも言わないタイプに見えたんでしょう」

「だからって、そんな決め方はないんじゃない？言葉が悪いけど、あなたは彼のおもちゃじゃないのよ」

「でも、そのときはそれで良かったんです。充分わかっていたんです。それでも彼と付き合えるのなら…彼の心が私で癒されるのなら、どんな形でもカッパルでいられたらそれでいいと。彼のためになら何でもしてあげようって」

「…そうだったの。それからずっと是枝と一緒にだったわけね」

「はい。私は彼の進学する大学も同じ目標にして入学しました。同じサークルにも入りました」

「ラブラブの絶頂期だったのね…」

「いえ、そうじゃなかったんです。大学も3年目になった頃には、会える機会は週1回のペースに落ちていました。途中、お互いの就職活動も始まりました」

「でも、三木さんは彼と同じ会社に入社したんでしょ？」

「はい。最終的にはそうしました。就職先が別々になると、どうしても疎遠になると思ったからです。私は彼と離れなくなかった。私にとつては彼が全てだった。自分で言うもの何ですけど、その執念が実を結んだのか、彼と共に目指した会社に内定が決まりました」

「そうね…まさに執念ね」

「まるでストーリーカーだって思うでしょう？でも違うんです。彼は私を邪魔扱いもしないし、疎ましい素振りもしなかった。彼が大学時代に多くのコンパをこなしてたり、風俗に通ってたりしたのは噂に聞いてましたけど、私に対しての優しさは変わりませんでした」

「あなたは…それで許せたの？」

「そのときは許せました。コンパだって大学生なら当たり前だし、風俗も男の人なら誰でも一度は経験したがるものじゃないですか」  
「それはちよつと…私にはわからないけど」

「彼は一緒に就職が決まったときも喜んでくれたんです。一緒にお祝いの食事もしました。私は心から嬉しかったし、一緒に働ける幸せも感じていました」

「じゃあ、一度も不安というものは感じなかったの？」

ここから三木さんの表情がやや曇ってきた。いよいよ事件のきっかけになる部分かもしれないと私は内心思っていた。

「正直感じました。就職してからというものの、彼は出世欲の塊で、休みを返上したり残業も平気でこなしてました。私はそれにはついていけなかったんです」

「そう…」

「彼は業績をグングン伸ばして、上役から可愛がられるようになり、私たちがデートする時間など入る余地もなくなっていました」

「……」

「そんなとき、私ふと思ったんです。私は今まで彼を必死になつて追いかけて来ただけ。でも今はもう追いついていけない。彼にとつて、私は何なんだろうって」

「わかるわ…きっと私でも同じことを感じたと思う」

「そのとき初めて思ったんです。もう終りにした方がいいのかなって…」

三木さんの目にうつすら涙が浮かんでいるのが見えた。ハッとする私。

「ごめんなさいね。思い出させてしまつて…辛いのならもう話さなくてもいいわ」

「いえ…大丈夫です。話せます——私は迷っていました。彼は今私のことをどう思っているんだろうって。そんなときだったんです。久々に会えた彼の口から、今までの迷いが吹っ飛んでしまうよ

うな言葉をもらったのが」

「……？迷いが吹っ飛ぶような言葉……」

「ゆりかさんにこんな言葉を言っているの？どうかか……あなたにもショックな言葉かもしれません」

「私に遠慮しないで。何を聞かされても平気だから。今日はその覚悟でここに来たの」

「はい。。わかりました。今でも耳について離れません。そのとき彼は私にこう言ってくれたんです」

三木さんはまるで回想シーンを思わせるような口ぶりで、当時の記憶のままに説明した。

「綾乃、俺はお前に苦勞をかける生活はさせたくない。一日も早くスピード出世をして、お前には金に困らない優雅な生活を過ごしてもらいたいんだ」

「えっ？それって……」

「綾乃、俺と結婚しよう」

「……英之さん……」

「ダメか？」

「うっん全然。嬉しい。とっても嬉しい」

「今まで支えて来てくれてありがとう。そしてこれからも頼む。俺の出世のために協力してくれ」

「ええ、もちろん。私にできることなら何だってする」

「よく言ってくれた。実は綾乃にしかできないことがあるんだ」

「私にだけ……？」

「そう。お前にだけ。椅子に座って俺の指示に従ってくれたらそれでいい。やってくれるかな？」

（続く）

（

## その22 やり直すために

三木さんの細かいセリフに渡るまでの説明が、私の知る事件の真相と繋がった。

「それがあなたに暗示をかける事だったわけね・・・」

「はい。目的は森田卓さんを誘惑して、妻のゆりかさんと離婚させること。それが何を意味するかなんて考えもしなかったし、暗示にかけられると、なぜこんなことをするのかさえ、考えられなくなりました。ただ私は、是枝のためなら何でもすると心に堅く誓っていました」

「そうだったの…そういう経緯があったのね・・・」

「暗示って、本当に怖いです。是枝を愛していた反面、かけられた術によって、森田さんも好きになっていく…そして大胆な自分の人格が形成されてゆく…矛盾だとわかっていても、自分に歯止めがきかなくなっていたんです」

彼女の声は震え、大粒な涙がこぼれ落ちた。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい…私は是枝が許せなかった。暗示も解いてくれないままに時が過ぎて、気づいたときには彼はあなたと結婚することになっていた。私は彼の出世のために利用されただけ。彼は私に何の愛情の欠片もないことがやつとわかったとき、私の頭にはもう憎しみと恨みしかなかった」

私は三木さんの話を聞いて、身につまされる思いがした。

今までのモヤモヤしていた部分は、ほぼ解けたような気がするけれど、この真実を聞くと彼女に深く同情せざるを得ない。

「三木さん、もう謝らないで。私もあなたと同じことをしてきたんだもの。そんな私が人の事をどうのこうの言える立場じゃない」

「ゆりかさんが私と同じ事なんてそんな…」

「いいえ。同じ事よ。さつきも言ったけど、私も昔、暗示にかかってその人にどれだけ迷惑をかけてしまったことが…」

「その人は今何を…？」

私は一瞬ためらったけど、正直に名前を明かすことにした。

「その人って言うのは…森田卓さんなの」

「!!!!」

三木さんは目を丸くして、声も出せずに驚いていた。

「私は2度も卓さんを突き放した。1度目は催眠が解けたとき。この恋は本当の恋じゃないとかたくなに思ってしまったのが原因だった。彼が私にとってどんなに大事な人かもまだ気付かずに」

「……」

「2度目は、暗示にかけられたあなたと卓さんの浮気を許せずに、離婚を決意したこと。私は彼を2度もどん底に叩き落としてしまったようなもの」

「でもそれは私のせいですから…」

「ねえ三木さん。私もあなたもこれまで毎日のように、反省と後悔の日々を過ごして来たと思うの。私は自分が幸せになる資格なんてもうないと思っていた。でもね、このままの生活を続けていたら家族までダメになる。もう誰にも迷惑はかけたくない。そのためには立ち直らなくちゃ！幸せをつかまなきゃって思えるようになったの」

「ゆりかさんは強い人ですね…」

「全然強くなてない。私ひとりでは何も変わらなかった。いつも助言をくれたり、気にしてくれたりして支えてくれる友人知人がいなければ、今の私はこんな心境にはならなかったわ」

「うらやましいです。私にはそんな友人なんていないし、守る家族もいるわけじゃないから、立ち直る必要なんてないんです」

「それは違う！あなたにだって、心配してくれる親御さんがいるでしょう？」

「それは…」

「私はね、そのとき急に三木さんのことが頭に浮かんだの。きっと

私と同じ思いをしてるに違いないって。絶望して自分の行く末を見失ってるんじゃないかって」

「……」

「だとしたら、あなたが不幸のままで、私だけが前に進んで行くのはいけないと思ったの。共に被害者なんだもの。共に立ち直って共に幸せを見つけないきゃダメだって」

少しの間があつてから、三木さんが言葉に詰まりながらも口を開いた。

「ゆりかさん、ありがとう。私のことまで考えてくれるなんて……今日までそんな人誰もいなかった……私のことなんか。」

三木さんは感極まつて、両手に顔をうずめた。

「ねえ三木さん、私と一緒に誓つて。新たな幸せを目指すつて。あなたが約束してくれたら、私もこれから頑張れるわ」

彼女は顔を隠した両手をゆっくりとひざに降ろす。でも顔はまだうつむいたまま。

「ゆりかさん、私とあなたでは、罪の重さが違います。人ひとりの命を奪ったことは、簡単に償えるものではありません。例えば是枝が悪い男でも、彼を亡くした親御さんにとって私は仇。しかも世間からはバッシングされ、身をひそめて暮らしています。それを思うと私が幸せを望むことはいけない気がしていたんです」

「言ってることはわかるけど……このままではあなたはダメになつてしまうわ」

「はい。それは承知の上です。承知の上でした……さっきまで。」

「え……？」

三木さんが真つ直ぐ私に顔を向ける。

「なんだかゆりかさんのおかげで、少しですけど、自分のこれからの人生を考えてもいいのになつて」

「もちろんよ。あなた自身の人生なのよ」

「本当に私のような者でも、刑期を終えたら幸せを見つけてもいいんでしょうか？」

「三木さん、あなたは充分に反省している。後悔もしている。その気持ちさえ忘れなければ、幸せになる権利は絶対あるものよ」

「ゆりかさん…ありがとう。私、なんとか前向きに進んで行けるよう、努力します」

「良かった。その言葉が聴きたかったの。私も頑張るから、あなたも頑張つてね！」

三木さんが少しだけ微笑んでくれた。今は化粧つ気がないけれど、メイクもバツチリキメれば、とてもチャームングで魅力的な人。

「あの…ゆりかさんに聞いてもいいですか？」

不意に問われた私。

「ええ。構わないけど」

「森田さんともう一度やり直すつもりですか？」

私は答えに戸惑った。実際この問いに対する答えは私自身まだ出していない。

「ごめんなさい。それはまだわからないの」

「じゃあゆりかさんの言う幸せって、別な所にあると…？」

「いえ、そういうわけじゃないの。決してそういうわけじゃないんだけど…」

少し首をかしげる三木さん。遠慮がちに再び私に問いかける。

「あの…ゆりかさんは、森田さんと一緒に幸せをつかもうとしてるのではないんですか？」

「もちろんそうしたい気持ちはあるわ。あるんだけど…」

「何か迷いでも？」

「実際の話、卓さんが今の私のことをどう思っているのかわからない。それにさつきも言ったように、私は彼を2度も突き放した。そんな私が、あんなに純粋で献身的な人にふさわしいのになって…」

「そんなことは決してないと思います」

「ありがとう。でもね、私の方から彼にアプローチすることはもうないと思う。都合が良すぎるもの」

「じゃあ・・・森田さんからアプローチが来るのを待つと・・・？でももし来なかったら・・・？」

「いいの。幸せは自分で探すもの。パートナーがいなければ幸せになれないとは限らない。別な形の幸せもきつとどこかにあるはず。今いる家族を大事にするものひとつの幸せだわ」

「やっぱり強いわ。ゆりかさんは・・・」

バス停のベンチで三木綾乃さんとの会話をおさらいしていた私。頭の中からそのシーンも徐々に薄らいできた。そんな中、あらためて私は思う。

私からは彼の元へは行かない。それでこのまま卓さんから声がかからないようなら・・・

その時はもう終わりにしよう。

それが私の人生・・・

それが私の運命さだめ・・・

と、突然の急ブレーキの音。

ハッと我に返った私は、目の前の状況を確認する。

1台の車が、このバス停を通り過ぎたとたん、急ブレーキをかけて数メートル先で急停止していた。見覚えのある年式の古い中古車。車から人が降りようとしている。心臓が高鳴った。私にはそれが誰かすぐにわかったから。

「——卓さん・・・」

（続く）

### その23 運命のタイミング（前編）

「ゆりかさんだっ！」

僕は反射的に急ブレーキを踏んだ。  
車が止まってからちよつと苦笑い。

バカだな…普通に止まればいいのに、僕は何焦ってんだ？

確かにバス停にいる女性はゆりかさんに違いない。

三木さんとの面会から30分も時間のズレがあれば、もう会えないものかと思っていた。

でもどうやらバス停には彼女一人きり。話しをするには願ってもない絶好のチャンス！

いつもの僕なら、心の準備も何もしなしに人と大事な話をするなんて、とんでもないこと。支離滅裂になるのは目に見えてわかる。

それなのに僕はこのとき、直感的に思った。

——今しかない。今を逃したらもう言えなくなる！

僕みたいな人間に直感なんてあるのかどうかは定かじゃない。それに何をどう言うのかなんて決めてもいない。下書きした原稿があるわけでもない。

なのに僕は、ゆりかさんの元へ足を運んでいる。僕の鈍感な頭脳より、勝手に進む足の方がよっぽど正直だ。

ゆりかさんも僕に気づいて、バス停の屋根付ベンチからゆっくりとこちらへ歩み寄って来ている。

そしてついに僕たちの距離が2メートル以内になったとき、お互いが自然に立ち止まる。

——数秒の沈黙。ゆりかさんは落ち着いていた。というより、僕だけが勝手に緊張しているだけなだけで。

こんな場所に突然現れた僕に対して、彼女は驚いた風の様子なども感じられない。

むしろ優しい眼差しで、僕が何かしゃべろうとしているのを待っているようにさえ見える。

——ならばしゃべろう！僕の今の本当の気持ちをここで。

決してロマンティックな場所ではないけれど、真心を彼女にぶつけよう。

「ゆりかさん。僕にはあなたが…」

と言いかけたとたん、僕のおなが

“グウウウウ…”

と、こんな田舎のバス停前で大きく鳴り響いた。

ガ ΣΣ(。D(；)ン！！な、なんでここでえええ！！

さすがに目を丸して驚いたゆりかさん。でもすぐにクスツと笑ってくれたので、照れ笑いしながらも一安心する僕。

「卓さん、おなか空いてるの？それともおなか壊してるの？」

久しぶりに会ったのに、会話の始まりがこんなだなんて…(^\_^；)

「いえあの…たぶん空いてる方だと(^\_^；Aでも平気です。これしきのこと」

「無理しないで。私もおなか空いてるの。どこかで一緒にランチしましょ」

「は、はははいっ！」

「私、バスに乗り遅れちゃってね。1時間も待つ所だったの。図々

しいお願いで申し訳ないけど、卓さんの車に乗せてくれる？」

「も、もももちろんです！」

ゆりかさんはまたクスツと笑った。

「卓さん、変よ。緊張なんてすることないのに。私たち、元夫婦じゃない。初対面じゃないのよ」

よくよく考えればそうだった。お互いよく知っている仲なのに、こんなに緊張するなんておかしいや…

「そう…そうですね。アハハハ…」

このぎこちない笑いも、どこかおかしいと自分でもよくわかる。

「卓さんは何が食べたいの？」

「ラーメン…いえ、口に入るものなら何でも^^;」

「じゃあ、車に乗って最初に見つけたお店屋さんに入ることにしましょ」

「はいっ」

結局、ゆりかさんがリードしてる形になっていた。

——15分後。

僕とゆりかさんはカレーショップのテーブルで対面していた。

「本当にいいんですか？カレーで」

「全然。卓さんもカレー好きでしょ？」

「はい。でも外食でカレーは初めてなもんで…」

「ホントに？じゃあ家庭のカレーしか食べてないってことね？」

「家でもカレーは作らないし…」

「そうなの？最後にカレー食べたのいつ？」

「えと…最後かどうかはわからないんですけど、僕の記憶に残ってるのは、昔ゆりかさんが作ってくれたやつかなあ…」

「（。〇。；）ええっ？そんなに前？」

「ええ。おいしかったですもん。辛口と甘口のルーを混ぜて中辛を作った中に、じっくり煮込んだチキンが入ってたあのカレーの味は

絶品でした」

「……そんなことなんか憶えてたの。」

「すいません。なんか急に思い出しちゃって >( ; ^ \_ ^ )

」

大事な話をするきっかけもつかめないまま、注文したカレーが運ばれてくる。

「ゆりかさん、福神漬は？」

「少しちょうだい」

テーブルには、透明のプラスチック容器に入った福神漬が置かれている。

僕は備え付けられている小さじで、ゆりかさんの皿にそれを盛りつけた。

「ありがとう。卓さん、少し手が震えてない？」

緊張しているのがバレバレとはいえ、僕は平静を装った。

「そんなことはないですよ。アハハ( ^ □ ^ ; ほら福神漬だってこんなに早く救える」

僕は勢いで、自分の皿にさじで5杯分の福神漬を盛ってしまった。

「卓さん、それ多すぎない？」

「いえいえ、これも僕大好きですから。アハハ……」

そう言いながら、僕は福神漬だけを口に運ぶ。

「卓さんダメっ！それで食べちゃ！」

ゆりかさんの言葉にハツとした僕。

Σ(「□」 ; しまった！取り分けるさじで食べちゃった！！

僕は半パニくり状態で、慌てて小さじを福神漬の容器に戻す。

「戻しちゃダメっ！( - ; ;」

と、またまたゆりかさんの声。

ハッ（。〇。；）ヤバっ！僕が口をつけたさじだった…  
全く何やってんだ僕は。

「あの…僕が責任持ってこれ全部食べますんで。」

「この量を食べるのは無理よ。何か袋でももらってお持ち帰りしましょう」

「は、はあ…」

僕って今でもやっぱりドジなんだ。これじゃ真剣な話なんてできるわけないよ。

僕は一体どうしたらいいんだ？何からしゃべれば気持ちを伝えられるんだ？

どうやら僕の思い悩んでいる表情が、ゆりかさんに読み取られたらしい。

「卓さん、ここでは食べるのに専念しましょう。緊張して言葉を選んだりしていると食べた気もしないでしょ？」

「はい…まあ」

「お互いおなかへペコペコなんだから、大事な話はあとで。場所を変えてからにしましょう」

「そうですね…そうですね。わかりました」

結局、ここでも終始リードはゆりかさんだった。

ああ…なんか不安になってきた。

こんなんで、僕はちゃんと言えるのだろうか？  
ドジも治らない、進歩もしていないこの僕が…  
果たしてゆりかさんに再婚の申し入れなんか…

（続く）

## その24 運命のタイミング（後編）

ゆりかさんと食事中での会話は、もっぱら三木綾乃さんのことだった。

同じ日に、同じ思いで彼女を訪ねた偶然を、二人で驚き合っていた。

間接的な話なら普通にできるのに、核心部分になるとなぜ極度に緊張してしまうのか、自分でも齒痒くてならない。

そんな中、何気にふと見た外の景色を眺めて気がついた。

——そうか、確かこの十字路を西に進めば5分くらいで…

僕はゆりかさんに問いかける。

「あの…このあと、ちょっと寄り道していいですか？」

「え？寄り道？」

「それほど遠くじゃありません。着いたらそこでゆりかさんに聞いてもらいたいお話をしようかと…時間の方は大丈夫ですか？」

ゆりかさんはためらいもなく、即答の返事。

「私は平気。いずみとひなたは母の家に行ってるから」

「良かった。じゃあここを出たらすぐ…」

と、ここでゆりかさんのケータイに着信が。。

「いずみからだわ。ちょっと失礼…」

席を立てて数メートル先で小声で話すゆりかさん。

1、2分ほどして僕のところに戻って来た。

「ごめんなさい。ひなたが熱出しちゃったみたいなの」

「Σ（□）…ええっ？」

「そんな高熱じゃないみたいだけど、病院で看てもらった方がいい

のか母もいずみも迷ってるようだから、様子を見に行こうと思うの」「そ、そうですか…そうですね。すぐに行ってあげて下さい。行くべきです」

「卓さん、ごめんなさいね。お話も聞けずに…」

「いえいえ、僕に構わずどうぞ」

ゆりかさんは申し訳なさそうな表情で席を離れ、店員に呼び出してもらったタクシーで早々と去って行ってしまった。

僕は店の出口でタクシーが視界から消えるのをずっと眺めているだけだった。

「あ、そうだ」

不意に思い立って、僕はいずみにメールをしてみる。

“ ひなたちゃんの熱はどのくらい？ ”

すると、30秒も経たないうちに返信が。

“ どうして知ってるの？ ” といずみ。

“ ママと会ってたんだ。今タクシーでそっちに向かったから ” と僕の再送信。

するとまたまたすぐにいずみの返信。

“ 卓くんは来ないの？ ”

それに対する僕の返信。

“ うん。ちょっと色々あってね。ひなたちゃんは大丈夫？ ”

僕のこのメールを最後に、いずみからの返信はもう来なくなった。

確かに、僕の車でゆりかさんを送ってあげるといふ選択肢もあった。

その方がひなたちゃんにもいずみにも会えたのに…

でもその反面、自分の気持ちにけじめをつけないまま、再びあの子たちに会うのは決して良くないという心理もあった。

あゝ、せつかくのチャンスさえも生かせないなんて…

こんな偶然に出会うタイミングなんて、もうないかもしれないのに…

なんだかこのまま真っ直ぐ帰る気にもなれない。どこか寄り道でも…

そうだ、僕ひとりでもいいや。このままアソコへ行こう。

僕は車を走らせる。カレー屋の十字路から西に5分ほど行くと、視界がきれいに開けた海岸線に出た。

やや曇り空だけど、まぶしい日差しが苦手な僕にはちょうどいい波もおだやかだ。

僕は車を降りて、砂浜へ続く土手の斜面に腰を下ろした。

——どのくらいぶりだろう…あのとき以来、来てないもんな。

僕は砂浜から遠くまで広がる大きな海原と地平線を、ただ呆然を眺めていた。

なんだか眠い。僕は斜面に寝そべり、空を見た。やけに雲の動きが早いように感じるのは気のせいかな？

僕の行動はトロくさくて進まないのに、雲は着実に次へ次へと進

んでいる。

ああ…バス停で会ったとき…あのときに言うべきだったのかもしれない。

たとえば、おながが鳴ったって、構わず話を続けていれば今頃は。

後に残るは後悔ばかり。

所詮、結果論でしかないのに…

僕はゆっくりと目を閉じた。

——口に何かが飛び込んで来た驚きに、慌てて僕は飛び起きた。でも何のことはない。少し強くなった風に、飛ばされた雑草が僕の口に入ったのだ。

「あー、びっくりしたもう…」

ケータイで時間を確認する僕。

「わ、1時間近くもここで寝てる（ - ；」

僕は体を起こし、風で波が少し荒くなった海を再び眺める。

背後から人が近寄って来る気配を感じた。

無造作に振り向いた僕は、あまりの驚きに体が固まってしまった。

「ゆりかさん…」

彼女は、まぶしすぎるほどの微笑みを浮かべて、何も言わずに僕のとなりに座った。

当然ながら僕の質問はこうだ。

「どうしてここがわかったんです？ ひなたちゃんは大丈夫なんですか？」

ゆりかさんは、となりにいる僕に振り返りながら答える。

「卓さん、いずみにメールしたでしょ？」

「えっ？あ、はい。ひなたちゃんの様子が気になったもんでつい…」

「それでね、いずみに卓さんの所に戻って言われちゃったの」

「（…）えっ？」

「ひなたは母といずみで病院に連れて行くから心配するなって」

「でも心配でしょう？」

「少しはね。でも38度まで熱もないってことだから…安心して任せようと思って」

「そうですか…それにしてもよくここがわかりましたね」

「ええ。引き返してもらったタクシーで、一旦カレー屋さんに戻ったの。もういないとわかってただけだね」

「はあ…」

「それで思い出したの。卓さん言ったわよね？ちよつと寄り道していいか？って」

「はい…」

「それでピンと来たの。あそこからわざわざ寄り道をする場所…それは私たちの思い出の場所だってね」

「ゆりかさん…」

僕は感激した。ゆりかさんが…ゆりかさんが『私たちの思い出の場所』と言ってくれるなんて。

今まで僕は自分勝手に『僕だけの思い出の場所』だと信じて疑わなかったからだ。

「それに私もね、ここに来たかったの。卓さんと初デートした時以来だもの」

「でも…ゆりかさんにとって、ここは良い思い出の場所だったんでしょうか？」

「どういう意味？」

「僕は当時、言葉に言えないような、とんでもない失態をしてしまいました」

「そうだったかしら？」

「そうですよ。あの時もちょうどこの辺に腰を下ろすと、いきなり僕がおなかを壊して…ほら、あそこの岩陰まで無我夢中で走って行って用を足したんです」

「言葉に言えたじゃないw」

「あ…^^;」

「そして、別なカップルに見られちゃったのよねw」

「お恥ずかしい話で…(´、;´)ゝ」

「それでもやっぱり、ここは私にとっても大切な思い出の場所だわ…」

「…!!!」

僕の胸が一気に加速して熱くなった。

もう来るはずもないと思ったチャンス。散々逃して来たチャンス。言うなら今だ。今しかない！

ここで言わなきゃ男じゃない！三木さんに偉そうなことを言えた義理じゃない！

僕はゆりかさんに向き直る。斜面で正座はきついけれど、片手を地面に付けてしっかりバランスをとり、そして彼女の目を見てはつきりと言った。

「ゆりかさん。ここからもう一度やり直させて下さい！この場所から…最初からもう一度！」

(続く)

## その25 必然な二人

口ベタな卓さんがここまでではつきり言うまでには、かなりの決意と勇気を振り絞ったはず。

今すぐにでも返事はできる。『はい』と一言で済むことなのだから。

なのに…なのに私はその直前でためらった。

バカな私…ここに戻って来たのは何のため？こんな予感もしてたはず。そしてその時は、快く返事することも決めてたはずなのに…

突然の不安が私の頭の中をよぎる。それは卓さんに対してではなく、自分への不安。

私は卓さんにふさわしいだろうか？

独身時代に一度フツてしまったことも、離婚をしたことも、みんな私の決断でしたこと。卓さんを長い間苦しめて来たのはこの私。

そんな私がいとも簡単に申し入れをOKしてしまうのは、都合が良すぎるのではないか？

こんな善人の塊みたいな人と幸せになる資格が私にはあるのだろうか？

「卓さん。本当に私でいいの？」

彼は躊躇なく答える。

「もちろんです！」

彼の言葉は力強かったけど、斜面での横向き態勢のためか、その維持が辛そうに見える。

それを見た私はひとつの提案をした。

「卓さん、正面の方を向いて話してみない？お互い海を見ながらしゃべるの」

「…はあ」

「目を合わせながら話すのも大事だけど、緊張するでしょ？私ね、卓さんにもっとリラックスしてもらいたいの。そして私がさっきの返事をする前に、もう少しだけあなたとお話がしたいの」

「海を見てるとリラックスして話せるんですか？」

「人の表情を見ない分、楽に話せるものよ」

「…わかりました」

「ありがとう」

私たちは隣同士に座りながら、顔はお互いに正面の海を見据えていた。

話しかけたのは私の方から。以前から心に引っ掛かっていたこと。「卓さん、いずみに対する責任を感じてのことなら、無理はしなくていいのよ」

「無理なんてそんな…」

「私、全然知らなかったの。あなたがずっと今まで、いずみの養育費を払い続けてくれていたこと…本当に申し訳なくて…」

「そんな謝らないで下さい。それは僕が決めたことなんですから」「でもあんな大金、申し訳なくてとても私には使えない。卓さん、あれはあなたのお金よ。あなたが自由に使っていいの。あなたは人間的にも素晴らしい人。尊敬すべき人。私たちのために、卓さんの人生を犠牲にしてしまったら…」

——数十秒の沈黙。

やがて卓さんが、ひとつひとつ言葉を丁寧に、噛みしめるようにゆつくりと声を発した。

「ゆりかさん、それは違います。僕が自分の人生を犠牲にしているだなんて、一度も考えたことはありません。断じてありません」「でも…」

「僕が人間的に素晴らしいだなんてとんでもない話です。むしろ女々しい男そのものなんです。僕は何年経ってもゆりかさんを忘れることはできませんでした。是枝君と再婚されたことがわかったときだって、シヨックで寝込んでしまいました。忘れる決心をしたはずなのに…そのはずなのに、どうしてもあなたのことが頭から離れなかったんです」

「・・・」

「そんな数年後のある日、突然いずみが僕の前に姿を現しました。成長したいずにゆりかさんの面影を見たとき、受験勉強を教わるために僕の家に通って来るいずみを拒むことなんてできませんでした。会うことが…会えることが嬉しくて嬉しくてしょうがなかったんです」

卓さんが胸のうちを正直に告白してくれている。彼はウソの言えない人。私は黙って彼に耳を傾けていた。

「でも僕はゆりかさんに近づくことなんてできませんでした。是枝君と再婚しているあなたに付きまとうのは、単なるストーカー行為ゆりかさんの幸せな家庭を阻害することになる。僕は自分の気持ちをずっと封印していました」

「その封印が解けたのは…例の事件のとき…？」

「そうです。是枝君が亡くなってからです。人の死をきっかけにするなんて、僕はとんでもない男なんです」

「…そんなことない」

「でも正直、僕はいずみやひなたちゃんと自由に楽しい時を過ごせるようになり、嬉しくてたまらなかったんです。そして帰宅するあなたの顔を確認してから僕は自分のアパートに戻る。そんな程度のちつばけな時間に、僕は幸せを感じていました。とんだバチあたり者です」

「自分をそういうふうに言わないで」

「でもそこで気づいたんです。僕が前進するためには、ゆりかさん

を忘れることじゃなくて、ゆりかさんと歩んで行くことだって。バチ当たりでもいい。甘んじてそれは受け入れるから、ゆりかさんと一緒にやり直したいって」

「卓さん…」

「僕にはゆりかさんしかいないんです。ゆりかさんが必要なんです。ゆりかさんが大好きで大好きでたまらないんです。頭の中はゆりかさんでいっぱいなんです！」

怒涛のように流れる卓さんの言葉。口ベタな彼がここまで言うてのける心の強さ。信念。決意。私は今にも泣きそうだった。

「僕は映画のようになかった。いい決めセリフなんて言えません。たとえそんなセリフが浮かんだとしても、僕には似合いません。ただ僕には、ゆりかさんたちを守っていく覚悟があります！」

「私…たち」

「はい。僕はいずみやひなたちんと家族になりたい。本当の父親じゃないけれど、本当のような家族になりたいんです。図々しくて馴れ馴れしいお願いですが、僕のこのわがまを聞いてはくれないでしょうか？見た目はこんなブサイクな僕だけど、どうかもう一度、僕にやり直しのチャンスをくれないでしょうか？」

一気に込み上げてくる感動。私は彼の懸命な言葉に心を打たれた。「僕は家族全員で幸せになりたいんです。誰ひとり欠けることなくこれからずっと…」

「卓さん、もう言わないで…」

「えっ？」

私は卓さんを遮った。

「もうわかったわ。充分にわかった。それ以上言ったら私も…」

「あ…」

海を見ながらしゃべっていた卓さんが、チラッと私を見たのがわかった。

「私もう…声が出せなくなっちゃう。きちんとお返事できないじゃないの…」

「ゆりかさん…」

見られてしまった。

私の目から一気に流れ落ちる涙を。

涙でぐしゃぐしゃになった私の顔を。

それはまさしく嬉し涙。心の底から湧き出る感動の涙。

私はこの瞬間、ハッキリと決意した。

私はこの人を支えてゆこう。これからずっと。

何があってもこれから一緒にいよう。私にとって、これ以上の人は絶対いない。

どんな人間にだって欠点はある。誰しも完璧な人間なんていない。私たち二人に足りない部分があったってそれも当然。

もう二人とも大人なんだから、これからは許す許さないの問題じゃなくて…

補い合って、話し合って、そして分かり合ってゆこう。

卓さんは全て行動で示してくれた。ずっと今まで。

何年にも渡って支払い続けてくれた大金の養育費。

いずみの受験勉強をサポートし、ひなたには手話も指導。更には強盗からも二人の身を守ってくれた。

是枝が亡くなってからも私たちを陰から支えていてくれた。

世間の好奇心な目にさらされないように、目立つことなく、心配りや気配りも決して忘れなかった彼。

どんな決めセリフよりも、どんなにときめくようなセリフを言える人よりも、行動で示す人には叶わない。

誠実さ、実直さがにじみ出ている人…それが森田卓さん。  
今なら大声で言える。

——私は…私は森田卓さんが大好き!!

遠い地平線から視線を隣のゆりかさんに移すと、彼女はボロボロ泣いていた。

僕は戸惑い、すぐに視線を正面に。

こんな場面、映画やドラマならそつと彼女の肩を抱き寄せてあげるのかもしれない。

でも今の僕はゆりかさんの返事待ち。早合点はいけない。焦ってはいけない。

——待とう。何分でも…このままゆりかさんの言葉を。。

待つのは長かった。

5分か10分か…お互い肩を並べて座りながらも、そのくらいの沈黙は続いていた。

ゆりかさんの鼻をすする音が止み、やがて沈黙は破られた。

「卓さん、私ね。9年前のあの頃と…あの頃ここにいたときと同じ気持ちなの」

「初デートのとき…ですね」

「ええ」

「でも…あのときは暗示にかかっていたんじゃない？」

「そうよ。でもね、あのときの気持ちは蘇ってくるの。卓さんに夢中だったあの気持ち…」

「それって…」

僕はまたチラッとゆりかさんを見た。彼女は海を見つめながら話している。

軽い微笑みを浮かべながら…とても優しい顔で。とても印象的な顔で。

ゆりかさんが愛おしくてたまらなく思えた瞬間…

今すぐにも抱きしめたい。ギュッと抱きしめたい。  
でも僕はそんな衝動をグッとこらえた。

「もちろん今はそんな暗示になんてかかってないわ。でも気持ちはあのとときと同じなの。あなたを思う気持ちは全く同じ」

「同じ…」

「私も卓さんが好きです。大好きです。私にとって、かけがえのない大切な人よ」

「ゆりかさん…」

「今決めました。私はあなたと生きる。これからずっと共に生きていきたい！」

僕の衝動は限度を超えた。

僕がゆりかさんに振り向くと、彼女も同時に僕を見ていた。

こんなに澄んできれいな目…見たことがない。

目と目が合った瞬間、僕たちの意志は通じた。

お互いが求めたのはキス。

強く激しいキスではなくて、そっと近づき目を閉じて、お互いの唇の感触を確かめ合うキス。長い長いキス――

僕はゆっくり彼女の肩に手をまわし、そっと優しく引き寄せた。  
もう言葉なんていらない。

海のさざ波がBGMのように、とても心地よく聴こえる。

こんなにも自然にキスができるなんて。。

こんなにあたたかいキス。

ドキドキするのではなくて、心から落ち着くキス。安らげるキス。  
癒されるキス。

それは心が溶け合うように長く…更に長く続いた。

やがて僕たちの唇が離れても、目と目はお互いをしっかりと見ていた。

口を開いたのは僕の方から。

「ごめんね。随分遠まわりしちゃって…」

ゆりかさんは軽く目を閉じ、首を横に振る。

「ううん。違うわ。私ね、キスしてる間に思ったの。これは私たちが真の夫婦になるための試練だったんじゃないかって」

「試練…」

「今日、この日この場所で、私たちが会えたタイミングが全てだと思うの。私たちがこうなるのは必然だってこと」

僕は少し考えてから、その言葉をじっくり噛み締めた。

「必然か。うん…そうだね。そうであって欲しい。いや、きっとそうだよ」

「ええ…きつとそうよ」

(続く)

## その25 必然な二人（後書き）

次回はエピソードになります。ここまで読んでいただいているたくさんの方には、心から感謝致しております。

## エピソード

限定復活！みっちちの好き勝手ぶろぐ♪

今偶然いらしたパソコンの前のあなたッ！

そしてケータイから見てる人ッ！

はじめましての人はどうもはじめまして。

そうでない方は、超お久しぶり♪

みっちちでえっすv(。・ω・。)イエイ♪

もうね、このブログ放置して何年も経つのに閉鎖してなかったの

( \* m \* ) ププツ

元々アタシの気まぐれカキコだから、どうでも良かったのよね。

それにアタシのプチPTSD解消のために書いてたやつだしさ。

人に読まれるのを意識してなかったから、文章なんてもう支離滅裂よ。

わぁ、このアタシが今、四字熟語使っちゃったー \* m プ

でも不思議よね。

こんなに放置してたのに、毎日1人とか2人は訪問する人っているものなのねw

まあ検索で偶然引っ掛かってくる通りすがりの人なんだろうけどさ。

いいのいいの。今回もそれで。アタシが書いてスッキリすればそれだねw

今日の更新も、今夜1回限りの期間限定更新なの。

ホントはもう書くつもりなかったんだけどね。

なんか立て続けに嬉しいことが重なっちゃってね。

書かずにはいれなくなっちゃったのよ。

そして今度は真正正銘。1週間後にはこのブログも完全閉鎖するつもり。

なぜかって？聞きたい？聞きたくない？

はい。どっちだとしても聞かせてあげるw

んとね、カツコ良く言うよね。人生の一区切りってゆうのかなあ？  
または始まりともゆうかも？

アタシってほら、森田のネタばっか書いてたじゃない？

アイツはネタになるキャラだからアタシに書かれたって仕方ない  
んだけどさあ。

でも驚くなかれ！

森田の今の現状ってね、超ラブラブなのよ！もう信じられないくらい。

なもんだからさあ、アタシそこでフツと思ったのね。

過去のことをぐちゃぐちゃ書いたブログなんか、全て消してしま  
おうって。

だって、思い出したくもない忌々しい出来事もあったわけじゃない？

あ、知らない人は素通りしてね。面白くもないだろうからw

で、要は残してたってあんまし良いことないってこと。だからそ  
う決めたの。

でもね、どうせ消してしまうんなら、最後はハッピーな記事で締め  
括りたいってもんじゃない？

ちょうど嬉しいこともあったわけだし、だからUPする気になったの。

てなわけで、前置き長かったけど、本題に入るね（\*・・・\*）  
ウフフフ」

それは昨日のことだったの。

親しい仲間内だけでちよつとしたお祝いをしたわけ。

ちよつと大きめのカラオケルームでね。まあホームパーティーみたいなもんよ。

もちろんゆりかと森田は一緒に来たわ。いずみちゃんとひなたちゃんも連れてね。

翔子もわざわざ遠くから来てくれて嬉しかったあ。でも第一声がこれだもの。

「ゆりかと森田。復活おめでとお、ホント良かったねえ」

もう翔子ったらさ、ニヤニヤしてわざとアタシをチラ見しながら言ってる。

すかさずアタシ突っ込んだわよ。

「ちよつと翔子！今日のメインはアタシ！ゆりかたちは先週終わってたんだから」

「だって私、先週来れなかったんだもん」

「はいはい。じゃもうそれで終わりね。次はアタシに祝福の言葉ちようだい」

「（\* m \*）ププツ 美智代、自分で催促してる」

「だってえ。アタシにやつと輝ける日が来たのよ。当然じゃない」

アタシは１段高い小さなステージに上がってみんなに投げキッスをしたの。

「なんか意味不明な行動ね（^ー^；）」と翔子。

「なんですって！」

「いえいえいえ、何でもないわ。美智代、入籍おめでとう」

「（\* ^ ^ \*）ノ ハイ、ありがとう」

「で、旦那さんは？」

つて、翔子が言っただけと同時にアタシのダーリンが部屋に入ってきたの。

「どうもお待たせしました。ちょっと仕事の電話してたもんで…」

ゆりかがすぐに突っ込んでくれたわ。

「涼りょう。ダメよお嫁さんを放置しちゃ！どうせまた浮気調査の張り込みでもしてたんでしょ？」

「わ、当たり前。探偵つてのは9割がこんな仕事しか依頼が来ないんだ^^;」

ここで陰の薄い存在の森田がやっとしゃべった。

「茜崎さん。ご無沙汰してます。この度は本当におめでとうござい  
ます」

「カタいな^^; もつと楽に行こうよ。森田くん」

このブログにいらしたみなさん、事情がわかった？

そうなの。アタシ、茜崎涼あかねさきりょうさんと結婚しちゃったの♪

付き合い出したのが、森田がアタシの隣から引越して行っちゃった後から。

森田に当番させてたゴミ出しを自分で行かなくちゃならなくなっ  
てから、いつも彼とバツリ会うようになってね。

アタシってほら、おしゃべりじゃない？彼はシーンとしてるのが  
苦手らしくて、アタシのおしゃべりが良い音響になるらしいの。

そんな理由で付き合い始めるつてもヘンなんだけども。

でもいいの。彼はアタシのタイプだし、ゆりかとはとくに終わ  
ってるし、それにね、なんてったって、プロポーズして来たのは彼  
からなんだもん（・・）むふふ♪

そしてゆりかからもお祝いの言葉もらっちゃった♪

「美智代。涼。入籍おめでと。最初に報告聞いたときはびっくり  
しちゃったわ」

「（＊・・・＊）ウフフフ、人を驚かせるのが趣味なの。でも本気よもちろん」

「その浮かれ気分見ればわかるわ（　　）」

「美智代おねえちゃん、おめでとうございます」

「いずみちゃんがひなたちゃんの手をひいて、礼儀正しく二人でお辞儀をしてくれたの。」

そしてひなたちゃんが花束渡してくれて…

このときなんか、すつごくジーンと来ちゃった。

「ありがとうね。おねえちゃんとっても嬉しいよ」

「ニコツとするいずみちゃん。でも急に疑問形の表情になったの。」

「ひとつ聞いてもいい？」

「いいわよ。なあに？」

「えと…私の本当のパパが美智代おねえちゃんと結婚したってことは、おねえちゃんは私の義理ママってことになるの？」

「最もらしい質問ね。でも違うわよ。いずみちゃんのママはゆりかママひとりだけ。アタシのことは今まで通りおねえちゃんでもいいわ」

「そっか…うん。そうだね。そうするね」

アタシはこのとき、人ごとながらハッと思ったの。

「ねえ、いずみちゃん。森田のことはパパって呼んでないの？」

「だってパパって顔じゃないもん」

「（ノ——）ノコケッ！」

それはそうだけど、さすがにアタシもズッコケた。

「でもねえいずみちゃん…」

そのとき、ひなたちゃんが大きな声で森田に向かって叫んだのね。

「おとうちゃん！」

一瞬だけど、固まったアタシ。

でもそれは驚いたんじゃないやなくて、あまりにも森田にピッタリな呼び方だったから。

いずみちゃんがひなたちゃんの言葉を補足してくれた。

「私とひなたは卓くんと呼ぶのはやめにしたの。で、お父ちゃんならいいかなってw」

アタシはその意見に強く賛同しちゃった。

「うんうん。文句なしね。それしかないわ！さすがいずみちゃん！」

「私にはママとお父ちゃんがいて、身近にはパパもいるし、なんかとっても幸せだなって思うの」

「そうね・・・そうよね。」

なんていい子なのっ！いずみちゃんてっ！

よし！やるわ！アタシだって…

アタシだって、いずみちゃんみたいな子をボツコンボツコン産んでやるわっ！

そんな決意を新たに、昨日は楽しい楽しいパーティのひとときを過ごして来たってわけよ。

え？ダーリンは今家にいないのだった？

いるわよいるわよ。今お風呂なの。

さっき一緒に入ろって誘われちゃったんだけどね（ノ・ヾ）やんっ

でもこのブログ書きちゃおうって思ってた断っちゃった。

いいのいいの。どうせ明日の朝もエッチするんだし。

そのとき一緒にシャワー入れるもん（ ）キヤー

アタシったらなんてことをwww

とゆうわけで、このブログの更新もこれで終わりね！

良いことづくめで、素敵な締めだったでしょ？（\*・・・\*）ウ

フフフ」

もしかしたら偶然アタシの知り合いが読みに来るかもしれないから、1週間だけこのままにして、そのあと閉鎖しまーす！

みっちっちの期間限定ぶろぐ。ご静聴ありがとございましたあ」

---

「美智代ったらもう…私たちのこと、実名で載せてるなんて…」

「（；；、ハハハ…まあいいじゃない。これで終わりみたいだしさ」

いずみが偶然ネットで見つけた美智代さんのブログ。

僕たちは茶の間でいずみのノートパソコンを覗いていた。

「よくこんな見つけたね。どうやったんだい？」

僕たちにパソコンを譲ってテレビを観ているいずみが、こちらを見ないで答える。

「誰でも1度は自分の名前を入力して検索することってあるでしょ？」

「まあ…あるね（^ー^；）」

「だからお父ちゃんの名前で検索してみたら出て来たの」

「それ、自分の名前じゃないだろ（ - ；」

「エへ（\*^ - ^\*）ぶいいじゃん別に」

ちよつと驚いたけど、このブログは美智代さんらしいと思った。「最後の方読むと、すごいラブラブみたいね。美智代たち」

「うん。なんか読んでて恥ずかしいもんだね」

「私たちもブログ書いてみる？」

「おのろけブログとか？」

「違うわよ。そんなの読者がドン引きしちゃうじゃない。例えば健康ブログとか」

「うーん…内容に行き詰まりそうだなー」

「まあそうよね・・・」

「でも健康は大事だからね。これからは僕、インスタントラーメンを断とうと思ってるんだ」

ちょうどその時、いずみの突っ込みが。

「この家に持ち込んで来た300個のラーメン捨てていいの？」

「(〇〇〇;) ギク!! いやいやいや、それを全部食べてからの話だよ」

「まだ当分かかるじゃない;|」

「家族で食べれば3か月以内にはなくなるよ」

「私、そんな毎日は無理」

「ママも無理」

「じゃあご近所におすそ分けでも…」

「しなくていいから( ^ □ ^ ; A 恥ずかしいし」

僕がみんなと一緒に暮らし始めてから、こんなたわいのない会話でも毎日が楽しくてしょうがない。

この家庭を二度と壊したくない。だから家族の将来も真面目に考えている。

「ねえゆりか。僕はね、君のお母さんと一緒に住もうと思ってるんだ」

彼女は驚いて僕を見る。

「卓さんは…それでいいの？あなたのご両親は？」

「僕は長男じゃないから大丈夫。ゆりかのお母さんは体も弱いのに今は一人暮らし。この家売って、お母さんのいる家を建て増しし

て二世帯住宅にしようと思うんだ。この家は古いからね」

「そんなことできたら…私もすごく安心だけど。」

「じゃあ決まりだね。もちろんお母さんの許可もいるけど」

「たぶん…喜んでくれると思うわ」

「良かった。これでひなたのトラウマも消えるんじゃないかと思うんだ」

「えっ？」

「だってさ。思い出したくないけれど、ここにいたらひなたは必ず事件を思い出すだろ。ひなたがここにはトラウマから解放されないと思ったんだ」

「卓さん、そこまで考えて…」

「お父ちゃん、株上げたね」

テレビに夢中のはずのいずみもボソツと言う。

「（Ａ）（ヾデヘヘ）」

照れ隠しに頭をかいていたら、いきなりゆりかが僕の唇にキスをして来た。

「うっ…ちよっ…子供たちが…」

案の定、いずみとひなたに目撃されてしまった（「」）；

「もっっ！ママたちったら昔より仲良くなってる！」

「わかる？」

「あのお…それはわかるんだけど、私たち子供の前では我慢してもらえる？」

ちよつと体裁の悪くなった僕。それに対する精一杯のごまかしがこれ。

「ごめんごめん。キスはみんな平等にしないとね。ひなた、こっちおいで」

ニヤニヤしながら僕のところに寄って来たひなたのほっぺにチューをする。

はにかむところが可愛くてしょうがない。

「次はいずみだよ。おいで」

「ちよつとマジでそれだけはやめて。軽いセクハラだよ。お父ちゃん（＾―＾；）」

「ゞ（´、；）ゝ ウヘヘ」

ああ…なんて幸せなんだろう。

こんな日々が過ごせるなんて、思ってもいなかった。

僕とゆりか。そしていずみにひなた。

みんな大事な家族。大切な家族。かけがえのない家族。

昔の武田鉄矢のドラマに近いセリフだけど…

“僕は死なない！”

ゆりかのために子供たちのためにも、先立つことは許されない！  
悲しい不幸は絶対に味合わせない！

僕はそう心に堅く誓った。

「ねえ卓さん。美智代のブログにコメント書いてあげようか？」

「ああ。それいいね。きつと喜ぶよ」

「ていうか、きつとビックリするわ（＊・・・＊）ウフフ」

ゆりかが何やら美智代さんの最後の更新記事にコメントを書き始めた。

そして1分も経たないうちに、

「できた！」

彼女は送信ボタンをクリックする。

「もう？早かったね」

「いいのよ。こういうのは簡単で」

「ふうん…見ていい？」

「どうぞ」

「どれどれ…」

僕は美智代さんのブログのコメント欄を見てブツと吹いてしまった。

その内容がこれ。

“ 私たちみたいに幸せになっ てみなさい ♪ ”

ゆりか&すぐる

（完）

## エピソード（後書き）

更新もままならない中で、最後までこのお話に付き合っていたいただいた読者様方には心より感謝致します。

また、連載終了後に初めていらした方、ここまでたどりついていただけで、ものすごく嬉しく思います。

できればほんの一言でも感想をいただけたら更に嬉しく思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1464d/>

---

突然の彼女3・ファイナルエピソード

2010年10月8日13時23分発行